
新説・仮面ライダーキバ

リスくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新説・仮面ライダーキバ

【Nコード】

N7237L

【作者名】

リスくん

【あらすじ】

新たなるキバ。

新たな舞台の幕が今、開かれる

登場人物1（前書き）

性懲りもなくまた仮面ライダー小説です（他のも進んでないのに何してんだ自分！）。

思いつきのまま、書いてしまいましたが見てくれると嬉しいです。

登場人物 1

紅進也（14歳） / 仮面ライダーキバ

イメージCV：釘宮理恵

キバに変身する謎多き少年。

茶髪か金髪かはっきりしない色の髪が特徴で身長は低い（変身すると高くなる）。

どこかで長年育つたらしく、世間知らずの常識知らずだが頭は良く、高いヴァイオリン（それ以外の音楽も）の才能を持つ。

無邪気で純粋な優しい性格。天然な性質ではあるが、それ故人間心理を見るのに長けており、相手の成長を促すことも。

何故、キバに変身できるのかはわかっていない。

一人称は「僕」。

キバツトバツト？世

性格、能力などにおいては原作キバと同じ。

だが進也に比べると常識人なのでそれを逆手にとり、彼をからかったり悪ノリさせたりする面を持つ。

麻生由美子（17歳）

イメージCV：平野綾

私立の名門校に通う美少女。というのは表の顔で実際は女というにはやや豪快な面を持つ。

黒いロングヘアと高い身長（本人のコンプレックス）が特徴。

正義感は強く、ひよんなことからファンガイアに関わったことから進也と協力することになる。

情に厚く、面倒見のいい性格で進也達の身を常に察じている。

進也と逆に常識はあるが雑学などの知識は持たない。空手、柔道など武道の有段者でもある。

勉強は苦手。

一人称は「私」。

麻生護（45歳）

由美子の父親で麻生財団の若き会長。

容姿は原作の嶋に近い。

穏やかな性格だがあまり感情を顔に出さない。

実は裏で…。

尾上次郎／ガルル

イメージCV：森川智之

ウルフェン族最後の生き残り。

青いメツシュが入った荒れた短髪、メガネとその先にある鋭い目と、一見怖い容姿だが、その実、以外に温厚な性格で常に敬語。

進也の仲間の1人で、彼の母親・真夜から進也を守る使命を勇輝、力と共に授かっている。

戦闘時、ガルル、あるいはガルルセイバーとして進也に力を貸す。

過去は見かけに見合った粗暴な性格だったが…。

一人称は「私」、あるいは「僕」（過去は「俺」だった）。

羅門勇輝／バツシャー

イメージCV：鈴木健一

マーマン族最後の生き残りで進也の仲間の1人。

容姿的には進也と同年代だが実年齢は由美子の10倍以上の高齢（それでもマーマン族にとってはまだ子供）。

常に前髪の緑のメツシュが濡れている。

見かけはかわいい子供ながらクールな毒舌家で由美子の神経を逆撫でさせる。

バツシャー、もしくはバツシャーマグナムとしてキバに力を貸す。

かみなり
神成力ノドツガ

イメージCV：宇垣秀成

フランケン族最後の生き残り。進也の仲間。

総髪頭のオールバックで、由美子さえも見上げるほどの長身。

馬鹿力の持ち主だが性格は穏やかかつ、純粹（悪く言えば単純）。

ドツガかドツガハンマーとして力を貸す。

ちなみに3人の名前は人間世界に外出するための偽名である。

紅沙耶（13歳）

イメージCV：

由美子の妹。容姿は赤みがかった茶髪のショートヘアに黒い目。身長は姉と対照的に低め。

活発で熱い姉とは容姿、性格共に全く似ず、引っ込み思案だったが進也との出会いで変わり始める。

眼鏡をかけていたが、キバの戦いに遭遇して壊して以来コンタクトに変えている。

照れ屋かつ臆病だが、心根は穏やかで動物を愛する優しい性格。

自分を変えてくれた進也に何やら複雑な気持ちを抱いているようであり…。

登場人物1（後書き）

登場人物募集です。

イクサは既に決めてあるので今回はサガ、ダークキバ、レイ、アーク、それから元々キバはライダーが少ないのでチェックメイトフォードとスパイダー（ちなみにチェックメイトフォードは今回はルークとビショップも人間名を付けてください）を決めてもらえると嬉しいです。

キャラは容姿、性別と性格、味方サイドか敵サイドと登場人物1との関係を書いてください（こんなに要求してすいません）。

わがままな僕ですがどうか素晴らしいキャラクターをお願いします（土下座）。

もう一度、お願いします（また土下座）。

1・紅の戦士(前書き)

さあ、お待ちかね第1話です。
新たなキバワールドをお楽しみください。

1・紅の戦士

夜の公園…。

それは子供達が昼間はしゃぐ時間と違って変わり、大人達が闇の口マンを生み出す場所。

だが時にそこは悪夢を生む残酷な場所ともなる。

「ねえ、こんなところに呼び出して何するつもり？」

お世辞にも美人とは言えない女が男の片手に抱きつき、甘い声を出していた。

「ハハハ、決まってるだろ。」

男は魅力的なスマイルを見せると女の手を軽くほどき、

「君を…食うためさ…。」

顔に怪しい模様を浮かび上がらせる。

女は息を飲むと逃げ出そうとする。

だが男は女の手を力強く握り離そうとしない。

「ハハハ、逃げることはないだろ、あれだけいい思いをさせてあげたのに…。」

やがて壁に映る男の影が異形の姿に変わると、女の頭上に半透明の牙が現れ、彼女の肩へ突き刺さる。

女は声にならない断末魔の叫びを残して地面に倒れる。

男は冷たい目でそれを見つめると舌を回して、唾を飲んだ。

「ごちそうさま」

智江洲

ここは小さいながらも数々の歴史的遺産の宝庫で知られている街である。

そんな街の商店街を1人の少女が自転車をこぎながら滑走していた。

「おはようございます!」「おはよう、由美子ちゃん。」
「おっす!」

少女の気持ちのいい挨拶に商店街の人達も笑顔で挨拶を返したり、手を振ったりしている。

彼女の名前は「麻生由美子」。

私立高校に通うごく普通の成績優秀、スポーツ万能少女である。

そんな彼女がこれから始まる戦いの物語に巻き込まれていくことになる…。

由美子は学校に着くと、自転車を止め門をくぐる。

「おはよう、麻生さん。」

「おはよう。」

横切る同級生達にも笑顔で挨拶をかわす。

教室へ入ると既に来ているクラスメイト達が会話をかわしていた。

由美子も荷物を置くとその会話の輪の1つに加わった。

「おっす、何の話してんの?」

「へへ、ここ最近話題の殺人事件の話だよ。麻生も知ってたんだろ?」

男子生徒の何人かが怖さを強調するように襲いかかるようなポーズをとる。

「それって…。」

由美子は思い出そうと頭を上上げる。

連続透明化殺人事件。

智江洲では昔からこの謎の事件が多数発生していた。

被害者は肉体が全て透明化しており、触れただけでガラスのように砕けてしまっていた。

数年に渡って何百件も発生しているにも関わらず警察は未だに犯人

を捕まえるに至っていないかった。

そこまで話すと男子生徒はニヤニヤしながら指を振る。

「と・こ・ろ・が、つい最近になって新しい目撃証言が入ったんだよね。」

「目撃証言？」

由美子は怪訝そうな顔つきになる。

「実はさ、事件現場の付近で変な怪物と赤い鎧の戦士が…」「何言ってるんだ！青だろ！」

ここで1人が突然反論する。

「バカ言っな、緑だっつーの。」

「紫って奴もいるぜ。」

他の2人もバラバラに色を挙げる。

「てんでバラバラじゃない！」

由美子に指摘され、話していた男子はバツが悪そうに咳払いをする。だがめげずに話の続きを始めた。

「とりあえず、一致してるのはTVで見た仮面ライダーみたいだった言うことと…。」

「…変なコウモリが一緒にいたって言うことだ！」「」

締めを言われて、男子は今度こそ落ち込んだ。

「仮面ライダー、コウモリね…。」

由美子は呆れ混じりにそのワードを呟いた。

そんな時、廊下から女子達の悲鳴…というより黄色い声が響いてきた。

由美子が外に出ると1人の男子教師…俗に言うイケメンな男が女子達に囲まれていた。

由美子の横に他の女子も出てくると教師への遠目を輝かせた。

「あ〜ん、やっぱり数学の桜木先生、いいわよね〜。すっごく素敵！」

女子達は全員、桜木教師の虜となっている…由美子を除いて。彼女だけは男子生徒が向ける苦々しい目に近い目で彼を見ていた。「まったく、男は顔だけじゃないっての！あんな奴に限って裏で何してるかわからないんだから。」

由美子の説明が足りなかった。

彼女は少女時代、祖父に武術の手解きを受け、黒帯級の腕前を持っていた。

が、その影響で彼女自身も美人の容貌とは裏腹に男勝り以上の性格の体育会系の女子になっていたのだ。

そんな彼女であるからして、男子が噂している怪物や仮面ライダーも毛ほども信じていなかった。

放課後

「何が仮面ライダーだ！何がイケメンだ！馬鹿馬鹿しい！」

由美子は自分に言い聞かせるように叫びながら自転車で家路を走っていた。

「まったく、そんなTVみたいなの…。」

由美子が苦々しく愚痴った時。

「キャアアア！」

女性の悲鳴がどこからか聞こえてきた。

由美子は自転車の方向を変えると悲鳴が聞こえた方向へ向かう。路地を曲がるとそこには…。

「麻生さん！」

「桜木先生！」

桜木が1人いた。

いや正確には1人では無い。

「その人は…。」

彼の足下には透明化した女性が倒れていた。

桜木は残念そうに首を横に振る。

「酷い…。」

男勝りの由美子も思わず顔を押しさえた。

と、バタバタと駆ける足音が耳に響いた。

由美子が前を見ると小柄な少年が逃げるように走っていた。

「ちよつと、待ちなさい！」

倒した自転車を起こすと由美子は飛び乗って後を追う。

「桜木先生は警察を呼んで！」

「あ、ああ…。」

反響する足音を頼りに少年の後を追いかける。

後に残されたのは桜木と遺体…。

だが桜木は持つている携帯を取りだそうともせず、それどころかだんだん見えなくなっていく由美子の後ろ姿を見て不気味に笑った。

「バカ力。」

激しい追跡で由美子が息を切らし始めた頃、彼女は町外れにいることに気づいた。

「はあはあ、ここ、どこ…。」

だが彼女の追跡が報われた証拠に近くで扉が閉まる音が聞こえた。

由美子が自転車を降りて、何歩か歩いていくとすぐ近くに看板と家の明かりが見えた。

「こんなところに、お店…？」

看板には「古美術・輸入雑貨の『ドラム』（あなたの求めるもの、きつと見つかります）」と掲げられていた。

「ここに来たのは確かよね。」

看板を眺めるのもそこそこに由美子は店に入った。

中には古めかしい壺、掛け軸、絵画から宝刀まで古今東西、あらゆる

る時代の品が値札付きで並んでいた。

「へえ、なかなかセンスがいいじゃない…ってそうじゃなくて！」

一瞬、見とれたが本来の目的を思いだし頭を抱える。

「お気に入り品は見つかりましたか？」

突然背中から声をかけられ、由美子は飛び退く。

しかし、改めて振り向くとそこにはやや精悍な顔つきながら優しい笑顔を浮かべた青年が立っていた。

びくつく心臓を押さえ、由美子は青年に聞く。

「あの、店長さんですか？」

「いえ、私はこの店の店員の尾上と申します。」

「はあ…。」

青年の礼儀正しい態度には由美子も好感を抱く。

「まあ、立ち話も何ですから、どうぞ。おーい、勇輝君、力さん、お茶を持ってきてください。」

青年…尾上の呼びかけに店の奥から由美子より幼い少年と、ごつい大男がお盆を手に現れた。

「あ、お構い無く。あの、ところで…。」

話を切り出そうとはするのだが相手の押しが強く、結局お茶を一杯もらうことにした。

「あの、ここに子供が来ませんでした？えっと…その子くらいの。由美子は3人の中でもっとも子供に見える少年で比較する。」

「ちよつと、僕は子供じゃない。これでも百…。」

子ども扱いされて怒る少年が何かを言い出そうとすると2人が慌てて口を塞ぐ。

「百？」

「ああ、いや…。もしかして坊ちゃんですか？」

青年…尾上は取り繕うようにようやく話に乗った。

「坊ちゃん？」

「ええ、雇い主の子供さんで今は私達と暮らしてるんです。」

「見かけによらずお人好しね。」

由美子は口には出さないが心の中でこう思った。

「お〜い、坊ちゃん！」

尾上の天井に呼びかけると階段を下りる音が聞こえてきた。

「あ、あんた…！」

それはやはり先ほどの少年だった。

「やあ、こんばんは。さっきは危ないところだったね。」

「…」「危ないところ？」「…」

尾上達も初耳らしく、怪訝な顔になる。

「お姉さん、後もう少してファンガイアに食べられちゃうところだったよ。」

「ファン…ガイア…？」

聞き慣れない単語に由美子は目を細めた。

すると急に後ろの3人が慌てだした。

「ちよつと、坊ちゃん！普通の人にその話はしちゃいけませんよ！」

「それは僕達と同族の間だけの秘密でしょ！」

わけのわからない話でなおかつ徐々に蚊帳の外の状態に陥っていく由美子。

いつしかそれは激しい怒りに変わっていた。

バキッ！というカップが砕ける音に全員がビクッと振り向くとそこには形容しがたい表情で激怒している少女の姿があった。

思わず唾を飲み込む4人。

「しょうがない、ごまかしたら殴られ…じゃなくて「おい！」あっ、はい話します話します。」

二杯目のお茶で由美子の怒りを抑えると尾上は話を始める。

「いいですか、この世界に人間以外の種族がいるって信じますか？…って信じてませんよね。」

由美子の険しい表情から信じていない以上のものを悟る。

「その中の一種族にファンガイア族というものがあるんです。ファ

ンガイアは人を襲ってライフエナジーを吸って生きる怪物の種族なんです。」

「待って、怪物、ライフエナジー？　どういうこと？」

普段はどんとしている由美子も怪しい単語や支離滅裂な話の内容に頭がショートを起こし始めていた。

「最近透明化殺人つてのが噂になってるでしょ。あれってファンガイアの仕業だよ。」

「へ？　でもあれは何か薬品を使ったから身体が透けるようになったって警察が…。」

と、ここで尾上達に話すのを任せて黙っていた少年が口を開いた。

「でもお姉さんさつき実際に死んだ人を見ただでしょ。あんなに人を透明にできる薬なんて今の世の中じゃないよ。」

「で、でも…。」

自分でも公式発表に納得いかないものがあつた上に、事実その遺体を見たせいで彼女の心にはグルグルした渦が巻いていた。

気分を落ち着けるために軽く深呼吸をすると再び少年に問う。

「仮にそんな怪物がいたとして、一体どこに逃げたって言うのよ。」

そんなのが逃げてたらずぐに気づくはずよ。」

「あれ、僕さつき言ったよね、「食べられちゃうところだったよ。」って。」

「は？」

少年の言葉に由美子の頭に大きな疑問符が浮いた。

気を取り直してさつきあの場所にいた自分以外の人間を思い返す。

「ちよつと待って、それだと犯人は…。」

現場で遺体の傍にいた人物…立花。

「で、でもあの人は人間じゃない。どうみても怪物とかには…。」

「お嬢さん、ファンガイア的能力には人を超える力以外にももうひとつあるんです。」

尾上はそこで一旦区切りをつけると呼吸をして再び開く。

「人間への擬態です。」

「擬態？」

由美子はその単語でおもいつくのは昆虫やカメレオンの姿。

「ファンガイアは高度な擬態技術を持っていてふだんは人間社会に溶け込んでいる。怪物の姿になるのは人を襲うときと戦うときだけだよ。」

「じゃあ、立花先生は…。」

「きつと人を襲って逃げようとしてたんだよ。でも思ったより早く駆けつけた人間…つまりお姉さんが現れたせいで自分が見つけた振りをしてたんだよ。」

それを聞いて由美子は慌てて立ち上がる。

「それじゃ急いでそのことを…。」

だが4人は制止すると首を横に振った。

「きつともう警察が来てるだろうし、とっくに逃げたと思うよ。」

「だったら…。」

少年は小さな棚からペンダントを取り出すと由美子の首にかけた。

「これ持って。ファンガイアは明日きつとお姉さんを狙うだろうから、それに対してのお守り。」

由美子は怪訝そうな顔でお守りを見る。

「あつ、お姉さん疑ってる！ほんとに効くんだからね！」

少年は初めて怒った表情を由美子に向けた。

「明日きつとお姉さんに何かあるよ。そのときはすぐ行くから。」

「あ、ありがとう…。」

由美子が店を出ると、尾上が少年に声をかける。

「いいんですか坊っちゃん、あれは「マヤさん」の形見の品でしょう。それをあんな簡単に…。」

彼と他の2人は惜しげな顔だが少年はまったく気にしていないように、無邪気な笑顔で笑う。

「いいんだ、あの人、お母さんに何となく似てるから…。」
「なるほど…：そうかもしれませんが…。」
ここでの光景を由美子が見たら、気絶はせずとも肝を抜かしたのは間違いない。

何故なら先程まで人の姿をしていた尾上、勇輝、力の姿が見たものを震えあがらせるような異形の怪物に変わっていたからだ。

そこへ勝手口の暖簾をくぐって「何か」が入ってきた。

「ふひっ、逃げられちゃったぜ…。」

3人の怪物は「それ」に頭を下げる。

「あつ、店長、お帰りなさい。」

「お帰り、キバット。」

「おう！」

「それ」は少年の近くでぐるぐると回り始める。

翌日

由美子は授業も耳に入らないほどに机の上でボンヤリしていた。

いや、正確に言えば昨日、少年や尾上に言われたことを考えていたのだ。

「ファンガイア…：ねえ…。」

にわかには信じがたいが説得力はある。

しかし普段人間に化けていると言っつのは…。

周りのクラスメイトを横目で見る。

「だったら、この中にもいるかもってことよね。」

そしてもうひとつ頭に浮かぶのは、昨日のその後だ。

由美子は店を出た後、家に帰ってから警察から連絡が入り事情聴取を受けた。

立花は通報の後、事情聴取を受けて既に家に帰っていたらしい。警察の見解では自分も含めて犯行は無理と判断されたようだが、由

美子は少年が言った言葉もあつてまだ悩んでいた。

「当の本人は今日もあれだしな。」

昨日、事情聴取を受けたにも関わらず今日の立花はいつもの様に女子に囲まれても疲れている様子を見せていなかった。

「本人に聞いてみるか…って言うわけないよね。」

由美子は自分の案を頭から打ち消した。

だがチャンスは以外にも早く訪れた。

放課後

「あつ、麻生さん。」

疑惑の立花本人が由美子に声をかけてきたのだ。

「あつ、はい！」

以外にも早い展開に彼女は動揺する。

「今日、話したいことがあるから後で来てくれるかな？」

この言葉で彼女の不安度は一気に跳ね上がる。

しかし彼女も大人。

そんな様子を顔には見せなかった。

「はい、わかりました。」

立花が離れていくと由美子は昨日もらったペンダントを見る。

「あの子、私を助けるとか言ったけど、無理よね…。」

講堂

その扉の前で待っていた立花の元へ由美子がやって来る。

「やあ、待ってたよ。」

立花はいつものように女子を落とす魅力的な笑顔。

しかし由美子は惑わされることなく自然に

「話ってなんですか？」
と切り返す。

「昨日は大変だったね、あんなことが起きて。」

「ええ、まったくですよ…。」

と、立花は笑顔のままだが、目が笑っていないことに気づく。

由美子はわからない程度に数歩下がった。

「おかげで昨日食べたばかりなのにもうお腹が空いて大変だったよ…。」

「は？」

話が突然脱線したように変わり、由美子は目が思わず点になった。すると立花が突然舌なめずりをして彼女を笑顔で見つめた。

だがそれはいつものように女子を落とす素敵なスマイルではない。悪意と殺気がこもった危険な笑み。

もう一度舌なめずりをする。彼の顎に不気味な模様が浮かぶ。

由美子は思わず息を飲んだ。

「君を食べさせてもらうよ…。」

由美子の頭上に半透明の鋭い二本の牙が出現すると、立花の目の動きに合わせて彼女の首に振り下ろされる。だが。

「え…？」

つぶつてしまった目を再び開けると、牙は何かを押さえられるように彼女の頭の上で動きが止まっていた。

「な、何故だ…？」

由美子も驚いたが立花もそれ以上に仰天の顔になっていた。

「えっ…。」

ふと自分の胸を見ると少年からもらったペンダントが光を放っており、牙の動きを透明な壁…俗に言うバリアが由美子の身体を守っていた。

「バカな、それは魔物避けのペンダント、それも相当強力な物…。」

「これが…。」
光るペンダントを再び凝視する。

「一体誰が「僕だよ。」何!?!」
割り込むように入ってきた声に由美子も立花もその方向を振り向く。
あの少年がこちらに向かつて歩き出していた。

「そうか、坊やだったのか…。」
一瞬、立花は動揺したものの落ち着きを取り戻す。
そして全身を光らせると馬に似た怪物：ホースファンガイアに変化した。

「ダメ、逃げて!」
由美子は呼びかけるが少年は歩を止めずに前へと進んで叫ぶ。

「キバット!」
叫びに応じるかのように由美子の前に新たな信じられないもの…金色のコウモリがどこから降りてくる。

「よっしゃ、キバって行くぜ!」
コウモリ…キバットを少年は右手に掴むと、左手を差し出す。

「ガブツ!」
キバットは口を開いて左手に噛みつく、少年の下顎に模様が浮かび、腰に赤いベルトが巻かれる。

「変身!」
少年がキバットをベルトのバックルに装着するとその身体が銀色の光に包まれ、身長が大人ほどに変化する。
そして銀色の光の膜が砕け、中から赤と銀の鎧に包まれ、黄色い目を光らせる戦士が現れた。

その姿に由美子は前に男子生徒の噂話を思い出す。

「仮面ライダー…、噂はほんとだったの…。」
ホースの身体に立花の顔が映る。

「貴様…キバか!」
驚くホースに戦士…ベルトのキバットが笑う。

「へへ、その通り！てめえみたいな悪いファンガイアを倒して回ってる正義の味方さ。」

ホースは唸ると、拳を振り上げキバに襲いかかり、キバも迎え撃つ。ホースの鋭い爪や蹴りをかわしながら逆にパンチの連打、ローキックからのハイキックと力強い一撃でダメージを与える。更にホースのパンチの一撃を受け流すとガードが空いた腹にパンチを決め、よろけたホースをアッパーで弾き飛ばした。

「す、すごい……。」
少年とは思えない馴れた戦いぶりに由美子は感服してその様を眺める。

キバは新たな攻撃に入ろうとホースへと歩みを進めた。ふらつきながらも立ち上がるホース。

しかし身体から煙を上げながらも何故か笑っている。
「進也、気をつける！」

キバットが危険を感じ、忠告する。

「へ、へへ、まだまだだよ……。」
ホースが腕を叩くとそこからガラス片のような物が飛び散り、足元にこぼれる。

だがこぼれたガラス片は鋭い長剣に変わり、ホースはそれを拾うと近づいたキバに振り下ろす。

「がっ……。」
火花が散り、後退するキバにホースはここぞとばかりに剣で攻撃し、キバはたちまち防戦一方の状態に追いやられる。

やがてキバは周りに逃げ道がない壁に追い詰められ、前方にホースを迎え撃たなければならぬ形になる。

「なかなか強いが、ここまでだ！」
勝利を確信したホースは剣を構えるとキバの腹に向けて剣を突き刺

す。

由美子は思わず目を覆った…が。

「へへ、残念でした！」

キバットがその剣を歯でしっかりと受け止めていた。

ギョツとして隙ができたホースに再び連続パンチを決め、キバは逆にホースを逃げ場のない道に追い込む。

「とどめだ、進也行くぜ！」

キバットの呼びかけにキバは頷くとベルトの腰から一本の笛を取り出し、キバットの口にくわえさせる。

「おっし、ウエイクアップ！」

奇妙な笛の音が奏でられるのと同時に辺りが満月輝く夜へと変化する。

「嘘、さっきまで昼だったのに、それに満月？」

キバが鎖で覆われた右足を振り上げるとキバットがベルトから飛び出し、鎖を砕く。

鎖が砕けた右足から赤い羽根が展開し、先についた3つの緑の石が輝く。

「はあああ…はっ！」

勢いをつけてキバは高空へとジャンプし、右足の先をホースに向け突っ込む。

あまりの速さにホースはかわすことすらできないまま、キックを胸に受けてどんどん壁に押し出されていく。

そしてホースの身体が壁に叩きつけられた瞬間、壁にコウモリに似た紋章が壁に刻み込まれた。

全身から鈍い光を放つと砕け散るホース。

「やった、倒しちゃった…。」

脱力する由美子。

やがて夜空が昼の空に変わっていくとき。
どこかのビルから屋敷から身体が生えた亀の様な竜…キャツスルド
ランが飛び立っていく。

「ねえ、あんた…。」

由美子がキバに近寄った時、彼女の目の前にキャツスルドランが降りてくる。

「な、何これ、ってかあぶなっ！」

キャツスルドランはのたのたと歩くと目の前を飛ぶ光った玉を飲み込み、再び空を飛んでいった。

「あの光ってるのは…？」

「ファンガイアが吸ったライフエナジーさ。」

いつの間にか変身を解いた少年が由美子の横に立っていた。

「ねえ、さっきのアンタが変身「よお！」ひゃっ！」

少年の後ろから飛び出したキバットに由美子は尻餅をつく。

「いいねえ、姉ちゃん、噛みやすそうだけ。」

意味不明な言葉を吐きながらキバットは飛び回る。

「もう、ダメだよキバット、驚かしちゃ…。」

少年は手を差し出すと由美子を助け起こす。

「大丈夫「何なのよ、もう！」うひゃっ！」

今度は少年が尻餅をつく。

「アンタ、何者？さっきのアレは？一体何がどうなってるのよ！」

「お、落ち着いて…、順を追って説明するから…。」

少年もキバットもあまりの剣幕に目を点にする。

「まずアンタの名前は？それからよ！」

「ぼ、僕、紅進也…よろしくね、お姉さん…。」

「お姉さんじゃない！麻生由美子って名前があるの！覚えといて！」

「コウモリ、アンタもよ！」

「「は、はい…。」」

だがまだこの物語は始まったばかりに過ぎなかった。

1・紅の戦士（後書き）

この話のアームズモンスターのモデルは現在ドラマ放送中の「アレ」です。

断っておきますがこの世界でもガルルは元々敬語キャラではありません。

キャラ募集は続行中です。

次回もお楽しみに。

素敵なキャラも待っています。

2 少年とキバ（前書き）

さあお待ちかね、新説キバ第2話です。

原作とはまた違うストーリーをお楽しみください。

2・少年とキバ

夜

「ドラン」「二階の進也の部屋。

先ほどまで戦っていたとは思えないほどの安らかな表情で進也はベッドの中で寝息を立てていた。
キバットはコウモリであるせいか眠らず部屋の止まり木から彼を見守る。

進也は夢を見ていた。

「進也…。」

真っ白い風景の中、進也に白いワンピースの女性が声をかけている。

「誰…?」

女性の姿は遠く離れているにも関わらず、その声はすごく近く、そして優しく響いていた。

やがて女性のぼやけた像が晴れ、その顔がはっきりと進也の目に映った。

「お母さん…!」

夢は途切れ、進也は目を覚ました。

「何だ、また夢か…。」

進也は持ち上げた身体を再びベッドに下ろす。

「どうした、またマヤの夢でも見たのか?」

「あつ、うん…。」

「今日は戦って疲れてんだ。ゆっくり休みな。」
キバットに優しく呼びかけられ、進也は再び目を閉じた。

「ありえない、ありえない！」

朝、鏡の前で由美子は唸っていた。

昨日見た少年、コウモリ、変なドラゴンに戦士。

由美子は自分が見た数々の光景を未だ信じられずにいた。

「あのガキンチヨ結局私に何にも教えずに行っちゃうし。」

その後、由美子は少年が変身した戦士に関して彼を問い詰めようとしたのだが…。

「あつ！あんなところに空飛ぶ亀！」

「えっ!?!」

キバットの言葉に思わず振り向いてしまい、気がつくまで進也達の姿は消えていた。

「あのコウモリ〜！亀より喋る金色のアイツの方が珍しいじゃない…。」

思ったときは既に後の祭りだった。

「何、うんうん唸ってるんだ？」

後ろから呼びかけられ慌てて振り向く。

「お、お父さん、帰ってたの？」

声をかけたのは由美子の父…護だった。

彼はまだ若きながらも麻生財団の会長を務めており、仕事の都合上家には毎日いなかった。

「何だか知らんが外まで聞こえるぞ。」

「わ、わかったわよ…。」

護は苦笑しながら由美子の肩を叩くと洗面台を出た。

「あ〜っ、思い出したらまたイラつく！」

部屋を出ると護は携帯を手に取りどこかへと電話をかける。

「ああ、私だ。第2のキバが現れたという情報は本当らしいな。…
何だつて？ が完成？だが行方不明？」

ドラム

尾上が店の大家…木戸と会話をしていた。

「す、すいません。3日の内に払いますから。」

「そうしてもらえればありがたいんだけどね。」

この店、実はかなり経営難であり、月の家賃にも困っていた。ということで今日も家賃の催促を受けていた。

「マヤさんの知り合いってよしみで先延ばしも許してるけどこれ以上待たせたら…しばくよ。」

木戸はその穏やかな顔からは想像できないほど冷たい言葉を告げると店を出ていった。

途端に尾上はヘナヘナと座り込む。

「弱りましたね〜。あと3日でかなり稼がないと坊っちゃんが…。」

店の奥に隠れていた勇輝と力が慰めるように彼の肩を叩いた。

「大丈夫！坊っちゃんや店長が何とかしてくれるよ！」
力も賛同して頷いた。

「君達…。」

街の路地。

歩いていたり、談笑していた人達が禍々しいオーラを感じて慌てて

飛び退く。

その本人…由美子は身体から溢れる殺気を隠そうともせず、自転車を漕いでいた。

井戸端会議をしていた主婦達はその姿にひそひそと、

「あれ…由美子ちゃんよね…」

「いつも穏やかに挨拶してくるのにどうしたのかしら？」

と会話を交わしていた。

が、学校に着く頃にはその怒りを心の奥に押さえいつも通りの猫かぶりを見せられるようになっていた。

「おはよう。麻生さん。」由美子の心の奥など知るよしもない笑顔で同級生の眼鏡の少女が声をかける。

「あつ、鈴木さん、おはよう！」

彼女…鈴木百合は由美子の友人の一人で彼女のいい話し相手だ（由美子の豪快な裏の顔は知らないが）。

「ねえ、麻生さん、明後日滝澤ゆかりが来るって聞きました？」

「滝澤…ゆかり…って誰だっけ？」

由美子は家がある程度の屋敷でありながら普段家ではラフな生活を送っており、よって他のクラス内の仲間では有名な人間も知らないことが多い。

「ほら、あのヴァイオリニストよ！日本各地で公演してまわっている！」

「あ、ああ…！」

本当はわかっているくせに由美子は作り笑顔で知ったかぶりしたしかし、いくら有名人を知らない由美子でもそんな人間が街に来ることには興味がある。

「それで？もしかしてその演奏会に行くの？」

「そのつもりだったんだけど…」

百合は苦笑いしながらチケットを二枚ポケットから取り出した。

「一緒に行くはずだったお兄様がその日出張が入っちゃって…。お父様やお母様は普段から忙しくて一緒に行く相手が見つからないから、よかつたらどうですか？」

「うん、OK！」

由美子にとつては待ってたと言うべき言葉、すぐにOKする。

そしてチケットを一枚受け取るうとしたとき。

「あつ、由美子さんだ！」

聞き覚えのある声に由美子はずっこける。

振り向くとそこにはこの学校の中等部の制服姿の進也がこっちに満面の笑顔で手を振っていた。

「麻生さん、知り合い？」

「だあ〜！ちよつ、ちよつとね？あつ、ごめん、アイツに用事があるからまた明日ね！」

百合の手から奪うようにチケットを取ると、由美子は進也にズンズンと駆け寄り、

「ねえ、由美子さ…。」

言いかけた進也の襟首を掴むと廊下を引っ張っていった。

「あ、行っちゃった…。」

百合はポカンとした表情でそれを見送った。

「さあ、今日は隠してること話してもらおうわよ〜！」

進也を講堂の裏に連れ込むと由美子は猫かぶりフェイスを捨てて鬼の顔で進也を睨む。

「アンタのあれ、一体何なのよ！あのコウモリにあのドラゴン！私の頭はまだパニクってるんだからね！」

単刀直入のズバズバ質問を受ける内、進也は徐々に眉毛が下に下がっていった。

「ごめんなさい、昨日は仕方無く由美子さんの前で変身したけど、

本当は人にキバのこと教えちゃいけないんだ。」

「キバ？」

由美子の頭にその文字が「牙、騎馬」といった形に変換されるがどれもあの戦士には当てはまらなかった。

「キバっていったい何なのよ、変なゴマカシだったら…その首絞めるからね。」

凄みのある声と表情で脅す彼女と裏腹に進也は明るい表情になる。

「でも由美子さん、そのおっかない顔と手で秘密を守ってくれそうだから…特別に教えてあげる！」

由美子はシワを寄せた拳を彼の顔面に叩きつけたい衝動を抑えて進也の制服の襟から手を放す。

「わかった、じゃあ話してもらおうじゃない。」

由美子もにっこり笑ってみせたが今にもヒビが入りそうなほど硬い笑顔だった。

「ファンガイア族っていうのは昨日尾上さんから聞いたから知っているとと思うけど、世の中には人間以外に全部で12の部族があるんだ。ヒマラヤのイエティとか未確認生物っていわれてるものもその一部なんだ。」

「えっ、でもあれってトリックとか見間違いとかの類じゃないの？」
超常現象の類をあまり信用しない由美子にとってこれはなかなか信じない。

すると進也は目を吊り上げてムツとする。

「あんなのほんの一部！実際由美子さんも見たでしょ、キバットやファンガイア！」

言われて由美子も自分を襲った馬の怪人や金色の陽気なコウモリを思い出す。

というより、この純粹で大人しそうな少年がむきになったことに驚く。

「ま、まあ、信じてあげるわよ、とりあえず。」

観念したように肩をすくめて見せると進也は再び笑顔に戻って話を続ける。

「それでね、僕もお母さんやキバットに聞いた限りしか知らないんだけど…。」

キバの鎧は元々ファンガイアの王族がレジエンドルガ族という族民と戦うために作り上げたキバット族の製作者アイテイストと呼ばれる存在が作り出した王族の武装らしく戦いが終わった後は新たな継承者が見つかるまでの間、キバットバット？世がその体内に封じていたという。

「あのコウモリがね…。んで、あんたがその新しい継承者ってわけ？」

「わかんない！」

進也の無邪気な一言い由美子はずっとこける。

「僕は4年前にお母さんにキバットと一緒にお母さんからもらったんだ。」

回想

「お母さん、プレゼントってなに？」

母親は笑顔を見せると奥の部屋から何かを手招きする。

が、そこからは人間ではなく変わった姿のコウモリが飛んでくる。

「よお、お前がマヤの息子か。そっくりだな！」

「こ、これは？」

一瞬、奇妙な姿の生き物に驚くがすぐに好奇心満々の顔でキバットをつつく。

「この子はキバット。あなたの新しいお友達よ。」

「それからこの街で異変が起こるたびに僕はキバットと一緒に悪いファンガイアと戦うようになったんだ。」

進也はえへんと胸をはる。

「それであんたのお母さんは？」

彼女は一番気になる質問を聞いた。

「僕の…キバットと会った次の日に、いなくなった…。」

由美子は先ほどまで進也に向けていた怒りを忘れて、代わりに空気の読めない発言をした自分に怒る。

「でも、僕さびしくないよ。だってキバットに尾上さんや勇輝さん、力さんもいるもん。」

進也は精一杯明るい声を出すがどこか寂しげだ。

由美子はそれを見て、進也に対する怒りや疑りをなくすことにした。「わかった、私もほかの人には黙っててあげる。でも何か協力してほしいことがあったらすぐに私に言うこと、わかった？」

進也はぱあっとしたにこやかな顔になると、

「ありがとう！じゃあ僕の店、また招待するよ！」

しかし、ドラムに戻ると既に来客が訪れていた。

スーツを着こなし、四角い眼鏡と髪の毛の生え際にわずかに白髪のある恰幅のいい男性が応対をしていた尾上から進也と由美子をちらっと見る。

「こちらは？」

「ああ、前の店長さんの息子さんとご友人の方です。」

「ほほう。」

男は関心した声を上げるが目は笑っていない。

「それで先程の話だが、この店の主人にお任せしてよろしいかな？報酬は二千万出そう。」

「はい、それはもちろん、お任せください。」

「では、よろしく頼むよ。報酬は前金で銀行に振り込んでおくよ。」
男は立ち上がると店を出て行った。

由美子は進也に耳打ちする。

「アンタそんなことも引き受けてんの？」

「ちよっとね。」

「なに〜！モディリアーニの姉ちゃんにキバのこと話したと〜！」
「ちよつ、店長聞こえますよ…。」
尾上が止めるのも無視してキバツトは羽で頭を抱えて唸る。
「でも首が良いのを除けばこの姉ちゃん熊みたいだもんな〜。」
「おい、コウモリ…！」
由美子の毒気のコもった一声。

「おほん、んでさっきのおっさんはどんな用件だ？」
頭に大きな（由美子の怒りの）タンコブを作ったキバツトが依頼を問う。

「はい、依頼人は佐野信明さん。ヴァイオリニストの滝澤ゆかりさんのマネージャーだそうです。」

「ん、滝澤…。」
どこかで聞いた…と考えたところで由美子は思い出してチケットを取り出す。

「あつ、由美子さんも行く予定なんですか。僕たちも、ほら。」

尾上が吹くのポケットからチケットを取り出すと勇輝と力も同じものを出した。

「ねえ、僕のぶんは？」

「もちろん、ありますよ。」

尾上にチケットを渡され進也ははしゃいだ。

「それでどんな依頼？」

「ええ…。」

佐野は音楽プロデューサーも兼任しており、無名だったゆかりに才能を感じ音楽界に引き抜いたという。

結果は大成功。ゆかりは全国公演を果たすほどの実力者となった。だがその頃から不振な事件が始まったという。

あるときは彼女宛に不気味な手紙が送られるようになり、更には無

言電話、ストーキングなどが行われていたという。

そんな矢先、彼女の公演を行った会場で殺人事件が起きた。被害者は半透明化したうえにガラスのようにもろくなっておりこの数年間で起きている透明化殺人事件と同様の状況となっていたという。

その後も彼女の公演先で必ず一人、殺人が起きるといふ。ゆかりは脅えているが警察もあてにならない、そんな状況で佐野はこの店の噂を聞いたという。

すべて話すと尾上はコップに入った水をあおる。

「なるほどな、で、なんでこの姉ちゃんにペラペラ話してんだ？」
尾上はしまったと言うように口をふさぐ。

「大丈夫、僕と由美子さんは協力するって約束したんだ。だから由美子さんにも協力させてあげて。」

キバットはその言葉にポカンとなるがため息をつく。
「まったくお前もマヤに似てお人好しだな。女に危ない橋を渡らせるのは俺の趣味じゃないが…、まあ姉ちゃんは熊みてえだし、いいだろ！」

この言葉でキバットの頭にもうひとつタンコブがついた。

「わかった、僕がそのお姉さんを守る！」

進也は決心して胸を叩いた。

だがキバットはそばによると一言

「その裏の可能性も考えとけよ。」
と伝えた。

一人聞こえた由美子はそのやり取りを見て首をかしげた。

「ひ、ひい…。」

逃げる男性の首に吸命牙が突き刺さると、彼からライフエナジーを吸い取る。

「フウ、コノマチノニンゲンノライフエナジーハゼツピンダナ。」

タコに似た怪人…オクトパスファンガイアは腹を叩くと歩き去っていった。

「ぐひ、いいなあ。」

ニット帽をかぶった男はよだれをたらしながら手に握ったゆかりの写真にキスをした。

翌々日

公民館の前にはどでかいポスターが貼られており、開いた入り口に観客達がどんどん入っていった。

「ねえ、紅君てどういう子なの？滝澤ゆかりさんに仕事で呼ばれるなんて…。」

「さ、さあ…。」

百合に昨日のことを話すと戸惑った様子で質問されてしまう。

けれどもさすがにファンガイアに関わっているかもしれない事件の調査とは口が裂けても言えなかった。

しかし彼女は昨日キバットが進也に言った一言が妙に気にかかっていた。

『その裏の可能性も考えとけよ。』

「裏…。いったい何のことなんだろう？」

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「あ、何でもないわ。」

楽屋

この場には進也、マネージャーの佐野、そして滝澤ゆかりがいた。尾上、勇輝、カモ来ているのだが今は外を見回っていた。

「坊や、守ってくれるのはいいけど、肝心の店長さんは？」

ゆかりは不安そうに聞く。

「キバ…店長さんは普段外に出るのがあまり好きじゃないんだ。だから絶対安全なプランだけ立てて店の方で待機してる。」

「そう…わかりました。」

幾分か安堵したのかゆかりは軽くため息をつく。

「ところで…お願いがあるんだけど…」

進也はゆかりをギロリとにらみつける。

「な、何かしら…」

「サイン頂戴！」

一変無邪気な一言で全員がずっこけた。

公民館の裏庭では尾上、勇輝、力があちこちを見回っていた。

辺りを注意深く眺めながら尾上は鼻を動かす。

「ガルル、どう？」

「ふむ、ファンガイアの臭いが風に流れてするのですが、この辺数キロには怪しい人間が見えませぬね。」

尾上…ガルルは狼男の種族「ウルフェン」の生き残りである。

その能力は人間の姿でも発揮することができ、彼は常人の数十倍の視力、聴力、嗅覚を持っていた。

だが元々ウルフェン族は凶暴かつ好戦的な荒っぽい種族として知られている。

にも関わらずガルルの物腰に凶暴な度合いが見えないのにはわけがあるのだがそれはまた別の話で。

近くに何もないと感じた3人は場所を移して他へ向かった。

だが尾上も詰めが甘かった。

彼らがいた場所のすぐ近くの草陰にニット帽の男が隠れていたのだ。
「ぐへ、へへへへ。」

男はポケットからナイフを取り出すと刃先を舐めて裏口から中へと入っていった。

）
）

ゆかりのコンサートは予定通り行われた。

彼女が弾き鳴らすヴァイオリンに観客達も聞きほれる。

「へえ、なかなかいい感じね。」

普段、クラシックなどまったく聞かない由美子にとってもその演奏はなかなかのものだった。

進也も舞台袖でゆかりの様子を見張りながら演奏にほれほれしていた。

やがて全ての演奏、そしてアンコール曲も終わり、ゆかりが一礼して幕が下りた。

「すごかったわね。」

「ええ、私、サインももらいたくなっちゃった。」

「そうね、楽屋に進也がいるはずだから行ってみようか。」

2人はまだ余韻が残っているステージをくぐって楽屋に向かった。

廊下

「お疲れ様です。」

スタッフに代わって進也が差し出すタオルでゆかりは顔を拭く。

「ありがとう。演奏どうだった？」

「はい、最高でした。」

いつもの笑顔で笑う進也。

「えつと楽屋はここを曲がればすぐ。」

地図を見ていた由美子にニット帽の男がぶつかる。

「いたっ、気をつけなさい！」

「ぐひ。」

だが男はぶつかったことにすら気づかない顔で角を曲がっていった。

「まったく…、あの人もファンなのかしら？」

「さあ、でも何かあの人が手に光るもの「きゃあああああ！」

言葉を遮るように近くから悲鳴が聞こえてきた。

「行ってみましょう！」

楽屋の前に来ると佐野が肩を抑えてうずくまっていた。見るとそこから血が流れている。

「だ、大丈夫ですか？」

「へ、変な男がいきなりナイフを振り上げてきて…早く中に…」
楽屋に入ると先程の男がナイフを持ってゆかりに詰め寄っていた。

「あ、あなた誰？」

「ぐへへ、アンタの大ファンさ。」

男は常軌を逸した目だ。

由美子は男に気づかれないように近づく。

そしてナイフを奪おうとそっとよるが。

「あ、由美子さん！」

進也の余計な一言で男に気づかれてしまった。

「あ〜ん？」

「バカ！こつそりナイフを取る作戦が台無しじゃない！」

だが怒っていても仕方ない。

由美子は構えをとるとナイフを振りかざした男を放り投げる。

百合と進也も啞然とするが。

「百合、何してんの、早くゆかりさんを安全なところに！」

「えっ、は、はい！」

名前で呼ばれたことに一瞬驚くが百合はゆかりの手をつかんで走る。男は取り押さえられた状態から何とか動こうともがくが無駄な努力だった。

「さあ、観念しな、お前なんだるゆかりさんのファンを襲ったファンガイアは！」

「はっ？ファン何？確かに俺はファンだけど人殺しなんてしねえよ！」

「とぼけるな〜！」

男の関節がボキボキとなる。

「ぎゃあああ！ほんとだよ！ていうか俺手紙や無言電話はしたけど

会いにきたのははじめてだよ〜！」

「えっ？」

戸惑うように由美子が手を放すと男はそのまま気を失った。

「じゃあ、ファンガイアは…、ねえ進也はどう思う…。」

だが由美子が振り向くと進也は忽然と姿を消していた。

その頃

「さて、この辺でいいわね…。」

ゆかりは百合に握られていた手を離すと一息つく。

「ええ、にしてもなんだったんでしょうか、あの人？」

「きつと私をつけてきた変質者よ…。でももう少しうまくやってくれたらアイツに押しつけられたのに…。」

「え？」

ゆかりの一言に百合が疑問を持った時、ゆかりの下顎にステンドグラスに似た模様が浮かぶ。

「でも、おかげですぐにご飯を確保できたわ。走ったらお腹空いちやって…。百合はようやく異変に気づいて後ずさりをするがゆかりが舌なめずりをするのと同時に彼女の頭上に二本の牙が浮かび、突き刺さる、はずだった。

「キバババババート！」

直後にキバットが飛び出すとその小さな身体から想像できないほどの力で百合を吹き飛ばし、牙から逃れさせた。

おかげで百合は気を失ったが…。

「何なのよ、アンタ…。」

「食事」の邪魔をされたゆかりはその姿をオクトパスファンガイアに変える。

そこへ。

「やっぱりお姉さんだったんだね。」

待ち構えていたように現れた進也にオクトパスは驚愕する。

「ア、アンタ…。」

だがファンガイアもファンガイア、すぐに威勢を取り戻し身体に浮かべたゆかりの顔で笑う。

「どうして私がファンガイアってわかったの？」

「簡単だよ、まずあなたにサインをもらった時…。」

進也は受け取った色紙をすぐにキバットに見せる。

「これだな…。」

キバットが目を光らせると色紙に残っていた指紋が人間の物とは思えない形に変化する。

「ハハハ、ビ〜ンゴ！」

「ってことは最初から私のこと疑ってたってわけか。迂闊だったわね。」

そう言う割にはオクトパスの表面からは余裕の表情が消えない。

進也とキバットもわかつてはいたがあえて口に出さず、推理を続ける。

「当然！あなたは前々からこっそり人を襲っていたはずだ。でもいつもすぐに変化を解いて最初の発見者の振りをしてたんだよね。」

「あなたに満点を送りたいわね。そうよ、私はあのマネージャーにスカウトされる前からライフエナジーを吸ってたわ、上質の物をね。でもそんなの簡単に手に入るもんじゃない。そこに…。」

佐野マネージャーにスカウトされ有名になり、その上全国ツアーを果たすまでの力をつけたことでゆかりは常に上質のライフエナジーを吸うことができるようになった。

「でもあのマネージャー、私が人間じゃないって薄々感じてたみたいね。だからあなたに私の護衛と称した調査をさせたのかしら？」
ケラケラと笑いながら自分のやったことを話すオクトパスに進也が

問う。

「でもお姉さんの演奏は素敵だった。あの音楽に込められた思いはなんだったの？」

彼としては彼女に他の生き物を思いやる心があってほしいと願って最後の質問だった。

だがそれも虚しい努力だった。

「別に。人間っていい音楽を聞かせるとすぐにライフエナジーが美味しそうに膨らむのよね。それがいいからよ。」

その言葉に悪びれる様子はまったくくない。

「わかったよ。じゃあ僕もこれ以上は遠慮しない。あなたにもう音楽を…汚させない！キバット！」

「おっしや！キバっていくぜ！」

キバットは進也の周りを一回転すると右手にキャッチされる。

「ガブツ！」

左手に噛みつかれるのと同時に進也の下顎に模様が浮かび、腰にベルトが巻き付く。

「変身！」

進也がベルトにキバットを繋げた瞬間、彼の身体は銀色の光に包まれ身長が変化する。

そして銀色の光が砕け、その中から戦士…キバが現れる。

「アンタ、キバだったの…。」

「へへ、今頃気づいたのか姉ちゃん。」

キバットが不敵に笑うとそれを合図にキバがオクトパスに向かって飛び出す。

オクトパスが迎え撃とうとした矢先、キバのパンチ、パンチ、キックの連続攻撃が決まる。

オクトパスも手を鞭に変化させるとキバを打ち据えるが、決定打にはならずすぐに反撃の一撃、そして怯んだ隙を狙っての渾身の一撃が炸裂する。

「クツ、やるじゃない。でもこれは…どうかしら！」

オクトパスは下半身に結晶を集合させるとその形状を二輪のタイヤに変化させ逃げ出す。

これにはさすがのキバも驚くが。

「何ビビってんだよ！俺達にもあるだろうが。」

キバットは慌てず呟くとフエツスル抜きで口笛を吹く。

外からはわからない「ドラン」の地下。

降りてきたアームが金色の像の側を通り、その横の赤いバイクを掴むと上に引き上げる。

外に現れたバイク…マシンキバーは乗り手がいないにも関わらずライトを光らせ、エンジンを吹かせると、赤い閃光になって飛び出す。

「これバイクだから変身しないと乗れないんだよね…。」

キバは目の前に現れたバイクにまたがりながら呟くと今度は自らエンジンをかけ発進させる。

逃げていたオクトパスはキバが追ってきたことに驚くが追いつけないとふんだか、動きを止めず走り続ける。

「へっ、逃がさねえよ！」

だがキバットも、そしてキバもまだ諦めない。

スピードを上げるとオクトパスを追撃する。

その頃、道路では警察・交通課の教官が生徒相手にスピードガンの説明を行っていた。

「いいですか、この最新のスピードガンはバイクの最高速度・約250kmまでちゃんと対応しています、この様に走っている車に向

けて引き金を引くだけで…。」

カチツと音が鳴ると車の速度が表示される。

「わかりましたか？」

が、生徒達は教官の説明を無視して近づいてくる何かを茫然と見ている。

「何を一体…。」

振り向いた教官のすぐ側をオクトパスが走り抜け、更にキバのバイクが駆け抜けていった。

途端にスピードガンに亀裂が入る。

教官も啞然と壊れたスピードガンを見つめるが生徒の注目が自分に戻ったのに気づくと。

「ああ…、でも最新型といえど欠点もあります。君はこの旧型を使ってください。」

めげずに講義を続けた。

キバは遂にオクトパスに追いつくとブレーキの勢いでオクトパスを吹き飛ばした。

「ギャアアア！」

身体から火花を散らしながら地面を転がるオクトパス。

「今だ、キバ！」

キバは頷くとベルトから赤のフェッスルを抜いてキバットに吹かせる。

「ウエイクアップ！」

その叫びと笛の音に呼応して辺りが夜の闇に包まれる。

ふらふらと立ち上がったオクトパスは状況の変化に戸惑う。

キバが右足を上に振り上げるとキバットがベルトから飛び立ち、その封印の鎖を解除する。

足の3つの魔皇石を光らせながらキバは力強くジャンプし、月と身体を重ねる。

そして一回転すると右足を突き出し、急降下しながらキックをオクトパスに叩きつけた。

地面にキバの紋章が浮かぶとオクトパスは鈍い光を放って粉々に砕け散り、ライフエナジィのみが飛び出す。

ふわふわと飛んでいくライフエナジィ。

それをどこから飛んできたキャツスルドランが一口で飲み込んだ。

「へへ、やったな。」

「キバツトもね。」

キバ…進也とキバツトはお互いの健闘を讃えあつた。

ドランにて

「何ですって！ああ私まんまといっぱい食わされちゃったってわけかよー！」

由美子は進也からの報告を聞いて頭を抱える。

「でもあのストーカーさんも何か怖いことになってたよね。関節があり得ない方向に曲がってたもん…。」

由美子は冷や汗をたらすとさすがにやりすぎたかなと反省した。

そこへ百合が駆け込んできた。

「百合…、どうしたの？」

今度は下の名前で呼び捨てにされても動じない。

「うん、ちよっとお礼を言いたくて…。」

そう言つて百合は進也を見る。

「聞いたわ、君が助けてくれたのよね…。ありがとう。」

百合はそう言つて微笑むと進也もいつものような人懐っこい笑みを浮かべた。

「坊っちゃん…。」

「バカ、泣くんじゃねえよ！」

感動のあまり嗚咽する尾上をキバットはたしなめた。

「僕もお詫びといえばなんだけど……ヴァイオリンを弾いてあげる。」

「えっ、アンタ弾けるの？」

「うん。」

進也は店の奥からヴァイオリンを持ち出すと肩に乗せて弓で弦を弾き鳴らす。

（
）

聞いた人間を和ませる穏やかなメロディ。

それを聞きながら、由美子は思った。

「きつと進也がキバっていうのを受け継いだのはみんなの笑顔を守るためなわけね。」
と。

そのヴァイオリンの音色は優しく静かに響き渡った。

2 少年とキバ（後書き）

今回、小ネタに某フランス映画の一場面をモデルにしていますがどこかわかりましたか？

次回はいよいよ3人のアホ？の1人が能力発揮、お楽しみに。

3・青狼の力(前編)(前書き)

。お待たせしました(二回も書き直したわりには微妙な出来ですが…)

今回は柳雨さん投稿のキャラクター初登場です!

3・青狼の力（前編）

街の中にある小さな洋館。

その中にある真つ暗な部屋。

そこでは一つの影が電気も点けずに一人、机の上で何かに向かってナイフを突き立てていた。

「オノレ、許サン、許サン、許サン！」

影は湧き出るほどの激しい憎悪を持って一枚の写真に何度も何度もナイフを突き刺し、遂には引き裂いてしまった。

「アイツト、アイツノ息子ダケ八何ガアロウト、絶対ニ許シテハオケン！」

やがて影がナイフを握り締めるとその姿が怪人…モスファンガイアへと変わった。

公民館の事件から一週間…。

あの戦い以来、変死事件はバツタリ息を潜め、街には平和が訪れていた。

が、それと対称になるように逆に由美子の方はヒマを持て余すようになった。

学校の昼休み

由美子はポカポカと日が照ってくる窓から外を見つめながら何をすることもなく時間を潰していた。

「はあ、平和ねえ…。こんな平和な日が毎日続くといいんだけど…」

「だがさすがにここではかりヒマを潰してはもったいないと思っただか彼女は窓から頭を引っ込めると軽く首を動かす。」

「さて…、そうだ、ミナちゃんここに遊びに行くか！」

保健室

この学校の保険医…海神湊はポットで沸騰するコーヒーを見ながら微睡んでいた。

そこへノックの音が聞こえ、湊は慌てて目を覚ます。

「は、はい！…なぐんだ、由美子ちゃんか。」
入ってきた来客…由美子を見ると再び椅子に腰を下ろした。

「ケガか体調が悪い時じゃなきゃダメって言ってるでしょ。」

「へへ、いいじゃん、ミナちゃんのコーヒー美味しいんだからさ。」
由美子は笑うと近くの椅子に座った。

湊はコーヒーを二つのカップに注ぐと由美子に一つを手渡した。

「それで？ここに来たってことは何か面白い話を持ってきたってことよね？」

「うーん、面白いって言えば面白いのかな？」

由美子の頭に浮かぶ「アイツ」と取り巻き達の顔。

アレを話すべきかと考えると微妙な顔になってしまう。

「えっ、どんなのどんなの？」

しかし、湊に話してしまっただけには黙っていられない。

彼女の期待の目を裏切ることが出来ず、由美子は進也のことを話すことにした。

由美子は、進也のこと、尾上達3人のこと、そしてドランという店のことをキバの話に触れないように話した。

話始めのときは茶々を入れてきた湊だったが話が進むに連れ、何も言わず黙り込むようになってきた。

「…ってヤツなんですよ。」

「ふーん、紅進也、ねえ…。」

が、話が終わる頃にはいつもの彼女に戻っていた。

ドラム

中では尾上が浮かない顔で電卓を弾いて紙にその数字を書き込んでいた。

「また赤字だ…。今月も出費が多いな…。」

そしてこそこそしている勇輝と力をジロリと睨む。

「勇輝君、またレジからお金くすねたでしょ？」

「や、やだな、何を証拠に？」

とぼける勇輝の顔に尾上は表を叩きつける。

「支出の額と残ったお金があつてないんですよ…。あれほど無駄遣いはするなつて言ったのに…。」

獲物を狙うような尾上の目に見つめられて勇輝は動けなくなる。

「それから力さくん、今月の電気代跳ね上がりまくりなんですよ。」

力はそれを聞くと慌てて自分の後ろにあつた巨大な機械を布で覆った。

尾上はそれを見るとため息をつく。

そこへ玄関が開く音が聞こえバタバタと足音が近づいてきた。

「まったく、2人とも少しは店長と坊ちゃんを…。」

尾上が振り向くと進也とキバットが手にでかい袋を持ってニッコリ笑っていた。

「ねえ！ゲーム機つてのを初めて買ったよ！」

「へへへ、みんなでやろう、ぜ…？」

尾上は無言のまま近くにある宝刀を手に取ると鞘からゆっくりと抜く。

「やめて、ガルルが「約束」破ったらダメ！」

勇輝と力は慌てて尾上の動きを抑え込む。

「はい、押さえて押さえて…。」

キバットが今にも掴みかかりそうな尾上の首に噛み付くと彼の顔に

模様が浮かび、

「はい、ちよつと興奮しました…。」

目から怒りの色が消え、素直に謝った。

そこへ店のドアの鈴の音が響いた。

キバットは急いで裏に隠れ、進也達も宝刀を元の位置に戻した。

「いらつしやいませ！」

「…へえ。」

やって来たのはスーツ姿の女性だった。

「本当にいいの、学校抜け出しちゃって？」

「いいの、いいの、どうせいても退屈なだけだし！」

放課後、由美子と湊は自転車を並べて進也の店へと向かっていた。

「で、実物はどんな子なのかしらね？」

湊は子供のような目で軽く笑った。

が、店に入るとそこには黒い空気と共にぐったりとしたいつもの面々がいた。

ただし、進也はいつも通りだったが…。

「ねえ、この店、ほんとに面白いの…？」

湊の声には明らかに「不安」と「恐怖」が入り混じっていた。

「う、うん…。アンタ達どうしたのよ！」

と、パタパタと進也が寄ってくる。

「うん、何かこの店を立ち退けだって！」

一瞬、店の空気が凍りついた。

「アンタそれでよく笑ってられるわね…。」

由美子に締め上げられ進也は足をばたつかせる。

「えっ…立ち退きってまずいことなの…。」

「そつよ…。」

更に締める力が強くなる前に由美子は尾上と湊に引き剥がされた。

「坊ちゃんが死んでしまいます！」

「由美子ちゃん、ちょっとやりすぎ…。」

由美子は息を整えると改めて今度は尾上に事情を聞く。

「はあ…、んで？どういうわけ？」

「はい、さっきのことなんです…。」

女性客は入ってくるなり、店の品も見ずにいきなり来客席に座ると名刺を出した。

「私、とある建築会社で秘書をやっております、白石と申します。」

「店長は用事で出ておりまして、私、店長代理の尾上と申します。」

尾上はにこやかに応対するが女性…白石は愛想笑いも見せずにカバンから書類を二、三枚取り出しテーブルに置いた。

「近々、この場所とその周辺にとある大型マンションの建設計画が持ち上がりました。」

「は、はあ…。」

突然聞かされた言葉に実感が湧かない尾上を尻目に白石は地図を取り出し店とその周辺の家々を囲むように印を書いた。

「よつて、あなた方には間もなくここを立ち退いてもらうことになるでしょう。」

「た、立ち退き！」「」

この言葉にはさすがに（進也を除く）全員が慌てて立ち上がった。

「ま、待ってください…。」

「もちろん、社長はただでとは申しておりません、それ相応の「そういう問題じゃありません！」何か不都合でも？」

思わず大声を出してしまったのに気づくと尾上は気まずそうに座り込んだ。

「…確かにこの店は経営難で困っていますがそれでもこの土地はお譲りするわけにはいきません。この店はある人が留守の間預かっている大事な店なんです。悪いですがそう社長にお伝えください。」

白石はため息をつくと言類をカバンにしまつて立ち上がった。

「わかりました。しかし、2、3日の内にまたお伺いしますのでもう一度よく考えておいてください。」

彼女はそう言うと言店を出ていった。

「ちつくしよ、おととい来やがれ！」

勇輝は歯ぎしりしながら地面を蹴った。

「…と、言うわけです。」

話を聞かせ終わると尾上は由美子と湊の目に火がついていることに気づいた。

「何よ、そいつ…自分の勝手だけでそんなメチャクチャを…。」

「ちよつと行つて締めてこようか…?」

湊にいたつてはもはや一教師の発言ではない。

そんな中で進也だけは事態の深刻さに気づかないかのようにニコニコ笑っていた。

「アンタは呑気でいいわね…。」

この根性がある意味尊敬してしまう由美子だった。

そこへキバットがアクビをしながら裏から出てくる。「ふああ、もうさっきの客は行つちまつた…か?」

が、まだ他の来客…湊がいるのに気づくと気まずそうに再び部屋に戻っていった。

湊がその姿を見ていたとも気づかずに…。

「えっ、家が、無くなつちやうの!?!」

「そう、そうなら困るでしょ!」

まるで小学生と先生のやりとりであるが、一応由美子が進也に事の重大さを分かりやすく説明したのである。

あまりの気疲れに由美子はため息をついた。しかし、進也は対称的に突然勢いよく鼻を鳴らした。「だったら僕、がんばるよ！絶対ここを潰させない！」
「わかっていただいてありがたいです…。」
言いながら由美子は椅子にぐったり腰かけた。

「しかし、具体的にはどうするんですか？」
「ただ闇雲にやるんじゃ失敗しちゃうわよ？」
尾上と湊に問われ、由美子は紙を取り出すとペンのキャップを抜いた。

「私にいい考えがある！」
「どこの司令官？」
由美子のセリフに誰かが突っ込んだが彼女は即座に無視した。

その夜、進也とキバット、3人は由美子のプランを見ながら自分達なりにどうするかを考えていた。

「でも、これ、うまくいくのかな？」
のっけから疑問の勇輝。

力もいつものように無言ながら顔には冷や汗がたれている。

「大丈夫！由美子さんだからきつとうまくいくよ！」

「坊っちゃん、その自信はどこから…？」

「何となく！」

きっぱり断言され返す言葉がない尾上。

そんなグダグダ会議の中、キバットがひとあくびすると窓を開いた。

「店長、どちらへ？」

「へへ、久しぶりの夜の散歩だよ。」

「あつ、だったら僕も…。」

進也が立ち上がりかけるがキバットは羽根で静止した。

「たまには1人でしたいんでな。」

「キバット？」

店を出るとキバットは優雅にヒラヒラと飛ぶ。

が、同時にキバットの後ろを1人の人影がゆっくりと歩き出していた。キバットはそれに気づかない「ふり」をしながらゆらゆらと飛ぶ。

やがて影が足を止めるとキバットもその場に静止した。

「しっかし、驚いたな、お前が「あんなこと」してるなんてよ。

しかもモディリアアーニの姉ちゃんの知り合いとはな…。」

「時代ノ都合！仕方ナインダヨ。」

キバットが嫌みに笑うことに影はムツとしながら答える。

「オ前ダツテ人間嫌イノ癖ニ何デアンナボーヤト付キ合ウヨウニナツタンダヨ！」

「ある女との約束さ、俺は律儀な男なんでな。」

「アラ、私ヨリイイ女ナノ？」

影の質問にキバットはニヒルに笑う。

「ああ、いい女さ、クイーン！」

影はやれやれとばかりに首を振るとその姿を光に照らした。

クイーン…湊は由美子に見せるような顔で聞く。

「んで、手伝って欲しいことって？私はただじゃ動かないわよ？」

「ああ…わかつてるさ。」

そしてキバットはあることを話し始めた…。

3・青狼の力（前編）（後書き）

僕はみなさんからの投稿キャラクターは事前に読んだマンガのキャラクターでその人物に一部似せて作っております。

今回のキバのキャラの大体はミステリーマンガのキャラをモデルにしていますよ。

柳雨さん、ありがたく出させていただきました。

他のみなさまのキャラ登場もお楽しみに。

今回、お待たせしたぶん、次回は早めに更新します。

4・青狼の力（後編）（前書き）

最近、忙しくて更新が遅くなっています。すみません。
ようやくの更新です。
それではどうぞ。

4・青狼の力（後編）

それほど大きくない汚れたビルの窓に、「城崎カンパニー」の赤い文字がチラチラと外の電灯に反射して光っていた。

中では小さな社長室の中、恰幅のいい私服姿の男…社長の城崎が机を介して秘書である白石と会話をしていた。

「んで？良い値で買い取るつつたのにまだあの店まだどかないの？」

白石は問われると無言で頷く。

「ふん…。こないだの奴らもだけど、みんな強情だね…。」
城崎の口にくわえられたタバコからは一本の煙が小さく流れる。

灰になりかかったそのタバコを灰皿にすりつけると彼は椅子の背もたれにどっかりと腰を下ろす。

「うん、まあ、いいか。あと一週間あるし、うまくいかなかったらいつものパターンでいってね。」

「はい。」

白石は無表情に淡々と答えると椅子を立って部屋を出た。

城崎はそれを見送ると新たにタバコを一本取り出し口にくわえた。

「使えるし、かわい子ちゃんだけど、無表情がつまらないかな？」
呟くとくわえたタバコに火をつけ煙を吐き出した。

そんな会社から少し離れた電柱の影。

「『ああ、こちらA地点、ビルから動き無し。』」
由美子が小型マイクを片手に、

「『こちらB地点、こちらからも動く様子は見えません。』」
ビルを監視しながら尾上達3人と連絡を取っていた。

「『こちらA地点、引き続き監視を続行するわ。』」

「『こちらB地点、了解…』 ってもうやめませんか？」

すぐ至近距離で。

昨日由美子が言っていた良い考え…それは「相手の弱みを握って立ち退きを諦めさせる」との名目でこの城崎カンパニーをいろんな視点で調べることだった。

「悪趣味ですよ、こんなやり方！」

「そうだよ、これって犯罪じゃん！」

力も鼻から熱い息を噴出し、憤る。

が、この非難轟々の3人を「ギロ」の一睨みで押さえつける由美子。

「うっさいわね、じゃあ、これ以上の方法考え付くの？」

言われると実は思いつかない3人。

そこへ進也が笑顔でスーパールの袋を両手にかけてきた。

「由美子さ〜ん！アンパンと牛乳買ってきたよ〜！」

「いや、ノリノリですね、坊ちゃん！」

思わず大声で突っ込む尾上を由美子がたしなめる。

「し〜っ、犯人ホシに気づかれたらどうすんのよ…。」

「そうだよ、今までの苦労が水の泡ってやつだよ。」

「2人ともテレビの見すぎです…。」

呆れる尾上。

そんな彼女たちをビルの中から見下ろしている影があった。

影は社長室、そして外の由美子達を交互に見るとニヤリと笑う。

「ハハハ、アノ馬鹿ヲ長イコト利用シタカイガアツタナ。オカゲデ

憎イアノ女ノ息子ヲ殺スチャンスガデキタ…。」

それから数時間後、ビルからは何の動きも無いまま空だけが徐々に明るくなっていた。

勇輝、力、進也に至ってはあまりの時間の長さについてしか眠りに入り、起きていたのは由美子と尾上だけになっていた。

「相変わらず何事も起きないわね…っていうか尾上さんも寝ないわ

ね。」

残った牛乳を飲みながら由美子は尾上が相変わらずパッチリ目を覚ましているのを見る。

かく言う由美子もしっかり目が開いているのだが。

「そりゃあ私は狼男ですからね、夜なんて屁でも無いですよ。」

「ふうん…、でもそういえば尾上さんって狼男のわりには紳士的よね。」

その一言に尾上は一瞬、ギョツとする、が、すぐににこやかな顔に変わる。

「坊ちゃんの言う通りだ。ほんとに由美子さんはマヤさんに似てますね。」

「マヤさん…、って誰？」

ドランの人間と付き合ってから聞いたことが無い名前：マヤ。

「そこで寝てる坊ちゃんのお母様ですよ。そして…。」

尾上は空に遠い目を浮かべる。

「私が生まれて初めて、そして唯一恋してしまった女性ですよ。」

「へえ…、そ・れ・じゃ…。」

にわかに興味がわく由美子。

まだ他の3人が目を覚ましていないのと、ビルから人が出てこないのを確認すると尾上を見る。

「教えてもらっちゃおうかな？そのマヤさんとの関・係。」

「ええ…！…まあ、いいでしょう…。」

尾上は軽く咳をすると息を整えた。

「あれは今から15年くらい前のことです…。」

15年前…。

「ちよつ、やめてよ…。」

夜の繁華街で1人の若い女性が3、4人の男達に絡まれていた。

「へへ、いいじゃねえか。ちょっと遊ぶだけだよ…。」

女性は逃げようとするものの、男達はわざとらしく彼女の動く方向に動いて彼女を逃がさない。

「ヒヒヒ…！」

「へっへ…！」

男達が女性の手を掴んで下婢た笑い声をあげたときだ。

「よしな、その女の子が嫌がつてるじゃねえか。」

皮ジャンを羽織ったサングラスの男が新たに介入してきた。

「あん？何だてめえは？」

当然、自分達の楽しみを邪魔する形で現れた男に不愉快さを感じてチンピラ達は男を睨み付ける。

「それとも…自分達が不細工だから、モテねえってか？」

「てめえ…！」

チンピラの1人が拳を振り上げ男に殴りかかるが、彼は素早くかわすと逆に拳を顔面に叩き込んで壁に吹き飛ばした。

「てめっ、よくも…。」

更に次々と飛びかかってくるチンピラ達をほとんど身体を動かさずにかわしながら全員をあつという間に地に這わせた。

「よお、大丈夫かお嬢さん？」

男はチンピラ達を踏み越えると女性に手を延ばした。

が、その時まだ意識があつたチンピラがポケットからナイフを取り出し立ち上がる。

「くそおおお！」

だがその刃先が男に届く前に彼の顔に2人のパンチと肘打ちが決まっていた。

仰天の表情のまま意識を失うチンピラを尻目に男…尾上次郎もギョツとしていた。

「何だ…助ける必要なかったか？」

「ううん…ありがとう。」

肘打ちを決めた女性はクールに笑った。

「ねえ、それ半分以上作ってない？」

由美子は険しい顔をする。

と、言うのも現在の格好がセンスの無いＴシャツにジーパン（店ではこれ＋エプロン）の敬語男が当時はそんな格好も言葉もハードボイルドな男だったとは到底考えられなかった。

「いえ、100%実話ですよ！」

尾上は怒る。

「んじゃ、一応それが恋のきっかけ？」

「いえいえ…まだこの話には続きがありますよ…。」

尾上が話を続けようとした矢先、眠っていた進也が起き出した。

「ん…、ガルル、何の話してるの？」

「あ、起こしてしまいましたか…。すみません、続きはまた後日と言っことで。」

尾上の昔話はここで打ち止めとなった。

結局、何事も起こらないまま、日が昇ってきた。

「由美子さん、大丈夫なんですか？」

「うん、一応友達の家泊まるって言っただけだし…。」

すっかり起き続けていた由美子もさすがに疲れが出てきたのか一欠伸をして身体を伸ばした。

と、どこからか「犬のお巡りさん」の曲が流れ出す。

「えっ、な、何？」

「ああ、私の着メロです、はい、もしもし…？」

激しく突っ込みたい気持ちを、由美子は電話を邪魔してはいけないという考えでがっちり押さえ込む。

「はい、あつ、店長！…はい、わかりました、すぐ戻ります…。」
携帯を閉じると尾上は顔がウォー マンの様な顔に引きつらせた。

「え…？」

笑ってるのか困ってるのかわからない表情。

その顔面のまま彼は無理するように口を開いた。

「私達がやったこと無駄だったみたいです…。」この一言で由美子は今まで全身に溜め込んでいた疲労を一気に噴き出すとそのままひっくり返った。

「あつ、ちよつ、由美子さん、由美子さん！」

洋館

「後モウ少シダ…。ソレマデ何モ知ラナイデ平和ニ生キナ…。」

影は狂喜の笑みを浮かべ、壁にかかっていた進也、そしてある女性の写真にダーツを打ち込んだ。

「フフフ…。」

「ふあああ…っであれ？」

由美子は辺りを見回し自分がいつの間にかどこかの部屋のベッドに眠っていたことに気づいた。

と、そこに進也がマグカップを載せたお盆を持ってキバットと共に入ってきた。

「あ、ようやく目が覚めたんだ。よかつた、半日くらい眠ってたんだよ。」

言いながら進也はお盆を側の机に置くとマグカップを一つ、由美子に手渡した。

「これ、あなたのベッド？」

由美子の問いに進也はニツコリと頷く。

「ああ、まあ、ありがとう…。」

ぎこちないお礼を言いながら由美子はカップの中身…暖かいココアを飲んだ、が。

「いろんな僕の気持ちがかもってるんだよ！」

突然の下手くそな口説き文句に飲んだ側からココアを吹き出した。

直後に進也の頭にタンコブが膨らむ。

「どこでんな言葉覚えた!？」

「何か綺麗なお姉さん…。これ言ったらきつと喜んでくれるって…。」

不意をつかれたゲンコツに進也は涙目となるが、それに追い討ちをかけるように由美子に迫られる。

店の一階

「さあ、どうぞ。」

「ありがとう。」

誰かが尾上から受け取ったコーヒーを受けとり、口に運ぶ。

と、そこへドタバタとの足音を鳴らしながら由美子が降りてきた。

「あつ、由美子さん、起きました!。」

横に突き飛ばされ頭を打って尾上は泡を吹いた。

それも無視して由美子はコーヒーを飲んでいる人物…湊に詰め寄る。

「ミクナくちやくん!。」

「あら、何怒ってるのよ。」

当の湊は何故目の前の由美子が猪の様な表情で激怒しているかが見当もつかない。

「何進也に口説き文句教えてんのよ!。」

「ああ、あれ。」

悪気の無い顔で微笑む湊。由美子がそれに反論を返そうとしたとき、進也とキバットが上から降り、気絶していた尾上も息を吹き返した。

「よお…。」

「あつ、キバット、ダメ!。」

第三者の前でノコノコ顔を出すキバットを由美子は慌てて隠す、が。

「その必要は無いわよ。」

湊は先程と打って変わって真面目な顔で由美子を静止した。

「え、何で…?」

辺りにいる全員を順番に見渡してもキバットが彼女に接触していることを疑問に思っている顔は無い。それどころかキバットは由美子を半ばバカにするような目をしている。

当然、由美子からの「制裁」を受けることになったのだが…。

「んで？何で私に怒ってるわけ？このボーヤに口説き文句を教えたこと？勝手に由美子ちゃん達が調べてたことを無駄にしちゃったこと？それとも、私が彼らと知り合いつてこと？」

「全部！」

由美子は熱気がこもった鼻息を湊に浴びせた。

「まったく知らないふりなんかして、最初からこの店のこととか知ってたんでしょ！」

「うん。」

無表情のまま、湊は頷く。

「まあまあ、そこは落ち着いて…。」

尾上が仲介に入ろうとするが再び突き飛ばされた。

また泡を吹きながら悶絶する尾上。

由美子は再び進也の方を向く。

「アンタも！ミナちゃんが知り合いなら何で言わない！？」

「うん！でもその人が由美子さんの学校の先生だったなんて知らなかったなあ。」

由美子の学校＝進也の学校。

にも関わらず笑顔でこんな能天気なボケをかます進也の頭にタンコブがもうひとつ増えた。

「でも私学校サボってまでこんなに資料集めてきたのにそれは酷くない？」

「いつもサボってるでしょうが！」

反論すべきなのに言い返せない湊。痛いところを突かれながらも、

めげずに手に持っていた茶色い大きな封筒を取り出す。

「キバット、アンタの見込み通りね。あの地上げ屋の秘書、臭いわよ…。」

封筒はキバットに代わって進也が受け取ると丁寧に開いて中身を取り出す。

中には数枚の書類と共に、あの秘書…白石の写真が入っていた。

「ミナちゃん、この資料どこから？」

「私には優秀な子分がいるのよ。」

湊はイタズラ好きな子供のようにウインクをしてみせた。

進也と尾上達3人は一枚、一枚書類を手にとって全ての文字を凝視していたが、ある一行にいくと目が止まる。

その中でも進也の目はいつになく真剣だ。

「先生、これって…。」

書類にははつきりとした文字で「紅マヤ」の名前が書き込まれていた。

「アイツが…一体…？」

キバットもその名前が出たことに驚いた様子でフラフラと飛び回る。それだけではない、この部屋にいる由美子と湊以外の人物は全て、その名前が浮かんでいたことに動揺していた。

「んで、ここからがもうひとつ、臭いところ。彼女、この街に来るまでの間にいろんな街のいろんな職を転々としてるのよね。それも3ヶ月おきに。」

城崎の会社

城崎はいい仕事を終わらせたらしく、大きなカバンを手にビルへと戻ってきた。

「さあ、今日は久々に飲みまくるとするか！」

ご機嫌な顔で中へと入る、が、彼の帰りを待っていたのは…。

「な、何だコリヤ！」

床一面に撒かれた書類や本、デスクには電源の入ったパソコンという状態の部屋の中、彼の会社の社員達が全員、その身体を突き通らせてあちこちにバタバタと倒れていた。

「ど、どういうことだよ…。」

と、背中に人の気配を感じ城崎は後ろを振り向く。

それから安堵し、ゆっくりとため息をついた。

「な、何だ君か…。っと、大変だ。」

そこに立っていたのは白石だった。

その顔はいつも通り、いやいつも以上に冷たく無表情だ。

しかし城崎はそれを見るだけで即座に安心し、「気を許して」しまった。

「うちの社員が…。」

焦りながら辺りを見回す城崎の首を白石が掴んだ。

「な、何のつもり…?」

言いかける前に彼の脇腹に重い一撃が決まり、城崎は意識を手放した。

その姿を見て白石は初めて口元に不気味な笑みを浮かべる。

「さて、コイツらの利用価値も無くなったし…そろそろあの子供の処へ…。」

白石は気を失っている城崎の姿をジッと眺めると、

「でもその前にこの男を食っちゃおうかしら?ここまで私にうまく使われたんだから…。」

下顎に模様が浮かび、彼女の頭上に吸命牙が浮かぶ。

しかし彼女がその牙を振り下ろす瞬間、黄色い影がその一撃を阻んだ。

影：サーベルファンガイアはそのまま鋭い爪、長い牙を光らせると白石へと飛びかかる。

「ちっ、食事の邪魔を…。」

白石も対抗してモスファンガイアに変身すると、サーベルに挑みかかる。

2体のファンガイアはビルの窓を叩き割ると外へと飛び出す。

「貴様、ファンガイアのくせになぜ私を襲う？」

サーベルは答えることなく、突然モスに背を向けどこかへ走り出す。

「ま、待て！」

モスも背中中の羽根を震わせて後を追った。

野原

サーベルを見失ったモスは白石の姿に戻り、周辺を見る。

「アイツ、いったい…。」

と、それを考える間もなく、彼女の前に進也、そしてキバットが姿を現す。

進也の目は強い何かを見せる。

「あら、ちょうどよかった。そろそろあなたのもとに行こうと思っ
てたから…。」

不気味に笑う白石にキバットが問う。

「てめえ、なんでマヤを恨む？どうしてアイツを狙うんだ？」

「別に…。私よりずっと美しいことが妬ましかったからよ…。そし
てあの女の息子であるアンタも！」

悪びれる様子も無く彼女は進也を睨むが、すぐに表情を崩す。

「まあ、それは建前で、アンタのその鎧を奪えって上からの指示な
らだけどね…。」

呟くと、白石は再びモスに変化する。

「行くよ、キバット。」

「おう、キバットていくぜ！」

進也は舞い降りるキバットを右手に掴むと、キバットも口を開く。

「ガブツ！」

進也の下顎に模様が浮かび、腰にキバットベルトが巻かれるとそこ
にキバットを装着する。

進也の身体が銀色の鎧に包まれると彼の背丈が変化し、キバへと変
身する。

モスは剣を生成するとキバへと振り下ろす。

だがさすがはキバ、僅かな動きでその攻撃をかわすと体勢を崩す位置にキックを決め、よろけたところに再びキックを決めモスを吹き飛ばした。

樹に叩きつけられたダメージは大きく、モスはフラフラとよろけながら立ち上がった。

「よっしゃ、決めるぜ！」

キバも頷くとウェイクアップフェッスルを取り出すが。

モスは素早く動くと言から爆発する燐粉を吹き出す。

不意を突かれた反撃に今度はキバがダメージを受ける。

更に燐粉が撒かれ、辺りはモヤモヤした空間に覆われる。

「な、何だコリヤ!？」

急に視界が狭くなり戸惑うキバの身体に火花が散る。

そしてキバがよろけるたびに何度もキバの身体から火花が起きとうとう彼はその場に倒れてしまった。

「おい、進也、大丈夫か？」

「ど、どうにか…。」

キバットはベルトから離れると周囲を見渡す。

「野郎、この霧に隠れてやがるな…。それなら…。」

ベルトのロットから青いフェッスルが飛び出しキバットの口に収まる。

「行くぜ、ガルルセイバー！」

フェッスルから高い音が放たれた。

ドラン

灰色の小さな猫が店の玄関に戻ってくると湊の手の間に収まる。

「ダニエル、ご苦労様。」

そこへフェッスルから流れる高音が店の中へと響く。

「へ、な、何の音？」

由美子が慌ててキヨロキヨロしたとき、尾上が立ち上がり、勇輝と力はつまらなさそうに椅子に肘を寄せた。

「由美子さん、ちよつと呼び出しですから行ってきます。」
そう言うと尾上はドタバタと店を走り出た。

「呼び出して何？」

由美子がいぶかしむ横で

「行ってらっしゃい。」

勇輝、力、湊は手を振った。

走る尾上の姿が狼男・ガルルに変化すると更に小さな彫像に変わり外へと飛び出していく。

「よっしゃ、来たぜ……！」

キバが左手で彫像をキャッチすると彫像は変形し、剣：ガルルセイバーへと変わる。

それから繋がるようにキバの左腕、腕の順に青い鎧に変化する。

そしてキバットの眼、キバの眼が青へと変わった。

モスが再び霧の中から剣を振りかざし襲い来る。

が、今度はキバはその剣をガルルセイバーで受け止め逆にモスを切り裂いた。

驚き怯みながらモスは霧の中へと潜っていく。

キバはそれを逃がさない、ガルルセイバーをモスが逃げた方向に向けてと後ろを叩く。

瞬間、ガルルセイバーの口から遠吠えが放たれると辺りの霧を一気に吹き飛ばし爆発させた。

全身から煙を上げ、満身創痍でふらつくモス。

「今度こそとどめだ！」

キバはガルルセイバーを横に構え、キバットに刀身を噛ませる。

「ガルルバイト！」

キバットの口から青いエネルギーがガルルセイバーに流れ込む。キバがガルルセイバーを構えなおすのと同時に辺りが満月輝く夜へと変わった。

キバは口を開くとガルルセイバーをくわえて構えを取る。

そして勢いをつけると暗い夜空へと飛び立ち、身体を満月へと重ねる。

そこから身体にうねりを働かせながら一気にモスに急降下した。

ポロポロの身体でモスは必死に剣で攻撃を受け止めようと構える。だがそれも虚しくモスはその身体を剣ごと叩き斬られてしまった。

青い狼男の刻印が浮かび、砕け散るファンガイア。

その身体から飛び出すライフエナジーはキャツスルドランがごとくりと飲み込んだ。

数日後

由美子は落ち着かない足取りで「ドラん」へと飛び込んだ。

「ねえ、立ち退きの話白紙になったって?」

あれからすぐに城崎は自らこの話をなかったことにするとの申し出が入り、店の閉店の危機は去った。

尾上達3人もホツとした様子でくつろいでいた。

「これで安心ですね…。」

すると進也もバタバタと裏から出てくると由美子に飛びついた。

「これでいまた由美子さんが来れるね!」

「まったく…。」

苦笑しながらも由美子もいい気持ちで笑っていた。

「そうそう、これで次郎も少しくらい赤字で怒らないことだね。」

「そう、少しの赤字で…。」

勇輝の言葉に頷きかけた尾上、が。

「ふざけないでください!うちの店は超大赤字なんですよ!」
大声で怒鳴りつけた。

保健室

コーヒーを飲む湊の元にキバットが飛んでくる。

「あら、どしたの？」

「ちよつと礼を言いにな。」

湊はその言葉に軽く驚き、軽く笑った。

「にしても顔を自由に変えられるお前がその顔を二百年もそのままにしてるなんてな。」

「ふふ、この顔はある人からもらっててね、お気に入りなのよ。」
湊は自分の「顔」を軽く撫でた。

保健室の庭先で灰色の猫：ダニエルが軽く一鳴きした。

4・青狼の力（後編）（後書き）

尾上の過去面、僅かに明らかにしましたがいかがでしたか？

サーベルの正体はモロバレだと思いましたがあえて隠しておきます（ちなみにこの世界ではファンガイアが化けるのは人間とは限りません）。

今回はバトル無しの明るいストーリー、新キャラも登場します。お楽しみに。

5・踊る大文化祭（前書き）

今回は僕の大好きなドラマ「踊る大捜査線」映画3公開記念ということでもストーリーもそれテイストをくわえたストーリーにしました（というよりこのオチの為に作ったような）。

今回もバトル有りでお送りします。
それでは。

5・踊る大文化祭

私立北村学園

どこの学校でもあるように由美子や進也達が通うこの学校にもいよいよ文化祭のシーズンがやって来ていた。

「さあ、残り2週間だ。そろそろうちのクラスの出し物も決めるよ
うにな。」

HRで担任からの一言を受けた翌日、由美子のクラスでは何をす
かの談義が行われることになった。

「メイド喫茶は？」

「プールを借りて釣り堀とか。」

「劇とかやるのはよくない？」

と、多くの意見が持ち上がるのだが、うまくまとまらないまま、そ
の日の談義は終了を迎えた。

由美子も残りをクラスの実行委員に任せ、帰りの支度をしたが。

「そうだ、ミナちゃんにちょっと聞いてみよう！」

思い立ったが吉日、由美子は教室を出ると保健室に向かった。

しかし。

「あつ、由美子さん。」

保健室には湊の姿は無く、進也が1人、本を読んでいた。

「あれ、進也だけ？ミナちゃんは？」

「先生なら職員室にいったよ。どうせ由美子さんが来て留守番して
くれるからって。」

由美子は生徒に留守番を任せる湊に怒りを感じながら、ポットを手に取りカップにコーヒーを注いだ。

その頃、当の湊はと言つと。

「ああ、海神君、ちよつと領収書の整理頼むよ。」

「ええ〜っ!？」

教務主任の小野のお説教が終わり、保健室に戻ろうとした矢先、再び主任に引き留められてしまった。

「そんなの、小野さんがやればいいじゃないですか！」

「もうすぐ文化祭で人手が足りないんだよ。それにいろんなクラスや部活動から必要経費の申請もあるしね。じゃ、頼んだよ。」主任はそう言つと職員室から出ていった。

湊はまだ納得いかない様子だったが仕方なく自分の机に座ると置いてあつた領収書を探す。

「まったく私は保険医なのに…ってあれ？」

先ほどまで机の上にチラシと見えていた領収書が忽然と姿を消していた。

落ちたのではと机の下も見るがどこにも無い。

文字通り、影も形も無くなつていた。

と、あちこちから声上がる。

「あれ、財布が無いぞ？」

「ありや？ライターが無い…。」

「俺の弁当は？」

「あれ、僕の領収書が無い！」

職員室にいた教師の半数近くが自分の持ち物を無くしていた。

「もしかして…泥棒？」

思わず湊が呟くと、自分の持ち物を無くしていた一同は一拳に顔面蒼白になった。

いつまでたつても湊が戻つてこないことに業を煮やした由美子は進也も引きずり、職員室へと向かつていた。

「ねえ、何で僕も？」

「いいから！付き添い！」

と、職員室に繋がる角を曲がった由美子は目の前に現れた男とぶつかり、男は辺りに持つていたバッグに入れたものをぶちまけた。

「ちよつ、大丈夫ですか？」

「あ、は、はい……。」

男は由美子に見せたくないかのごとく飛び出した財布やら弁当やら時計やらをカバンにしまうと慌てて走り去っていった。

「な、何、あの人……。」

「すつごく急いでたね……。」

2人が啞然と見送つたとき、今度は湊が同じ方向から走ってきた。

「あつ、ミナちゃん（先生）！」

湊は息を切らしながら辺りをキョロキョロと見回す。

「あつ、由美子ちゃんに進也君……大変よ……。」

数十分後

文化祭の準備をしていた生徒達が外から聞こえてくるサイレンの音に窓の外を見る。

「あれ？パトカー？」

「何か……ってうちの学校じゃん。」

職員室

刑事らしき面々がよくある聞き込みを行っているのを由美子、進也、湊がボクッと見つめていると、そこへ穏やかそうなメガネの初老の男性……この学校の校長・北村が近づいてきた。

側には丸顔、小太りの教頭・斉藤がついている。「おや、君達、何かあったの？」

「ええ、職員室に泥棒が入ったみたいで…。」
にこやかな顔で笑っていた校長は「泥棒」のワードを聞いた途端、急に顔に冷や汗を浮かべる。

その表情を出来る限り悟られないように目を横にいる教頭に動かし、何かを合図すると教頭は頷き慌ててどこかに走り去っていった。そして焦りの表情を元に戻すと、

「そっか、んじゃ私が警察の人達に話してくるよ。」
と笑顔で職員室に向かっていった。

「はあ…。領収書誰が盗んだんだろ？」
ため息をつく湊の肩を由美子がチヨイチヨイとつつく。

「だったらあいつと愉快的仲間達に任せればいいんじゃないの？」
由美子に親指で指された進也は不思議そうな顔で首を傾げた。

職員室では教師1人1人に刑事が聞き込みを行っていた。数人の制服警官の中心にいる中年の刑事がその内容をメモに取りながら腕を組む。

「ふつむ…、これは最近この辺で出ている連続窃盗犯かもしれませぬね。」

刑事はコートから写真を一枚取り出し、主任に手渡した。
写真には四角いメガネをかけたマッシュルームカットの青年が写っている。

「名前は山田一郎、この学校の卒業生ですね。手口から彼の犯行であることはすでにわかっているのですが…」

「ですが？」

「彼が盗むのは財布や小物が主体で領収書を盗むなんて聞いたことがないんですね…。」

刑事は弱ったとばかりに頭をゴシゴシとかき回した。

ドラン

「おいおい、モディリアーニの姉ちゃん…。ここは古道具屋、探偵事務所じゃないんだぜ…。」

「泥棒」の話を持ち込んできた由美子に対しキバツトはあきれる感情を示すように飛び回り、

「あの、言い方が悪いです。ここは骨董品店でしょ…。」
尾上が言い方を訂正する。

「それで、由美子さんはその泥棒を見たの？」

「うん、すごい普通の顔だったわね。確か…。」

由美子はカバンの中のノートを一ページ破くと、時折頬を書きながら絵を表した、のだが。

「ほら、こんな感じ。」

そこに描かれていたのは、どれだけ妥協してもとても人間とは思えない、言わば怪生物の絵だった。

「由美子さん、これ、警察の方にも見せたんですか…？」

素の狼男の毛並み以上にブルーな顔をしながら尾上が問う。

その絵の凄まじさや、後ろの勇輝、力も顔色が緑と紫に変化し、キバツトもアゴを外してしまっていた。

「お巡りさんも苦笑いしてたよ！」

進也だけは相変わらずの満面の笑顔だったが。

「ねえ、どう思う？」

「いやいや、これはないよ、こんな下手くそな…。」

腹から蒸気を流しながら倒れている勇輝の側で由美子が赤熱化した拳を冷ましながらか天使の微笑みで聞く。

「何か聞こえた？」

「ああ、半魚人の腹に鉄の拳が叩き込まれる音が聞こえた。」

キバットはブルーな顔で答えた。

改めて…。

「ねえ、何かこの泥棒の手がかりをつかむ手段は無いの？」

「そうは言っても何か情報が無いと…。」

と、ふと尾上が由美子の胸元に目をやる。

「な、何よ！」

「ちよつと失礼…。」

尾上は視線を外さないまま、由美子の胸についた「ある物」を取ろうとしただけなのだが、

「何すんのよ、この狼！」

「それ」を掴むと同時に尾上は顔に強烈ピンタを喰らう羽目になった。

それでも涙顔で腫れる頬をさすりながら彼は何とか手にとった物…黒く短い髪の毛を取るとキバットに渡した。

キバットは髪の毛を口にくわえると、

「ガブツ！」

と噛みつく。

「ふうん…。」

キバットは口に髪の毛をくわえたまま、くるくると目を回していたがやがてその回転をとめ、髪の毛を口から放した。

「どう、キバット、何かわかった？」

キバットは口を軽く動かすとニヤリと笑う。

「こいつは人間の小物、近いうち捕まるな。」

「えっ、どうしてわかんのよ？」

驚きながら由美子が聞く。

「俺の勘は当たる！」

だがキバットの自慢気たっぷりな確証無しの発言に一気に脱力する

ことになった。

「当たるわけないでしょ！」

由美子は激怒するが、その側で進也と3人は何故か全開の拍手を送った。

「マジ…で？」

夜

1人の男が袋の中に缶、ライター、包丁をこそごとと積めていた。

「文化祭か…。くだらねえな…。」

男は気味悪く笑いながら目の前の建造物…北村学園を見つめた。

文化祭当日

この小中高大合同の学校では他の学校と比べて非常に珍しく、文化祭の当日には全学科、学年を通して全ての人間が文化祭を行っていた。

今年も例年に洩れず、華やかな文化祭が行われる予定だったのだが先日の盗難事件もあってか、あちこちの入り口に警官が配備されていた。

「いくら盗難があつたからとは言え、少し物々しいですな。」

全ての門を見回しながら主任が呟くがそれに対して校長はいつものように生徒に見せるようなにこやかな笑顔で笑っている。

「ま、いいじゃないの。これだけいれば今日と明日、楽しい文化祭が送れるでしょ。」

「まったく、校長のおっしゃる通り！」

教頭はゴマをするように校長に賛同した。

ここでひとつ、言い忘れたことがあつたが、この学園の高等部の校長、教頭、主任はその容姿と性格から、生徒や教職員から某刑事ドラマの三人組から「北村のスリーアミーゴス」と呼ばれていた。

だが3人は気づいていなかった。
自分達のすぐ後ろに手に大きなカバンを持った男がいたことに。

「うん、うん、なかなか様になってるじゃない。」

由美子達のクラスの出し物は会議の結果、お化け屋敷に決まり、由美子も含めてクラスメイト達はそれぞれ思い思いのお化けの扮装をしていた。

「でも由美子さん、よく考えたわね。お友だちと考えたの？」
シンプルな幽霊の衣装をした百合が感心して笑う。

「まあね。彼らのおかげかな。」
由美子が胸を張っている裏では。

「まったく、ガルルはどこかに行っちゃうし…ねえ、ドツガ。」
真っ暗な教室の中、河童の衣装をした勇輝、フランケン衣装をした力が座り込んで顔を膨れさせていた。

廊下

「悪いわね、付き合わせちゃって。」
湊に呼ばれ、進也と尾上は2人、学校のあちこちを見回っていた。
もちろん、楽しむことも忘れず手には焼きそばとたこ焼きを持っていたが。

「別にいいよ、ウチのクラスはそんなにスゴい出し物はしないしね。」
「店にいてもヒマだし、まあいいでしょう。」

2人とも言っていることの割には十分に文化祭を楽しんでいた。
「ところでキバツト君は？せっかく領収書泥棒捕まえるの手伝ってもらおうと思ったのに…。」

「キバツトも色々見て回りたいんだって。美術部の作品のところに行ってるよ。」

美術部の出し物・学校美術館。

部員が描いたモディリアーニの模写の前でキバットは興奮し、飛び回っていた。

「うつひょ〜、よく出来てるぜ！」

だがその姿を隠しているため、キバットの身体は見えず、周りの来賓にはテンションが上がりまくっている彼の叫び声だけが聞こえる形になっていた。

「ねえ、何か聞こえない？」

「もしかして、幽霊？」

おかげでここにはあまり客が寄りつかず、せつかくの自信作を描いた美術部員達もわけもわからないまま、残念そうな顔を浮かべていた。

校長室

「ねえ、何これ？」

校長、教頭、主任の3人は先程まで校長室、だった場所の惨状を見て啞然としていた。

机や椅子は蹴り倒され、壁一面には赤いスプレーで、

『文化祭なんてクソだ！』

『人間なんてくだらない！』

『やることすべて愚の骨頂！』

『仮面ライダーオーズ、9月スタート！』

など様々な落書きが書かれていた。

「落書き…ですかね？」

「んなこたわかってるよ、何なのこれ、一部ドキドキの一言とか書かれてるけど。」

3人が3人喚いていると、主任が2人の背中をあつと言う顔で見つめる。

「ん？どしたの？」

「こ、校長…背中…。」

「背中…つてあぁっ！」

3人の背中には3つ合わせて赤いスプレーで『3バカ』と書かれていた。

と、そこに教師が校長室に駆け込んできた。

「校長、大変です！」

「ちよっ、空気読んでよ、今何してるかわからない？」

「あっ、すいません、でも大変なんです！」

由美子のクラス

「どういうことよ…これ…。」

クラスメイトに呼ばれ、駆けつけた由美子の前にはバラバラに壊されたお化け屋敷のガイコツが転がっていた。

その上、近くにはへこみがあちこちにあり、明らかに鈍器によって砕かれたものであることがわかった。

それだけではない、先程から来賓やクラスメイト以外の生徒から様々な苦情の声や悲鳴が上がっていた。

財布、ライターが消えた、背中に落書きをされた、せっかく作ったオブジェが壊された、美術部の展示室から変な声がする（これはキバット）e t c . . .。

「由美子さん、誰が一体…。」

「わかんない、けど許せないわね…。」

由美子はいつもの正義感を燃やしながら手に持った白い物を握り砕

いた。

「由美子さん、それガイコツの…。」

「あ…。」

ガイコツの上腕骨と気づかずに…。

廊下

ウシシと笑いながら歩いている男と湊がすれ違い様にぶつかる。

「あつ、すみません…。」

一旦は会釈で終わりかけたのだが、湊はぶつかった男の顔で何かが頭によぎる。

「どうしたの、先生？」

「ちよつと待てよ…。」

やがてその顔が警察に渡された写真の男…山田一郎の顔写真と重なった。

「あんにやる…。」

山田も自分の正体を見破られたのに気づいたのか、慌てて走って逃げ出す。

「あつ、待て…。」

「ちよつと僕に任せてください！」

追いかけてよつとする湊を引き止めると尾上が自ら、山田の後を追った。

由美子のクラス入り口。

「ねえ、勇輝、アンタの力は犯人探しの役に立たないの？」

「無茶言つなよ！僕が力を発揮するのは水の中、普段は視力くらいしか見せ場はないよ。それに僕君よりずっと年上だよ、呼び捨てにするなつての！」

2人が言い争つてるところに怪しい男…山田と尾上が続けて駆けて

きた。

「由美子さん、そいつを捕まえてください！」

言われて由美子はわけのわからないまま、山田に対して通せん坊の体勢をとる。

それでもなお強行突破しようとしたのか、山田は頭を前に出すと由美子に向かって突っ込むという「命知らず」の行為に出た。

結果、由美子のかかと落としが決まり山田は撃沈した。

勇輝と力が警官を呼びに言っている間、由美子、そして湊は机を使つて簡易取調を行った。

だが…。

「何ですって、オブジェは壊してない？よくもそんな…。」

「ホントだって、俺、この学校で泥棒はしたけどそんな酷いことは…。」

と、財布やライターを盗んだことは認めたがいろんな悪質な行動は全て否定した。

「んで？どうやって学校に侵入したの？」

「ああ、俺、この学校の卒業生なんすよ。だから制服着て職員室入つたら誰も怪しまなくて。」

問い詰められてるにも関わらず、山田はイタズラ小僧の様にまだクスクスと笑う。

「うんうん、僕もイタズラ大好き！」

「進也君、扇動してどうすんのよ、まったく…んじゃ、盗んだもの全部出さない。」

湊に睨まれ、山田は渋々、カバンからたくさんのお財布、ライター、時計、果てにはボールペンや定規などまで出した、が湊はその中が一番大事な物が入ってないことに気づく。

「あれ、領収書は？」

「領収書？そんな物盗みませんよ、何のメリットも無いし。」

「へ？」

由美子と湊は互いに顔を見合わせた。

ともあれ、山田が警察に引き渡されたことで、事件が一つ解決し、ようやくメインイベントの屋外ステージが行われることになった。お化けの扮装を解き、由美子は進也や湊、3人と席を並べながらステージを見渡せる位置に座った。

しかしながら由美子と湊にとっての一大事が解決していないということと彼女達の周りにはモヤモヤとした空気が漂っていた。

そこへまだ興奮が覚めず、身体から蒸気を吹き出すキバットが飛んで戻ってきた。

「キバット、どうだった？」

「ああ、最高だったぜ……」

と、進也達が座ったときはガラガラだった観客席もようやく生徒や教師、来賓で埋まりステージ見物の体勢が整っていた。

そして小さな花火と共にステージの上に主任が上がってきた。

「みなさま、大変長らくお待たせしました、いよいよステージ開演です。司会は私、学園内で最も芸が面白いと評判の高等部学年主任、小野がお送りします。」

主任のジョークをまじえた挨拶に、客席から笑い声や拍手が上がる。「ありがとうございます、それではまずは……」

ところが主任が紹介を始めようとした矢先、ステージ上に突然男が上がってくる。

「あっ、ちよっとお客さん、ステージに勝手に……」

言い終わる間もなく主任の首に男のナイフが突き立てられる。

ステージからは叫び声が聞こえ、客の一部はあっという間に席から離れてしまった。

後には一部の生徒と職員、それと進也達が残されていた。

「おい、責任者はどこだ！」

ビクビク震える主任の側で男が怒鳴り声をあげる。

しかし誰も答えないのを見ると、ナイフを主任の首元から離し、周りにいる人間を睨んでは聞いていた。

「お前か？」

「違うわよ。」

湊も答えたが、

「だったら良いけど」

と言った一言は無視された。

やがて主任の目がその場にいた校長に移ると、男も校長にナイフを向ける。

「お前か？」

主任も涙目で助けを求めた。

しかし、校長は無情にも、

「私、主任の北村と申します、そちらが校長です。」

と、立場を主任に押し付けるといふ暴挙に出た。

男も納得したのか、ナイフを再び主任に突きつけると彼に問う。

「ここに紅進也って生徒がいるだろ？どいつだよ……。」

「く、く、紅……？あ、ああ中等部の……。そ、それならあそこに……。」

主任は既に限界に達しており、すでにお漏らしまでしていた。

そして進也を指差すとそのまま、泡を吹いて気絶してしまった。

「ちっ、使えねえな、まあいい……。おい、てめえ、ちよつと来い！」

進也は呼ばれるまま、歩き出そうとするがそれを由美子が遮る。

「ちよつとアンタ、一体何なのよ……！」

「俺か？俺はな……。」

男は下顎にステンドグラスを浮かべ、シープファンガイアに変化する。

「……！ファンガイア！」

「ほう、姉ちゃん知ってんのか、俺達も有名になったもんだな。」

だがその姿を見てもまともにはたつていられたのは由美子や尾上達だけ、後の生徒や教師達は気絶したり、腰を抜かしたりとほとんど常態を保てていなかった。

シープは身体を叩くと、銃を生み出し、銃口を進也に向ける。

「だがそこをどかねえとお嬢ちゃんの内臓、そいつもろともぶちぬいちまうぜ？」

「退くわけないでしょ！アンタ、進也に何の恨みがあるわけ？」

「別にねえぜ？俺はクライアントに雇われたただの殺し屋さ。まあ余興に人間が作ったくだらねえ芸術品もどきをぶっ壊すのは楽しかったけどよ。」

「何ですって……。」

ようやく由美子も合点がいく。

文化祭をぶち壊した犯人はこのファンガイアだったのだ。

湊も憤った顔で聞く。

「じゃあ領収書もアンタが？」

「領収書？何のことだ？」

「ミナちゃん、今それどころじゃないでしょ！」

だがその横を更に進也が通る。

「ちよつと、進也、アンタが行くことないのよ！」

しかし、進也は普段の笑顔から想像もつかないほどの顔でシープを睨む。

「違うよ由美子さん。僕はアイツに呼ばれたから行くんじゃない。みんなの楽しいお祭りを壊したアイツを倒しに行くんだ！」

「ほお、言うねえ。ならかかってこいよ。」

シープは舌なめずりをしながら銃を光らせる。

「行くよ、キバット！」

「よしや、興奮の熱が冷めないうちにキバっていくぜ！ガブツ！」

キバットが進也の左手に噛みつき、彼の下顎に模様を浮かばせる。

「変身！」

出現したベルトにキバットを下ろし、進也はキバへと変身する。

「へえ、あれが黄金のキバか…。暗黒のとはえらい違いね…。」
湊が安心したようなあきれたような口調で呟く。

最初の一撃で戦いの舞台はステージから一気に学園裏の林に変わった。

だがキバは最初の一撃を決めたは良いものの、その後は反撃できず、シープの強力な銃撃に翻弄されていた。

それだけでなく、キバが隙を見計らって決めようとした攻撃にもシープは見かけによらない高速移動で軽くかわし、更に銃撃で圧倒していた。

たまらずキバは大木の影に隠れるがそこもすぐに連射を受け、あまりもたない状態だ。

「へへん、最初の威勢はどうした？」

至近距離でとどめをさそうとしているのか、シープは一旦銃撃を止めるとずんずんとキバが隠れた大木に近寄る。

「進也、こうなりやあれで行くぞ！」

「うん！」

キバはスロットから緑のフェッスルを取り出し、キバットに吹かせた。

「バツシャーマグナム！」

トランペットのような音が流れ、辺りに響き渡る。

ステージに響く音。

「よし、今日は僕だ！」

3人の中から勇輝が前に出ると姿を半魚人・バツシャー、更に彫像に姿を変え、飛び出していく。

「行ってらっしゃい！」

由美子もまだ戸惑いがありながら尾上達と手を振った。

「お待たせ〜！」

キバは彫像バツシャーを右手に掴む。

するとガルの時とはまた別の変化が起きた。

バツシャーが銃…バツシャーマグナムに変形すると同時にキバの右腕が鎖に包まれ、緑に変化する。

そして胸、キバツトの目、キバの目の順に次々と緑の姿へと変化していった。

「ヒヤヒヤヒヤ、もう逃げ場は無いぜ、諦めて出てきな…。」

シープは改めて銃を構えるとキバにとどめをさすべく、引き金に指をかける。

が、シープが撃つより早く木の影からバツシャーマグナムが飛び出すと、強力な弾丸でシープの銃を吹き飛ばし、本人にもダメージを与えた。

そして今度は自分がバツシャーマグナムをシープに向けると、仮面の下で不敵に笑う。

「形勢逆転だね（だな）。」

シープはわなわな震え出すと今度はスピードを上げて木の間と間を高速で駆け回る。

「俺の銃を落としたからどうした？俺にはまだこのスピードがある。てめえのなまくら弾丸なんて当たってたまるか！」

「残念だな、お前はもう逃げられねえぜ、バツシャーバイト！」

キバツトの叫びと共にキバはバツシャーマグナムの撃鉄を噛ませる瞬間、森は風のざわめきとともに一瞬で夜の闇に包まれる。

シープが戸惑う中、キバの足元が光り、そこから幻覚の水面…アクアフィールドが流れ出す。

「な、何だこりゃ！」

キバはバツシャーマグナムを上に掲げ、側面のフィンを回転させる。

するとその回転にそってアクアフィールドから大量の水が引き込まれるようにしてバツシャーマグナムの中に流れ込み、光の球体を生み出す。

身の危険を感じたシープが走り出した瞬間、構えたキバがバツシャーマグナムの引き金を引いた。

大きな弾丸がシープ目掛けて一気に発射される。

「へへ、いくら早くても所詮は弾丸…って何？」

弾丸は猛スピードで走るシープの後をまるで生きてるかのごとく追いつく。

「ひ、ひい…。」

やがて体力の尽きたシープの身体を緑の弾丸が貫き、大きくバツシャーの模様を浮かべた。

硬直するシープにキバが近寄る。

「大事な物壊される気持ち、少しはわかった？」

だが聞こえるはずもなく、キバの最後の指の一突きでシープは崩れ去った。

やがて再び昼の光に染まる空の上をキャットスルドランが飛び立つとライフエナジーを吸い込んだ。

由美子達がステージの上でしっかり待っているなか、ステージ裏から進也とキバットが戻ってきた。

「どう、勝った？」

由美子の問いに進也は笑顔で両手のブイサインを向けた。

由美子や尾上達、湊もブイサインを返す。

こうして戦いは終わった。

だがまだ事件は終わらない。

全てが終わったのは文化祭から三日後だった。

「斉藤君、わかってるね。」

教頭を側から離すと校長はいつものにこやかな顔で職員室に入ってくる。

「いやあ、いろいろあつたけど何とか今年の文化祭も楽しく終わつたね。」主任を陥れたことも忘れたかのような（実際、忘れていたのだが）笑顔である。

湊はあきれながら立ち上がると保健室に向かおうとする。

が、すぐに近くの教頭の不振な行動に気づいた。

彼はこそそとあちこちの机から何か紙を取り出すとビリビリと破き、クシヤクシヤにしてゴミ箱に捨てていた。

「ん〜っ？」

校長は湊が教頭に近づいているのに気づくと慌てて教頭に目でサインを送る。

しかし時既に遅く、湊は教頭をどかしてゴミ箱に捨てていた紙を取り出し、凝視する。

「あつ、これ領収書！」

それを聞くと他の教師達もゴミ箱に群がり領収書を出してしまった。校長は教頭を捨てゴマに逃げ出そうとするが、そう何度もうまくいくはずもなく、すぐに教頭が泣きついてきた。

湊（他大勢）の視線も校長に向かう。

「校長だつたんですね？」

「え、何が？」

「とぼけてもムダです。これが証拠でしょ？」

「あ、あ、でも君達文化祭で費用使いすぎ……。」「
言い終わる前に校長の手に手錠オモテヤが食い込んだ。

「えっ、何これ？」

「校長、窃盗の容疑で逮捕します。」

校長は助けを求める目で周りを見るが、

「仮にも全生徒、教師の見本が泥棒はダメでしょ。」

「あきらめなさい！」
と全員から非難轟々。

まだ言い訳をしようとする校長の肩を一人が叩く。

「行きなさい。」

「はい。」

観念した犯人のように校長は両肩を押さえられ、ずるずると取調室

(正確には生徒指導室)へと引きずられていった。

「でもね、金を使いすぎる君達も悪いんだよ！」

校長の悲痛の叫びが職員室に響き渡った。

5・踊る大文化祭（後書き）

さあ、いよいよ次回はお待ちかね、イクサの登場です。
キバ同様、キャラクターは原作とは正反対ですよ。
お楽しみに。

6・白き騎士（前書き）

みなさま、お待たせしました。

この度、スランプの為、連載が停滞しておりましたがようやくの更新です。

今回はイクサ登場編に加えて、ここまでの新登場人物紹介を行いましたと思います。

それではまず本編をどうぞ。

6・白き騎士

日曜日

尾上は店の扉の鍵を開けると箒と塵取りを持ち出して店先をはわき始めた。

「ふう…。」

まだ人通りもなく（と言つてもこの店の客自体がほとんどいないのだが）、辺りを小鳥達がさえずる声だけが穏やかに流れていた。

「さてと…。」

掃除を終えて道具を片付けようとする尾上の目にふと、道をふらつきながら歩く人影が見えた。

「おや、酔っ払いさんがまだいたんでしょうか？」

しかし男はやがてへなへなと崩れると、その場に倒れこんだ。

「ちよっ…、えっ？」

駆け寄ろうとした尾上の前で男は身体を透き通らせると粉々に砕けてしまった。

「ファンガイア…。」

尾上は身体の寒気と激しい嫌悪感を感じ、拳を握りしめた。

麻生家

由美子は休日にも関わらず制服姿で大きなバッグを側に、朝食にがつついていた。

母・優子はそれを呆れ目で見つめる。

「アンタ、朝からよく食べるわね…。」

「いいでしょ！部活じゃ体力作りは大事なの！」

こう言っているが由美子は特に部活に入っているわけではない。

その代わり、由美子は学校では特殊な立場にいた。それは他人曰く、「武芸部非常部員」である。前にも話したように彼女は幼少期から祖父に空手、柔道、剣道の手解きを受けており、高校生の今では黒帯級の腕前を誇っていた。その介あつてか、今ではそれらの部活の試合の助っ人に参加し（ただし学校の校則の都合上、公式戦には参加していない）、練習や合宿にも特別参加をしていた。

由美子がスープのお代わりを要求しながらもう一枚のパンをトースターに入れてしているとドアの外から父の電話する声が聞こえてきた。

「あれ、お父さん帰ってるの？」

「ええ、昨日の深夜にね。でもまたすぐに出かけるみたいよ。」

母はやれやれとばかりに肩を上げた。

「ふうん、ゆつくりしてけば良いのに…。」

コーヒーをすする由美子に母が声をかける。

「ところで早く行かなくていいの？急がないと遅刻するわよ。」

由美子はその言葉に慌ててコーヒーを飲むとパンとスープを無理矢理押し込んで玄関へと飛び出していった。

バッグを片手に急いで道を走っていると由美子の目の前に少女が歩いているのが入った。

「ちよつとどいて〜！」

「え…？」

が、既に遅く由美子と少女は思いっきり正面衝突してしまった。

「いけな〜い、大丈夫？」

由美子は少女に駆け寄るが、

「はい…。」

と小さな声で言うだけで立ち上がってそそくさと立ち去ろうとする。

「あつ、でも怪我とか…。」

「いえ、いいんです。」

少女は由美子の手を振り切って急ぐように走っていった。

「何なのかしら？感じ悪いわね…って、遅刻遅刻！」

由美子は急いでいるのを思い出して再び走り出した。

由美子と別れた少女は着ている服のポケットから手紙を出した。

中に入っているのは一枚の地図と…進也の写真。

「あの人に言われてきたけど…。どこにいるのかしら？」

激しい叫び声が響く道場。

男女柔道部入り乱れて練習が行われている中に、由美子がいた。

「どおりやあああ！」

向かってきた男子一人を見事に投げ飛ばしたところで、部長が両手を鳴らした。

「よし、10分休憩！」

汗を拭きながら水を飲む由美子に先程ぶっ飛ばされた数人の男子がニコニコと寄ってきた。

「いやいや、相変わらず強いし遠慮が無いねえ。」

「非常じゃなくて正式に部員になればいいのに。」

由美子は男子達をジト目で見て肩をすくめる。

「あのね、私はあくまで練習で来てるの？それに私が強いんじゃないの？
くてアンタ達が弱いんじゃないの？」

「ハハ、キツツイね。」

男子の1人が笑った。

と、1人が由美子を含めて何人かを自分の近くにサークル状に寄せると小声で話し始めた。

「なあ知ってるか？最近の連続殺人。」

「えっ？あのアマのスポーツ選手やインストラクターとかが殺され

てる事件？」

「ここ最近、街では男子達が噂するように、怪しげな殺人事件が起きていた。」

「だがスポーツ選手とは言うものの襲われているのは主に武道をある程度かじった人間などが多く、それでいてやはりやられた人間はガラス状に変わっていた。」

「もしかして…ファンガイア？」

「肘に顎を乗せて考える由美子の耳に男子のこんな声が入った。」

「でも今日もまた事件が起きたらしいぜ。確か死体が町外れの変な店で見つかったらしいぜ。」

「町外れって…まさか…。」

由美子の頭に「いつものメンバー」の笑顔が浮かんだ。

夕方

由美子はケーキを片手にいつものあの場所に向かった。

ドラム

特に店の前には変わったところもなく、由美子は取り越し苦労を感じながら店の扉を開けた。

しかし…。

「由美子さ〜ん」

入るなり抱きついてきた進也の後ろで尾上が力のマッサージを受けていた。

「ん、どしたの？」

「おほっ、モディリアーニの姉ちゃんのケーキだ。」

キバットは大喜びで由美子が持ってきたチョコケーキにパクつく。

尾上もチーズケーキを一口食べると落ち着いて今日の顛末を由美子

に語り始めた。

「ふうん、大変だったわね。」

「はい…、あの後散々事情聴取受けまして…。」

尾上は顔は引きつった笑顔に、フオークやカップを持つ手はガタガタと痙攣とかなりの疲労具合を見せていた。

「でもこの店の近くって聞いて驚いたわよ。まさかアンタ達がやったんじゃないかって。」

と、由美子の一言で部屋の全員が一瞬ドキツとした顔で額から一筋冷や汗をたらした。

「まさか、ホントに？」

しかし由美子のこの言葉は意外にも進也が否定した。

「そんなことしないよ。だってみんなお母さんと約束してるんだもん。」

「約束？」

その事情を聞きたい由美子だったが、進也の興味対象はすぐに彼女の持っているモンブランへと変更されていた。

「な、何よ…？」

進也は自分の手にあるショートケーキと由美子のモンブランを見比べていたがやがて物欲しそうな目で

「ねえ、由美子さんのちよつと食べさせてよ。僕のもあげるからさ。」

と、自分のショートケーキを笑顔で差し出した。

「ええ…、もっと話聞きたかったのに…。」

由美子はずまんなさ気にぼやきながらも、自分もお互いのケーキを見比べ…彼のケーキの頂上にそびえるクリームがたっぷり乗ったイチゴを遠慮も無く食べた。

が、途端に進也の目から光が消え、ぽかんと呆然とする目となった。

「…由美子…、さん…？」

硬直する進也のそばでキバツト達も「そりゃないだろ」といった感じの視線で見つめられ由美子は戸惑う。
「えっ、何か悪いこと、しちゃった？」

夜道

由美子は気まずいムードの中にいるのが苦しくなり、自転車を思い切りこぎながら気分を晴らしていた。

「あゝあ、結局あの事件のことほとんど聞かずに終わっちゃった。」

通る物は由美子以外には野良犬しかいないこの状況、何の障害もなく家まで間近という時だった。

「ギヤーツ!!」

夜の静寂を思い切り切り破るほどの激しい悲鳴が近くから響いてきた。

「もしかして…。」

由美子は自転車の向きを家と逆方向に向け、急いで悲鳴の方向へと漕ぎ出した。

だが由美子が着いた時は既に遅く、道の真ん中に透明化した男の死体が倒れていた。

「遅かった…、でも。」

近くからは走っていく音が反響し、犯人がまだ遠くに行っていないことがわかった。

「えっと、電話電話…。進也、キバツト、ファンガイアよ！」

『ああ、わかってる。すぐ行くぜ。』

「へっ？」

「わかってる」という言葉が気になったが、そんなことを気にしている暇があるわけでもない。

由美子は急いで自転車を起こすと足音の方角へと向かった。

「フハハ！格闘家、武道家ナド偉ソウニシテルガ所詮俺様ノ敵デハナイ！」

猿に似た怪人：コングファンガイアは人間の姿に戻りもせず、素早く街を走り回っていた。

しかし足音を頼りに追っていた由美子が姿を見極め、その後ろを自転車で追い始めた。

「待たんかい、コラ〜！」

「ナ、何ダ…、ツテ女カ…。」

コングは追いかけられたことに驚くが相手が人間の女とわかった、前を向き、

「馬鹿メ！」

口から火炎を吹いてきた。

「嘘〜〜〜！」

由美子は不意をついた攻撃を慌ててかわそうとするが避けきれないぎりぎりまで自転車ごと倒れることで何とか回避した。

「いてて…って。」

が、その痛みに怯んでいる間にコングは由美子へと素早く近づく。

「速い…！」

コングは由美子めがけて回し蹴りをしかけるが、彼女はコングの脚を手で止め横へと流し、ふらついた怪人の隙を突いて掌底を顔面に打ち込んだ。

非力な人間に見えた彼女の思わぬ反撃にコングは驚くが、

「ナルホド、才前王武術ノ心得ガアルノカ。ナラ…。」

表情は動かないながら笑う反応を見せると独特の構えをとった。

由美子も対抗して自らの構えをとってコングと対峙する。

「選手を襲ったのはアンタね？」

「アア、ミンナ威張ツテル割ニ八齒ゴタエガナカッタガネ。君八楽シマセテクレルノカナ？」

「私はそうそう簡単にはやられないわよ！」

由美子は睨みを利かせると、コングへと向かっていく。

しかし不意を突かれた時とは打って変わってコングは素早い動きを生かし、由美子の拳、蹴りを軽くかわしていく。

「この、当たり前なさいよ!」

逆にコングの攻撃の一撃、一撃はかなり重く、かわす由美子も体力が削られていく。

徐々に防戦一方へとなってしまう。

「ああもう、さっさと来いよ進也!」

と由美子が心で叫んだとき。

「キバ~~~~ッ!」

キバがキックと共に由美子とファンガイアの間へと飛び込んできた。

キバは由美子を後ろに押し下げると、自分が怪人の前へと出た。

「間に合ったな、姉ちゃん!」

「ありがとう、キバ!」

が、キバは急に由美子の方を向くと彼女の襟首を掴み上げた。

「由美子さん、ひどいよ、ひどいよ、ひどいよ!」

「何の話よ!」

「僕のイチゴ!」

まだ根に持っていたことに由美子はこの状況ながらあきれ果てる。

「さっさとアイツと戦え!」

怒った由美子はキバ（進也）の股間を思いっきり蹴り上げた。

その凄惨な光景にキバツトもコングも思いつきり目を覆う、が。

「コンナコト!」

「してる場合じゃねえ!」

慌てて互いに（キバはキバツトの意思で）戦闘態勢に入った。

と、ようやくコングは相手の姿に気づいた。

「ヨク見タラ、才前、キバカ!」

相手が手ごたえのある相手と感じたのか、コングは舌なめずりする腕を鳴らした。

「行くぜ!」

キバは強烈ダメージを何とか回復させると、コングへと向かってい

く。

「はあああ…！」

先手を取ったのはキバだ。

相手の懐に潜り込むとパンチを繰り出す。

だが、その攻撃を受けた瞬間、コングは笑った。

「えっ？」

瞬間、キバはコングのパンチ、チョップ、キックを喰らって膝をつく。

「ど、どういうことだ？」

驚くキバは負けじと再びパンチを打ち込むが、

「こ、これって…。」

彼の拳が打ち込まれたその瞬間、その一撃はコングの腹へと沈んでいき、グンと弾かれた。

よろけたキバに怪人のジャンプからの回転キック、腕を掴んでの巴投げと威力抜群の攻撃が次々に決まっていく。

「早い上に強い…、これはただの…。」

由美子もこの強さに恐怖を感じ、危機を感じたキバットも青のフェッスルを取り出した。

「だったらこれで行くぜ！ガルルセイバー！」

ガルルフエッスルから遠吠えのごとき高音が鳴り響き、ドランへと届いた。

ドラン

店の中へもフェッスルの音が響く。

「私の出番ですね！」

3人の中から尾上が動きだし、店を出ると彫像へと変身、空へと飛び出していく。

「来た！」

キバは左手にガルルセイバーを握ると、その拘束を解除、ガルルフ
フォームとなつてコングへと飛びかかった。

コングはキバの襲撃を素早くかわすが、今度はキバもガルルの高速
のスピードで追う。

「速い、これなら……。」

由美子も安堵し、戦いを見守る。

「ナルホド、確力ニ速イナ……。」

だが、コングの口振りは感心しているように見えてもまだどこか、
余裕を見せている。

「へっ、余裕を見せてられるのも今のうちだぜ！」

やがてキバはコングへと追いつき、ガルルセイバーで一気に斬りか
かる。

しかし、まだ甘かったのだ。

先程攻撃を跳ね返したコングの身体にガルルセイバーが一撃をくわ
えるが、再び怪人の身体が揺れ動きその剣撃を無効化した。

「ガルルセイバーでもダメか……！」

「オ前八、ドコマデモマヌケダナ。俺ノ肉ノ鎧八、柔ラカク、ソシ
テ硬イ！ソナ剣ヤ拳ジャ、届カンナ。」

コングは自分の身体を鼓舞し、筋肉を揺り動かした。

「そうか、だからさつきから……。だったら……。」

キバットの呼びかけにキバも頷き、今度は緑：バツシャーフェッス
ルを取り出し、キバットの口に装填した。

「バツシャーマグナム！」

トランペットに似た音が鳴ると、キバの手からガルルセイバーが離
れ、今度は彫像となつた勇輝：バツシャーが飛んでくる。

キバが今度は右手で掴むと解放された左手が再度封印され、新たに
右手が解放、キバはバツシャーフォームへと変わった。

だが隙を突かれ、キバはコングのパンチを連続で浴びてしまう。

「進也、耐える…！」

キバは必死に攻撃に必死に耐え、一気にファンガイアの攻撃を振りほどいた。

そしてコングの腹にバツシャーマグナムを当て、零距离から弾丸を撃った。

「これなら…どうだー！」

バツシャーマグナムとコングの腹の間から小爆発が起きる…。

「ひゃっ…と…」

爆発に伴う閃光に由美子は目を覆う。

やがて光が消え、由美子が目を開くと。

そこにファンガイアの姿は無く、地面に横たわる進也、フラフラと飛ぶキバットと…あの少女の姿があった。

「進也！」

由美子は進也に駆け寄ろうとするが、少女が手で制止する。

「近づかないで！大丈夫です！」

見ると進也は顔は青くぐったりしているものの、息はしっかりしていた。

少女は進也の身体をあちこち触って何かを調べている。

「この嬢ちゃん、さっき急に現れたと思ったら進也をペタペタ触ってやがる。」

キバットはあまり見かけが変わらないのでわかりづらいが、進也と同じく表情はグッタリしていた。

「キバット、ファンガイアは？」

「逃がしちまった…。あの野郎、零距离で撃ったのに平然としてやがった…。」

ドラン

「ああ、そう、私今日友達のところ、泊まるから…。うん、じゃあ明日朝イチで帰るから…。ふう…。」
由美子は電話を切るとキバットを見る。

「んで？進也は一体何で意識を失ったの？」

「ああ、魔皇力の消費が許容値を上回っちゃったんだ。ガルルとバツシャー続けて使った上にあんなエネルギー放出しちゃったからな…。」

キバット自身、先程からさほど回復しておらず、いつもに比べて低空を飛んでいる。

今は寝ている進也の側に尾上達が付いていた。

「それより何より…。」

由美子はその場所からついてきた謎の少女を見る。

少女も由美子とぶつかったのを覚えているようで、軽く会釈した。

少女はキバットの姿を見ているにも関わらず、まったく驚いている様子はなかった。

「おい、嬢ちゃん一体何者なんだよ？」

キバットが問うのに対して、少女は表情を変えないまま、それでいて初めて口を開いた。

「初めまして、私は名護雪と言います。」

そこへ、尾上が一人、二階から降りてきた。

「進也の様子はどうか？」

「命には別状はありませんが…、魔皇力の消費が激しくて三日は目を覚ましませんよ。それに零距离発射の反動で右腕がしばらく動かせない大ダメージを受けています。」

「そっか…。」

由美子はボリボリと頭をかいた。

「でもこのまま待ってたらもつと犠牲者が出てしまいます。」

2人と1匹が頭をかかえているところに少女…雪が声をかけた。

「みなさん、もしかしてあの「ファンガイア」を追っているんですか？」

「そうなのよ…って、えっ!？」

考えのあまり、由美子達は思わず聞き流しかけたが、慌てて彼女が言ったことにギョツとする。

思えば雪は先程からキバットの姿を見たり、由美子でも初耳の単語をいくつも聞いていたにも関わらず、特に表情を崩すこと無く、話を聞いていた。

「ねえ、アンタ…雪ちゃんって言ったっけ。アンタ、ファンガイアとか知ってるの?」

由美子の問いに雪は頷く。

しかしすぐに彼女は顔をプックリ膨らませた。

「でもがっかりしました。私が聞いていたキバはもっと強かったはずだったのに…。」

「な、何を…!」

キバットは憤慨するものの、雪はまったく表情を変えること無く、扉へと向かった。

そして、

「近いうち、またファンガイアが現れます。気をつけてください。」
警告するように一言言うと彼女は店を出ていった。

ドアが閉まって足音が遠ざかっていくと由美子とキバットは途端に顔に青筋を浮かべた。

「何だ、アイツ!おととい来やがれ!」

「さつきも腹立っただけ!何よあの態度!」

と、いきり立った2人をなだめるように尾上がテーブルに暖かいココアを置いた。

「まあまあ、きっとあの子もちゃんと心配してくれていますよ。」

「そうかしら（そうか）？」

由美子はイライラ顔で熱いココアをチビチビすすった。

「だってホントに言葉の通りなら坊ちゃんをここまで運んでくれなかったでしょ。だからそう思ってあげてください。」

「まあ、そりゃそうかも shouldn't けど。」

たしなめられながらココアを飲むと由美子は何となく怒りがおさまってきた。

「それよりも。」

尾上が彼女の出て行った扉の外を眺める。

「坊ちゃんと同じくらいのおの子が何故ファンガイアを知っていたのでしょうか…？」

しかし外の闇は彼の問いかけにだんまりを決め込むように、ただ空の星を輝かせるだけだった。

店を出た後、雪は一人、人気の無い夜の街を歩いていた。

無感情のまま歩いているように見える彼女だったが、その顔は先程までの無感情かつ無表情な顔と変わってどこか不安を抱えているような悲しげな顔だった。

「あんな風に言っちゃったけど…、おの子大丈夫かしら…。」

自分に対してのごとく呟く彼女だったが、その時不意に背後への気配を感じて振り向いた。

いつのまにか彼女の後ろに帽子を目深に被った女性が立っていた。

「あなたは…あの時の…。」

知っている人物らしく驚く雪に女性がゆっくりと歩み寄った。

「今日は、どうして？」

「遂に手に入れたわ。あなたがあの子を助けるために必要な力の鍵を…。」

女性は手に持っていたトランクを開いて中に入っていた物…大きなベルトと奇妙な形のギアを取り出した。

「これは…？」

それから進也が目覚めるまでの3日間、ファンガイアによる事件は起きず、しばしの平穏な日々が続いていた。

それから更に数日が立ったある日。

ドラン

進也が右手をしつかり動かすのを確かめる尾上達。

「うん、ちゃんと動くよ。」

「よかった、もう大丈夫ですね。」

彼はあの戦いの際、普通の人間ならば複雑骨折するほどのダメージを右手に受けていたのだが、進也は「体質」の都合上、眠っている間に回復する身体となっていた。

そこへ扉を開けて由美子が入ってきた。

「おう、姉ちゃん、学校はもう終わったのか？」

「ファンガイアの方が勉強より大事！いい考えが浮かんだから早退してきた。」

正義感は結構だが無茶苦茶な理由である。

しかしそんなことはまったく気にせず由美子は来客椅子にドツカリ座ると大きく咳払いした。

「いい考え？何々？」

目が輝く進也を、いつもはややウザがる由美子も今日は何か自信があるようでカツコつけるように笑う。

「フッフ、聞いて驚かないでよね。私、あのファンガイアをおびきよせる方法を思いついたの！」

「ええ

！?。」

驚くキバット達（目をキラキラさせたままの進也は除く）に由美子は自慢げに語り始めた。

「と、いうわけ。」
由美子が語り終えて再びドツカリ腰を下ろすと、進也は不安げな顔を
する。

「でも、それじゃ由美子さん危くない？」

「大丈夫、私も自分の身ぐらい守れるし…。」

ドンと胸を叩く。

「進也が怪我したの、私のせいだしね。」

軽く笑うと由美子は進也の頭を撫でた。

と、

「バツキャロー！姉ちゃんが死んだらどうするんだ！」

突然、キバットが声を荒げて叫んだ。

「キバット…。」

「もし、姉ちゃんが死んだら、死んだら…。」

身体を震わせるキバットに由美子も思わず胸を押さえる、だが。

「新しい姉ちゃん、見つからねえんだぞ！」

途端、由美子の額に浮かぶ青筋。

「てえな、何も殴ることねえんじゃねえの？」

「キバットも悪いよ。由美子さん怒らせるんだから…。」

ぶつくさ言うキバットと一緒に進也は由美子の「作戦」の為に草の
陰から辺りを見ていた。

夜の街路

ジャージの上からパーカーを羽織った青年が、シャドーボクシング
のような動きでジョギングをしていた。

それを近くの方の角の陰からバンダナを頭に巻いた革ジャンの男が見つ
めていた。

男は青年を獲物を狙うような目つきで見て、歯を出して笑った。

「ここ一週間、暴れるのは控えていたが…、弱いやつをいたぶるの

はやめられねえし、何よりあのキバでも俺を倒せなかつたんだ。怖いものは何もねえ。」

男は手を握り締めると、青年に飛びかかった。

ところが、青年は男をかわすと逆に彼を投げ飛ばした。

その拍子に青年が着けていたフードが落ち、素顔が露になる。

それを見て、目を見張る男。

「お、お前は……。」

そう、走っていたのは青年ではなく、由美子だったのだ。

「そのとおり、私は……。」

名乗りを挙げようとする由美子を男の、

「あの時のキンタマ女！」の叫びが遮る。

その途端、男の頭に由美子のみえばりのグリグリが決まり、男は悶絶する。

「だ〜れが、キンタマ女じゃ〜！ざけんな！」

更に解放ざま、由美子にケツの間を蹴られ男は涙目で歯を食い縛りながらその姿を正体：コングファンガイアに変貌させた。

「よくも騙した上に酷い仕打ちを！お前なんか食ってやるぜ！」

コングは両手を振り上げると、由美子に向かって襲いかかる。

だが、その襲撃が来る前に由美子の前にキバットが飛び出すとコング目掛けて何度も体当たりをぶつけた。

「ぐあ……！」

怯んだところに進也が出てくると飛び回るキバットをキャッチする。

「さあ、やっちゃって！」

由美子の指示に進也も頷くと左手をキバットに差し出す。

「ガブツ！」

進也の下顎に模様が浮かび、腰にベルトが装着される。

「変身！」

キバットを装着し、進也はキバに変身と同時にコングへパンチを撃

ち込む。

さすがに不意を突かれるのには弱いのかコングも跳ね返せず、近くの河原まで吹き飛ばされた。

「てめえ、どうやって俺の足取りを嗅ぎ付けた!？」

驚きを隠せないコングが由美子達に問う。

「ふふ、それはね…。」

「俺達の仲間に狼男がいてな、そいつがお前と戦った時、マーキングをしていたのさ。」

前回の戦いの際。

「はあああ!」

ガルルセイバーがコングに当たり跳ね返される一瞬。

剣に付いた顔から光が放たれ、コングの身体へと吸い込まれていく。

「これが引つ付くとな、離れた位置からでも俺達はお前の臭いにすぐ近づくことができたの「人のセリフ、とんな!」」

シメを取られ、由美子は激怒する。

だがそれ以上にハメられたコングは身体をワナワナと振るわせ、身体を真っ赤にした。「てめえら、許さん、許さん、許さんぞ!」

いきり立つとコングは身体をぐんと膨れ上がらせ、激しい筋肉を見せつけた。

「俺の柔軟な筋肉は防御の為だけではない!前は手加減してやったが今度は本気で行くぞ!」

コングは叫ぶと大きな拳を回転させるように振るわせ、キバに振り下ろす。

「よけろ、進也!」

間一髪、バツク宙でかわすが拳が落ちた場所はメラメラ炎を上げな

がら大穴を空けていた。

「ちつ、だかなかなかやるようだな…。」

「こないだのアレが本気で無かっただと…。」

キバットも顔を青くするが由美子も無意識に足を震わせていた。

キバは素早く拳の範囲外に移動し、呼吸を整える。

だがコングは余裕で笑うと、

「ケツ、お前、俺のこの攻撃を忘れたわけじゃねえよな!？」

大口を開き、巨大な火炎放射を射ってきた。

「あの時よりデカイ?」

キバはジャンプで火炎より上に飛び上がる。

だが、あまりの太さにかわしきれず、右足が焼かれる。

「くっ…。」

キバ（進也）は鎧の下で顔を歪める。

彼の右足は焦げるほどに焼かれ、ヘルズゲートも封じられてしまっていた。

「これじゃ、必殺のキックが使えねえ…。」

コングもキバが立てないほどのダメージを受けているのを知ると、

巨大な腕を鳴らしながらズンズンと迫ってきた。

「ここまでか…。」

キバットさえも目をつぶってしまった時。

「ぐおおお!」

突然、コングを白い稲光が弾き飛ばした。

コングは身体から電流を流しながら地面に倒れ込む。

「え、だ、誰?」

由美子、キバット、そしてキバがその電撃が放たれた方向を見る。

河原から僅かに高い丘…。

その上に手に何かのギアを持った雪が立っていた。

「「お前は…。」」

「君は…?」

その顔を見たことがあるキバットと由美子は驚き、直接は初めて見るキバ…進也は怪訝な表情で見つめる。

「大丈夫ですか? 私が代わります…。」

雪は小高い丘を降りていくと自ら、コングの前へと立った。

「何やってんのよ! 早く逃げないと…。」

由美子は叫ぶように呼びかけるが、雪は恐れるどころか怪人を強い目で見つめる。

コングもその間に身体の痺れが抜け、フラフラと立ち上がった。

「へへ、ちよつとビックリしたがお嬢ちゃんが相手するって?」

コングは笑いながら手を燃え上がらせると彼女を狙って振り上げる。

すると雪はどこからともなくベルトを取り出すと腰に巻き付けた。

「何!?!」

怪人も思わず、攻撃の手を止め後ろへ下がる。

「な、何、アレ?」

由美子も驚きながら戦場で今、起きようとしている様子を見据えた。

「ついに手に入れた…。あなた達と互角に戦うこの力を…!」

雪は左手を掲げ、右手に握ったギアに押し付けた。

『R - E - A - D - Y』

無機質な電子音が流れ、音が鳴り始める。

「変…、身…!」

雪は叫びを挙げるとベルトにギアを下ろした。

『F - I - S - T - O - N』

音声と共にベルトから金色の十字架が現れ、輝く鎧の形を形成する。それが雪に被されるとその姿が白い…聖職者にも似た鎧の戦士に変わった。

「へ、何だ?」

「白い…戦士…。」

由美子と進也は啞然とその姿を眺め見る。

「ハツハツハ、何だか知らんが俺は一度はキバに勝ってんだ！そんなよくわからんヤツに負けるか！」

コングは両腕を赤熱化させ、戦士へと振り下ろす。

だが瞬間、彼女の姿が怪人の視界から消えコングのパンチが宙を切る。「な、何？」

戦士を見失ってキョロキョロ辺りを見回すコングの腹にズンと鈍い音が響く。

コングが自分の攻撃が決まった点…下腹部を見ると戦士がそこへ拳を固めたパンチをぶつけていた。

だがコングはすぐにニヤリと笑い、拳を大きく振り上げた。

「効かんことを…理解していないようだな！」

コングの拳が落ちた地点が大爆発し、由美子も進也もギョツとした趣でその地点を見つめた。

「ふん、この俺様にたてつくから…だ？」

だがコングが振り下ろした地点には大きなクレーターは空いていたものの、戦士の姿はまったく無かった。再び姿を見失い、首を振るコングの耳に声が響いた。

「なるほど、確かに硬いです…、なら。」

声が聞こえた直後、白い影が一瞬見え、コングの懐に再び拳を構える戦士が現れ、

「はあああああ…！」

今度は目に見えなくなるほどの速度で怪人の身体にパンチやキックを連続で打ち込んだ。

「フハハ、何発撃つても効かんと言って…。」

これだけの攻撃を受けても余裕を崩さなかったコングの顔、それが苦痛に歪む。

同時に怪人の身体に無数の亀裂が浮かび、光を噴き出しながら大爆発を起こした。

「進也の攻撃をいくら受けても倒れなかったアイツが…。」

驚く由美子より離れた背後。

そこにあの帽子女がいたことに由美子は気づかなかった。

女は帽子の下でクスリと笑う。

「早いものね…。もうLv2の段階まで使いこなしているなんて…。」

女は手元の測定器を見ると、戦いの場を去っていった。

「進也…。」

とだけ呟いて。

腹が爆発するほどのダメージを受け、コングは身体のサイズが元々の大きさにまで縮まっていた。

「い、嫌だ…。俺はもつと暴れまわって…。」

「言いたいことはそれだけですか…?」

戦士…雪が冷たく呟くのに従って、戦士の閉じていた仮面が開き、赤い目が明らかになる。

そしてその時熱気も放たれ、満身創痕の怪人を吹き飛ばした。

それを見計らって戦士は腰に着けていた銃を抜くと下を押し出し、隠れた刃を引き出した。

更に腰のスロットからフエッスルに似た小さなカードリッジを取り出すとベルトに差し込み、ギアをスイッチのように押し込んだ。

『I - X - A - C - A - L - I - V - E - R - R - I - S - E - U

- P

再び無機質な電子音声が流れると、戦士の胸の紋章が赤く光り出し、剣へとエネルギーが入り込んでいく。

戦士は重い呼吸をしながら剣を鋭く、そして力強く構えた。

「や、やめる…。」

怪人が虚しい叫びをあげたのもそれが最後だった。

「あなたに…、明日は来ない…。」

雪：戦士は呟くと剣をコングへと振り下ろした。

その光の刃に叩き斬られたコングは身体から電流を流しながら、四散した。

後には戦士と、雪のように舞い散る破片が残された。

「スゴい、倒しちゃった…。」

「アイツ、何者なんだ？」

由美子とキバットの思いを代弁し、進也が人懐っこく聞いた。

「君は…一体何なんだい？」

「私は名護雪…、またの名は…仮面ライダー、イクサ…です。」

まだ結晶が降り注ぐなか、雪：戦士は呟くように、そして初めて戦士の名を名乗った。

登場人物2

名護雪（16歳）／仮面ライダーイクサ

イメージCV：折笠富美子

赤茶色のセミロング（やや前が長い）の頭に近い片側を僅かに結んだ髪型とやや細い目が特徴。

身長が進也よりある程度大きいので同年齢と思われるがちだが実際は二歳年上。

戦いの際はほとんど眉一つ動かさないため、表情が無いように見えて実は感情表現は人一倍豊かでおかつ、意地っ張りな一面もある。普段は冷静だが内面は熱く、正義感もある優しい性格。
一人称は「私」。

海神湊（？歳）

イメージCV：沢城みゆき

黒くて横に長い形のセミロングにやや細目。常に耳に目立つイヤリングをしている。

スタイルは抜群でどんな格好をしても輝く姿をしている。

進也や由美子達を通う学園の24歳の若き保険医だが正体は…。

温厚で子供っぽい面が目立つが時折ドライかつ冷酷とも見える面を持つ。

一人称は「私」。

ダニエル

湊が飼っている猫…だが正体は彼女に使役するファンガイアで、クイーンの命令にのみ忠実に動く。
冷静な性格。

サーベルファンガイア

身長 / 208 cm

体重 / 98 kg

ビーストクラスファンガイア。

湊の飼い猫・ダニエルが変身する。

鋭い爪と牙が武器で、ビーストクラスでもトップクラスの素早さを誇る。

謎の女（?歳）

イメージCV：???

帽子を目深に被っており、顔がわからないが季節構わず黒いコートとスカートという格好から辛うじて女性とわかる人間。

進也を取り巻く人物に助言を与えたりサポートを施すが、直接進也の前に顔を出さない謎の人物。

仮面ライダーサガ（?歳）

イメージCV：松野太紀

正体不明の謎の仮面ライダー。

謎の女に協力し、その指示を受けて進也達と共闘したり、彼女の言葉を伝える。

戦闘力は非常に高く、複数のファンガイアが束になってかかってもかなわないほどの実力者。

常に素顔は明らかにせず、その場にいた人間の姿に変装する。

紅真夜（?歳）

イメージCV：柚木涼香

進也の母。

黒い髪に黄色い目をしている。

「この親にして、この子あり」の言葉が示すように息子同様の無邪気かつ天然だが、非常に優しい性格。

進也がキバになった一年前に、「ドラゴン」を飛び出し行方不明にな

るが…。

水無月渚（17歳）

イメージCV：豊崎愛生

由美子の同級生で、小学校時代からの幼馴染兼親友。

ブロンドのロングヘアに緑がかつた黒い目。身長は由美子より若干低め。

清楚で穏やかそうな外見に似合っただけで勉強では常時学年TOPの才女

…は表の顔、実際は由美子に負けず劣らず豪快ガッツで喧嘩っ早い。由美子とは深く強い信頼関係を持っているが、普段はそれを欠片も見せないような口喧嘩をする。

登場人物2（後書き）

いかがだったでしょうか？

雪は少女版照井を目指して作り出したキャラクターです。

これからどんどんキャラクターを広げていこうと思っているので今後をお楽しみに。

最後に今度、新説キバのスピノフ編を出したいと思っています。

というわけで、読者の皆様にやって欲しいネタ、これは面白いのはというネタがあれば大募集します（僕自身幾つかネタを考えています）。

次回は早く更新する予定です。

それでは。

7・ファンガイアの心（前編）（前書き）

大変、遅くなってしまいました。

お待ちかね、最新話です。

今回から数話にかけて雪のキャラを掘り下げていきます。
それではどうぞ。

7・ファンガイアの心（前編）

真つ暗闇の中…。

幼い少女が一人、前も後ろもわからない中をとぼとぼと裸足で歩いていた。

「お父さん…、お母さん…どこにいるの…。」

少女は次第に不安にかられ涙をポロポロと流しキョロキョロと辺りを見回した。

と、暗い中から不意に不気味な鳴き声が聞こえ、少女はビクリと足を止める。

「な、何…？」

次第に鳴き声は大きくなってくると、それに加えて周囲から足音が鳴り始めた。

自分一人しかない状況…。

少女が身体をすくめる中、暗闇から何匹もの怪物が姿を現した。怪物達は不気味な鳴き声を上げると、少女の周りをジワジワと取り囲んでいった。

少女は悲鳴を上げてうずくまる…。

雪はそこで目を覚ました。

「またあの夢…。」

ベッドからよろよろと腰を上げると頬が濡れているのを感じた。

拭ってみると、それは涙…。

ボンヤリとそれを眺め、ふと横を見て雪はギョツとする。

何故なら雪が寝ていたベッドの側で進也が穏やかな顔で寝息をたてていたからだ。

戸惑いながら部屋を見て、雪はこの部屋が自分の初めて見る部屋だと気づいた。

「こ、こは…。」

「おっ、やつと起きたか…。」

雪が聞こえた声の方向に振り向く、とベッドの枕元の上にあったヴァイオリン（の形をした木箱）の中からキバットが彼女の方を見てニツと笑っていた。

「嬢ちゃん、あの後随分長く眠ってたんだぜ。」

雪はキバットに言われ、何故自分が眠っていたのかを思い出した。

昨日…。

自分の仮面ライダーとしての姿を明かした雪。

進也と雪はお互いを見据えると変身を解いた。

「お嬢ちゃん…、アンター一体何者なんだ？」

「別に、今言つたように仮面ライダー以外の何者でもありません。」

「じゃああなたの目的は何なのよ？」

「ファンガイアを倒すことです。」

雪は感情を感じない表情でキバットや由美子の問いに答える。

その声はただ与えられた任務を淡々とこなす兵士の様にも感じられた。

「アンタねえ…、ちょっとは…。」

呆れて一言物申そうとした由美子を進也の手が遮った。

「そっか…。でも雪さんの戦い方、何かすごく怒ってるみたいだったよ。強い憎しみを感じるみたいなの…。」

進也が何気無く言ってみた一言。

しかしその一言は雪の心に何かを響かせていた。

「あつ、ごめんね。何か「あなたに何がわかるんですか？」」

さつきまでと打って変わって声を荒げる雪。

その手は震える握り拳を固め、無感情だった表情も激しい憤りを感じる顔つきに変わっていた。

「何も…わかってないのに…そんな口を聞かないください…！」

いつしかじわりと目から涙をこぼすと、顔を膨らませて進也達に背を向けた。

「雪…。」

「雪さん…。」

進也と由美子は何を言えばいいかわからないまま雪に歩み寄ろうとした。

だがその瞬間、雪は身体からフツと力が抜けたかと思うとそのままバツタリと崩れ落ちてしまった。

「お、おい、お嬢ちゃん？」

由美子が急いで駆け寄ると雪を抱き上げ、脈を確認し縦に頷いた。

「よかった…。」

今度は進也とキバットが脱力して肩（翼）を落とした。

そして雪は由美子に背負われ、そのまま「ドラム」のベッドへと運ばれたのだった。

「あの…昨日はすみませんでした…。」

「いや、いいんだよ、それより問題は…。」

キバットは雪のベッドの横に置かれたトランク…イクサのベルトを見て聞く。

「このベルト、一体何なんだ？相当嬢ちゃんに負担かけてたみてえだけど。」

「それは…。」

雪は言いくそうに口ごもる。

「あの女性」のことを言うべきか言わぬべきか、彼女は戸惑う。そこへ、

「言いたくなかったらいいんだよ。」

いつ起きたのか、進也がニッコリ笑って雪の横に座っていた。

軽く驚く雪に進也が話を続ける。

「僕もみんなに秘密にしていることがあるからね。雪さんも秘密があつて良いと思うよ。」

「秘密…ですか？」

キバットは唐突に言われ、訝しげに目を細める。

「秘密？一体俺に何の秘密をしてんだ？」

「うーんと、こないだキバットの楽しみにしていたケーキを食べちゃったこととか、こっそりキバットの顔に落書きをしちゃったこととか…。」

「全部俺じゃねえか！しかもお前だったのかよ！」

キバットは青筋を浮かべて進也の頬をぐいぐい引っ張りあげる。

「プツ…。」

急に聞こえてきた笑い声。

進也とキバットが思わず雪を見ると、雪は「しまった」と言わんばかりの顔で口を押さえていた。

途端、進也とキバットの顔がにへらとなる。

「な、何ですか？」

「今、笑つたでしょ？」

「笑つてません…。」

「笑つたよな！」

「笑つてません！」

強情に否定し、そっぽを向く雪。

それを見て1人と一匹は更に顔をニヤつかせ、お互いの顔を見合わせた。

「ああ、おはようございます。」

進也達が下に降りると尾上達3人は温かい朝食の載った皿をテーブルに並べていた。

雪がそのテーブルを見ると、

「これは…。」
テーブルの上には進也達の分の皿の他に、彼女の分のお皿も置かれていた。

「昨日も含めてのお礼ですよ。坊っちゃんを助けてくれてありがとうございます。うございます。」

いきなり朝食を出された上、頭まで下げられ雪はまた戸惑ってしまふ。

「いいから座りなよ！これはこの家の『家族』全員からのもてなしだから、な！」

尻込みし、言葉もなく慌てる雪を勇輝が無理矢理に椅子に座らせる。

「さ、みんなも座って座って！」

尾上がフライパンを叩くと、進也達はワイワイと椅子に座った。

「…いただきます！」「」

進也達が大喜びでそれぞれ朝食を食べる中、雪だけは戸惑い顔で目の前の皿を見つめていた。

と、そんな彼女にキバットが口をモゴモゴさせながら寄ってきた。

「そんなしかめっ面してねえで食べよ、うめえぞ。」キバットは笑いながら喋るため、その口からは食べかすどころではないほど、朝食の破片がこぼれ落ちる。

「キバット、行儀悪いよ。雪さんも遠慮しないで食べて。」

キバットに注意しながらも自分も口が汚れている進也。

そんな彼を見てため息をつく雪は皿に載った目玉焼きを口に運んだ。

しばらくモゴモゴと噛んでいた雪だったが、やがてその口から、

「…美味しい…。」
と声もれた。

それを聞くと進也はニッコリ笑い、尾上はホツとしたように息を吐いた。

怪訝な顔になる雪。

「よかった、美味しく作れてたみたいで。ね、ガルル？」
「ええ！今日は少し胡椒を入れすぎたかなと思ったんですけど、うまく作れてたみたいですね。」
「そういうことかとそれを眺める雪。」

その時再びわずかに笑っていることに彼女は気づくことはなかった。

食べ終わった皿が片付けられるテーブル。

ふと雪がそれを見るとテーブルの上にシリアルの箱が載っているのに気づいた。

箱にはキモかわいいといった感じのキャラクター達が踊っている絵が描かれている。

「あの、進也、このキャラクターは？」

「これはね…ああ！」

進也はいきなり大声を上げると勇輝とキバットを引っ張ってテレビの前に座り、電源を入れた。

電源が入ると画面いっぱいにはヨロリとしたギョロ目に三角眉毛の男の顔がドンと映った。

男性の周りでは箱に描かれていたのと同じキャラクター達がワイワイと踊っていた。

『さあ、良い子のみんな、『ケロケロおじさんとアンラッキーズ』の時間だよ。』

キャラクター以上の変な番組名。

その上、怪しすぎる男がいきなり出てきただけあって雪は初見にして思いきり引いた。

そんな番組であるにも関わらず、進也やキバット達はテレビから目を離さない。「坊っちゃん、好きなんですよ。」

尾上はそう言うのと代わりにこの番組に関して教えた。

この番組…『ケロケロおじさんとアンラッキーズ』は半年前から始まった教育番組である。

内容そのものは単純に歌を歌ったり、ダンスを披露したり視聴者からのお便りを読んだりとワンパターンな展開なのだが司会者の『ケロケロおじさん』こと『福原悟』のややハイテンション気味のキャラクターとキモかわな着ぐるみキャラ達が子供達に受けた上に、キャラクター商品も売れ、爆発的人気を誇る番組となったのだ。

「この番組、坊っちゃんやキバットさん毎週見てるんですよ、だからほら。」

尾上に促され雪が部屋をよく見てみると…テーブルのシリアルはもちろん、そこら中にお茶碗やらスプーンにフォーク、鉛筆やノート、フィギュアなどなど部屋中いっぱい番組の商品とわかるものが置かれていた。

「でも、これは…。」

ノートを手に取ってみるとそれは明らかに小学生の低学年向けの物とわかった。それを喜んで見る進也…。

「あれがキバなんて…。」

あまりのギャップに頭のふらつきを感じる雪だった。

TV局。

「最後に今日の一言、大好きな人は信じるんだ。意地悪言ってもワガママ言ってもそれが本音とは限らない。きっと大好きな人も君のことを愛してくれるはずさ。」

男：福原がカメラに向かって優しくささやき、後ろにいたキャラクター達と手を振ると、後ろのグリーンバックの上に設置されたライトが点った。

「はい、お疲れさまでした〜！」

ADの声が聞こえると福原はすぐに壇上から降りてきた。

「はあ…。」
ゆっくりと腰を下ろした福原に上機嫌のプロデューサーが駆け寄ってくる。

「福原さん、アンタはやっぱりスゴいな、また視聴率が上がったよ！」

ホッチキスで留められた紙を見てはしゃぐプロデューサーと対照的に、

「はあ…。」

当の福原本人は番組でのテンションはどこへやら、ぐったりと暗い顔をしていた。

「でもほら、こんなに手紙が来てますよ。」

横にいたマネージャーは励ますように彼にファンレターを見せる。

しかし福原はそれを見ても笑顔を見せるどころかますます暗い顔になった。

そんな気だるそうな顔で

「ねえ、今回は何位？」

と聞いた。

「は？」

「視聴率のランキング。」

「えっと、はは、また2位ですよ！」

「ホント、スゴいじゃないですか！」

2人は福原を明るくさせようと必死に驚いてみせるが、彼はクスリともしなかった。

そのまま椅子からフラフラ立ち上がるとスタジオから出ていった。

「ちょっと、何が不満なんですか？番組は好調、キャラクター商品は売れてる、絶好調じゃないですか？」

マネージャーには福原が何に不満を感じているのかわからなかった。

「ねえ、堺君？」

「は、はい？」

福原が急に口を開いたのでマネージャー・堺は慌ててメガネをずり上げた。

「この番組、何か足りないんだよ…。」

「はい？何かって、何が？」

「僕にもわからないんだ…。」

そう言う福原の顔はどこか哀しげだった。

学校

「1575年、織田・徳川連合軍は…。」

由美子は授業も上の空、ボツと窓から見える空や校庭を眺めていた。

「アイツ、ちゃんとやれたのかな…。」

昨日雪を進也の家まで運んだ後、由美子はそのまま帰ってしまったため、その後の顛末については彼女はまったく知らないでいた。

「昼休み、中等部に行こうかな…。」

が、もうひとつ由美子が知らないことが一つあった。

それは話を聞いていない雪を教師が修羅の顔で睨み付けていたことだ。

「まったく女の子にゲンコツはないわよね。」

半ば逆ギレ気味にぶつくさ言いながら由美子は中等部の棟にやって来た。

「えと、進也の教室は…あった。」

教室を覗いてみると進也は1人、雑誌を読んでいた。

何故か彼の頭にも由美子の様なタンコブが出来ている。

だがそれ以上に進也が読んでいる雑誌に由美子は目が飛び出た。

「アンタさあ、1人で本を読んでて恥ずかしくないの！しかもこんな…。」

由美子は進也の持っていた雑誌の表紙：『ケロケロおじさん』の笑顔を見てため息をつく。

有名番組である故に由美子もこの番組を知っていたが、さすがに見たことはなかった。

ましてや自分の知り合いがこれを見ているなんて知りたくもなかった。

タンコブの理由もこれを見ていて遅刻したからだと聞いて、由美子は頭が痛くなった。

「僕、この番組にお便り出してるんだけどまだ一度も返事がこないんだ…。」

「知ったことか！」

由美子は思わず声を張り上げハツとなった。

進也はビクツときたのか目からポロポロ涙を流して嗚咽しだす。

「うわ、年下怒鳴ってるよ…。」

「大人気ねえな…。」

「えっ、あつ、ちよっ…。」

いつしか弱いものいじめの構図になっていることに大慌てする由美子。

その後ろで進也はシクシクと泣き続けていた。

「だあ、子供か！」

放課後

進也は泣きはらして真っ赤になった目を擦りながらトボトボと歩いていった。

「由美子さん…子供なんて酷いよ…。」

進也がしょぼくねながら歩いていると、彼と同じ一本道の反対側から黒い帽子にサングラス、地味なパーカーを着た男がしょぼくねながら歩いてきた。

進也と男、互いに肩を落として歩いていると…。

「うわっ！」

頭を下げながら歩いていたために2人は思いきり衝突した。

「いたた…。」

「ああ、すまないね…。」

と、ぶつかった拍子に男の着けていた帽子とサングラスが落ちてしまった。

その下から現れた顔は…。

「あ〜っ、ケロケロおじさん！」

進也がこよなく愛する番組の司会者…福原本人だった。

「えっ、君…あいた…。」

福原は痛そうに足を押さえた。

ドラム

「何で私なんですか…。」

雪はぶつぶつ文句を言いながらも、TVで見たばかりの顔が目の前にいるのは珍しいようで、その顔を横目で見ながら包帯を巻く。

「いやあすまないね、ぶつかっちゃって。」

進也の方は軽く血が滲む額に絆創膏を貼っていた。

手当てが済むと尾上が台所からポットとカップをお盆に載せて持ってきた。

「いやあ、まさか坊っちゃんを観てる番組の司会者にこんな近くで会えるとは思いませんでしたよ。」

尾上に言われ、福原は部屋を見回し、その中いっぱいグッズを見る。

「番組、観てくれるの？」

嬉しそうに聞く福原に進也はニツコリと頷く。

福原も一瞬、とても嬉しげに微笑む、のだが。

「ありがとう…、でも実は僕、今の番組に自信が持てないんだ…。」

「えっ、どういうこと？」

福原の番組をいつも観ていた進也は、TVと真逆の顔をする彼の態度に怪訝な表情をした。

「あなたの番組、視聴率は取れている上に、こんなにキャラクター商品が…売れているみたいですけど

。」

雪にも彼が自信を無くす理由がわからなかった…というよりわかりたくもないという方が正しかったのだが。

「どうして？」

と、進也がもう一度聞いてみる。

「僕の番組、確かに順風満帆なんだけど…このままでいいの不安なんだ、いつもの最後の一言だって僕自身が実行できてないし…。」

福原はガクリと頭を落とした。

雪は目をひくつかせて、福原に寄ろうとするが、その前に逆に進也が彼の前に立った。

「大丈夫だよ、福原さん。」

「えっ？」

「僕も最近、悩んでる人にあっただし…。」

雪がその言葉に反応する。

「僕自身も、僕の友達だって悩みがいっぱいあるんだ。だから、大丈夫！」

進也に、尾上達3人も頷く。

「あ、ありがとう…。」

福原はふるふるすると振るえ、涙を流しだす。

尾上がハンカチを渡すと、手にとって涙を拭いて鼻をかんだ。

「ほんとにありがとう！何だか自信が持てた気がするよ！」
福原は何度も頭を下げると、飛び出すように店を出て行った。
それを笑顔で見送った進也に雪が聞く。

「ほんとに良かったんですか？あれじゃ根本的な解決にならないと
思いますけど…。」

「いいんだよ、それで。」

進也は笑顔を崩さずに答える。

「どういうことですか？」

「だってあれはあの人の問題だよ、僕はちょっとしたアドバイスだけ。
後はあの人の仕事だよ。」

雪は「よくわからない」、そんな気持ちで目の前の少年の笑っている
表情をただ静かに見つめた。

そこにキバットが奥から飛んできた。

「それが進也の『流儀』ってやつさ。」

「進也の…、『流儀』…。」

と、部屋のどこかからヴァイオリンの音が鳴り出した。

雪が音に驚くより早く、進也がキバットを伴って外へと飛び出す。

「おっと、譲ちゃんも来たかったらついてきな。」

川原

ライフエナジーを吸われ、透明化した人間の前に、カエルに似た怪
人…フロッグファンガイアが立っていた。

だが、フロッグはおどおどとしながら何故か辺りをちらちらと見回
す。

そして半ばへっぴり腰な走り方で逃げ出そうとする。

「待ちやがれ！」

背中に聞こえた大声にフロッグはビクツと固まる。

「ちっ、遅かったか…。」

進也は一瞬、やられた人間を見、そしてファンガイアを見据える。

「いくよ、キバット。」

「おう、今日もキバっていくぜ！ガブツ！」

キバットが左手に噛み付くと進也の顔にステンドグラス状の様子が浮かぶ。

「変身！」

進也がベルトにキバットを下ろすと、身長が変化、姿がキバへと変わる。

フロッグはそれを見ると、何故か動揺したように身体を震わせたが、両手を振り上げキバに飛びかかった。

しかしキバはまったく恐れずにそのから空きの腹にキックをぶつけると、怯んだ怪人に更にパンチやキックを連続で打ち込む。

怯んだフロッグだがキバがなおも攻撃をしかけようとするキバを見ると、腕を叩いて銃を生成した。

そして震える手に銃を掴むとキバに向かって引き金を引く。

だが手が震えているせいでまったくキバには当たらない。

「どこ狙ってたんだ、銃ってのはこうやって撃つんだよ！キバ！」

キバは頷くと、緑のフェッスルをキバットに吹かせる。

「バツシャーマグナム！」

トランペットに似た音が鳴り響くと…。

「おっと、今日は俺の出番だ！」

勇輝…バツシャーが椅子から立ち上がり、彫像に変身すると外に飛び出した。

キバはそれを右手に掴むと、右腕、胸、キバットとキバの瞳の順に変化し、バツシャーフォームに姿が変わる。

「食らえ！」

キバが放った弾丸はフロッグの弾丸を打ち落とす、逆にフロッグの銃を破壊し、ダメージを与えた。

「よっしゃ、とどめだ…。」

キバはバツシャーマグナムをキバットに噛ませようとする、が。

その時、フロッグは足を押さえつづくまった。

「まさか…。」

キバの右手がだらんと下がった。

「おい、どうした、進也？」

するとフロッグは今度は剣を作り出し、キバに襲いかかった。

攻撃は呆然とするキバに次々当たり、その鎧から火花が散りバツシヤーマグナムを取り落としてしまう。

そこに雪が駆けつけてきた。

雪はキバの姿、ファンガイアの姿を見、歯を食いしばった。

「何やってるの、負けてるじゃない…。」

走って乱れた呼吸を整えるのもままならず、雪はベルトを腰に巻くとイクサナツクルに手を押し付けた。

『R - E - A - D - Y 』

「変身！」

『F - I - S - T - O - N 』

ベルトにナツクルを下ろすと、ベルトからエネルギーが鎧に変化する。

それが雪の身体に被さると彼女の姿がイクサに変わった。

イクサの仮面が開くと赤い目が露出し、熱風がフロッグを吹き飛ばした。

イクサは腰からイクサカリバーを取り、刃を出しフロッグを斬りつける。

フロッグも剣で対抗するが、まったく適わずあつという間に剣を取り落とされてしまった。

「はあああああああ！」

倒れたフロッグにイクサは容赦なくカリバーを振り下ろす。

その戦い方は最初のあの戦いのようにまったくためらいがない。それを見て何を思ったかキバがイクサの前に出る。

「進也、何を…。」

「邪魔です、退いてください！」

イクサ…雪はキバ…進也を払いのけ、フロッグに再び剣を向けた。

「やめて、その人を倒したらだめ！」

「進也、どうしたんだ？」

キバットも進也の突然の心変わりには驚く。

進也はそれでもイクサの動きをおさえる。

「離して、ファンガイアは…。」

その間にファンガイアは逃げ出してしまった。

進也はそれを見るとへたり込みながら変身を解いた。

雪も変身を解くと、進也の襟首を掴み上げる。

「何考えてるんですか、ファンガイアを逃がすなんて…。」

雪は手を震わせ、物凄い目で進也を睨みつけた。

そして進也を地面に下ろすと、ファンガイアを追いかけていった。

キバットも進也を見ると、

「どうしちゃったんだ、あんな奴楽勝だったよ。」

と聞いた。

進也は首を横に振る。

「ダメだよ、だってあの人は…。」

進也の目からは涙がこぼれていた。

フロッグは急ぎ走っていたが、へたり込むと変身を解いた。

その姿は…福原だった。

「あの子が…キバだったのか…。」

福原はため息をつき、頭を抱えた。

「だけど、いったい誰なんだ、あの人を『食った』のは…。」

震える福原。

それを近くから影が見つめていた。

「フン、バカ、ククク…。」

影はニヤリと笑つと姿を消した。

7・ファンガイアの心（前編）（後書き）

さて、次回は後編。

キバとイクサは共闘できるのか…わかりません（おい）。

次回の勝負をお楽しみに。

W、素晴らしい最終回でしたね。

まさか、あんな復活を果たすとは…。

TVのジョーカーもカッコよかったですね。

来週からのオーズ及び劇場版2011も楽しみです。

長くなりましたが最後に告知です。

この度、黒服さんの小説「仮面ライダー剣&キバ 白き帝王」とコラボすることになりました。

果たして別世界で進也達はどんな活躍を見せるのか…わかりません

（だからおい）！

ではまた次回、お会いしましょう！

8・ファンガイアの心（後編）（前書き）

ようやく更新できました。でも時間をかけた割には少々、作りが甘かったかなと感じる自分もいます（苦笑）。
それではどうぞ。

8・ファンガイアの心（後編）

「あの人がファンガイアだった？」

尾上達はキバットにある一言：福原がフロッグファンガイアと聞き、驚きを隠せないでいた。

「ああ、アイツがあそこまで落ち込むんだ、間違いないだろうな。」

「どつりでさっきの勝負で俺の使い方のキレが悪かったわけか…。」
勇輝は悔しそうに歯ぎしりした。

進也の部屋

進也は部屋に引きこもると布団を頭から被って泣いていた。

「そんな…、嘘だよ…。」

ファンだった人物がファンガイア…それも人を襲う怪物だった事実。福原の笑顔を思い浮かべる進也の目により涙が滲む。

勇輝は進也がこもる部屋をちらりと見ると、深くため息をつき立ち上がった。

「にしても坊っちゃん騙した上に人を襲うなんてよ。俺の手で殺つてやるか。」

そう言つて目尻にシワを寄せる勇輝。

右手を挙げるとその形が少年の物とまったく違う異形の形へと変わつていく、が。

「ちよつと待った〜！」

キバットが叫びながら勇輝の頭に体当たりをかまし、勇輝をぶつ飛ばした。

「まだ早まるんじゃないよ。まずはアイツが立ち直るのを待たねえと。」

「そうです、私達がマヤさんと約束したことをわすれたんですか？」

「チエツ。」

勇輝は軽く舌打ちすると手を人間の物に戻した。

「さてと。」

尾上は立ち上がると台所へ入っていった、と、すぐに

「あれ、お茶っ葉もコーヒーもほとんどありませんね。」

困った声を上げて尾上が出てきた。

「ちょっとひとつ走り買ってきますんでその間坊っちゃんを部屋から連れ出してくれますか？」

言葉に勇輝と力は頷くと二階へと上がっていった。

電灯だけが輝く暗い道を尾上だけが、否、キバットと彼が1人と一匹で歩き（飛んで）いた。

「おや、キバットさん、買い物なんだから私1人で良いんですが？」

尾上はキバットがついてきたのを不思議そうに聞くがキバットは、「とぼけんな、2人になりたい口実作りやがって。」

と考えはお見通しだとばかりに尾上を見た。

「はは、バレましたか。」

尾上はバツが悪そうに頭を搔いて笑う、がそれもほんの数秒。

すぐに顔を真面目な表情に戻してキバットに問う。

「それで？キバットさんはそのファンガイアを見てどう思ったんですか？」

「ああ、あのファンガイア……。」

キバットはそこで口をつぐんだ。

「どうしたんですか……。」

言いかけて尾上も後ろに人の気配があることに気づいた。

2人がそつと振り向くと、少し離れた電柱の後ろから黒い服の女性が現れた。

思わず尾上は身構えるがキバットは彼の前に近寄ってそれを制した。「待て、アイツからは敵意は感じねえ。」

キバットが庇ったことに安心してか女性はゆっくりとキバット達の前を歩み寄った。

「アンタ、なにもんだ？」

「ふふ、とりあえず初めまして、かしら？」

女性は目深に被った帽子の下で静かに笑った。

TV局

控え室の一つで堺マネージャーとディレクターが会話していた。

「えっ、福原さん体調が悪そうだったって？」

「はい、さっき外出から戻ってきたんですけど凄く青い顔してて。

それにどこかで足をケガしたみたいで。」

堺は焦り気味に額の汗を拭い、ディレクターは弱り気に頭を捻った。

「弱ったな、あの番組の看板は彼なのにな……。」

「す、すみません、すみません。」

自分に言われたわけでもないにも関わらず堺は何度もペコペコと頭を下げた。

その福原は川が流れる岸辺で大樹を見ながら佇んでいた。

「久しぶりだね。あれを誓ってからもう15年になるんじゃないかな？」

福原は目の前に立つ樹にまるで昔ながらの友達に会ったかのような口振りで話しかけると、樹もなつかしがるかのように風で枝葉を揺らす。

と、ズンとした気配を感じ福原は横を振り向いた。

暗がりからコツリ、コツリと静かな足音が響き、ひとつの影が姿を現した。

「君は…。」

驚く福原の前に姿を現したのは…雪だった。

「あなたが、ファンガイアだったんですね。」

雪は極めて冷静に見えた。だが一見、無感情に聞こえる声には強力な怒りが感じ取られ、横に開いた両手は強く握りしめられていた。

そして、どこからともなく腰にベルトを巻くと、雪は手にイクサナツクルを握る。

「それは…。」

「何に話しかけているか知りませんが、見つける手間が省けました。」

「

冷たく告げると雪は左手にイクサナツクルを押しつけた。

『RE・A・D・Y』

「変身！」

叫びと共にイクサナツクルをベルトに装着し、雪は走り出す。

そしてベルトから出現した光が雪に装着、彼女の姿をイクサへと変えた。

福原は驚きながらも自らもフロッグへと変身した。

「…。」

フロッグが現れたことで壁に掛けられたヴァイオリンが鳴り出したにも関わらず、進也は未だ一人、ベッドに籠っていた。

それどころか、耳を布団で塞いで音からも耳を背けていた。

「おい、坊ちゃん、ファンガイアだ！」

と叫ぶ勇輝の声も彼には届いていない。

「くそ、どうやってら出てきてくれんだよ…。」

出てこないどころか全く反応が無く勇輝達は途方に暮れその場に入り込んだ。

「ただいま…。」

そこに尾上が部屋の前へと戻ってきた。

しかし先程は曇っていたはずの表情はいつの間にか、いつもの顔に戻っていた。

「あ、ガルル…、坊ちゃんが…。」

駆け寄ってきた勇輝と力を尾上は手で制した。

「頼みましたよ、キバットさん…。」

相変わらず布団を被り、耳を押さえる進也。

「嫌だよ、もう戦いたくない…。」

すると窓が開き、キバットが部屋へと飛び込んできた。

「オラオラオラ、起きろ進也！」

「キ、キバット…。」

進也は驚きながら布団から顔を出した。

そして慌てて目の涙を拭くと、そっぽを向いた。

「な、何、僕は行かないよ！」

その言葉にキバットは額に青筋を浮かべ、尻に噛み付き、進也は悲鳴を上げた。

「強がつてる場合か！今、あのおっさんが暴れてるかもしんねえんだぞ！」

「で、でも、僕、おじさんを倒すなんてできないよ…。」

まだ、尻込みしてごねる進也。それにキバットは身体を震わせ、

「バツカヤロー！」

羽根を広げ、思いっきり張り倒した。

「お前、マヤが言ったことを忘れたのか？」

「お母さんの…言ったこと？」

「ああ。」

頷くキバット。その顔に母の顔が重なった。

「進也、もし、信じてた人が嘘をついてたら、あなたならどうする？」

『うつろんと、わかんない。お母さんは？』

『私なら…。』

進也の目がはつとしたように開いた。

進也はベッドから立ち上がり頷く。

「わかったよ、僕、行く。」

その時外では勇輝と力が鍵穴から無理矢理中を覗こうとしていた。

「あともうちよつとだ…。」

勇輝がほくそ笑んだ瞬間、扉が勢い良く開き、二人を弾き飛ばした。進也が走り出ていくと、後からキバットが追いかけていく。尾上はその後ろ姿を見届けると、微笑ましげな笑顔を向けた。「頑張ってくださいね。」

その足元では2人が正体を晒して伸びていたが。

「はあああ…!」

イクサは激しく、そして容赦無い連続攻撃でフロッグを打ち据えていた。

だが、その戦いの様相はどこかおかしい。

「このファンガイア…、どうして…?」

戦いが始まってからフロッグはまったく攻撃をしてこなかった。

だがそれはイクサ…雪が激しく攻撃を仕掛けているからではない。

怪人はまったく反撃をしないどころか、イクサの連続攻撃を全く避けようともしていなかったのだ。

「こいつ…、でもだつたら話は早い。」

イクサはカリバーの一撃でフロッグを吹き飛ばすと腰からフェッスルを外し、ベルトに差し込んだ。

『I, X, A, C A, L I, V A R, R I, S E, U P.』

電子音声と共にベルトから電流が流れ、胸のアーマーとカリバーの刃が真っ赤に輝く。

「あなたに明日は…来ない。」

冷たい怒りの眩きと共に、イクサカリバーがフロッグへと振り下ろされる、が。

「はああああ！」

その間にキバが飛び込み、イクサカリバーの刃を右手に握った。

「な…？」

「…？」

しかし、強力なエネルギーが迸る刃を握って手が無事でいられるはずもない。

当然ながらキバの右手から火花が激しく散るとダラリと下がった。

それでもキバ…進也は何事もなかったように仮面の下で笑ってみせた。

この行動にはイクサ、そしてフロッグも驚きを隠せない。

「進也…。退いてください、その手では戦えないでしょう？」

が、それでもイクサは呼吸を整えると、再び戦う構えをとる。

「キバット、ちよつと離れてて…。」

「ああ、わかった。」

キバはまた驚く行為をとった。

なんとイクサ、フロッグがいる目の前で変身を解いたのだ。

「し、進也、一体何を…。」

再び驚いたのはフロッグも同じだった。

何故ならば、自分のファンだった少年がキバだったのだから。

「君がキバだったのか…。」

フロッグは立ち上がると変身を解き、人間の姿に戻った。

「雪さん、ちよつと待ってて。」

進也はイクサ…雪にそう告げると、今度は福原の方を向いた。

「福原さん。」

「な、何だい？」

「あの人は福原さんが食べちゃったの？」

「何を言ってるんですか！あれを見れば…。」

反論しようとしてイクサは口ごもった。

進也が強い目で彼女を睨んだからだ。

すると、喋るべきか迷った様子で口をパクパクさせていた福原が口を開いた。

「信じてもらえるかはわからないが…あれをやったのは僕じゃない。」

「それ、本当？」

「本当さ、僕は昔ある人と誓ったくらいさ、もう人は襲わないってね。」

最初は進也がキバだったことで、恐れを感じていた福原も自分でも気付かない内に多くのことを進也に打ち明けていた。

それを進也のすぐ後ろで聞いていたイクサも変身を解き、改めて福原に歩み寄る。

「それでは何故…。」
と、その時だ。

どこからか音も無く吸命牙が出現し、雪へと下ろされた。

「危ねえ！」

すぐに気付いたキバットが飛び出すと吸命牙を振り払う。

途端に茂みから黒い影が現れ舌打ちと共に逃げ去って行った。

雪も急いで後を追おうとしたものの、

「あれ…？」

ふらりと目眩を起こし、足をつまずかせた。

「雪さん！」

慌てて進也が支えたものの、雪はそのままへたり込んでしまった。

「く…。」

追いかけてようにも体が上がらず、彼女は残った気力でファンガイアが逃げて行った方向をただ睨むことしかできなかった。

だがそんな雪の肩を優しく叩く者がいた。

それは…なんと自分が攻撃した福原だ。

「ど、どうして…？」

雪はその姿にただ驚き、そして戸惑った。

「なあに、あれくらい大したことはないさ。」

福原はそうは言ってるものの、あれだけの攻撃を受けて彼の体が無事なわけがなかった。

現に進也と共に雪を支えている手は震え、彼自身が今にも倒れそうな様子だった。

「僕だつて、早とちりで君に倒されようとしてたからね。」

「早とちり?」

その言葉には雪だけでなく進也も首を傾げた。

「実は今までも昨日のことみたいなのがあつてね、それがあんまり続くものだから、僕は自分で自分を押さえられなくなったんじゃないかって考えたんだ。だから…」

これで何故、フロツグがまったく手を出さなかったかの説明がついた。

福原はこれ以上、自分が人を襲うことがないよう、自らイクサに倒されようとしていたのだ。

それに感づくのに従って福原の手の中にいた雪がわなわなと震え始めた。

雪は福原の手を振り払うと、無理に立ち上がり、そして彼を睨んだ。

「本当に…自分勝手ですよ、私に倒されようとしていたなんて、ふざけないでください!」

だが雪は言葉以上に心の奥底で戸惑っていた。

いつも夢に見るファンガイアと目の前にいる福原。

一体、どちらが本当のファンガイアなのだろうか。いつの間にか雪の目からは涙が流れ、彼女の頬を濡らしていた。

その涙を拭くと雪は再び福原を見た。

「気が変わりました、あなたの明日はTVカメラの前です。その笑顔、忘れないでください。」

雪はそう言つと、そっぽを向く。

しかしその横顔はどこか笑っているようにも見えた。

TV局

「クソ、マサカアノキバノ野郎ガアソコマデ邪魔シテクルトハ…。」

「ある人物」が爪をガチガチ噛みながら怒り、歩いていた。

「フツ、ダガマイイ、マダ手ハ…。」残念だったな、もうおっさんに罪を着せるのはおしまいだぜ」！」

「男」は声に驚き、振り向く。

「男」のすぐ後ろに立っていたのは、進也、キバツト、福原だった。福原は驚愕の顔で目の前にいる人物を見つめる。

と、言うのも福原の視線の先にいた人物、それは福原自身が信頼していた人物だったからだ。

その人物は…堺だった。

姿を現した一瞬、堺の目に驚きと共に凶暴な光がとる。

しかしそれもすぐに彼の顔にあったおどおどした表情に隠されてしまった。

「な、何の話ですか、福原さん。おや、そこにいるのはファンの子ですかね？」

そう彼が見せる態度はその顔と相まって彼自身の姿にしか見えなかった。

「福原さん、外をぶらつくのはいいですが…。」
と、進也の後ろからキバツトが飛び出す。

「キ、キバツト族？」

その名前を思わず口走ってしまった口を慌てて塞ぐ、がこれでもう彼の正体は露見したも同然だった。
がっくりとうなだれる堺。

「な、何故、俺の正体が…。」

「福原さんに聞いてみたんだ、」福原さんの近くにいつもいて、福原さんの普段の行動をよく知ってる人はいるの」ってね。」

福原の近くにおいて、なおかつ彼のプライベートの事情を熟知してい

る人間：それはマネージャー・堺に他ならなかった。

「だがそれだけではまだ…。」

福原が言うようにまだそれだけでは犯人を決めるのに疑問がある。だがそれだけで十分だったらしい。

進也が推理している間ずっとうなだれていた堺は不意にむっくりと立ち上がる。

その表情はつい先程まで、そして福原にいつも見せていたおどおどした物ではなく、凶暴かつ狂気にあふれた顔だった。

「くそ、もう少しだったんだけどな。お前がキバと出会ってなきやうまくいったのによ!」

『信じられない』、福原の表情にはその一言が言葉の代わりに現れていた。

何せ、今まで自分の一番身近に付けていた人物が自分に罪を着せようとしていたファンガイアだったからだ。

「な、何で君が…?」

福原の質問されると、堺は唇を歪ませ不気味に微笑む。

「何で? お前、俺の姿を見て誰か思い出せねえのかよ?」

苦々しげに吐き捨て、堺はカメレオンファンガイアへと変化し、身体を心地よさそうに撫でた。

「お、お前は…。」

福原の顔にまた別の驚愕が現れた。

「ようやく思い出したのか、相棒。」

「相棒だあ?」

キバットは訝しげに福原、そしてカメレオンを交互に見る。

「ああ、俺は昔そこにいる人間かぶれと仲間だったんだよ。」

福原は反論しない。

だがむしろ、進也には彼が無言でカメレオンの言葉を肯定しているように思えた。

「福原さん…。」

「2人で人間襲ってるのは楽しかったのに、このバカときやがったら、人間の女に惑わせれてもう人間は襲わないなんて言いやがって…。」

毒々しい罵りにうなだれる福原。

何も言えず、返さずただ無言で暴言を受けるばかりだ。

「野郎…。」

キバットは怒りでカメレオンを睨むが、怪人は動じないどころか今度はキバットに指を突きつける。

「お前もキバット族だろうが！何でこんなクズ野郎を庇おうとしてんだ？キバってのは元々、こいつみたいな卑怯者を倒すためにあるんだろうが！」

我慢できず反論しようと口を開いたキバット。

だがその口から言葉を発するより早く、

「黙れ！」

と激しい怒声が響いた。

怒声に怯み、言葉が途絶えたカメレオンを睨みつける進也。

今度は福原に代わって彼の反論の番だ。

「卑怯者はお前だ！確かに福原さんは昔は楽しみながら人を襲ってたかもしれない。でも今はそれを悔いて今はたくさんの子供達を笑顔にするためにがんばってるんだ。だから…僕は福原さんを信じる！」

進也の言葉を聞くうち、福原の影がかかっていた顔には光が差し込み始める。

逆にカメレオンは彼の声と共に発される気迫に押され始めた。

「へっ、昨日まで布団被って信じられないくなんて言ってた奴の言葉じゃないぜ。」

「キバット、うるさい…！」

キバットの皮肉に反論する姿は子供だったが。

「ちっ、貴様、一体何なんだよ！」

カメレオンの問いに進也は返す。

「僕は…街の平和を守る正義の味方、仮面ライダーさ。いくよ、キバット！」

「おっしや、今日もキバツていくぜ！ガブツ！」

進也は右手にキバットを掴むと左手を噛ませた。

同時に下顎に模様が浮かび、腰にベルトが出現する。

「変身！」

キバットがベルトに下ろされ、銀色の光と共に進也の姿がキバに変わった。

「ちっ！」

舌打ちするとカメレオンは窓を打ち破って外へと飛び出す。

「待ちやがれ！」

キバも逃がすまいと素早く破れた窓を突き抜けていった。

その様子を見つめる福原。

しかしその顔には確かに光が戻っていた。

「仮面ライダー…、か。いい名前だね。」

「ギヤアアア！」

バツシャーマグナムの一撃に高空から駐車場へと落とされるカメレオン。

その隙を逃さず、キバは更に撃ちまくるがカメレオンは透明化すると素早く動いて弾丸をかわす。

銃を上げると、キバはバツシャーマグナムを上げる、がキバットがよく見るとその右手はぶるぶると震えていた。

「やっぱりあれのダメージはでえか…。」

だが目がいいカメレオンファンガイアも進也が持つ弱点にすぐに気付いた。

「あの野郎、右腕に怪我してやがるな、なら。」

飛びかかるカメレオン。

しかしその瞬間、バツシャーマグナムの弾丸がカメレオンにぶつかり、その本体を晒した。

「甘いよ、君が僕の右手にすぐに気付かないと思ったの？」

そう、自分自身でもダメージに気付いていた進也はあえてそれを晒すことで怪人に隙を作ったのだ。

「さすがだぜ、どんどん強くなつてやがる。」

キバットも進也の計略に舌を巻いた。

ふらつくカメレオンを前にキバはキバフォームに戻り、更に紫のフエッスルをキバットに吹かせた。

「よっしゃ、ドツガハンマー！」

フエッスルからはずっしりした重低音が響く。

ドラン

「ドツガ、出番だぜ。」

戻ってきた勇輝に突かれると力は頷きむっくり立ち上がる。

「坊っちゃん、今行く…。」

ぼそりと呟くと力はフランケンシュタインの怪物、そして彫像に姿を変えドランを飛び出していった。

やがてキバの元へと飛んできたドツガはガルル、バツシャーと同様、その姿を武器に変える。彫像の頭が折り畳まれると、像の裏側に収納されていた棒が飛び出し、折り畳み傘の要領でグングン伸び、巨大な拳型のハンマー・ドツガハンマーへと変形した。

キバが目の前に降り立ったドツガハンマーを掴むと腕、肩、胴体の順に頑丈な鎧に覆われる。

そしてキバット、キバの両眼が紫へと変わり、怪力の戦士…キバ・ドツガフォームが姿を現した。

「ひ、ひい…。」

カメレオンはその姿を見ただけで、勢いに気圧されると透明化して逃げ出そうとする。

だがもうそうは問屋が卸さない。

「逃がさない、キバット！」

「おっしや、ドツガバイト！」

口元に下ろされたドツガハンマーに噛みつくと、紫色の魔皇力がハンマーへと流し込まれる。

同時にキバの手の動きに合わせて周りが暗闇：稲妻が轟くおぼろじきよ朧月夜に変わる。

キバはハンマーをカメレオンが消えた方向に向けると、本体の裏側に備えられたレバーを引く。

するとハンマーの拳が開かれ、その掌に巨大な瞳が出現する。

瞳はしばし辺りを見回していたが、やがて一点に視線が定まりそこをカツと睨んだ。

「ガッ、ガアアア！」

瞳から閃光が放たれカメレオンの透明化を暴き出す。

キバはハンマーを振り上げ、稲妻のパワーを注入、ハンマーから本体よりも大きなハンマー・ファントムハンドが飛び出す。

「はああああ…！」

キバットはハンマーを何度も振り回し、ファントムハンドをカメレオンへと叩きつけた！

夜の闇が晴れ、辺りが日の光に照らされるとハンマーが振り下ろされた場所に巨大なクレーターが露になった。

「終わったな…。」

キバットはニヤリと笑うとベルトから離れ、キバの姿も進也へと戻った。

だが…。

進也は気づかなかった。

満身創痍になりながらも執念深く彼らの後ろに姿を消して立っていたカメレオンに。

カメレオンは荒い息を吐くと体組織から剣を作り出す。

「はあ、このままじゃ終わらせねえぞ…！うおお！」

カメレオンは激しい勢いで走りだし、進也の無防備な背中に剣を振りかざした。

「あなたに明日は…来ない。」

眩きと共にカメレオンの身体へと一閃が走った。

「な、何…？」

火花を散らしながらカメレオンが振り向いた先には…雪…イクサがカリバーを手に立っていた。

「ゆ、雪さん！」

驚く進也の眼前でカメレオンは結晶と化し粉々になった。

雪は変身を解くと、怒り目で進也に詰め寄り、再び襟首を掴んだ。

「進也、やっぱりあなたは甘すぎます！私が来なかったらどうなっていたか…。」

雪の勢いに圧され進也は冷や汗のまま、

「あ、ありがとう…。」

と頭を下げた。

雪はそれを見ると襟首を掴んだ手から力を抜き、軽く微笑んだ。

「でも、その甘さがあなたの流儀なら、私もそれに従います。何たって…、一応…。」

言いづらそうに指をつつく、がそっぽを向き、

「私も…、仮面ライダーですから。」

と顔を隠して答えた。

「おや、嬢ちゃん照れてんのか？」

「違います！」

「照れることないよ。」

「だから違います！」

ちやかす進也やキバットに振り向かず反論する雪。

無論、赤くなつた顔をごまかすための照れ隠しなわけだが。

数日後

「おはよう…。」

由美子は朝起きてくると、牛乳を手に取り、TVを点けた。

画面に映っていた番組は福原が出演する『ケロケロおじさん』だ。

由美子は知る由もなかったが、あの事件が終わって以来福原は今まであつたことに吹っ切れたようだ。

今ではTVに映す顔も前以上に輝く笑顔だ。

『さあ、今日のお便りは…。』

由美子も普段ならチャンネルを変えるところを、この日は何故かその番号のままにしていた。

「おやおや、同じ話題がたくさん来てるね、どれどれ、『仮面ライダー』って一体どんな人？」

由美子は思わず牛乳を吹き出す。

「か、仮面ライダー…って進也のことよね…。何で話がこんなに大きくなつてんの？」

画面に思わず張り付く由美子。

『実は僕ね、仮面ライダーに会ったことがあるんだ。仮面ライダーはね、僕と同じで弱い人、優しい人、がんばる人の味方なんだよ。僕も悩んでたときに彼に励まされたんだ。』

「やった〜、おじさんが誉めてくれた〜！」

「やったな、進也！」

進也とキバットが大はしゃぎする後ろで雪は目にシワを寄せていた。昨日は進也に共感したものの、早くも気持ちが悪く後悔の方向へと傾き始める雪。

それを見越してか尾上は優しく笑うと雪の肩を叩いていた。

と、キバットが笑いを止めて思いに更け始めた。

「しかし、アイツ…。」

「これがあの福原ってファンガイアの過去の詳細よ。彼は悪人じゃないわ。」

尾上は驚きながらも黒服の女性から大きな封筒を受け取る。

が、キバットはそれ以上のある確信を持った気持ちで女性を見つめていた。

「お前、マヤだろ？」

直球の質問だった。

だが女性はくすりと笑い、

「いいえ、違うわ。」

と否定した。

キバットは信じられない。

「冗談はよせ！お前がマヤじゃなきゃそんなこと…。」

「そんなこと…何？」

言いかけたが急に口から言葉が出なくなるキバット。

代わりに尾上が言葉を返した。

「あなたがマヤさんでないというなら、それでいいです。でも坊っ

「ちゃんはあなたを待っていますよ。」
その一言に女性は足を一瞬、止めた。
だが再び歩き出すと、一度も振り向かないまま霧の向こう側へと去っていった。

「マヤ…、何で顔を見せねえんだよ。」
キバットはせつなさとなぜかながらの怒りが混じった顔で横側でTVを見ている進也を見つめた。
当の本人はそれに気づかずただTVを前に無邪気な笑顔でTVを眺めているのだった。

その時、店の外にあの女性が進也達の様子を見守っていたことに気づいたものは誰もいなかった。

8・ファンガイアの心（後編）（後書き）

今回は箸休めレベルにバトルの無いストーリーを入れようと思っています。

もう話の構想は出来上がっているので今度は早く更新したいと思います、本当です（必死）。

ではまた、次回をお楽しみに。

9・故郷へ帰ろう！（前書き）

今回は早く更新出来ました！

今回は以前コラボをしてもらった黒服さんの小説『仮面ライダー
& amp; キバ 白き帝王』の後日談及び、次回よりコラボ開始予
定の闇丸・EXEさんの『けいおん！仮面のヴァイオリン弾き』の
プロローグ的な物を出してみました。
それではどうぞ。

9・故郷へ帰ろう！

ある晴れた日、由美子はいつもの様にドランの店を訪れる。

「さうて、あいつら何やってんのかな。」

と、来てみると店の玄関前には小さな札がぶら下がってるのが見えた。

由美子はその札を上げてみると、落書きだらけの真ん中に

「『誠に勝手ながら本日は休業させていただきます。』？」

の字が書かれていた。

「ていうかいつも客なんか来てないじゃん、それに……。」

耳を扉に寄せると中から騒がしい声とごとごとと物を動かす音が聞こえてくるのがわかる。

「まだ、留守じゃないみたいね。」

玄関が開かなかったので、由美子は進也から教えてもらった裏口から店に入る。

中では進也やキバットも含めて店の全員がやや急ぎ気味でリュックに荷造りをしていた。

「おっす、こんにちは〜！……って聞こえてないのかな？」

由美子は小さなため息を一つつくつくと進也の肩をちよいちよいと叩いた。

「えっ、って、由美子さん！」

由美子に気づいた途端に進也は由美子の胸にドンと抱きついた。

その音でキバット達も彼女が来たことに気がつく。

「おっ、姉ちゃん、来てたのか、言ってくれりゃ良いのに。」

「言っただけどね……。」

キバットの能天気な言い様に殴りたい気分を覚えたが、本当に気づ

かなかった、ということに許すことにした。

「ところで…。」

部屋を見回すとこの店の人数分の荷物が床に置かれ、様子的には…。
「あんだ達、ついに夜逃げを…。」
こける尾上達。

「違います！今から私の里帰りなんですよ！」

「え？あ、ああ、冗談よ、冗談！」

口ではこう言ってるものの、由美子の顔には冷や汗が浮いておりそれは何よりさっきの一言が本気だったことを示していた。

「うちの立場って…、由美子さんにや何なんだよ…。」
勇輝の呟きが尾上の傷をさらに抉った。

部屋の隅で落ち込む尾上はさておき、由美子は進也が着ているコートに気付いた。

「あんだ、それって、直人さんにもらったやつ？」

由美子の見た通り、進也が着ているコートはつい一週間程前、偶然別世界に着てしまった進也達が出会った別のキバ…不知火直人に買ってもらった茶色いコートだった。

「あんだ、それよっぽど気に入ったのね…。」

軽くあきれながらも由美子は進也の笑顔に自分も微笑んだ。

「優紀さん、直人さんと進展していると良いんだけどな。」

懐かしみながら由美子は彼とパートナー・東雲優紀の顔を思い浮かべた。

「俺はそれよりも我が孫とあの程度しか家族の交流できなかったことが悲しい！ああ、また会いたい！」

キバットとしては自分そっくりなキバット族：キバットバット？世の名前が自分の二代後であることから未だに彼のことを「孫」と呼称していた。本人からは終始、否定されていたが。

進也はコートを着たまま部屋の中をくるくるはしゃぎ回る。

「これ、後でおじいちゃんに自慢するんだ！」

「ん？」

進也の口から初めて聞く言葉…「おじいちゃん」に由美子は反応する。

「あれ、あんた、おじいちゃんっていたの？」

由美子の問いに進也が首を横に振ると、彼に代わって尾上が口を開いた。

「私の父ですよ。今日は私の里帰りって言ったでしょ。」

説明する尾上だが、何故かその口調はどこか重く表情には暗い影がかかっていた。

とは言っても何か悲しいものがあつての暗い顔ではなく、口にするのも憎らしいと言いたげな彼の気持ちを示す顔だった。

「何があつたのかしら…？」

少々気になつたものの、自分は部外者、そろそろ帰ろうと腰を上げドアノブに手をかけた時だった。

不意にズシンと地鳴りがしたかと思うと外から大きな鳴き声が聞こえてきた。

「あつ、迎えに来てくれたんだ！」

進也は声を聞くと荷物を片手にキバットと外へと駆け出して行つた。後を追つて由美子が店の外へ出ると、

「おわあ！」

そこには腰を抜かした彼女を見下ろすように大屋敷から手足や翼、首を出した竜が立っていた。

「あわわ…つてあれ？」

驚きはしたものの流石は由美子、その竜がよく出会っているものと気付くと、すぐに恐怖心は消え去つた。

「気付いた？でも一応初めてだから紹介するね。キヤッスルドラン、僕の友達の竜なんだ。」

進也が紹介すると、竜…キヤッスルドランは「初めまして」とばかりに頭を下げた。

「あつ、初めまして。」

そこへ尾上達も大荷物を抱えて店の外へと出てきた。

「あつ、来ましたね、それじゃ、行きましようか。」

キャッスルドランは頭を大きく一振りし、腰を下ろす。

するとその動きに従って身体の大屋敷の扉から小さな音がし、扉が大きく両側に開いた。

扉からは神々しいばかりに光が溢れ、中を照らしていた。

「よつと！」

「ほつ！」

「…。」

尾上達が扉へと飛び込むと光は彼らの身体を照らし、吸い込むように屋敷の中へと引き込んだ。

「よし、俺達も行こうぜ！」

「うん。」

ここで由美子も手を振って見送り、となれば良かったのだが。

「さうて、んじゃ、由美子さんも！」えっ！」

進也は由美子の手を掴むと自分もろとも扉へ引つ張り込んだ。

「ちよつ、私は関係な…ひゃあ〜！」

進也と由美子が屋敷の中へ吸い込まれると、扉は音をたてて閉まった。

「私を巻き込むな〜！」

由美子は涙目で進也を揺するがもう後の祭り。

キャッスルドランは大きく鳴くと翼を広げて空へと飛び立った。

引き込んだ罪悪感は無のまま、いつものペースではしゃぐ進也。

「由美子、大丈夫よ。あなたは尾上さんのお父さんがどんな人か気になるんでしょ？だったらこのまま付き合っのもひとつの手じゃない！」

自分に言い聞かせると、由美子は進也の里帰りに付き合うことにした。

キャツスルドランの中は外で見るよりもずっと広くサッカーコート一面分の床が部屋中に広がっていた。

「変ね、こんなに広くは見えなかつたんだけど。」

由美子が不思議がっていると、

「魔力で空間を圧縮していますからね、外から見るよりはずっと広いですよ。」

とお茶のお盆を片手に尾上が説明した。

「でもこんなデカブツ、人に見られて大丈夫？こんなの見たらみんな腰抜かしちゃいそうだったけど。」

現に自分も、と言うのは敢えて止める由美子。

「大丈夫だよ、キャツスルドランは透明幕で周りを覆うことができるから、ほら！」

進也が指さす先には、何か文字が書かれた紐が垂れ下がっていた、が。

「細いわね…。それにボロボロだし…。」

「長く使ってませんでしたしね…。」

笑顔で言うが尾上も少々不安のようだ。

そんなまでに紐は…本当にボロボロだった。

「よし、行くよ〜！」

「あっ、バカ…。」

案の定、進也がジャンプしながら掴むと紐はあっさり…切れた。

「お決まりの展開…。」

頭を抱える由美子。

当然、巨大な竜が空を舞う姿は多くの人達に目撃された。

その中に…、

「何だありゃ…？」

「あれは…。」

1人の青年と白いコウモリの真上を飛んでいくキャッスルドラン。

住めば都とは良く言ったもので、由美子も最初は居心地が悪そうに部屋をウロウロしていたものの、しばらくすると進也達といつもの会話をするまでに落ち着いていた。

やがて由美子がひとあくびをした頃、再び先程と似た地響きと共に部屋が揺れた。

「あつ、着いたみたいだ。」

進也は荷物を手に取ると真っ先に部屋を飛び出していき、由美子も今度は落ち着いて後をついていった。

と、勇輝が由美子の耳元に

「これから面白いものが見られるぜ…。」

ウシシと笑いながら囁いた。

「面白いもの？」

それから本の数分程歩いた先に小さな集落が見えた。

「ここが…。」

「そう、ここが私の故郷、『狼の里』です。」

集落の中には数が少ないものの猟師に似た格好をした男女がたくさんいた。

そのうち、男の一人が進也達の元へとやって来た。

「おお、キャッスルドランが見えたのでそろそろだと頭が申しておりましたが。さ、さ、お着きをお待ちしておりますよ。」

尾上はそれを聞くと何故か嫌そうに顔の筋に皺を寄せた。

男の案内で由美子達は集落で最も大きな屋敷の前まで連れて来られ

た。

「ガール様と進也様達がお着きになりましたよ。」

男が門に向かつて呼びかけると鍵が開く音が聞こえた。

そして軋みだした門から銀色の総髪頭をオールバックにした老人が顔を出した。

老人は険しい顔で進也の元へ歩み寄る、と。

「おじいちゃん、久しぶり！」

「おお、進也坊か。よく来たのう。」

その顔を緩めて進也を抱き上げた。

「ぬしらもよく来たな、ゆっくりしていきがいいぞ。」

老人に顔を向けられると勇輝と力も頭を下げた。

「何だ、いいおじいさんじゃない。」

何が面白いのかと勇輝の言ったことに再び首を傾げた。

…理由は程なくわかった。

尾上は先程の皺寄せ顔はどこへやら、老人に笑顔を向ける、のだが。

「はは、父上、まあだ性懲りも泣く長生きしちゃってるんですか。

老兵はそろそろ去り行くべきでしょ。」

口からはドスの効いた暴言が飛んだ。

だが老人はそれを聞いても怯むどころか今度は、

「何を言うか。貴様みたいな若輩者がいる間は死ぬどころか引退も

せんぞ。この外道息子が！」

負けず劣らずの暴言を笑顔で返した。

「こ、この親子…。」

由美子には見えた。笑顔の二人の背中に見える激しい覇気が。

老人はふんと鼻を鳴らすと由美子に気づいた。

「むっ、この娘は誰じゃ？」

「ああ、この人は「お前に聞いたらんわい、アホ！」…。」

老人は尾上に毒を吐くと、進也に笑顔を向けた。

「さて、この娘は誰なんじゃ、ん？」

「うん、由美子さんって言ってね、僕の友達だよ。」

由美子は老人に頭を下げる、と、その途端老人は素早く由美子の元に駆け寄った。

「おお、ようこそ、マドモワゼル…。わしはこの里の頭領、ヴオ…おっと、尾上巖と申します。」

「は？」

急に気取った口調になった老人…巖に目が点になる。

「この里に来れたということは、お嬢さん、あんたはキバのことやウルフェンは知っておるな。」

「は、はい…。」

由美子が戸惑いながら頷くと、老人の顔がにやけた。

「ならば話は早い！お主、わしの15番目の妻になれ！」

「は！？」

それから部屋に荷物を下ろすと、案内を受けて大広間へ向かった。

「すいませんね、由美子さん。うちの父は女癖が悪くて気に入った女性をすぐ自分の元に招くんです。」

「へ、そうなんだ…。」

言われなくても巖老人の態度から彼が女たらしなのはわかる。

だがそれ以上に由美子は老人らしからぬあの表情に鳥肌が立っていた。

「んで、妻14人って本当なの？」

「お恥ずかしながら本当です。その上、その全ての女の人の間に私を含めて30人の子供がいるんですよ。」

出会うなり求婚される以上に鳥肌が立つ話だ。

そして尾上が故郷に帰るのに少々嫌そうな顔をしていた理由もよくわかった。

「その癖、頭領としては非常に慕われているから余計にたちが悪いんですよ。たく、あのジジイ…。」

由美子は憎々しげに尾上に同情することしか出来なかった。

そんな話を聞いたからか、由美子は食事の席でもあまり箸が進まなかった。

その癖、老人は原因が自分にあるとは露知らず、

「どうした、口に合わんか？」

と言つて心配までする始末。

おまけに進也達も普段と何変わらない態度でおいしそうに食事をしていた。

「何であんなシーン、間近で見ても平気でいられるのよ…。」

由美子の気持ちを表すかの如く、彼女の握っていた茶碗にヒビが入った。

ともあれ、満腹になると気分も落ち着いたようで由美子も巖老人に気兼ねなく質問を出来るようになっていた。

「そういえば、この里はキバを知っていないと入れないって言つてましたけどどうしてなんですか？」

「おお、それはな…。」

巖老人は立ち上がるとふすまを開けて外を見せた。

外の木々が生い茂る中、よく見ると何本かの木に札が貼られ、その間から半透明のもやもやしたものが流れていた。

「この屋敷の裏は里と山の北の境目になっておるでな、この里にはここ以外に東、西、南にも同じ札を貼つておる。」

そう言つて老人は木に貼られているものと同じ札を懐から出した。

「これは人避けの札でな、何も知らん人間がこの中を見ても何もわからんし中には入れん。じゃからこの里に入るにはキャッスルドラゴンが必要なんじゃ。」

なるほど、と由美子は頷いた。

「ときに進也坊、この後一局どうじゃ？」

「うん、やるやる…！」

進也とキバツト、老人が広間を離れていくと、由美子は質問の対象を尾上に変えた。

「ねえ、でもおじいさん、尾上さんに厳しい割には進也には優しいわよね、どうして？」

先程から見た様子では老人は尾上を口汚く罵るのに反して、進也は本当の孫の様に接し、進也も本当の祖父の様に慕っていた。由美子の質問からしばしの間を置くと尾上は口を開いた。

「クソジ…じゃなくて父上は子供の大半には軽蔑されるか憎まれるかしていますね。今じゃ彼を慕っているのはこの里の人と進也ぐらいなんです。」

「軽蔑」と聞いて由美子の頭に新たな疑問が生まれた。

「ねえ、なんであのおじいちゃん、あなた達に嫌われてるの？」
だがそれを口に出した途端、尾上の雰囲気が一変した。

尾上は涙を流しだすと由美子の肩をがっしり掴むと勢いを上げて話し始めた。

「よくぞ、聞いてくれました！あのジジイと来たら女を寄せて子供を産んだ拳句、自分じゃ何一つ世話しないんですよ！おかげで正妻だった私の母上や兄弟も…。」
ちよつと質問がまずかったかなと後悔する由美子だった。

「ふん、始まったようじゃの。」

屋敷から聞こえる大声を聞きながら厳老人は笑う。

「アイツはわしら親子の話になると途端に騒がしくなるからの。」

「ほら、次はおじいちゃんの番だよ。」

「おお、すまんな。」

老人は本館の声から将棋の盤に意識を戻し、すぐに一手を打った。

「む、むむ…。」

よつぽど難しい手らしく、あの進也の顔にも僅かにシワが寄る。

「ほつぽ、ところで進也坊、その別世界のキバはどのようなヤツじやったかの？」

「うん、凄くかつこよくて、強くて優しかった！ちょっとツンデレだったけどね。」

「ツン…デレ…?」

ツンデレがわからず目を点にする老人。

まあ当然と言えば当然なのだが。

「おお、いかんいかん、そう言えばわしも聞きたいことがあったんじゃない。」

わからないのをごまかし老人は別の話題をふった。

「また来やがった、じいさんの悪い癖。」

キバツトはため息をついて部屋を出ようとしたが、

「むっ、おお、キバツト、お前にも聞いてほしい話じゃ。」

と老人は引き留めた。

「最近、お主、半年の間にこの山か隣の山に来ぬかったか？」

老人は唐突にこんな質問を投げかけてきた。

進也とキバツトは顔を見合わせ、そして互いに首を横に振った。

「うっむ、そうか…。ならいいんじゃないか。」

「じいさん、ここに来たこと自体半年振りだろ？それに修行でも無い限りこんなところまで来ねえよ。」

キバツトの一言に進也も賛同した。

老人も僅かに訝しげな表情を浮かべたが、息をつくと、

「さて、勝負を再開しようかの。」
と先程の表情に戻った。

進也も笑うと新たに一手を指す。

「はい、王手。」

「な、何!？」

少し老人の注意が逸れている間に将棋の盤は進也の駒に埋められてしまっていたのだ。

「す、すまん、待ってくれ！」
「待ったなし。」
勝ち誇った顔で腕を組む進也。

しかし老人の頭にはまだもやもやしたものは残っていた。
「しかし、あの気配は何じゃったんじゃ…？まさかあの鎧は薄…。」
と。

それからさらに夜が深くなった頃。

進也達が寝静まった中、由美子は1人眠れず星空を眺めていた。

「ふうん、まだこんなに星がキレイなところがあつたんだ…。」

雲ひとつ無い空、煌々と輝く美しい星を眺めていると、

「どうした、眠れぬか？」

老人が後ろから歩いてきた。

昼間のナンパも合つてか少々ビクつく由美子だったが、老人は構わず彼女の横に立った。

「昼はすまんかったな。この里に人間の娘が来るなどマヤ以来じゃからの。」

「おじいさん、マヤさんのこと…。」

「当然じゃ、知つとるとも。あやつにもおぬしのように断られたのう。」

ほんとに見境が無いなど実感し、顔が青くなる由美子。

「じゃがわしだって息子や娘は愛しておるぞ。わしが名付け親じゃからの、名前もみんな覚えておる、ガルルに…。」

老人は自慢げに語り、尾上を含めての子供達の名前を挙げてみせた（人数が多い上にややこしい名前も多いため、由美子には全て合っていたかはわからなかったが）。

だがそれ以上に普段、あんなに罵っている息子を「愛している」と言える老人に由美子は驚いた。

それ故、由美子は疑る目で老人を見た。

「はは、じゃがわしが愚かなのも事実じゃ。せめてこの気持ちがあやつらに通じればのお…。」

老人が僅かに見せた寂しげな顔。

それを見て由美子の警戒心も少し和らいだ、が。

「ま、それは置いといてじゃ、やっぱりお主、わしの嫁にならんか？」

「ふざ…けるな！」

相変わらずの老人の顔に由美子の回し蹴りが決まった。

翌朝

「お、おじいちゃん、その顔どうしたの…。」

進也が啞然と足型を顔に付けた老人に聞くが老人は何も言わず味噌汁をすすする。

進也がチラリとほかの席を見ると由美子は怒り顔、尾上は半笑いでご飯をかきこんでいた。

わけもわからず首を傾げる進也とキバツト。

やがてさらに時間も経ち、進也達の帰る時間がやって来た。

「じゃ、おじいちゃん、また来るからね。」

「うむ、楽しみにしておるぞ。」

老人は笑うと進也をしっかりとがっしりと抱きしめた。

「ふふ、しかし進也よ。」

「うん、何、おじいちゃん？」

老人は進也の肩を叩き、そして由美子を見た。

「いい友を持ったな。」

「うん！」

目を輝かせ頷く進也、そして由美子も軽く笑う。

と、老人はまたにやけ顔を由美子に向けた。

「お嬢さん、わしはいつでもまっとなるからの。」

懲りないジジイだ。

由美子は自分の中の老人株がさらに急下落したのを感じた。

「いいじゃねえか、意外と悪くないぜ、その…。」

言い終わる前に石で撃墜されるキバツト。

最後は尾上が代表して前に出た。

「まあ、また来るかもしれないが、そのときはお願いしますね。」

「おう、今度は便所を部屋に用立ててやろうかの。」

最後まで敵意を隠さない2人。

その様子に由美子はただ大きなため息をつくのだった。

9・故郷へ帰ろう！（後書き）

いかがだったでしょうか？

ガルの兄弟（あるいは姉妹）の1人は近いうち出す予定です、お楽しみに。

前書きでも予告の通り、次回より闇丸さんとの小説コラボをスタートします。

世界観は異世界では無く、Wとオーズのように僅かに繋がりがあ
る世界の予定です（勝手にすいません、喜んでくれたらありがたいです）。

いよいよスタート、お楽しみに。

10・2人のキバ（PART1）〜二つの出会い（前書き）

前回からの予告通り、今回より数話に渡って闇丸・EXEさんの小説「けいおん！仮面のヴァイオリン弾き」とのコラボ編をお送りします。

それではどうぞ。

10・2人のキバ（PART1）〜二つの出会い

デパート。

その中にある喫茶店で由美子と尾上はコーヒーを片手に談笑し、進也はジャンボパフェに美味しそうにパクついていた。

「由美子さん、今日はすみませんでしたね、私達の買い物に付き合わせちゃって。」

この日、由美子はデパートに買い物に行くという進也達に同行して（というより、進也に無理矢理付き合わされる形で）隣町までやって来ていた。

「いいのよ、どうせ進也のいつものワガママだしね。」

由美子はややあきらめ気味に、進也を見、お手上げとばかりに肩を落とした。

尾上もそれを見て苦笑する。

「でもありがとう、由美子さん！」

そんな彼女の気を知るはずもない進也はいつもの様に屈託の無い、パフェのクリームのついた笑顔で由美子を見て笑う。

しかし、由美子もその顔を見ていると呆れ気分もどこかへ吹き飛ばすのだった。

「ほら、顔、髭みたいになってるわよ。」

「えへへ。」

それから喫茶店を出た後もしばらく歩いていると、そろそろと多くの人が通っている中に幼い少女が歩いているのが見えた。

不安げな足取りで歩き、目尻から涙が見えている様子を見るとおそらく迷子なのだろう。

由美子は少女の許に歩み寄ると、

「どうしたの、お母さんとはぐれちゃったのかな？」と聞いた。

少女は由美子が近づいてきたことに一瞬、ビクツとしたもののすぐに安心したのか頷いた。

「そっか、んじゃ、お姉ちゃん達と一緒に探そう。」

少女はパアツと顔を輝かせると縦に頷いた。

その後ろで進也の服の裏に隠れていたキバットが、

「さすが姉ちゃん、普段のゴリラ女ぶりがまったく感じられねえぜ

…。」

と、感心していたが。

「お譲ちゃん、名前何ていうの?」

「つばさだよ、さくらいつばさっていうの。」

「あつ、おかーさんだ!」

進也達が少女を迷子センターまで連れて来た後、程無くしてそこに彼女の母親と兄らしき少年がやってきた。

母親は安堵した様子で少女を抱きしめ、由美子に頭を下げた。

「ありがとうございます、何とお礼を申し上げたらいいか…。」

「いえ、いいんですよ、つばさちゃん、もうはぐれちゃだめだよ。」

「うん、おねーちゃん、ありがとうございます!」

由美子は少女が笑うのを見て、その頭をしっかりと撫でた。

「翼、はぐれちゃだめだよ。」

少女の兄らしき少年も妹をたしなめた。

そんな様子を進也はじっと寂しそうに、そしてうらやましそうに見つめる。

「いいな、お母さんに、お兄ちゃんか…。」

「坊ちゃん…。」

いつも明るく振舞っていても、親がいない進也の心には寂しさがある。

その気持ちはいつも進也についている尾上には痛いほどわかった。

由美子もそれに気づくと、進也の許に歩む、そして

「な〜に辛気臭い顔してんのよ!」

そしてしよぼくれる彼の背中をドンと思い切り叩いた。

「えっ、わっ、わ。」

その勢いで進也は思い切り少女の面までよろけると、少女…翼は進也にちよこちよここと寄ってペコリと頭を下げた。

「おにーちゃんもありがとう!」

「あ…、う、うん。」

翼にお礼を言われ、照れ混じりに頬を染める進也。

由美子はクスクスと笑い、尾上は微笑ましげにそれを見ていた。と、母親が進也の顔をチラチラと眺め回すのに気づいた。

「そういえば、あなた、ウチの息子にそっくりね。あっ、この子じやなくてもう一人いるんです。」

進也が小さな少年の方に目を向けるが、女性は訂正する。

「ほんとだ、何かお兄ちゃんに似てるかも。」

母親の言葉に2人の子供も賛同し、進也もその人物に興味を持った。

「ねえ、その人の名前は何ていうの?」

「えっ?」

見ず知らずの少年、進也に名前を聞かれ戸惑う女性。

その口が言おうかどうか迷っている矢先、

「くるの、クロノっていうの!」

少女が真っ先にその名前を出した。

「…クロノ? ひよっとして…。」

何かを感じたかのように尾上が咳く。

そして何を考えてか、今度は尾上が女性に歩み寄り、聞いた。

「ひよっとしてあなたは…周平さんの奥さんですか?」

女性は驚いた目で尾上を見る、そして、

「あの、主人を知っているんですか?」

と聞き返した。

それを聞くと尾上の顔に嬉しさと驚きが混じった表情が浮かぶ。

「そうですか、周平さんのところの！びっくりしたな、もう3人も子供がいたんですか。」

「いえ、4人です、もう1人いますよ。」

最初こそ驚いていたものの女性は夫の知り合いであることに安心したのか親しげに話すようになった。

が、別に驚いている者がいる…言わずと知れた由美子だ（進也は驚く以前に、いつもの調子で2人の子供とじゃれあっていた）。

「ウソ、知り合い？」

丁度その頃…。

「ヘッキシ！」

「クロノ、風邪でも引いたの？」

噂にされていた張本人…桜井黒乃はベタにクシヤミをしていた。

横では彼のパートナー・キバツト族のキバーラが心配する。

「何でもねえよ、それよりこの辺だったよな。」

クロノは鼻をすすると、キバーラと辺りの河原を見回す。

そこは数日前、キャツスルドランが数多くの人間に通り過ぎていくのが目撃された場所である。

数日前、キャツスルドランを街中で見たクロノとキバーラは自分達の世界に存在する一（と思われる）キバの情報を求めて、他の人々がキャツスルドランを目撃したこの場所まで足を運んでいた。

だが…。

「全然情報が集まらないわね、あの図体ならかなりの人に見られたと思うんだけど…」

懸命の捜索にも関わらず、キバはおろか、キャツスルドランの情報もほとんど入ってこなかった。

「まったく、隣町まで足を運んだが…無駄だったかな。」

「ねえ、もう疲れちゃった、早く帰りましょ。」
一旦出直そうと、河原から背を向けた時だ。

「だ、誰か助けてくださいーい！」

付近から助けを呼ぶ声が耳に入った。

「キバーラ、聞こえたか？」

「ええ、あっちの方向よ！」

2人は声が聞こえた方向へ向かって走っていった。

2人が駆け付けるとそこに橋の下に誰かが追い詰められていると
…。

「あれは…ファンガイア！」

複数のファンガイアがその人物に襲いかかろうとしている姿だった。

「多勢に無勢とは卑怯だな！行くぞ、キバーラ！」

「OK！カプツ！」

クロノが右手を突き出すとキバーラが噛みつく。

するとクロノの下顎にステンドグラス状の模様、腰にベルトが出現する。

「変身！」

クロノが叫びと共にベルトにキバーラを下ろすと、その姿が光に包まれ、キバに変わる。

だがそのキバの姿は進也のキバと違い、目と胸はコバルトブルー、そして背中には長剣がマウントされていた。

そう、クロノ…彼こそは人間のキバ・薄明のキバ、レプリカフォームである。

Rキバは背中にマウントした剣…トワイライトを引き抜くとファンガイア達に飛びかかる。

「！？」

「…！」

ファンガイア達もそれに気付くと襲っていた人間からRキバへと目標を変える。

「はあああ、てやつ！」

Rキバはトワイライトを振りかざすと、襲い来るファンガイアを次々に斬りつけダメージを与えていく。

その勢いに圧倒され、ファンガイア達はRキバに近づけずすぐに防戦一方となっていた。

「何よ、こいつら滅茶苦茶弱いじゃない。」

キバーラも短期終了を確信した。

しかし、

「グワーツ！」

突然、クロノの背後に更に2体のファンガイアが現れ、彼の無防備な背中を斬り裂いた。

「うわっ！」

火花を散らし、怯んでしまったRキバを更に前方の3体が一斉攻撃をかけた。

咄嗟のことに受け止めきれずRキバは一気に吹き飛ばされる。

「クロノ！」

「くっ、こいつら、何かおかしいぞ…。」

Rキバ：クロノは敵の違和感を感じていた。

普段な戦っているファンガイアは野性的な怪人：ワームやミラーモンスターに比べると、知性がある分、戦いに規則性があつた。

にも関わらず、目の前にいるファンガイア達の戦い方には知性が感じられず、ただ本能のまま暴れまわっている。

1体、1体ならさほど強くはない。

だが複数で群がりながら襲い来る怪人にRキバは思わぬ大苦戦を強いられていた。

そこに…。

「ファンガイア…。それにあれは…。」
偶然通りすがった雪がファンガイアの姿を見つける。

「キバ？でもあれは進也じゃない。でも…。」

雪は素早く腰にベルトを巻きつけると左手にイクサナックルを叩きつけた。

『R・E・A・D・Y。』

「考えるのは後のようね、変…身…！」

ベルトにナックルを装着すると、

『F.I.S.T.O.N.。』

光の十字架が現れ、鎧を形成する。

雪は走りながら鎧と一体化、イクサへ変身すると腰からカリバーを引き抜き、ファンガイアへ向かう。

「てやあああ！」

イクサはカリバーでファンガイアをRキバから引き離れた。

「ア、アンタは…？」

突然助太刀に入ったライダー…イクサに驚くRキバ。

「話は後です、私も聞きたいことがありますから！」

喋りながらもイクサは飛びかかるファンガイアにも目を離さず、攻撃で払いのける。

そしてマスクに装着されたクロスシールドを展開、熱風でファンガイア達を吹き飛ばすとすかさず新たな攻撃をしかける。

「クロノ、あのライダーに負けてていいの？」

「はっ、んなわけねえだろ！」

Rキバも再び立ち上がるとファンガイア達へ反撃を開始する。

元々は大して強くないファンガイアは2人のライダーの攻撃に劣勢に戻された。

強力な猛攻が怪人達に大ダメージを与えていった。

「とどめよ、クロノ！」

「おう！」

Rキバは大ダメージを負ったファンガイア達を見据えトワイライト

を縦に構えた。

「剣よ光を呼べ…ってか？」

最後の抵抗でRキバに向かってくるファンガイア達。

Rキバはトワイライトを輝かせ、一気に振り下ろした。

その一振りと共に発生した衝撃波に斬り裂かれ怪人達は粉々に散った。

『I・X A・C A・L I・V E R・R I・S E・U P・』

カリバーフェッスルを装填するとイクサベルトから発生した電気が胸のイクサエンジンに赤く燃え上がらせる。

そして電撃はイクサの肩、腕、手、そしてカリバーの刀身へ流れカリバーを発光させた。

襲い来るファンガイア達。

「あなた達に明日は来ない…！」

イクサは呟きと共にファンガイアを切り捨てる。

こちらのファンガイア達も粉々に散った。

戦いが終わりお互いに変身を解くクロノと雪。

「あなたは一体…。」

聞きたいことがありげな雪をクロノが制止する。

「おっと待った、まずはこいつを助けねえと…。」

クロノはファンガイアに追われていた人物…少年に目を向けた。

「あ、ありがとうございます、助かりました。」

頭を下げる少年、その手にはしっかりと小袋が握られていた。

「おい、お前、何であんなのに追われてたんだ？」

クロノの問いに、

「それは…。」

と少年は何故か口ごもる。

「何か理由があるみたいですね？」

「ああ…。」

すると少年は決心したのか口を開いた。

「あのお願いがあるんですが…僕をドランという店に連れて行って
くれませんか？そこでならすべてお話します。」

少年の口から『ドラン』の名前が出てきたのに驚いたのは雪だ。

「アンタ、知ってるのか？」

クロノの問いに雪は頷く。

「お願いします、どうしてもある人に話したい…いえ、話さなきゃ
いけないことがあるんです！」

クロノと雪は顔を見合わせ、とりあえず頷きあった。

「まあ、俺達同士も知りたいことがあるし…。」

「そうですね。あの、あなたの名前は？」

「桜井黒乃と…キバールよ、よろしくね。」

「私は名護雪と言います。」

その様子を苦々しげな様子で見つめる影が二つがあった。

「おのれ…。かくなる上は…。」

影の一つ…緑色の服を着た男は手に装備した爪を光らせると、構え
る、が。

「よせ、策はまだある。」

もう一つの影…女性に止められ、男は渋々手を下した。

そしてクロノ達に気付かれないうつと姿を消した。

場所を切り替え、進也達は。

翼達の親…恵に助けてもらったお礼一（+尾上が彼女の夫と知り合
いだったということ）彼女達の家を招かれることとなった。

翼と兄…正広と初対面であるにも関わらず進也にとっても懐き、進也
も2人とじゃれあっていた。

「まるで直人さんと別パターンね…。」

以前別世界で見た光景を思い出し苦笑する由美子。

だがそんな彼らを3人の男がジロリと睨んでいたことは、誰も気づいていなかった。

二つの場所の二つの出会い、これが後の大きな戦いに繋がるとはまだ誰も知る由も無かった。

10・2人のキバ（PART1）〜二つの出会い（後書き）

今回は（まことに自分勝手ながら）、闇丸さんの世界とこちらを僅かに繋げた、ということとで桜井家の面々も登場させてみました。彼ら以外の人物も幾人か出す予定ですのでお楽しみに。ではまた次回、お会いしましょう。

11・2人のキバ（Part2）〜二つの場所〜（前書き）

ようやく完成しました。

少々グダグダですが、何とか書けました。

コラボ編2話です、どうぞ！

11・2人のキバ(Part2)〜二つの場所で〜

ドラム

「よつと！ほら、後ろががら空きだぞ！」

「あ、ズルい…。」

「勝負にズルも卑怯もあるか！」

中からは激しく殴りあう音と勇輝と力の争いあう叫び声が鳴り響いていた。

「おら、これでも食らえ！」

果たして一体中で何が起きているというのだろうか！？

それはあまりにも、くだらなかつた。

中から見れば、勇輝と力がただ単にキバット達に頼まれていた店番をサボって『STREET FIGHTER?』をプレイしている姿があるだけである。(ちなみに勇輝はガイル、力はザンギエフでプレイしている)。

「相変わらず…客、来ない…。」

しかしサボることに若干罪悪感がある力はプレイしつつも時折玄関の方へ目が動いていたのでコマンド入力がおろそかになっていた。

「よそ見してる場合か！」

それに対して、勇輝は客が来ないことを前提にキャラを操り、力のザンギエフに遠慮無く攻撃を加える。

おかげで現在の戦績は勇輝が50連勝、力は50連敗と対照の結果になっていた。

「でも、ほんとに…いい、のか？」

「後ろばかり見ていたら前には進めねえんだよ！」

カツコよさ気に言ってるが、その実一店員として最低の暴言を吐く勇輝。

このまま、51戦目が行われるのかと思いきや…。

あまりの連敗と客が来ないことに力の心が折れかけた頃、玄関の鈴の音が鳴り響いた。

同時に力の顔がパアツと輝く。

「客が来たよ…。」

逆に今度は勇輝はガツクリ頂垂れる。

勇輝は溜息をつき、渋々ゲームの電源を切った。

「こんにちは…。」

しかし入ってきたのが、雪と知ると2人仲良く溜息をついた。

「？」

事情を知らない雪は首を傾げながらも、店に2人の人間：桜井黒乃と雪達が先程助けた青年を入れた、と青年の顔を見た途端、勇輝と力の顔に驚きが浮かぶ。

「あれ、ひよつとして、よっちゃん？」

「あつ、勇輝さんに力さん、お久しぶりです。」

「よっちゃん」と呼ばれた青年も嬉しそうな顔を見ると、勇輝達の許に近づいて軽くお辞儀をした。

「あの、お知り合いですか？」

仲が良さ気な様子に雪が関係を聞くと、勇輝が青年を紹介した。

「うん、俺達の後輩分で大月義雄君つうんだ。だから、「よっちゃん」！」

雪は青年に会釈する。

青年も挨拶を返すと勇輝を見て照れ臭そうに頭を掻いた。

「その仇名はやめてくださいよ、もう一応大人なんですから。」

ガツクリ調子になっていた勇輝も知り合いの顔を見ると、いつの間にか笑顔に戻っていた。

「それで？今日は何でわざわざ、里から降りてきたんだ？手紙くれ

りや迎えよこしたのに……。」

「実は……おい、ちよつと!」。

クロノはとうとう痺れを切らして叫んだ。

「あんたがファンガイアに襲われてた事情もわかるけど……。」
言いかけてクロノは慌てて口を塞ぐ。

クロノからすれば、イクサである雪はともかくとして、一般人に見える勇輝達が「ファンガイア」という怪物を知るとは思えなかったからだ。

だがそれは彼が勇輝達と初対面だった故の話。

実際、勇輝達は訝しげな顔ではなく、少々驚いたような顔に変わる。

「アンタ、ファンガイア知ってんの?」

勇輝がファンガイアについて聞いてきたことに今度はクロノも驚く。そこにしばらくクロノのズボンのポケットに隠れていたキバーラが飛び出してきた。

「あ、おい、こんなところで……。」

クロノはキバーラを隠そうとするが、彼女自身は怒った調子でそれを遮る。

「ちよつと、まだわかんないの、ここにいるのは魔族よ、魔族! 気付かなかったの?」

「そうか、それなら……。」

説明がつく、とクロノも合点がいき改めて勇輝達を見ると。

「……キ、キバットさん!」

先程姿を見ている雪以外の全員が驚きの声を挙げた。

気を取り直して、お互いの事情を教えあつた彼らは相互で自己紹介をし合う。

「俺はマーマン族のバツシャー。こつちじゃ勇輝って名乗ってるからそう呼んでくれ。」

「俺……フランケン族……ドツガ……言う。力……呼んで。」

「……は?」

「ああ、こいつは人語あんまり話せないんだ。力って呼んでくれつつってんだよ。」

雪は普段のように無感情な表情で、

「改めまして、名護雪といます。」

と軽く頭を下げた。

「ああ、俺は桜井黒乃。クロノって呼んでくれ。そしてこいつが。」

「キバツト族のキバーラ、キバツトバツト？世の妹よ。よろしくね。」

「

紹介するとキバーラはウインクする。

その素性を聞くと突然、勇輝と力は急に頭を合わせて後ろを向く。

「キバツトさん、妹、いたか？」

「さあ？知らねえけどとりあえず口裏合わせとこうぜ。」

本人達はあくまで小声だったが…。

「ちよつと！聞こえてるわよ！」

耳が良いキバーラには丸聞こえで、彼女は顔に青筋を立てる。

クロノはクロノで、

「こいつら、どつかで見たことあるような…。」

勇輝と力に妙な既視感デジャビュを抱いた。

「あの、ところで進也と尾上さんは？」

「ああ、あの2人だったら由美子さん連れて買い物に出てるぜ。」

それを聞いて首を傾げるのはクロノとキバーラだ。

「なあ、雪さん、進也って誰だ？」

「もしかすると…？」

キバーラが疑問を問う前に、雪に変わって勇輝が話し始める。

「よくぞ聞いてくれた、進也さん、つまり坊ちゃんこそ俺達の主人、そして俺達の「キバ」だ！」

「坊ちゃんだからこそ、俺達、戦える。」

2人の少々、心酔したような口ぶりにクロノは若干引きながらも、

同時にまだ見ぬキバに僅かに関心する。

同時に今まで別世界の存在だった「黄金のキバ」が自分達の世界に存在することにも驚く。

「へえ、まあとりあえず凄いヤツなんだな、その進也って。」

「こんな店構えてるくらいだからひよっとして何か凄い子だったりするの？」

だがそれを聞くとほぼ無表情だった雪の顔に一瞬シワが浮いた。

「まあ、凄いのは確かですが…。」

その頃、その進也本人はというと。

「おにーちゃん、風邪？」

「うとうん、きつと誰かが僕の噂をしたんだよ。」

一緒にいる少女の兄が自分の家にいることも知らず、翼とじゃれあっていた。

翼は先ほどデパートで出会って以来、進也に対して本当の兄妹のように懐いていた。

その様子を見て由美子は同レベルさにやや呆れ、尾上は逆に微笑ましく見つめていた。

「相変わらずガキ臭いわね、アイツ…。」

「そう言わないでください、優しいんですよ、坊っちゃんは。」

そこに恵がお茶を持って義母の良枝と入ってきた。

良枝は入るなり、早速尾上へと目を向ける。

「あらこの人？なかなかイケメンじゃないの。」

良枝は目を輝かせながら尾上の頬をペタペタ触り、尾上も「イケメン」に悪い気がしないのか、頬を緩ませていた。

すると、今の今まで翼と遊んでいた進也が良枝の懐へと飛び込んできた。

「わあ、お婆ちゃんだ！」

嬉しそうに頬ずりする進也。

いきなりのことに一同が啞然とする中、

「だあ、初対面でいきなり何してんのよ！」

由美子は大慌てで進也を良枝から引きはがすとゲンコツをぶつけた。
「ああもう、ごめんなさい！」

「いや、いいのよ。ところで、どうしてこの人達を連れてきたの？
良枝がここで彼らが来た理由を問う。

「ええ、何でも…。」

「ええ、僕、周平さんとは知り合いでしてちょっとその縁で…。」

「へえ、周平と…。」

良枝は尾上の説明に納得したような驚いたような表情を浮かべた。
と、笑っている尾上のわき腹を由美子が突つつく。

「ねえ、私も知りたいんだけど。どうしてその周平さんって人と知り合いなの？」

「ええ、ええ〜。」

尾上が困り顔を進也に向けると、進也も「知りたい」オーラを全面に出した顔をしている。

「う〜ん、話すほどのことかどうか、わかりませんが聞きたいですか？」

尾上が恵と良枝に聞くと2人も「はい。」と頷いた。

「わかりました、じゃあお話しますか。あれはマヤさんと出会ってすぐかそこらですから…。」

尾上は語り始めた、周平との昔話を…。

今と違い、皮ジャン姿にサングラスの尾上が、これまた今と違ってまだ皺もなく、白髪も無い制服警官…若き日の周平が追いかけていた。

「おいコラ待て〜！」

「待てと言われて待つバカ正直がどこにいるか！」

決まり文句の中でも常套句の言葉を吐きながら追いかけ合いを続けていたが、やがて周平の息が上がり、その隙に尾上が逃げ出して行った。

「前に由美子さん達には話したと思いますが、昔は私結構ワルでね。」
いつものように仲間と色々やっている現場を見つかつては、周平に追いかけれられそれを撒いていた。
尾上の話によ美子達の口から笑いが漏れる。

そんなある日。

「いつもの様に追いかけ合いをしてた時に急に飛び出してきたスクーターに撥ねられて30mくらい吹っ飛んじやいましてね。怯んでる間に不覚にも捕まってしまったんですよ。」
笑っていた由美子達の顔から笑顔が消え、真っ青に染まった。尾上はまた笑いが来るだろうと思っていたのか、急に静かになったことに怪訝そうな顔になる。

由美子は青ざめた顔で恐る恐る尾上に聞く。

「ねえ、あんた、骨折れなかったの？」

「えっ？あれくらいで折れてたら大変ですよ。」
魔族である尾上は実際トラックに撥ねられても死なないどころかケガすらしない、だがそんな事情を知らない恵や良枝にとっては恐怖であると同時に、

「まったくあの子は…。」

「何で病院に…。」

周平の家族間での株価を更に下げる結果になった。
まあ実際のところは…

「おい、大丈夫か！？ケガは…してないようだな…。」
一応、周平に一度は心配しされたのだが。

「それから横に座らされて色々話を聞かされてね。」
それから一応病院に連れられたものの、すぐに異常無しと判断され

た後は2人は近くの野原に寝そべりながら語り合っていた。

「たく、お前一体何者なんだよ、あんだけブツ飛ばされたのに無傷つて。」

「別にいいだろうよ、ああ、遂に捕まっちゃったぜ…。」
尾上はため息をつくとき、歪んだサングラスを押し上げた。

すると周平は何を思ったか、尾上の方を見るとニヤニヤ笑い出した。
「な、何だよ…。」

「はは、いやな、腹を割って話せるのも滅多にねえし、俺家じゃ恥ずかしくて話せねえからお前にだけ喋るぜ。いいか、誰にも言うなよ。」

別に言いもしないし、それ以前に聞きたくも無いと思った尾上だったが仕方なく彼は周平の話に耳を傾けた。

そして聞いた、自分は父親を尊敬して警察官になったことや、自分の妻や息子、娘の話、そしてその息子もいつか警察官にしたいとの願いを。

「俺の親父はすげえぞ、まさしく偉大って感じた。俺もまだまだだけどいつかは…。」

「ふ〜ん、偉大ね…。」
少なくともある程度、尊敬はしてこそいるがそれ以上に軽蔑の感情が強い父親、それと比べると尾上からは少し周平が羨ましい気がした。

「まあ、あんまり自分の夢を押しつけてると成長したとき息子に嫌われるぞ。あ、ひよっとしたらバンドマンになってライブハウスに行くかもしれないぞ…。」

「え、縁起でもないこと言うな！」

さっきまで顔色が悪かった由美子達も気がつけば、その話に聞き入っていた。

「それから時々会っていたんですがね、いやあ、しばらく見ない内に4人になっていたとはね。」

尾上は笑うと近くではしゃぐ翼を見た。

「ん？」

ここで由美子の胸に疑問が浮いた。

今見る限りの尾上の容姿は20代後半。

だがそれでいて10数年もほとんど同じ姿、だったとすると…。

「尾上さんって、いくつなの？ねえ、進也…。」

由美子が進也の方を向くと、進也は翼と追いかけ合いをしていた。

「ひゃあ、につげろ〜！」

しかも逃げる方で。

「話聞いてないし！てか子供か！」

突っ込むころには由美子の胸からは疑問が消えていた。

場所は戻って再びドラム。

「さて、それじゃそろそろこっちに来た目的話してくれよ。ファンガイアに追われてたってことはただ街に遊びに来たってわけじゃねえんだろ？」

自己紹介を終えた後、勇輝達は雪達から大月青年が現れた事情を聞き彼にこの街まで降りてきた事情を聞き出そうとしていた。

青年も先程までのやり取りから一転、勇輝の問いに頷くと、真面目な顔で話し始めた。

「進也さん達が私達の里を出てからの話なんですけど、実は棟梁の家に保管されていたある書が盗まれたのです。」

「書？そっぴやガルの父ちゃんの家には何かいっぱいあったな。」

「はい、実はその中でも…。」

大月青年がその「書」について更に詳しく語ろうとしたとき。

「…！？」

雪とクロノが同時に何かの気配を感じとる。

「離れて！」

「え！？」

「いいから早くしろ！」

クロノがボツとしている青年を椅子から引つ張った瞬間、窓を割って数体の怪物：あの黒いファンガイアが飛び込んできた。

ファンガイアのうち、一体は奥の部屋から入り込み、足でゲーム機を踏んづけ破壊した。

「あ~~~~~っ!!!」

無残にゲームが壊されたことに勇輝と力は目を飛び出させて叫び声をあげる。

ファンガイアはそんな2人を軽く弾き飛ばすと、真っ先に青年に襲い掛かるが、キバーラがそれを妨害する。

「ちよつと、何だか知らないけど人んちに勝手に上がりこむなんていい度胸じゃない！」

「お前んちでもねえよ！ちっ…雪さん！」

クロノの目の合図に雪は頷くと、再び襲い掛かるファンガイアから青年を救い上げると、クロノとキバーラと共に外へ飛び出す。

ファンガイア達もその後を追い、店から飛び出していった。

「俺の、俺の努力の結晶を…返せ！」

勇輝は目に炎をカツと燃え滾らせると力と共に更にその後を追いかけていった。

その様子を近くの屋根から2人の男と女が見ていた。

勇輝達が最後に飛び出していったのを見届けると、女の方が後を追いかけてようとするが。

「待て、ここは俺に任せな。お前は奴らと準備をしておけ。」

「わかった、だがお前も抜かるなよ。」

女は男に忠告すると姿を消す。

男は自信を見せるような笑みを浮かべると、勇輝達が走っていった方向に向かっていった。

「おおりゃああー！」

「はああああ！」

人気の無い場所まで来ると、雪とクロノはイクサとRキバに変身、ファンガイア達に立ち向かっていた。

やはりファンガイア達は非常に弱く、闇雲に暴れまわる怪人には苦戦することなく、次々に倒れていた。

「うおお、やっちまえ！俺の宝を奪った奴らだ、遠慮はいらねえ！」
勇輝と力は青年の傍ら、2人のライダーを応援する一（動機は不純だが）。

だがイクサ…雪はここに至って不審なことに気づく。

何故かファンガイアは攻撃しつつも、隙を見ては青年に、否、彼が持っている小さな袋に手を伸ばそうとする。

それを必死に戦いながら雪はクロノに伝えようとすると、そこに高笑いが響いてきた。

雪とクロノがその笑い声が聞こえた方向を見ると、そこにあの男が立っていた。

「誰だ、てめえ？こいつらを操ってるのはてめえか！」

「ああ、そうだ。」

「じゃあ、書を狙っているというのは…。」

男は雪に問われると、顔に笑みを浮かべあの「模様」を浮かばせる。そしてその姿を蛇…スネークファンガイアに変えると、2人のライダーの前に降り立った。

スネークは雪の問いに答えず、Rキバ…クロノの方を向く。

「噂には聞いたが、「薄明のキバ」、本当にいるとはな。」

スネークの舌なめずりに、Rキバはトワイライトを構え、聞く。

「だったら？」

「まず戦わせてもらうぜ！」

叫び声をあげると、スネークは左腕の蛇の頭を振り上げRキバへ飛び掛った。

「またいらっしやい。」

「ありがとうございます。」

「周平さんによるしく言っておいてください。」

進也達は家にまで招いてくれた恵にお礼を言っていた。

翼は兄弟以外で遊んでくれた進也と別れるのが寂しいのか名残惜しそうに進也を見つめた。

進也もそれに気づくと翼の許に寄り、いつもの様にニッコリ笑った。

「おにーちゃん、また、会える?」

「うん、きつとまた会えるよ!」

進也の返しに嬉しそうに笑う翼。進也は前に自分がしてもらったように、その頭を軽く撫でた。

桜井家と別れてすぐ、キバットが窮屈そうに進也のリュックから飛び出してきた。

「ひい、つらかつ…がつ!」

「何出てるのよ!見られたら…!」

由美子は大慌てで隠そうとする、が。

「アホ、進也、ファンガイアの気配だ。近いぜ!」

「うん、気づいてた。」

進也も頷き、キバット、尾上と共に急いで走り出した。

「まったたく…。」

由美子が後を追おうとした矢先、不意に歩いていた女性にぶつかった。

「痛っ!あつ、ごめんなさい!」

「もう、どこ見てんのよ!」

由美子はプリプリ怒り出しそんな金髪の女性に謝ると急いで、進也達の後を追う。

「あれ?あれって…。」

その女性にキバットを見られているのにも気づかないまま…。

クロノ…Rキバと雪…イクサとスネーク、2VS1の戦いは激しく繰り広げられる。

「おおお！」

Rキバはスネークを見定めるとトワイライトを振り下ろすが、スネークは素早くかわすと右腕の蛇をRキバ目がけて鋭く伸ばす。

「はあっ！」

イクサは素早くRキバの前に立ち、腕をカリバーで切り払うとガンモードに変形させて弾丸を発射する。

弾丸が命中しのけざるスネーク。

「ぐっ、やるな、キバ！」

「敵に褒められてもうれしくないわよっ！」

素早い怪人相手にはこれがチャンス。Rキバはスネークに向かうと、一撃を決める。

「よしっ！…何っ？」

「ふん、まだまだあ！」

だがスネークは攻撃が決まったにも関わらず、すぐさま反撃を仕掛けてきた。

伸びてきた右手の一撃にRキバは思い切り殴り飛ばされる。

「クロノさん！」

駆け寄ろうとするイクサにもスネークの右腕の蛇が決まる。

「ちっ、あいつ、素早い上に重装甲かよ。やつかいな野郎だぜ…。」

そう、スネークは本物の蛇以上の強度を誇る強力な表皮に守られており、その身体がトワイライトの一撃さえも弾き返していたのだ。

身体がじんと痺れる攻撃を受けながらも、怪人への怒りをバネにして何とか立ち上がるRキバ。

吹き飛ばされたイクサもそれを見るとRキバに合流しようとするが

…。

「くっ…。」

ベルトに電流が走ったかと思うと、イクサのスーツ全体が火花を散らしイクサは再び膝をつく。

スネークと戦う前にも複数のファンガイアと戦っていたイクサの鎧と雪の身体に限界が近づいてきたのだ。

その隙を見逃す敵ではない。それを見るや否や、スネークはイクサに向かつて右腕を伸ばした。

間一髪、今度はRキバがその攻撃を切り払う。

「クロノさん…。」

「一発には一発。これで借りは返したぜ。」

Rキバ：クロノの言葉にイクサ：雪は仮面の下で微笑んだ。

苦戦の様子を見て怯えて、凶体の大きい力の後ろに隠れる大月青年。それを見て勇輝が呆れたようにため息をつく。

「お前は狼男のくせに本当に臆病だよな…。」

「し、仕方ないじゃないですか…。」

「まったく…。大丈夫だよ。」

「へっ?」

勇輝の「大丈夫」にキョトンとする青年。

「もうすぐ来るだろうしな…。」

「は?」

わけもわからずポカンとする青年の前で力もすっかり頷いた。

イクサを立たせるとRキバはスネークと向かい合う。

「ほう、まだやる気か?」自分の表皮が破られない自信の現れか、スネークはあきらめるとばかりの言葉を吐く。

「悪いな、お前を倒すまでぶっ倒れられねえのさ。」「まだやる」とは山ほどありますね。」

2人のライダーはそう言うお互いに剣を構える。

「チッ、諦めの悪い連中だぜ…。」

スネークは舌打ちすると、右腕を2人の方向に向け狙いを定める。

「ならとつと倒すまでだ!」

スネークが腕に力を込めた。

「キババババ〜ット！」

だがその瞬間、どこからともなく叫び声が拳がったかと思うと、スネーク目掛けてキバットが突撃をかけた。

スネークを怯ませるのと共に雪達の許に由美子が駆け寄った。

「由美子さん！」

「お待たせ…って誰とキバット…じゃないわよね？」

由美子は雪…イクサの横にいる灰色のキバをキョトンと見つめる。

「初めまして、だけど紹介は後！」

自分に張り付くキバットを払い除けようと腕を振り回すスネーク。

キバットはそれをヒヨイヒヨイとかわすと、素早く怪人から離れる。

「ちっ、どこだ、どこへ行った！」

キバットを見失い、苛立ちの叫びを挙げるスネーク。

するとその身体に連続して攻撃が決まる。

「くっ、誰だ！」

スネークが攻撃の飛んだ方向を振り向くとそこには…。

その姿を見て、勇輝と力はホツとしたように笑い、雪は長いため息をついて、首を回した。

「まったく、遅いですよ…。」

「あれが…。」

そしてその姿を見て驚くRキバ…クロノ。

由美子は肩を落として呟く。

「まったくカッコつけすぎ…。」

キバ・ガルルフォームはガルルセイバーを構え、スネークを見据えた。

「さてと、戦闘開始だ。」

「いくよ、キバット。」

11・2人のキバ（Part2）〜二つの場所〜（後書き）

次回は新キャラ登場予定、クロノにもプレゼントがあるので楽しみに。

何度か読んで研究しましたが、桜井家ちゃんと書けていたでしょうか？

感想お願い致します。

それでは、また。

12・2人のキバ（Part3）〜勝利、そして〜（前書き）

お待たせしました。

コラボ編第3話です。

今回ようやく決着、及び進也とクロノ（+1）の正式な出会いです。
ミスが無いか不安ですが、しっかり書けたので読んでください！

12・2人のキバ（Part3）〜勝利、そして〜

スネークは攻撃の矛先を進也…キバに向けると、両の腕を鋭く伸ばしキバへと攻撃をかける。

キバ・GFはガルルセイバーを強く握ると、ジャンプでそれをかわし、スネークへと斬りかかる。

「たあああ！」

しかしスネークはRキバやイクサに対峙した時と同様、一気に腕を引き戻すと交差して斬撃を受け止めた。

キバは力を込めて破ろうとするが、スネークはますます力を強め刃を自らの身体へと通さない。

「ふん、どうした、お前もこの程度か？」

スネークはキバを嘲ると、不意に手に込めた力を抜く。バランスを崩し、よろけるキバの隙を見逃さずスネークは右腕をキバの腹に叩き込んだ、が。

「へへ、残念でし、た！」

キバットがその攻撃をキバで受け止めると、今度はキバがその隙を突きスネークを斬りつけるとバツク転で素早く飛び退いた。

「く…、だが、まだまだだな…。」

だがキバが渾身の一撃を斬りこんだにも関わらず、表皮には傷一つ付いていなかった。

それを見てキバも仮面の下で口を噛む。

由美子もイクサと勇輝達の傍でその戦いの様子を見つめていた。

「進也でもあのファンガイアに傷一つ傷つけられないなんて…。」

「坊っちゃん…。」

イクサ…雪と勇輝達が歯がゆそうに見つめる中、由美子だけは怪人の方を何故かじっと見つめている。

「由美子…さん？」

「あいつ、すごく硬いって言ってたよね？」
由美子の言葉に雪が怪訝そうな顔をする。
「は、はい…。私もまったく剣が通りませんでした。」「
ほんとにそうなのかな？」「
「おい、由美子さん、そりゃ一体…。」「
勇輝がじれったそうに問う。

苦戦するキバの許にクロノ：Rキバが駆け寄る。

「おい、大丈夫か？誰だか知らねえけど？」

「うん、大丈夫。それより初めまして、『薄明のキバ』さん。」「

キバの口から出てきた言葉に驚くRキバとキバーラ。

「アンタ、知ってんの？このキバのこと。」「

と、キバーラが問うと

「うん、よく知ってる、けど…。」「

「「お前（君）、誰（なの）？」」「

逆に聞かれ、ショックを受けるキバーラ。

「どうせ、私は…。」「

「おい、今は戦闘中だろ！お前らも余計なことを言うな！」「

「「ご、ごめんなさい…。」「

Rキバに怒られ、頭を下げるキバとキバット。

「自己紹介は後だ。まず何とかあいつの鎧を破る手段を見つけねえと…。」「

「硬い？」「

スネークに向け、再び戦闘態勢をとるRキバ。しかしキバがまた呑気に聞いたのでずっこけた。

ペースを乱されまくり、頭をかくクロノ。

「だあ、お前も戦ってわかったらうが！あいつの鎧は簡単には破れねえ…。」「

「鎧？」「

「あいつの表皮だよ！傷ついてねえだらうが！」「

「あつ！」とキバが手を打つとRキバ：クロノは思いっきり脱力する。

「ほんとにこいつが俺達の世界のキバなのか…？」

いつの間にか生まれてくる疑問を押しさえながら（普段なら間をとりなすキバーラはまだいじけている）、
対策を練る。

「こうなりや、音撃弦で…。」

クロノが自らの持つもう一つの武器、「音撃弦」の使用を考えた時。

「ねえ！」

「うわっ！」

再びキバ：進也が間に入ってきた。

「何だよ、いい考えでも…」あのファンガイア、別に硬くなんかないよ。「は、そりやどついう…？」

Rキバがキバの言葉に質問しようとした瞬間、スネークの両腕が飛んできた。

「うわっ…！」

「ひゃあ！」

間一髪でかわすと、Rキバは再度スネークを斬りつける、がスネークの表皮にぶつかったと思うな否やまた弾き返されてしまう。

Rキバはそこから来る攻撃を斬り払い、キバに素早く詰め寄る。

「ほらみる、やっぱり…。」

「うっん、やっぱり違う、あいつは硬いんじゃない。」

「は？」

「硬くないって、どういうことだよ、そりゃ!？」

同様に由美子が吐いたその言葉の意味を問う。

「あのファンガイア、さつきからあんだけ叩って斬られてんのに傷一つついてないじゃない！それがおかしいのよ！」

だがその言葉に雪が反論する。

「でも由美子さん…、直人さん達と戦ったファンガイアは確かに…。」

「確かにあいつはめっちゃくちゃ硬かったけど…。」
由美子は自分の考えに霹靂が生じたことで頭を抱えるが。

「きつとあいつ、すっごく傷の治りが早いんだよ。」

「ってことは…再生能力を持つてるってことか？」

Rキバもようやく勘付く。

「あつ、そう、それぞれ。」

さりげなく思い出した振りをする由美子を勇輝達は白い目で見つめる。

しかし、文句あるかとはばかりに睨みつけられると、あっさり退いた。

「よし、それならとつとあいつを倒しちゃえばいいのね？」

「…どうやって？」

突き止めた本人に問われ、こけるキバーラ。

「バカ、それを破る方法も見つかってねえのにどうするんだよ…。」
キバーラに愚痴ろつとしたRキバが突然、腕を組むと敵に背を向けた。

それを隙と見たか、Rキバに対してまた攻撃が飛ぶが、キバが素早く受け止め押し返した。

「そうか…。」

Rキバは何かを思いつくと、手を宙にかざす。すると空間が破れ、中からギターに似た武器・音撃弦が飛び出しRキバの手に収まった。見たこともない武器を訝しげに見つめるキバツト。

「何だそりゃ？」

「説明は後だ！とりあえず、あいつを倒せるかもしれねえ。」

Rキバはそう言っつてキバの耳に手を当て何かを吹き込んだ。「作戦」

を聞くとキバがRキバを見る。

「それって確か？」

「いや、100%とは言えねえ、けど大丈夫か？」

Rキバが問うと、キバは頷いた。

「わかった、それで大丈夫。」

そう言うとキバは腰から紫のフェッスルを取り出し、キバットに吹かせた。

「おっと、力、お前の出番だぜ！」

勇輝の言葉に力が同調するのと同時に、フェッスルから重低音が響く。

「ドツガハンマー!!!」

キバットのコールを聞くとキバの手からガルルセイバーが離れ、入れ替わりに彫像に変身した力。ドツガがハンマーに変形、キバの手に収まると彼の姿をドツガフォームへと変えた。

「ふん、姿が変わったところで！」

ドツガフォームの姿をあざ笑うと飛び掛ってくるスネーク。キバはその姿を真正面に見据え、ハンマーを力任せに叩き込んだ。

「何？どおわあああ！」

あまりにも不意を突かれたことにより、スネークは腕を組むことも出来ず吹き飛ばされる。

「ナイスホームラン！」

するとあれほどまで攻撃を受け付けなかったはずのスネークの身体にいと簡単に、それも一瞬で満身創痕と言えるほどの傷がついていた。

だがそれも束の間、すぐに皮膚に吸い込まれるように傷が消滅した。「ハハ、俺の身体のコールドに気づいたことは褒めてやる。だが俺は外からは傷つけることは出来ん！」

「じゃあ内側からはどうだ？」

「何!?!」

スネークは高笑いをあげる、がすぐ傍からRキバの声が聞こえたかと思うとスネークの腹に音撃弦が突き刺さった。

「おっし、狙い通り！」

スネークが吹き飛ばされた瞬間Rキバは砂煙に紛れて、スネークも懐へと素早く潜り込んでいたのだ。

Rキバは身体を捻ると、音撃弦を展開させる。

「音撃斬・灰刃演舞！」

Rキバとキバーラは同時に叫ぶと、音撃弦をギターを弾き鳴らすように弦を弾く。

激しい音が鳴り響くごとに、もがくスネークの身体からは光が噴出、ガラスが脆くなるように崩れていく。

「があ…やめる…！」

必死にRキバを跳ね除けようとするものの、音撃弦の攻撃はスネークが動くことを許さない。

「今だ、キバ！」

キバは頷くと、高く飛び上がりハンマーを振り上げると、落下の勢いと共にハンマーを叩きつけた。

再生も封じられたスネークはそのまま粉々に散り、ライフエナジーが飛んでいく。

同時にキャツスルドランが飛んでくるとライフエナジーを飲み込み、空の彼方へと飛んでいった。

「あ、あいつは…。」

「？君、キャツスルドランを見たことあるの？」

「ってことは、ただここにきたってわけじゃなさそうだな…。」

キバットは訝しげに呟くと、ベルトから離れ、キバの鎧も解除される。

それを見てRキバとキバーラは更に驚く。

「なあ、ガキ!？」

「こんな子が!？」

「ガキ」呼ばわりされると、ムツと顔にシワを寄せる進也。

由美子もそれを見ると、安心して進也達の方に向かおうとすると、イクサ…雪がハツとしたように叫ぶ。

「進也、まだ…。」

雪が叫ぶより早く、空からホークファンガイアが進也めがけて襲い掛かってきた。

Rキバが気づいて庇おうと前に出るが、ぎりぎり間に合わない…。

「クイイイ！」

その瞬間、道路の歩道橋から白鳥が飛び出すと、ホークを弾き飛ばした。

弾き飛ばされたホークが悔しげに立ち上がると、今度は鏡から白い騎士が飛び出してきた。

「シエリル！」

Rキバが思わぬ救援者に目を向けると、形勢が不利と感じたかその場から飛び去っていった。

「ちえっ、歯ごたえがないわね。」

白い騎士…ファムは敵があっさり逃げ出したのを見ると舌を打つ。

Rキバは辺りを見回すと、ホツとした様子で変身を解き、雪とファムも変身を解いた。

その変身を解いた顔…金髪女性を見て今度は由美子が驚く。

「あ、あんた、さっき私がぶつかった…。」

「あんたは…。」

お互いを指差すのを見るとクロノは女性…シエリル・ノームに聞く。

「何だ、お前、この人と知り合いか？」

「知り合いつていうか、さっきぶつかったのよね。」

由美子も同意する。

そこに進也がちょこちょここと寄ってきた。目尻にまだシワが寄っているところを見るとまだ「ガキ」呼ばわりを根に持っているようだ。

「君だって小さいじゃん！僕はこれでも14歳なんだよ！」

すると、キバーラが進也とクロノの間に割ってくる。

「何よ、クロノも17歳なのよ！身長は伸びないけど、身体は逞しいんだから！」

本人としてはクロノの弁護をしているつもりなのだが、逆に身長に關しては軽く酷いことを言っている。

クロノは少し眉をひくつかせながらキバーラを下げる。

「ところで君の名前は？あと、うしろのオバサンも。」

「君」でクロノを指差し、「オバサン」でシェリルを指差す進也。

クロノとキバーラはギョツとするがシェリルは青筋を浮かべながらも表情は必死で保とうとする。

そしてお互い、名乗り終えると尾上がクロノの許に近づいてきた。

「ひよっとして、周平さんの息子さんの知り合いですか？」

「周平」の名前が初対面の人間の口から出てきたことにクロノが不思議げに聞き返す。

「あなた、とーさんの知り合いなのか？」

「ええ、昔色々とお世話になりましたね。」

意外な知り合いの關係を知って苦笑するクロノ。

尾上も笑い返すと、今度はシェリルに問う。

「それで、この人は周平さんの知り合いですか？」

再びピクリと青筋が浮かぶシェリルの顔。それでもなお顔は必死に笑顔を保とうとしているが。

何か殺気を感じ由美子と雪は一步引く。

「雪、あんたも感じる？」

「ええ、あの人達、根が天然ですから、たぶん気づいてないんです……。」

クロノとキバーラもシェリルから徐々に漏れ出す殺気から少しずつ足を引く。

普段から彼女と付き合い合っているクロノはシェリルの性格についてよくわかっていたからだ。

だからこそ、あえて進也達には何も言わない。

「俺、し〜らね。」

進也もそんなシェリルと周りの様子に気づく様子も無く、彼女の「必死」の笑顔に「本物」の笑顔で頭を下げる。

「さっきはありがとう、オバサン！危ないところだったよ！」

「おう、それに驚いたな、仮面ライダーはどんな年齢でもなれるのかよ！」

進也とキバットが素直に感謝の念を示している。それは限界直前のシェリルにもよくわかっていた。

だがその感情は彼女の中の殺意を増幅させる。

そして最初、進也を助けてくれたことに感謝していた尾上も、

「あれ、おかしいですね…何で…。」

勇輝や力、大月青年達共々、微妙に身体が震え、体中から冷や汗を流していた。

「あれ、オバサン、何で震えてるの？寒いのか？」

「ううん、そうじゃないんだけど…。」

散々今までいろんな子供に大人気ないことをしてただけあって、シェリルはこの場は大人でいようと抑えようとした、のだが。

「年取ると風邪引きやすくなるぜ。」

キバットの言葉にとうとう…。

「ブチッ！」

何かが切れる音がした。

先程と打って変わって鬼の形相で進也の顔をひねり回すシェリル。

「あんたね、年頃の女性にオバサン連呼するんじゃないわよ！」

本人曰く「年頃の女性」とは思えない凄まじい力と、「年頃の女性」がしてはいけない形相に進也はポロポロと涙を流し始める。

「ちょ、落ち着け！お前、表情！」

「大人気無いから…。」

クロノと由美子が慌てて進也からシエリルを引き剥がした。

それでもまだ恐怖が強いのか泣く進也。

「ちょっ、どうしたらいいのよ！」

「てか、この子ほんとにキバ！？」

由美子、クロノ、キバーラが手をこまねいてる中、スツと尾上が前に出ると…ポケットから棒付きキャンディーを差し出した。

「ほら、坊ちゃん、これ上げますから泣いちゃだめですよ…。」

「あんたさ、いくらなんでも…。」

「こんなことで泣き止むわけが無い」と言おうとしたのだが。

「うん、僕泣かない！」

いつのまにか泣き止んでキャンディーを舐めている進也に思わず全員（アームズモンスターとキバット以外）がずっこけた。

それから数分後…。

大月青年が持っていた小さな袋を進也達が調べることになった。

ついさっきまでの子供の顔と一転、進也は真面目な顔になると、手袋をはめて袋の中身をそつと取り出す。

袋の中からは袋より小さいメモリーカードが入っていた。

「ねえ、義雄さん、これおじいちゃんからは何て言われて預かったの？」

表情のギャップに戸惑うクロノ達を尻目に進也は大月青年に問う。

「さあ、あの人は「ワシの愛する女について」が入っていると聞いてました…。」

その言葉に今度は別の地点から「ブチッ」と鳴る。

クロノ達がビクツと振り向くと、由美子と尾上が先程のシエリルに負けないほどの勢いでメラメラと燃え上がっていた。

「あのクソジジイ…！」

「んじゃとつとおまえんちに帰って調べようぜ」「無理！」「は？」
再び一転、顔が「子供」の表情に戻る進也。

「ぼくんちパソコンないから！」

につこり笑って言う進也にクロノとキバーラは少々げんなりとし始める。

「この子、ほんとに悪気無いのね…。」

「ある意味、疲れるな…。」

2人は雪が言った言葉の意味が理解できた…：ような気がした。

「じゃあ、私んちは…ちよつと無理ね。雪んちは？」

「いえ、私はまだ…。」

近くにいる人間の家にパソコンが無いとわかると、（進也以外）全員困り果てて腕を組んだ。

「ねえ、誰か「おう！」早っ！てかまだ何も言ってないし！」

由美子が候補を聞こうと口を開きかけた瞬間、キバットが手を上げた。

「俺、いいとこ知ってるぜ！」

『へ？』

それから数十分、全員が歩き疲れた頃キバットがようやく一軒の家、否、屋敷の前に止まっていた。

「ここだぜ。」

「ここって…。」

由美子達が家の看板の横に顔を向けると、釘が抜けて落ちかかった看板に「糸矢研究室」と書かれていた。

それを見ると、進也が何故か嬉しそうな顔になった。逆に尾上達はうんざりとした顔になる。

「ねえ、ここって…。」

由美子が聞こうとすると。

インターフォンから、

「おや、今日は大勢なのかな？」

と不気味な声が聞こえてきた。

同時に屋敷の門がゆっくりと開く。

「ささ、どうぞ……。」由美子達は尻込みしたが、進也はお構い無しに屋敷の門をくぐっていった。

そうならばもう入るしかない。

由美子は雪、クロノと顔を見合わせると自分達も門をくぐった。

玄関から中に入るとすぐに屋敷の明かりが一斉に点く。

そして目の前にフツと現れた階段から1人の白衣の男がすたすたと降りてきた。

「やあ、いらっしやい！」

男は進也達を見るとにんまりと笑った。

12・2人のキバ（Part3）〜勝利、そして〜（後書き）

今回から新キャラ、柳雨さんのキャラ投稿から生まれた新キャラ・糸矢の登場です。

間もなくコラボ編も完結です、これからも楽しみに。

13・2人のキバ（Part4）〜とんでも学者と別れ〜（前書き）

今回は闇丸さんとのコラボ完結編です。

何だかグダグダになった感がありますが、何とか書き上げました。

そして遂に柳雨さん投稿のスパイダー登場（名前をちょっと変えました、すいません）。

それではどうぞ。

13・2人のキバ（Part4）〜とんでも学者と別れ〜

進也達が「糸矢研究所」に向かっていた頃…。

ホークファンガイアはブランウイングに傷つけられた身体を押さえながら元の姿…女性に戻る。

「ちっ、油断した…。まさかあんなにもライダーがいるとは…。だが。」

女は笑うと手元から黒い羽根を取り出し見つめた。

「この僕の手元には…。」

女は羽根を一枚掴むと空に向けて放り投げた。

すると羽根がどす黒い煙を放ったかと思うと、バラバラにちぎれ、その破片は黒いファンガイアへと姿を変えた。

そう、大月青年達を襲った謎のファンガイアの正体、それはホークが産み出した分身だった。

「この羽根あるかぎり、我が僕達はいくらでも作れる。次こそは「あれ」を…。」

ホーク…女は再びほくそ笑むと自らの分身に指示を出そうとした。

だがその時、どこからともなく赤い紐が鋭く延びてきた。

赤い紐は蛇のようにつねり、牙を剥くように唸りを上げて分身達を次々に貫き、切り裂いていった。

あまりの素早さに女が声も上げないうちに、分身達は砕け散っていった。

「な、何…?」

分身達があっという間に全滅すると、驚愕する女の目の前に銀色の戦士…キバでもイクサでもない戦士が降り立った。

銀色の戦士は青い目で女を睨み付けるように見つめる。

「お前は…。」

女は戦士を睨み返すとホークファンガイアに変化、襲いかかる。

翼を広げると鋭い爪を伸ばしホークは戦士を斬りつけようとする。だが戦士は何の動揺も見せずに爪を取り出した赤い剣で受け止め、横へと払い除ける。

「な、何…？」

怯んで動きが鈍るホーク、戦士はそれを見逃さず剣で何度も容赦なく切り裂いた。

そしてホークがふらついたのを見ると、腰から白いフェッスルを取り出し、ベルトに付く怪物に噛ませた。

『うえイkuあッp!』

怪物の目が光ると同時に戦士は赤い剣を縦に構える。キバの時と同じく辺りは月光が指す夜の闇に包まれる。

戦士が剣を夜空に掲げると空にキバの紋章が浮かぶ。

「ひ、ひい…！」

様子を見て身の危険を感じ、ホークは羽ばたいて空へと逃れようとする、が時既に遅し。

戦士は剣の矛先をホークの背中に向けると、狙いを定め、前へと突き出した。

剣は鋭い線を描きながら真っ直ぐ延びていくとホークの背中から胸を軽く貫いた。

「が…は…。」

戦士は剣でホークを貫いたまま飛び上がり、紋章をくぐり抜ける。そして剣を握り、力強く引き上げるとホークの身体が宙へと浮く。

「が…、サガ…。」

ホークの断末魔、それを聞き終わると戦士は赤い刃をなぞる。

ホークは絶叫を最後に響かせると粉々に砕け散った。

夜の闇が晴れ、元の何も無い青空が戻る。
戦士はそれを穏やかに見つめ、場を去っていった。

進也やクロノ達を来客用と思える広々とした椅子に座らせると、白衣の男は自らお茶やお菓子を盆に載せて持ってきた。

男はテーブルの真正面にある椅子に座ると、

「さて、初めての人には自己紹介がまだだったね。私は糸矢守彦。進也君達からはDr. スパイダーと呼ばれてるよ。」
と自らの名前を名乗った。

「あれ、普通っぽい？」

出迎えてきたときと打って変わって変わって常識人のような様相になったことに由美子は首を傾げ、進也の肩を突く。

「ん、何？」

「ねえ、この人いったい誰？何だか科学者っぽいけど…。」

「ぼいんじゃなくて科学者。すつごく頭の良い人なんだよ！」

「へえ…。」

由美子は眉を寄せて辺りを見回す、とクロノや雪、シエリルも同じように部屋の中を見ていた。

部屋の中はわりかしきれいに片付いてはいたものの、あちこちに書類やら分厚い本やら機械やらが置かれていた。

難しいことが苦手な由美子は頭を軽く抑えてお茶を飲む。

「ブツ！」

直後、お茶の味に思わず吹き出し由美子は咳き込む。

見るとクロノ達はもちろん、進也以外はみんな咳き込んでいた。

「な、何よ、このお茶！」

シエリルが抗議すると何故か舌を打つドクター。

「チツ、せっかく新薬の効能を試してみたかったんだが…。」

「俺達はモルモットか！」

「実験台にしないでください！」

クロノや雪も反論に加わる中、由美子は確信した。

「この人、変を通り越して危険だ…。」

由美子はニコニコ笑っている進也からキバットを引き剥がすと、尾上達も周りに寄せる。

「何なのよ、あの博士！来客相手にいきなり実験なんて。」

「うるせえよ！俺だってあいつがマヤの友達じゃなきゃ倒してえんだよ！」

由美子の目が点になる。

「つてことはあいつ、ファンガイア？だから寄せたくなかったわけ？」

「いえ、坊ちゃんもあの人がファンガイアということは知っていますから。それよりも…。」

今度は尾上が答える。

「あの人、坊ちゃんも平気で実験台にするんです。その上坊ちゃんも実験台にされてる自覚がないもんですから…。」

「あいつなら生体解剖も喜んで身体を提供しそうね…。」

由美子は進也を見ながら、頭の中で「不気味に笑いながらメスを取るドクターと今にも解剖されそうになる進也」を想像する。

そうとも知らない進也はクロノ達の猛抗議からドクターを庇っていた。

「みんな酷いよ！ドクターは凄い人なんだよ！」

進也に擁護され、ドクターも顔をでかくする。

「その通り！よくし、私のスーパー発明を見せてあげようじゃないか！」

そう言つと、ドクターは部屋の中から一つダンボール箱を取り出した。

それを見ると、クロノ、シエリル、雪は顔を見合わせると、一旦抗議を止める。

由美子達も席に戻ると、ドクターは箱から小さなゲーム機のような機械を出した。

「それは？」

「私のスーパー大発明その1！最強のウソ発見器！」

ドクターは自慢げに豪語し、進也も拍手するが他の面々は胡散臭げに見つめる。

それが気に食わないらしく、

「よし、では早速試してみよう！」

と質問も聞かずにスイッチを入れる。

『スベテ、イイエデコタエテクダサイ。』

電子音声が聞こえると、ドクターは面々を見回し由美子に機械を向けた。

「あなたは私の発明を怪しいと思っていますね？」

「いいえ。」

由美子が答えると全員が耳を押さえるほどけたたましい音で「ブー——ッ！」と鳴った。

だが。

「ねえ、でもこれだったらさっきから言ってるし……。」

由美子が反論すると、ドクターは再び眉にシワを寄せる。

「じゃあこれは？クロノ君には恋人が、いる！」

クロノの表情が一瞬ビクツと動く、が平静な顔に戻すと答える。

「いいえ。」

すると先程より大きい音で「ブー——ッ！！！」と鳴る。

驚くクロノとシェリル。しかしまだ疑いは抜けない。

「調べたとかじゃないわよね？」

「何を言いますか、私は今日初めて君達にあっただんですよ。知るわけないでしょう。」

弁解しながらも、ドクターは勝ち誇った顔になる。

クロノはもちろん、由美子達も驚く。

「ほらね、凄いでしょ！」

自分の事のように胸を張る進也。

「何でお前が胸張るのよ……。」

由美子に突っ込まれたが……。

「そつだ！最新作が出来てね、丁度いいサンプル……じゃなくて試しい人を探していたんだが……。」

思い返したように指を弾くとドクターは由美子やクロノを見てニヤリと笑う。

「サンプル」と言われかけていただけもあつて由美子は唾を飲むと身構える。

「まあまあ危険なものじゃないよ。すぐ持ってくるからね。」

ドクターはそう言つてまた笑つと、客間をドタバタと出て行く。

それをボツと見ていた由美子達だったが、ここでようやく本来の目的を思い出す。

「そつだ、あの爺さんが持ってきたチップを……てあれ、大月さんは……？」

本来の目的を思い出して気づいたが、気がつくと大月青年がいない。

「ああ、あいつならここ見たとたん……。」

「あ……、もう帰らなきゃ、ドクターさんによるしく……。」

「俺にチップ渡して逃げてつたぞ。」

とキバツトは答えた。

「怖かつたんだ（な）……。」

由美子とクロノは同じ思いで大月青年の思いを察した。

しばらくすると、ドクターは再び奥から戻ってきた。

「やあ、お待たせお待たせ。ところでこれなんだが…「ちょっとその前に…」?」

ドクターがその「物」を取り出す前に雪が彼の眼前にチップを差し出す。

「ん…これは?」

ドクターは繁々とチップを見、首を傾げる。

「僕の父が持ってきたチップなんです…?」

尾上が説明をすべて語る前に、進也が続ける。

「面白そうな道具の前にこれを見てほしいんだ。」

ドクターはしばらく考える素振りを見せたが…。

「了解したよ。パソコンルームにどうぞ!」

と進也達に奥へと手を差し伸べた。

その道すがら、クロノは進也に聞く。

「なあ、そう言えばお前は仮面ライダーになって何年なんだ?」

「うーんと、丸一年かな?」

これを聞き、クロノ、シエリル、キバーラは驚く。

「いなくなる前にお母さんが僕にキバットを託してくれてんだ。だから僕はみんなと頑張ってるんだ。」

進也の言葉にクロノは思った。

「こいつ、意外と修羅場くぐってるみてえだな。」と。

だがシエリルは急に咳き込み始めると、

「ま、まあ、私達に比べたら大したことはないわよね…。」

と虚勢を張り始める。

「よく言うわよ、最初はクロノと知らないで襲い掛かってきたくせに…。」

呆れ目でジトツと見つめるキバーラの口をシエリルが塞ぐ。

そして今度は進也がクロノに聞く。

「クロノ君、さっき彼女がいるって言ってたよね、ひょっとしてそ

れはその人を守るためなの？」

進也の質問にギクツとするクロノ。

「何で、そう思うんだ？」

「僕、つい最近別世界のキバにあったことがあるんだ。その人はクロノさんよりお兄さんだったんだけど、その人は一緒にいるお姉さんを守るために戦ってたんだ。だから、何となく。」

「へえ、そりやすげえな……。」

軽く答えながらもクロノは進也の言葉に深く関心していた。

そして進也はクロノを見てニッコリ笑う。

「だから、クロノさんも仮面ライダー、頑張つてね！」

「お、おう！」

クロノと進也は拳を握り、二人で頷く。

「あと、オバサンもね！」

また余計な一言を加えて拳骨を食らったのは言うまでも無い。

その頃、大月青年は一人、連絡を取っていた。

相手は頭領……巖だ。

「はい、ちゃんと渡しました。あとは何とかやってくれと思います。」

「ご苦労ちゃん。ワシからの援助とは、言わなかったらどうな？」

「はい、もちろんです。」

そう、大月青年が危険を犯してまで来た理由、それは巖老人から受け渡された「物」を進也達に届けることだったのだ。

だが表面上から老人本人が送ったと言っては尾上……ガルルに受け取ってもらえないが為にこの様な方法を使ったわけである。

巖老人は同時に青年がファンガイアに襲われたことを聞き疑問に思っていた。

「「アレ」を届けることは仲間内でも教えておらんかったはずじゃが……。一体誰が……。」

そしてもう一つ考える。

「じゃが思いも寄らず、「薄明」のキバまででてくるとはの、ふふ、これはおもしろいぞい。」

「ま、とりあえず戻つといで。」

「わかりました。」

電話を切ると青年は帰路に向かって歩き出していった。

「これは…。」

ドクターのパソコンに映っていたもの、それはキバットの姿だったのだが。

「何だコリヤ？」

「キバット族、なの？」

キバットもキバーラも見たこともないといった声をあげる。すると尾上がその画面の端に書かれた文字に気づいた。

「見てください、ここ。」

全員が尾上が指を指した先に目を向けるとそこに、

『 R A Y K I V A T 』

の文字が表示されていた。

その画面を興味深そうに見つめているドクターに由美子が聞く。

「これは？」

「ふむ、これは面白い、人造キバットの設計図だね。」

「人造、キバット…:というと？」

「名前の通りさ、おそらく人間をキバにする為のシステムだろうな。」

驚く一同。特に「人間が変身できるキバ」であるクロノ、キバーラと「イクサ」である雪の驚きは強かった。

「おそらく狼君の父さんが人間から手にいれたんだろうね。方法はわからんが…:ね。」

ドクターは愉快におどけてみせるが、父が持っていたものに尾上が唾を飲み込む。

「あのジジイ…。」

いつもの言い方だが、今日の場合はいつもと違う、自分の父が持っているものに驚愕している言い方だった。

「とりあえず、もっと調べたいから今日はこれ、預かせてもらおうよ。」

「うん、よろしくね。」

進也は頷いた。

それから数時間後。

「見送りに来てくれてありがとな。」

進也と由美子、キバットはクロノとシエリル、キバーラをクロノの家の近所まで送りにやってきていた。

「ううん、いいんだよ…それより、はいこれ。」

進也は手に持っていた箱を手渡す。

「これは？」

「ドクターの嘘発見器。きつと役に立つから持って行って。」

クロノは中身を聞くと、ぐったりしたように見つめる。

だが目の前にいる彼のプレゼントを無下に断るのも大人気無い。

由美子とキバットの顔を見てみると、彼女も「諦める」と顔でメッセージを伝えていた。

「ああ、ありがとう…。」

クロノは頭をがっくし下げるととりあえず箱をしまった。

と、進也がクロノの手を握る。

「それから、さっきも言ったけど、これから頑張ってるね。」

笑う進也。

クロノはしばし黙り、手を握り返した。

「おう、お前もな。」

二人のキバの友情が、かいま見えた。

13・2人のキバ（Part4）〜とんでも学者と別れ〜（後書き）

闇丸さん、ありがとうございました。

。プレゼントは好きに使ってみてください（物凄い精度の高さですが）

さて、ようやくコラボも終わり、いよいよ次回から本編再スタート
です。

お楽しみに。

特別編「疑問・質問答えまSHOW」第一回（前書き）

年末最後の更新、今回は特別編です！

特別編「疑問・質問答えまSHOW」第一回

作者

「さあ、今回は年末特別企画、「みなさんの疑問・質問に答えてあげまSHOW」のコーナー・第一回でございます。」

進也

「わあ、パチパチパチ！」

由美子

「でも答えてあげましようってたって、何の質問も募集もしてないじゃん。」

キバツト

「変なリスの頭被りやがって。くだらねえことしてるまに本編書けつての。」

作者

「ほお、いいんですか？僕は作者なんですよ。そんな口答えをする人を『いなかっただこと出来る』権限を持っているんですよ？」

キバツト

「くっ、こいつ…言うに事欠いて…。」

由美子

「腹立つわね…。」

進也

「ねえ、良いから始めようよー！」

由美子・キバット

「「いや空気読めよ！」」

作者

「最初は募集が無いようなのでこちらから皆様が気になることをお教えする形式といきましょう。では最初の質問はこちら！ジャカジヤーン！」

由美子

「古っ！」

Q1・この作品を思いついた切っ掛けは何ですか？

由美子

「いきなりこれ？っていうか作者は無計画でばんばん投稿する悪癖があるのよね〜…。」

作者

「うるさい！えっとこれはですね、最初はある作家さんからの要望があったからなんです、それ以外にもとある漫画を読んで閃きが浮かんだのもありますね。」

由美子

「とある漫画って？」

作者

「すみません、知らない人が多いと思われる作品なので。以前ジャンプ系列と言いましたが正確にはマガジン系列のとある漫画が正しいですね。」

キバット

「よつするにパクりか…。」

作者

「違います、イメージソースってヤツです!」

進也

「もう良いから次行こうよ。えっと次が…」

作者

「あの…司会進行は僕なんですけど…。」

Q2・声のイメージは?

作者

「これはですね、イメージを挙げるとすれば…。」

由美子：平野綾

尾上：森川智之

勇輝：鈴木健一

力：宇垣秀成

雪：折笠富美子

作者

「ですかね。」

進也

「あれ、僕は?」

作者

「ごめんなさい!実は君は僕的に良いイメージの人が全然思い付かないんです!」

由美子

「あんたね、何で肝心の主人公の声イメージしてないのよ…。」
進也

「ご、ごめんなさい！謝りますから竹刀で殴るのはやめて！あつ、これ読んでるみなさん、良いイメージが思いついたなら挙げてみてください！ギャア！」

進也

「それじゃ次…あれ、もうないの？」

キバツト

「どうやら今回はここまでみたいだな。次回は作者のみなさんから質問にお答えしていくぜ！」

進也

「というわけで、次回分から聞きたい質問を募集します。ついでに僕の声イメージも思いついたら送ってね、待ってます！」

作者

「次回からは更なる展開、痛い、ますます面白くなっていくので、やめて、お楽しみに、ちよっ、待って…。」

進也・キバツト

「「来年からもよろしく！」」

作者

「ギャアアアア…！」

特別編「疑問・質問答えまSHOW」第一回（後書き）

言い忘れましたが締め切りは特に設けないので（強いて言えば次の第二回まで）、どうぞしご応募を。

たくさん質問、楽しみにしています。

あっ、竹刀を持った由美子が追ってきたので僕はこれで…。

また来年、お会いしましょう！

14・真夜の日記(前書き)

さあ、2011年、初更新でございます。

新年一発目は特別版・過去編です！

今回は以前コラボをしてくださった黒服さんのキバ関連の物を加えていますよ。

それではどうぞ！

14・真夜の日記

クロノ達と別れてから数週間…。

あれ以来ファンガイアが起こす事件も息を潜め、しばし平穏な日々が訪れていた。

ドラム

学校も休日の日曜日、進也達は店を久々に掃除していた。

「今日呼び出したと思ったら…。」

部活の助太刀も無く、家で暇を持て余していた由美子も雪共々、何故か掃除に駆り出されていた。

「せっかくの休日に掃除って、どうよ？」

「バカ、何言ってるんだよ、由美子と雪さんは坊っちゃん友達、それイコール坊っちゃんちの掃除の手伝いもする、だろ？」

ぶつくさ文句を言う由美子に勇輝が当たり前前とばかりに笑う。「いや、何その方程式…。」

由美子はホウキで勇輝を殴りたくなかったが、思い留めて手を下ろす。何せ、同じく無理矢理呼び出されたはずの雪が何も言わず真面目に掃除をしているのだ。

自分だけ大人気なくやるわけにもいかず、由美子は掃除に戻ることにした。

見ると、進也はクローゼットから直人にもらったコートを出し丁寧にブラシをかけていた。

嬉しそうにブラシをかける進也に由美子は声をかける。

「アンタも大事にしてるよね、それ。」

「うん、直人さんが僕のために買ってくれたコートだもん。いつも綺麗にしないとね！」

そんな満面の笑みの進也に由美子は見つめると、そう言えばと思いつく。

「ねえ、優紀さん、どうなったのかな？直人さんと進展したのかしら？」

それを聞き、何故か引いている勇輝。

「いや、俺、ゲイじゃねえよ……。」

「アンタじゃないわよ！」

『ユウキ』違いに突っ込むと、由美子は進也に話を戻す。

「そうだね、そろそろ相思相愛になったんじゃないかな？」

「おっ、そりゃ良いな！」

いつの間にか部屋の奥から出てきたキバットも加わり話に花が咲いてくる、と。

「あの、おしゃべりも良いですけど掃除しましょうよ。」

『あ……。』

雪の言葉に我に帰ると、慌てて由美子達は掃除に戻る。

掃除が一段落した頃。

「ふい〜、ちよつと喉乾いたな〜。」

「じゃあ私飲み物買ってきますね。」

雪が立ち上がるうとする、と進也がちょこちょこくつついてきた。

「進也？」

「じゃあ、僕もついていく！いい？」

「え……、はい……。」

雪は怪訝そうな顔をしながらも進也を連れて店を出ていった。

それを見ると由美子は尾上を指先でちょいと招く。

「ん、何ですか？」

「ねえ、前から聞きたかったんだけど、マヤさんってどんな人だっ

たの？」

「マヤさん…ですか…。」

尾上は頬杖を突くと、しばらく考えていたが、立ち上がると部屋にあった写真立てを持ってくる。

その写真にはまだ今よりも幼い進也を抱き締めて微笑んでいる、肩辺りまで切り揃えられたセミショートの黒い髪にウェーブをかけた女性の写真が写されていた。

「すごい美人…。ていうか若い…。」

思わず息をつく美しさ、由美子はそれ以上言葉も出ずにただ写真を見つめていた。

尾上は更に語る。

「彼女が坊っちゃんのお母さん、紅真夜さんです。」

由美子は顔を見ての驚きも覚めないまま、

「それで…真夜さんってどんな人？尾上さんの話じゃ何かとんでもなく強い人だったみたいだけど…。」

何せ、今まで尾上から聞いてきた話は断片的であり、「強い」以外に詳しいことはわからないからだ。

由美子が聞きたげに首を傾げるのを苦笑すると、尾上は口を開く。

「優しい人でしたよ、私達魔族のことも私達と分け隔てなく扱ってくれて…。」

そこまで話したところで尾上の口が突然止まる。

「で、それでそれで？」

由美子は続きを聞こうと顔を寄せる、だが尾上は口を止めたまま、それどころか頭を押さえて悩みだした。

「あ、あれ…おかしいな…思い出せない。何故…？」

「ちよつと、大丈夫？」

由美子は尾上が思い出すのを待とうとするが、尾上は頭から手を離

すとイスにへたり込んでしまった。

「す、すいません…。これ以上は…。」

「えっつ！」

ほとんど話さないうちに話が中断してしまい、由美子はがっかりと肩を落とした。

「すいません、勇輝君や力君なら…。」

しかし…。

「えっ…あつ、あれ？」

「思い…出せない。」

勇輝や力に代わるがわる話を聞いてみようとしたものの、彼らもまた真夜に出会って以降のことをほとんど覚えていなかった。

「じゃあ、ガルルに…。」

「彼に聞いてもわからなかったからアンタに聞いたの！」

思い切り怒鳴ったものの、事態が好転するわけがない。

由美子のため息をついていると、丁度進也と雪が人数分のジュースを持って帰ってきた。

進也は由美子の顔を見ると「ん？」ときよとんとした顔になり、由美子に寄ってきた。

「由美子さん、どうしたの？」

「ちょっと顔色、悪いですよ？」

二人の心配に、手で「問題ない」と表すと由美子は顔を上げる。

「ん、大丈夫！ちょっと考え事してただけだから。」

それを聞くと、

「よかった！」

と進也は笑って尾上達にジュースを配り始めた。

しかしそれでも雪はまだ心配げな顔をして由美子の横に座る。

「本当に大丈夫ですか？元気が無さそうですが…。」

「ありがとう、でもちょっとガツカリ話があったただけだから。」

「そうですね。」

雪がようやくホッと一息つく、今度は由美子が雪に聞く。

「ねえ、雪？」

「はい、何でしょうか？」

「アンタ、進也ってどんなヤツだと思う？」

雪は質問を受けると訝しげな顔をし、手を組み考える。

「私からすれば、「子供」ですね、何であんな子がキバになったのか……。」

そう言いつつも、雪は口ぶりとは違う目で進也を見つめる。

由美子も視点を進也に向けてみると、彼はいつもの様に無邪気に笑いながら皆と談笑していた。

その様子に由美子も心から微笑み、そして考えた。

「やっぱ、進也のこともつと知りたいわよね……。」

「さて、と……。」

休憩が終わり、由美子が立ち上がるうとすると、そこへ尾上が歩み寄ってきた。

「あ、由美子さん、ちょっと頼まれてくれますか？」

「え？」

倉庫

尾上から倉庫にある物をいくつか取ってくるように頼まれ、由美子は倉庫に入る。

が、扉を開けた途端、ブワツと部屋中の埃が部屋に舞い由美子は咳き込んだ。

「ぶへっ、うえへっ……てきついわよ、こ……。」

倉庫の中はかなりの埃が広がってこそいたが、それと同時に店では見ないいろんな物が並んでいた。

大量のCDが入ったケースや変わった形の楽器、USBに似た形の機械、動物の絵が刻まれた銀色のメダル。

そんな数々の品々を眺めながら由美子は尾上に頼まれた物を探す。

「どれかな、と…。」

由美子が棚の上に置かれた箱を引っ張ると、それに引き寄せられて横に置かれたケースが落ちる。

「え？わっ、わっ。」

落ちる拍子に蓋が開いて外にぶちまけられる中身…カードが埃と共に舞い上げられあちらこちらに散らばり由美子は尻餅をついた。

「痛た…。」

まだそれだけでは終わらない。

由美子が尻餅をついた拍子に地面がグラリと揺れ、途中まで出していた箱が動く。

「へ？」

不吉な予感を感じた由美子が恐る恐る顔を上げた瞬間、その眼前に大きな箱が迫っていた。

店

「？ 進也、何か凄い音がしませんでしたか？」

ドスンと言う激しい物音に雪はホウキの手を止めて進也に聞く。

「うっん、わかんなかった。」

「そう、ですか…。」

一抹の不安を感じながらも雪は再度、ホウキで掃き始めた。

「あ、危なかった…。」

目の前にズンと落ちた由美子は荒れた息を整える。

本当に間一髪だった。

箱が落ちてきたことに気づいた由美子が素早く地面を蹴り上げたそ

の時、目の前に箱が落ちてきたのだ。

重量感がある大きな箱だけに、これが当たったらただでは済まなかっただろう。

由美子はゆっくり立ち上がる、すると箱の蓋が開いて中から小さな黒い本が見えた。

「何だろ、これ？」

箱から本を取り出すと、表紙に被った埃を払い、いろんな方向から眺める。

「ん？何かタイトルが…。」

黒い本の上、色褪せていた為にわかりづらかったが、表紙をよく見ると金の文字でタイトルが書いてあった。

「えっと、『Maya's Diary』？ ってことは…。」

そう、由美子が今一番気になっている人物・真夜の日記であった。

それがわかると、由美子の顔に笑みが浮かんだ。

「ふふふ、まさかこんなところで手に入るなんてね…。」

この店の誰に聞いても曖昧な解答しか得られなかった人物の全てがここにある。

由美子はまたニヤリと笑うと日記を胸元に隠し、そつと左右を見る。

「誰も、来ないわよね…。」

確認すると、由美子はゆっくりとページをめくった。

だが…。

「あ、あれ…？」

真夜の日記…そこには何も書かれていなかった。

由美子はパラパラページをめくってみるが、どのページを見ても着いているのは染みや汚れだけ。

「な、何よこれ？」

嬉しさが一転、脱力感に変わると由美子は手から日記をポロリと落とす。

その時だった。

誰も触れていないはずの日記の表紙が開き、ページがバラバラと風に吹かれるように素早くめくられる。

「えっ？な、何？」

そして日記のページが真ん中に差し掛かった時、中から強烈な光が放たれる。

その強さに由美子は思わず目を覆った…。

光がやみ、由美子が目を開くと…そこは「ドラム」の前だった。

「あれ？いつの間に私、外に出たんだろ？」

首を傾げながら店の中に戻ろうとすると、彼女が手をかける前に店から一人の男が出てきた。

「あつ、尾上さん。」

由美子は尾上に声をかける、だが尾上は何故か由美子を見無視する。

と言うよりは尾上は由美子の姿が見えないように感じる。

最初、無視されたことに怒ろうとした由美子もすぐそれに気づいた。

「ちよつ、何これ？」

よく見てみると、僅かながらに自分の姿が透けている。

試しにドアノブに触れようとすると、由美子の手はドアノブを突き抜けた。

何度も試してみるが、いくらやっても結果は同じ、まったく手応えが無い。

それだけではない、よくよく見れば店や目の前にいる尾上の姿が違った。

まず店は看板こそ同じではあるが、普段見慣れた看板に比べると綺麗に塗装されており、扉や窓も綺麗だった。

そして尾上の容姿も先程の「尾上」とはまるで違っていた。

整っていた髪は爆発しているかのように荒れ、服装もシャツにエプロンどころか派手なシャツにジャンパーを羽織っている。目にかけているのもメガネでは無く、黒いサングラスだ。普段彼の姿を見ている由美子であったから良かったものの、他人に見せれば「別人」と言われそうな変貌ぶりだった。

由美子が戸惑っていると、再びドアが開き、店の中から一人の女性が現れた。

「えっ!？」

「よし、んじゃ行くぜ?」

驚く由美子の目の前に現れた女性…それは写真で見たあの顔…。

「さて、一仕事といこうかしら?」

進也の母、真夜^{まよ}であった。

14・真夜の日記（後書き）

さあ、果たして由美子の身に何が起こったのでしょうか？

そして真夜が現れた理由は（というよりfeat・スカルと同じ様な気がしますが）？

次回もお楽しみに。

そしてこの度、黒服さんの小説・「仮面ライダー剣&キバ

白き帝王」のキャラをお招きすることとなりました！

近日開始です、こちらもお楽しみに。

15・過去の世界（前書き）

どうも、いつも元気な（でもありませんが）リスくんです。
過去編第2話更新です。
どうぞ！

15・過去の世界

ドラム

自分に気づいていない(？)二人の男女を前にして、由美子は自分の身に何が起きたのかを考えるため、頭の中を整理した。

「えっと、確か倉庫の中で真夜さんの日記を見つけて、それに何も書いてなくて、えっと急に光りだして…、ああ、もう！」

考えても埒があかず、由美子は頭を引つ掻き回す。

そうしている間に真夜と尾上はすたすたと歩き始めていた。

「あ、ちよつと待って…。」

由美子は引きとめようと叫ぶが、二人には彼女が叫んでいることはおろか、自分達の後ろに由美子がいることすら気づかない様子だ。

不意に由美子の頭に突拍子も無い考えが浮かんだ。

「ひよつとして、ここは真夜さんの日記の中の記憶…？」

口に出して由美子は再び頭を掻き、ポカポカと殴る。

しかしそう考えれば、目の前に真夜や若い尾上がいること、「ドラム」を含む辺りの光景がやや違って見えるのにも納得がいった。

原理や理由はわからないが、どうやらあの日記に何かがある。

それを調べたいところ、なのだが…。

「私、どうやって帰ったらいいのかしら？」

入ってしまった理由がわからないのに、出る方法がわかるはずもない。

「とりあえず、行くしかないみたいね…。」

由美子は結論を付けると、真夜と尾上、二人の後を追った。

公園

子供達が楽しげに遊んでいる中、木陰のベンチに座った少年と大柄

な青年がそれをぼーっと見ていた。

「はあ、いつの時代も子供って良いよな…。無邪気だし、健気だし。」

少年のぼやきを聞いているのかいないのか、青年はどっしりと佇んだまま何も答えない。

それを少年は軽く「苛立たしい」と言った表情で見つめる。

そこに…。

「お〜い、ユウくん、リツくん！」

真夜は公園に着くと、手を振りながら少年と青年の元に歩み寄ってきた。その後を尾上、そして由美子がついて来る、と、由美子は少年と青年の顔を見て吹き出す。

「ぶつ…、顔全然変わんないじゃん…。」

それもそのはず、少年と青年は髪の変化や服装こそ若干違うものの、由美子の知る勇輝と力、その人だったからだ。

「それにユウくんにリツくんだって…ぶふっ！」

自分は見えない存在とばかりにここぞとばかりに笑う由美子。

もちろん、目の前にいる勇輝はそんなことは知らず、真夜達が近付いたのが見えると、ベンチから立ち上がって彼女達と合流する。

「ごめんね、遅くなって！」

「いや、いいですよ。ほら、欲しがってた情報^{ネタ}。」

遅刻した様子であるにも関わらず、につこりと笑いながら謝る真夜。勇輝は呆れたため息をつきながらも「もう慣れっこ」とした様相で彼女に封筒を手渡した。

最初、写真でこの美貌を見、尾上からは言われた時には信じられなかったこと。

しかし由美子はこのやり取りを見て確信する。

「この人、進也の親だ…。」

勇輝、力と別れると、二人は近くの喫茶店に入った。

「ご注文はお決まりですか？」

「じゃあ、俺はコーヒー。」

「私はこのイチゴパフェをお願いね。」

注文を取ると、真夜は封筒から書類を出すと、チラチラと目を通す。

「まったく、あの子達もうちで暮らせば安全なのにね。」

「やめとけよ。あいつらまで入れたらますますボロくなるぜ、あの店。」

どうやらこの頃は、勇輝や力は店には住んでいなかったらしい。

彼らを入れることに肯定的な真夜に尾上はぼやいた。

「あいつらのことまで…」「コラ、ジロちゃん！」「ッ！」

先程以上に吹き出す由美子。腹を抱えるとピクピクと身体を震わせた。

尾上は顔を真っ赤にすると大慌てであちこちを向く。

見るからにカップルの二人に周りからの視線が向いているのがわかると、さらに赤くなった。

「おい、その「ジロちゃん」ってのやめろよ！恥ずかしいだろうが！」

「あら、恥ずかしいなんて、いいあだ名だと思っただけだな。」

真夜はニコニコと笑う。

それを見ていた由美子も尾上が顔を真っ赤にしているのを見て、さらに苦しんでいた（笑って）

尾上がげんなりしてへたり込むと、ちょうどそこに二人が注文したものが運ばれてきた。

真夜は少女のように目をキラキラさせて、パフェにパクついた。

「うーん、おいしい！」

店を出ると、真夜と尾上は再び連れだつて歩き出した。

「早いものね、ジロちゃん与会つてからもう半年か。」

「懐かしむほどのことでもねえだろ。たった半年なんか俺たちや「一瞬」にも等しいんだからよ。」

尾上が言うと、真夜は彼の額をチヨイと突いた。

「またそんなこと言う！アンタが人であるうと」「なかるうと」「私には関係ない。」

その言葉に押し黙る尾上に真夜は更に続ける。

「だから普通に人間らしく、ね。」

そうやって二人でだべりながらしばらく歩いていると、真夜が突然足を止めた。

「ん、どうした？」

真夜は額を指で押さえていたが、急に走り出した。

「ちょ、待て！」

尾上は理由もわからないまま、真夜の後を追った。

息を切らせながら追いつくと、尾上は目の前の道路を見てハツとなつた。

何と道路の真ん中で猫があっちへこっちへとウロウロ歩いていたのだ。

しかも、車がビュンビュン飛ばしている中、今にも轢かれそうな状態だ。

「ま、まさか、あれか…。」

尾上が聞こうとするより早く、真夜の足が動いた。

「お、おい！」

車が飛ばしている中、真夜は素早い前転で転がると猫を抱き上げる。それを見た多くの車は大慌てでブレーキを止める。しかし運悪く一台の車がブレーキを掛け遅れ、車が彼女の元へと飛び込んできた。

しかし、真夜はそれを前転で素早くかわすとそのまま、反対側へと転がり込んだ。

あんぐりと口を開け、腰を抜かす尾上。

へたり込んだまま口からは乾いた笑いが漏れてくる。

「アハ、アハハ…。」

猫も猫で自分が轢かれそうになったことなどわからず、笑ったような顔で「ニヤア」と鳴いた。

「ふふ、よかつたわね、ネコちゃん。」

真夜もそんなけなげな猫を見て嬉しそうに微笑み返した。

「アイツのすることだぜ…。」

生気を取り戻した尾上は反対側で手を振る真夜を見るとはガツクリ肩を落とした。

すると、猫は真夜の手から勝手に降りると、一瞬真夜を振り向き、礼を言うように傾げると再び走り出していった。

「もう危ないことしちゃだめよ〜！」

猫の後ろ姿に手を振ったところで、真夜は後ろの殺気に気付いた。硬くなりながら、恐る恐る振り向くといつの間にやら現れた警官と車に乗っていた運転手達が血走った目で彼女を睨みつけていた。尾上は頭痛がする頭を押さえた。

ネコはしばらく走っていたが、ベンチに座っている老婆の前に来るとピタツと足を止めた。

老婆は起きているか寝ているかわからない目で猫を見ると、猫は彼女の顔を見て「ニヤア」と鳴く。

「ほお、そうかい、そうかい。よかつたね。」

老婆は猫の言葉がわかっているかのように、泣き声に相槌を打つと猫を手元の籠に入れた。

「それでどうだい？あたしの『探し物』は見つかったのかいな？」
猫は答えるようにまた一声、「ニヤア」。

すると、老婆の持った巾着から小さな、金色の蝙蝠が飛びだした。

「そうとわかれば行こうぜ、『湊』。ここには他の魔族の気配もする。ひよつとしたら『武器』が手に入るかもだぜ。」

「まあ、待ちなさいな…。」

はやる蝙蝠…キバットを老婆は制止する、と老婆の身体が波の模様に包まれたかと思うと、変化が起き始めた。

銀髪のは髪は一瞬で黒に変化し、体中のシワが消えると身長もグンと変化した。

女性：現在においては由美子達の学校の保険医を勤めている人物、海神湊は曲がついていた腰を伸ばすと一息をつく。

「それに私のダニエルを助けてくれたお嬢さんにお礼を言わないとね。」

その頃。

一人の青年が必死に走り回っていた。

足がもつれて息も上がり、今にも倒れそうな状態ながらも男は足を止めない。

「ひ、何なんだ、あの『化け物』は…。」

事の発端は僅かに数分前だった。

青年は仲間達といつものように遊んでいたとき、目の前に女性が現れたのだ。

なかなかの美人だったため、仲間の一人がナンパ目的で声をかけた。

「よっ、お姉さん、俺達とお茶しない？」

「あら、いいわね。」

好感触に青年の頬が緩む。

だが…。

「今すぐに『食べたいわね』…。」
「え?」

青年達がキョトンとしたそのとき、女性の顔に不気味な笑みが張り付く。

そして、同時に空に透明の牙が浮かび青年の肩に突き刺さった。

舌舐めずりをする女性の前で青年は身体から色を失い、崩れ落ちた。

「あ、わわわ…。」

それを見た仲間達は顔を一瞬で真っ青にし、我先にと逃げ出す。

女性はニヤリと笑うと、下顎に模様を浮かべゆっくりと後を追い始めた。

それから一人、また一人と追いつかれた青年は次々と餌食になっていき、とうとう最後の一人になってしまった。

やがて気がつけば、青年は先の無い行き止まりへと追いつめられる。
「ひ、ひ…。」

登るにも指を引っ掛ける場所など無い。

それでも必死に壁を引っ掻く青年に、遂に女性が追いついた。

女性は舌舐めずりをして笑うのを見て、更に怯える青年。

「た、助けて。お金でも何でも欲しいものなら…。」

「あら、じゃあ君の『ライフエナジー』をもらうわね。」

女性の顔に再度、模様が浮かび、青年の肩に牙が突き刺さった。

どさりと青年が地面に倒れるのを見て、女性は呟いた。

「ごちそうさま。」

ドラン

尾上と真夜は、勇輝達に渡された資料をテーブルに並べて、一つ一つ見ていた。

「なあ、真夜。」

そうしながら、尾上は真夜に聞く。

「何、ジロちゃん？」

「ジロちゃんはやめろって…。てかお前はいいのか、こんなことばつかやってて。」

ムツと真夜の目にシワが寄る。

「それってどういう意味？」

「いや、お前って恋とかしねえのかなってさ。お前ってモテるだろ。」

実際、真夜はその顔が持つ人間にある通り、非常にモテている。

現に先程の街歩きの際も、多くの男性が彼女に視線を向けていた。

だが真夜は首を横に振る。

「うっん、私あんまり恋とか興味ないの。むしろ、こんな風な仕事をやってるほうが私って感じ。」

尾上はやれやれと首を振る。

「おかげで昔っからいろんな人振っちゃったけどね。」

言いながら、後悔はあまり無いように見える真夜の顔。

「真夜、お前が振った男の涙、数えたらどうだ？」

尾上の皮肉に真夜は、

「そうするわ。」

と苦い笑顔で返した。

それを同じ苦笑いで返し、尾上は二階へと上がっていった。

「でも真夜さんって良い人だな…。」

真夜…さすが進也の母親だけあってお茶目だが、心優しく、好人物だった。

彼女の日記の記憶に潜り込んだ時は戸惑った由美子も「真夜」と言う女性を見ていく内、好感を持てるようになっていた。

だが、疑問もある。

「進也のお父さんって、一体誰なんだろ？それに真夜さんの仕事って…。」

由美子は調べてみようと、真夜の資料に目を凝らす。

だが肝心の封筒には「X」とだけ書かれており、どこからもらったものはまったく知ることはできなかった。

中に入っているのが個人情報に見えることから、誰かを調べているようだが…。

「まさか、探偵とか？」

と、真夜が椅子から、またハツとしたように立ち上がった。

「え、また猫か何か？」

真夜は尾上が入っていった二階の部屋をチラリと見、急いだ様子で店のガレージへと走る。

ガレージに停まる黒いバイク。

真夜はそれに乗り込むと、夜の街へと走り出していった。

「あ、ちよつと待って…ってそうか、私は…。」

由美子も自分が幽霊のような存在であることを思い出すと、ふわふわと真夜のバイクの後を追った。

廃工場

「た、助けてくれ…。ほら、お金ならいくらでもある、だから…。」
恰幅のいい男性が、あの女性に対して必死で命乞いをしていた。

あの時の青年と同じく必死で逃げていたのだろう。額からは脂汗と冷や汗が混じったものがポロポロ流れ落ち、息はかなり上がっていた。

女性は男性をニヤついた目で嘲るように見つめ、ジュルリとヨダレを飲み込む音を出した。

その目で見られると、男は焦って真っ赤にしていた顔を青く染めた。
「うーん、それじゃ、ライフエナジーを頂こうかしら…。」

女性の下顎に模様が浮かび、その頭上に透明な牙が浮き上がった時だ。

「おっと、そこまでよー！」

女性と男性が声のしてきた方向を振り向くと…そこには真夜が颯爽と立っていた。

しかし、その目は普段の明るさやお茶目さは成りを潜めている。代わりにその目には今まで彼女が見せなかったような、「炎」が燃えていた。

由美子は女性の顔を見て「アッ」となる。

「これ、さっきの…真夜さんの持ってた紙に書いてた顔…。」

「あなた、誰？」

隙を見て男性が逃げたのも気にせず、女性は真夜を見る。

「私、私は…きゃあ！」

言いかけて落ちていたパイプに転ぶ真夜。女性、そして由美子の目が点になる。

真夜はめげずに立ち上がると、女性に対して話し始めた。

「土門直子、その美貌を使ってたくさんの男をたぶらかし、なおかつ最後はライフエナジーを吸った魔性の女。」

「へえ、よく知ってるわね。で、アンタは何。さっきの奴の代わりに私の夕食になってくれるわけ？」

女性は顔に青筋と模様を浮かばせると、ウナギに似た怪人…イールファンガイアへと変化する。

「ま、どっちにしろ、この姿を見たからには生かして返さないけどね。」

イールは真夜を嘲るように言うと、鞭のような腕をしならせるが…。

「撃つていいのは撃たれる覚悟がある人だけ。どんな武器を手にしてもよ。聞いたことない？」

真夜は恐れるどころか、逆に怪人に返す。

その言葉に逆に気圧されるイールを見据え、真夜はどこからかベルトを出して、腰に装着する。

「あつ、雪のベルト！」

だがその色は雪が持つものと違って黒い。同じく黒いイクサナツクルを取り出すと、真夜はそれを左手に押しつける。

『R - E - A - D - Y 』

電子音声が鳴ると同時に真夜はナツクルをベルトに装着する。

「変身！」

『F - I - S - T - O - N 』

ベルトから光がスーツが形成され、真夜の身体を覆う。

しかしその姿は雪のイクサとはどこか違った。その色は黒く、本来のイクサよりやや鎧が厚く見えた。

「何？」

「これは…。」

驚愕する怪人に右手を向け、真夜は呟く。

「さあ、アンタの罪を数えろ！」

そう言うが早いか、真夜は怪人の懐に飛び込むと、パンチを決める。途端、弾き飛ばされたイールは一気に工場の壁に叩きつけられた。

「ぐ、くう…。」

イールはムチを長く伸ばすと、縦に横に、真夜へと振り回す。

だが、真夜はそれを足の僅かな動きですいすいとかわし、イールに再び接近、今度はキックを決めた。

「す、すごい…。」

その強さに唾然とする由美子。

「お、おのれ…。」

イールはぶるぶると震えたかと思うと、突然目の前の水たまりに飛び込んだ。

「え…。」

真夜が敵を見失う、とその時、彼女の横にあつた水たまりが動く。イールのムチが飛び出す。

気付いた真夜がサツとかわすと、

「へえ、よく気付いたわね…。」
と声が聞こえ、ムチが水たまりに沈んでいく。

しんと、静まり返った廃工場。

真夜は敵の姿が見えないその中で一人佇む。

また来るであろう、攻撃に唾を飲みながら見守る由美子。

「あゝっ、もう私の姿が見えてないのが歯がゆい！」

しかし、由美子が心配するまでもなかった。

再び、ムチが真夜の、今度は背後から迫ってくる、が。

「はっ！」

真夜はそれに振り向き、ムチを掴むとイールを引き出した。

そのまま空に放り投げられたイールを見ると、真夜は腰からフエツスルを取り出しベルトに装填する。

「I - X - A - K - N - U - C - K - L - E - R - I - S - E - U

- P

そしてナツクルを取り外し、弧を描きながら落ちてくるイールに狙いを定め、

「ライダーパンチ！」

落ちてきた怪人にパンチを叩き込む。

「ぎゃああああ…！」

断末魔の叫びと共に木っ端微塵になる怪人。

その身体からライフエナジーが飛んで行くのを見ると真夜は変身を解除した。

「すごい…。」

由美子もその強さに感嘆するしかなかった。

そこへ。

廃工場の中に拍手の音が響いてきた。

「え？」

真夜がきよるきよるしていると、工場の扉から入ってくる影があった。

「ふふ、お見事。私の仕事より早いのね、あなたって…。」

「誰…？」

やがてその影は姿を現す、その姿は…。

キバだった。

しかし姿こそ進也のキバと同じで、なおかつキバツトが腰に着いているのも同じ。

が、その声は女性の声だ。

「あれ、この声、どこかで…。」

「あなたは？」

キバに正体を問う真夜。

「私、私は…。」

キバはキバツトに指示を出し、キバツトが離すと変身を解く。

「え〜〜〜〜〜〜〜っ!？」

驚きの声を上げるのは由美子だ。

何故ならば目の前にいるキバの正体は…湊だったからだ。

「私は『チエックメイトフォー四聖師団』のクイーン、湊。」

「俺はキバツト族の三代目・キバツトバツト？世だ。俺もよろしく。」

「『四聖師団』(チエックメイトフォー)にキバツト族…。」

真夜は目の前にいる一人と一匹を見つめる。

キバにまつわる二人の女性、そしてキバット。新たな出会いであった。

15・過去の世界（後書き）

真夜の危機を感じとる能力、これについては次回説明します。
キバに関わる二人の女性、彼女達が果たしてどう関わるか、次回を
お楽しみに。

16・真夜と湊（前書き）

遅くなりました！

バイト探しとスランプで時間がかかりましたがようやく更新です。
今回はようやく過去編完結です、そして…。

16・真夜と湊

「ふふ、そう警戒しないで。」

チエックメイトフォーを名乗る女性・湊は穏やかな笑みを浮かべる。横にいるコウモリ…キバットはともかく、一見すれば彼女はの外側は何の悪意も企みも見えない。だが真夜はそんな彼女の語りかけにも表情を崩さず、目の前にいる女性を真剣な眼差しで見つめる。

「警戒しないわけにはいかないでしょ。だって、あなたからは『心の声』がまったく聞こえてこないもの。」

「へっ？心の…声…？」

自分の知っている人物がキバになっていたことに戸惑う由美子は更に聞き慣れない言葉に困惑する。

逆に湊はその言葉を聞くと驚くどころか、非常に興味深そうな表情になる。

「なるほど、あなた『テレパス精神感应者』なのね。」

「テレ…パス…、ああ！」

由美子もようやく合点がいった。

昼間の道路…。

道路まではかなり距離があり、なおかつ猫の小さな声が聞こえるわけが無い場所から真夜はすぐさま猫のいる場所まで正確に走りぬいた。

そして数分前…。

明らかに真夜の視界に入らない攻撃が迫っていたにも関わらず、彼女は振り向くことすらなくその攻撃をかわし、更には敵の攻撃、特性を利用して瞬く間に敵を撃破してしまった。

武術の心得がある由美子は一瞬、「見切り」かと思っただが、それにしては反応が早い。

「偶然」には到底見えぬ、「機械」^{イクサ}の力でもないその動き。

湊を見つめたまま、何も答えない真夜。

「お、姉ちゃん、答えないってことは認めるってことか？」

キバットの挑発にも動じず、

「あんた、このファンガイアとどんな関係？ 答え次第じゃ…。」

逆に彼女は強い口調、そして戦いの中で見せたような鋭い目で再び問い返した。

湊はしばし考えるようなそぶりを見せた後、

「…いいわ。あんまり疑われるのも好きじゃないし。」

としぶしぶ了解した。

場所は変わって、夜の街。

尾上は暗い街中、立ち止まっては見回し、また立ち止まっては見回しを繰り返しながら走り回っていた。

「まったく、あいつは…。」

彼は偶然真夜が店を飛び出していった姿を見て追いかけていた。

しかし気づかれていたのか、曲がり角で彼女の姿が一瞬視界から離れたのを追った時には真夜の姿は影も形も無くなっていた。

「ちっ、焦り過ぎちゃった…。あいつに俺の『心』が聞こえたのか…。」

尾上はがっくり膝をついて、悔しそうに頭を掻いた。

諦めたのだろうか？

不意に尾上の口から不気味な不気味な笑い声が響いてきた。

「フフフフフフ…。まだ甘いぜ真夜…。」

尾上は身体から青い瘴気を噴出しながらすつくと立ち上がると、サングラスの下に見える目がギラリと光る。

その目はなおも聞こえる笑い声と裏腹に何の感情も…いや、怒りに燃えていた。

「ウルフェン族の俺様が人間の『超能力』なんかになめられてたまるか…。」

うなるように言うと、尾上は再び辺りを見回し、鼻を動かし始めた。

「つまり、あなたはキングの命令であるファンガイアを倒しに追いかけていた…ってわけ？」

「そ、でも久々にキバで遊べるって思ってたら、アンタが出てきちゃって…ざくんねん。」

答えると言った時と一転、湊は再びおどけて見せる。

「信じていいの？」

「ああ、クイーンは悪ふざけは言っても、嘘は絶対言わないぜ。」

キバットは胸一（？）を張って威張ると、湊に後ろから殴られる。

「悪ふざけで悪かったわね！」

「殴るこたねえだろ、バカ！」

「うん、わかった。アンタ達のこと、信じていいみたいね。」

真夜は湊と対面して初めて頬を緩めると、彼女に答えた。

それを聞くと湊の眉が僅かに動いた。

あれだけ「信じて欲しい」と口にしていたにも関わらず、彼女は真夜の言葉に僅かに驚いていたのだ。

「あれ、いいのかしら、私、あなたに全部の自分は見せてないけど

「？」
それでもその様子を悟られないよう、口ではまだ明るい口調でごまかす。

「あなたは自分のことを少しでも話してくれた。それで十分！」

「いや、初対面でそこまで信用するって……。」
何の偶然か、ユニゾンする由美子とキバットのツツコミ。

「お人好しね……。」
湊も呆れ顔で苦笑した。

そこへ誰かが廃工場に入ってくる音が聞こえ、同時にふてくされて飛んでいたキバットが湊の側に戻ってきた。

「おい、そろそろ行こうぜ。」
「そうね、じゃあそろそろ……。」
そう言っただち去ろうとしたが、ふと足を止めた。

「そう言えばあなたの名前聞いてなかったわね。どうせだし教えてくれる？」

ポカンと固まる真夜。だがすぐにそれはいつもの笑みに変わった。

「私は真夜。紅真夜よ。」
「ふふ、いい名前ね。それじゃまたどこかで……。」

湊も微笑み返すとキバットと共に去っていった。

その光景をただ一人、見続けた由美子は話が一段落ついたところで再び考え始めた。この世界に来て初めて知ったこと、驚いたことの数々……。

中には自分の顔見知りの人間の顔もあった。
果たして現在に至るまでにどのような出来事があったのか？

その時、由美子を取り巻く風景が徐々に歪み始めた。

「えっ、な、何？」

廃工場の風景はゼリーのようになり崩れていくと渦を巻いていき、最後はどこかに吸い込まれように無くなっていった。後に残ったのは何も無い真っ暗な空間…。

「どういうこと？何が…？」

由美子は戸惑いながら何が起きたかを探る。

ふと由美子が向けた目の先に一点、光が点っていた。よく目を凝らしてみればそこには誰か人の姿がある。

「誰…？」

誰となく由美子が問うと、光の中の人物はゆっくりと由美子に近づいてきた。

闇の中の光に目が慣れてきたことと、人物がすぐ近くに来たことで彼女の目によろやく人物の顔が映った。

「あなたは…！」

人物は真夜だった。

真夜は過去の世界で見たようにニッコリ微笑むと、由美子に語りかけてきた。

「はじめまして、になるかな？麻生由美子ちゃん。」「私の名前…
ていうか私が見えるんですか？」

「ええ、私は何でも知ってるのよ。ふふふ。」

優しく穏やかに真夜は話を続ける。

「私は紅真夜…ってことは知ってるわよね。まあ、今ここにいるのは日記に心の一部を残した云わばコピーみたいなものなんだけどね。」

「

真夜はそう言つて由美子の身体に手を当てる、が彼女の手はまるで幽霊のように由美子の顔を通り抜けた。

「いつかは読まれちゃうと思つたけどまさかあなたなんてね。驚いたわ。」

「でも何で私に？」

語りかけられたことに驚いた由美子も次第に真夜の人柄に感化され、最も気になっていた疑問を打ち明けた。

真夜は考える素振りを見せると、

「そうね、あなたが進也の『最も大切な』友達になつてるからかしら？だからこれはそのお礼。」

「お、お礼だなんて！それに私は…。」

否定しようとするものの言葉が続かない。

何より由美子の顔は照れで赤くなつていた。

「ふふ、カワイイわね。」

真夜に笑われ、更に赤くなる。

「で、でもどうして進也の前から消えたんですか？親なら…」

由美子は気を取り直して真夜に聞く。

しかし真夜は口に指を当て、首を横に振つた。

「ダメ、それは記憶の私からは言えないわ。でもこれからの日記を見ればヒントは得られるかも知れないわね。」

「だったら…。」

真夜は再び首を横に振る。

「今はここまでしか見せられないわ。でも続きが気になるなら、近いうちにまた来なさい。続きを見せてあげるわ。」

それが最後だった。

「真夜さん！」

気がついて身体を起こすと目の前に進也と雪がいた。

見れば自分は進也のベッドで横になっている。

「目が覚めたようですね。じゃあ私は尾上さんに…。」

「うん、僕は由美子さんを見てるよ。」

聞けば由美子はその後、倉庫から戻ってこないことを不振に思っ
て来たキバットに倉庫の床で倒れているのを見つけたという。

「たく、ビックリさせやがって。」

「でもよかった、大したことないみたいで…。」

ホッとした様子でいつもの様な人懐っこい笑顔で笑う進也。

その顔にふつと真夜の笑顔が重なる。

「じゃあ僕は残りの片付けをしてくるから、立てるようにしたら
降りてきて。」

「おう、それまでゆっくりしてな。」

「あ、あのさ進也…。」

部屋を出ようとした進也に由美子は呼び止めようとしたが、
「ん、何？」

「ううん、何でもない。」

由美子はあるて何も言わなかった。

気になること、悩みはまだ数多くある。

だがそれを進也に聞くにはまだ彼女は進也を知らなかった。

「ああもう、部外者なのに知ったかぶりしてた私のバカ！」

由美子は握りこぶしを固めて自分の頭を殴った。

ビルの屋上。

あの黒い服の女性が一人の青年を連れ、佇んでいた。女性は手にあ
の日記を持ってそれを眺める。

「ミセス。いいのかい？あのボーイに会わなくて。」

「…まだ私は会うべきじゃないわ。私が出たところでまだ何かが出
来る訳じゃないもの。」

悲しげに語る女性。

そんな彼女を見て青年は齒がゆそうに下唇を噛んだ。

「でも私に代わってあの子に会ってあげられるのは最も信頼しているあなただけよ、『サガ』。」

「ああ、任せときなミセス。ミーを誰だと思ってるんだ？」

青年は自分を指差すと、その姿を銀色の戦士に変えた。

どこかのビル。

会長室と書かれた部屋の中に1人の女性が入る。

「会長、これが今月の計画表です。」

「ん、ご苦労さん。」

会長と呼ばれた男は机に置かれた茶封筒を引き寄せ自分の側に置いた。

「これで我々の理想も一歩前進ですね。」

「だと良いけどな……。」

苦笑いする男。

その頃、どこかの壁がグンニヤリと歪み始めていた。

そこから姿を現すのは……。

16・真夜と湊（後書き）

他にも書きたいことはたくさんありましたがそれは次の過去編に入れることにします。

次回からは黒服さんの小説・「仮面ライダー剣&キバ 白き帝王」とのコラボ編スタート、サガもいよいよ本格登場です。
お楽しみに。

17・白き帝王（前書き）

黒服さん、読者の皆様、お待たせしました！

コラボ編第一話更新です！

今回からのシリーズで遂にサガも初登場しますよ。

そして今回はキバと同じ音楽ネタにちなんだあるネタも出ます！

それではどうぞ！

17・白き帝王

学園の道場。

剣道部の練習場では部活生が見ているなか、胴着を着た2人が練習試合を行っていた。

片や1人の男子学生、そしてもう1人は由美子だ。

2人はお互いに相手を視線の先に入れ、相手にいつでも一撃を加えられるよう意識を集中していた。

緊張した空気が辺り一面に充満する中、遂に片方が動いた。

「てやあああ！」

男子学生は勢いよく叫ぶと素早く由美子に走り、隙を見せることなく一気に竹刀を振り下ろす。

速攻勝負を決めるには一番的確な手だ。

だが由美子を相手にするにはまだ手が甘かった。

誰もが勝負の行方を確信した瞬間だった。

不意に空気が弾けるような軽い音が鳴った、かと思うと男子学生の口からうめき声が聞こえ、握られていた竹刀が力無くポロリと落ちる。

学生はそのまま身体を震わせると胸を押さえて膝を屈した。

逆に由美子は先と変わらず、竹刀を構えたまま凜と構えている。

一瞬で胴への一撃を決めた、端から見ればそれ以外はどう動いたかもわからなかった。

そんな周囲の啞然とした視線を受けながらも、当の由美子は気にすることなく面を取る。

そしてくやしそうに顔を歪める男子学生…剣道部部长に勝ち誇った顔で手を伸ばした。

「さて、約束通り、パンを奢ってもらおうよ」

購買部

「さて、いい運動になったかな？」

由美子が負かした男子剣道部『全員』からせしめたパンをリュックに詰めていると、近くの席で男女のしている雑談が聞こえてきた。こっそり耳を傾けてみると、どうやらあの『都市伝説』の話をしているらしい。

「ねえ、あんた知ってる？新しい『仮面ライダー』の都市伝説。」

「知ってるよ、赤い身体に黄色の目のヤツだろ？」

赤い身体に黄色い目、ようするにキバ…進也のことだ。

「都市伝説、ね…。近くに『本人』がいるのに…。」

都市伝説の話は自分がキバに出会う前からあったがに消えるどころか未だここまで広がりを見せている。

そんな『仮面ライダー』伝説の力に由美子は感心半分、呆れ半分のため息をつくと腰を上げた。

都市伝説の『事実』に普段会っている以上、噂話をそこまで真剣に聞く必要もなかったからだ。

しかし…。

「は？そんなの誰でも知ってるわよ。私がしてるのは『白銀の戦士』の話よ！」

女子生徒は怪訝な顔を見ると、別の戦士の名前を出した。

「え？」

電光石火の動きだった。

由美子はその話を聞いた途端素早くUターン、噂をしていた二人の席に飛び込み、テーブルに手を叩き付けた。

「「ひっ？」」

仰天している二人を前に由美子は、

「その話、詳しく聞かせてくれる？」
と問う。

「…わかりました…。」

二人の男女はガクガク震えながら頷いた。

ちなみにこの数分後、由美子が去った後この二人が、

「なあ、よく考えりやあれって二年の麻生だよな？」

「何で三年のあたし達が敬語使っちゃったのかしら？」

という会話から別の談義に話し始めたのは別の話（その時の由美子の背中から修羅が見えたという）。

噂に寄れば…。

新たな『仮面ライダー』目と装飾品が青く輝く美しい白銀の鎧を身に纏い、傍には奇妙な円盤を従えている。

そして赤く光る奇妙な武器を振るい、人を襲う謎の怪物と人知れず戦っているという。

しかしその詳細は『赤い』仮面ライダー以上に不明瞭で、まだはつきりと姿を見たものはいないらしい。

ドラム

「…て話な訳。」

由美子は先輩男女から聞いた新しい『仮面ライダー』の話を説明できる限り、進也とキバット、雪に話した。

「白銀に青い目か…。」

「それってひょっとして直人さんじゃないかな？」

進也は自分が慕う別世界の仮面ライダー・直人の名前を候補に挙げる。

以前異世界に迷った際、出会い、行動を共にしたキバ…直人。

確かに彼が変身したキバ… エターナルフォームは「青い目」に「白銀の鎧」と噂に出てきた『仮面ライダー』に似ている容姿をしている…。

「俺からすればあのクロノってヤツにも似てるな。」

キバットが出した名前・桜井黒乃…「薄明のキバ」も同様に白い鎧に青い目の容姿だ。

直人がこちらの世界にやってきたのか、クロノが戦う姿が目撃されているのか。

だがそれと確認するには疑問がある。

「うーん、でもそれじゃ『円盤』の説明がつかないのよね…。」
そう、噂によれば戦士の傍には常に『円盤』に似た物体が漂っているという。

これが一体何なのか？

「ま、この噂もその人の遠い友達から聞いた話みたいだしね。もう

…。」

考えても埒があかないので、由美子はここで話を切るうとするが。

「いえ、調べる価値は十分にあると思います。」

「え？」

雪が真剣な意見を上げた。

「うん、そうだね、直人さんだったら嬉しいし。」

「我が孫にも会いたいしな！」

動機はやや不純だが進也とキバットも賛同した。

「え、マジで？」

目を点にする由美子に、

「マジだよ。」

進也はいつもの笑顔で頷いた。

公園。

のどかな陽光が差す中、老人が一人、うたた寝をしていた。一見すると平和なこの場所、だがこの場所にある異変が起ころうとしていた。

公園の入口に当たる並木道、そこに一陣の風が吹いたかと思うと辺りの緑の木々が、道がベージュ色に染まった。

その風景が揺らぐと、やがて奇妙なオーロラが現れる。

オーロラはしばしその場所で揺らいでいたが、そこにバイクの駆動音が聞こえてきた。

バイクの駆動音が大きくなるにつれ、オーロラは更に揺らいでいく。そしてバイクの音が近くに迫った瞬間だった。オーロラがブワツと盛り上がり、そこから男女を乗せた白いバイクが飛び出してきた。

その音に老人が目覚ましていると、バイクもその場に停車しブレーキをかけた。

運転をしていた男性は、バイクを降りるとヘルメットを外して一息をつく。

「はあ、ようやく止まってくれたぜ…。」

「しかし、一体ここは…。」

女性の方もバイクから降りると、辺りを見回す。

男性は純白と呼ぶのがふさわしいほどの白い髪に白い肌をした容姿に細身ながら逞しい身体を付けていた。

その姿と裏腹に彼の両眼は鋭く、コバルトブルーの瞳が人を寄せない雰囲気を出している。

逆に女性の方は美しくも温厚そうな顔に、優しげな瞳を持ち、男性とは対照的に人に安心感を与える容姿をしている。

しかしながら、その瞳は左の目のみにあり、右目は何故か巻かれた包帯に隠されていた。

加えてその包帯は、彼女が持つ美しさをも狭めてしまっている。

男性は女性と同じように辺りを見回すと、自分達が通ってきた後ろを振り向いた。

彼らをここに招き入れたオーロラはまだ同じ場所で揺らいでいたが、徐々に辺りの風景と混じり始めている。

「もう後戻りは無理そうだな。」

誰ともなく男性が呟くと、女性が彼に声をかけた。

「ここはどこの世界なんでしょうか？見たところでは『私達の世界』と変わらないようですが…？」

「ああ、だが俺達はさっきまで街道を走っていたはずだ。それに天気も曇っていたはずだ。」

男性が見ている空は明るく晴れている、そしてこの場所は公園だ。

「『キバット』、どう思う？」

男性が聞き覚えのある名前を口にすると、彼の着ていたコートがもぞもぞ動きだし、見慣れたシルエットが飛び出す。

だがその姿は進也達と共にいるキバットとは違い、白いカラーリングに男性と同じコバルトブルーだ。

「ふむ…。僅かばかり人と違う匂いがするが、この距離ではファンガイアの匂いかどうかわからんな。」

言葉遣いも進也のキバットがおちゃらけた口調なのに対し、こちらのキバットは真面目な口調だ。

「とりあえず、動かないとわからないか…。」

男性はそう呟くとバイクを引きながら、歩き始める。

「あ、待ってくださいよ、『直人さん』！」

女性…東雲優紀は慌てて男性…直人の後を追った。

この名前で気づいた者もいるだろう。

そう、オーロラから現れたこの男性こそ、進也が別世界で出会ったキバ・不知火直人だったのだ。

直人と優紀、そしてキバツトバツト？世。

何故、彼らがこの世界にやって来ることになったのか？

しかし『謎』が招いた人間は彼らだけではなかった。

薄れたオーロラの中から二つの影が飛び出す。

「きゃは！」

商店街。

進也、由美子、雪の三人はあれから情報を求めて街に繰り出していた。

が、もちろん、収穫などあるわけもなく…。

「いやあ、全然見つからないね」

呑気な声を挙げる進也に、

「いや、当り前でしょうが！」

当然のごとく突っ込む由美子。

「だけど雪、あんたが調べようとか言うなんて…。」

「ええ、私も少し興味がありますから、それに…。」

「それに？」

雪は間を置いて、再び話し出す。

「そのライダーが味方とは限りませんよ。ひよっとすれば『あの』

イクサの様な人かもしれませんし。」

「ああ…。」

由美子も以前に出会った『イクサ』を思い出して苦笑する。

あの時は思い出しただけでも未だゾクリと来る記憶だ。

「だけどまだ『噂話』なんだし…。」

「イクサの姉ちゃんのこととも一理あるぜ。ライダーたってあく

まで正義の味方じゃ限らねえんだからよ。」

まだ半信半疑の由美子に対して進也の懐に隠れたキバットも雪の言葉に自分の一声を足す。

「へ、ひよっとしてライダーってキバとかイクサだけじゃないの？キバットの言葉に驚く由美子。」

それに対しキバットは、

「たりめーだろ、姉ちゃん、馬鹿か？」

と鼻で笑った。

煮えくり返りそうな腸を抑えると、由美子は進也に聞く。

「ねえ、ほんとにライダーってたくさんいるの？」

「うん、いっぱいいるよ。もちろん僕や雪さんみたいなのとは限らなけどね。」

「へ、へえ…。」

進也はいつものように笑顔で話すが、由美子には妙に怖く感じた。

そうしてただ話しながらしばらく歩いていくと。

「ちよつとちよつと、お嬢さん方にお坊ちゃん。」

誰かが進也達に向けて呼びかけてきた。

進也達がキョロキョロと見ていると、一人の老人が目の中に入った。

「おじいちゃん、どうしたの？」

「ちよつと家まで帰りたいんじゃないが、道に迷ってしまったの。ちよつくら助けてほしいんじゃないか。」

老人は困った様子で首を傾げた。

「うん、いいよ！」

「おお、ありがたい。」

進也が快く引き受けると、老人は嬉しそうに笑い、彼らの後ろにくつついた。

「あれ、いつの間にか？」

「…？」

その時、由美子と雪は何か違和感を感じたが、口には出さなかった。

同じ頃、近くの場所を直人と優紀も歩いていた。

「やっぱり私達の世界とは違うようですね。」

「ああ、ギルドも無いし、ローチの姿も見当たらない。俺達のいた場所とは違う世界であることは間違いないな。」

直人達の世界では仮面ライダーの存在は公認されており、直人と優紀もその中の一人だ。

ライダー達は不死の怪物・アンデッドを封印したり、ゴキブリに似た怪物・ダークローチを倒すことで生計を立てていた。

その一方で直人達は幻獣種アンデッドの子孫に当たる怪物：彼らの世界におけるファンガイアとも戦っていた。

直人達はその戦いの過程で破壊されたキバの武器・ザンバットソードを直すため、とある街に向かう途中、この世界に引き込まれたのだ。

直人達が思案に暮れていると、突然、二人が腰に付けた鈴が静かに鳴り出す。

「…直人！」

「ああ、近いな。」

直人が鈴を見て呟くと、目の前に一人の男が現れた。

「やあ、そんなかわいいコウモリを連れているということは、君、キバだね？」

「…だったら、どうする？」

「君の命、頂くよ！」

男は叫ぶと、怪人・シャークファンガイアに変化した。

「まだこの世界がどこかわからなかったが、ちょうどいい。キバット、雪！」

「はい！」

「ああ、早速終焉を奏でよう！ガブツ！」

直人は右手にキバットを掴むと、左手を噛ませる。進也同様、顎にステンドグラス状の模様が浮かぶ。

雪はトランプに似たケルベロスの絵柄が描かれたカードを取り出したバツクルに差し込み、腰に当てる。

すると、バツクルからベルトが現れ、彼女の腰に巻き付いた。

「変身！」

『OPEN UP』

直人は身体を銀色の光に包むと、姿を変化、キバ・エターナルフォームに、優紀はベルトから飛び出した光のスクリーン・オリハルコンエレメントを潜り、仮面ライダーホワイトラルクへと変身する。

「白？赤ではないのか…。さては貴様、『噂の戦士』か！」

「噂？」

意味深な言葉を訝しく思いながらもエキバは向かってくる怪人へと挑む。

シャークは両手・頭に備え付けたヒレを振り回し、エキバへと襲いかかる。

最初の一撃をエキバがかわずと、ヒレは近くに立った樹に突き刺さり、その身を抉り取った。

「直人、あれはやばいな。」

「ああ、だが近づけなければいいだけだ。優紀！」

「はい！」

エキバの言葉にワラルクは頷くと、手に持ったボウガン・ラルクウザーをシャークに向けて引き金を引く。

突進してきたシャークは連射される光弾をヒレで弾く、その瞬間、Eキバは素早く距離を詰めるとキックで敵を吹き飛ばした。

「ふん、やるな。さすがは噂の戦士だ。」

だがそれでもシャークは余裕を崩さず、まだ攻撃をする姿勢をとった。

「噂だかなんだか知らねえが、襲ってくるなら倒すまでだ。」

キバも同じく攻撃の姿勢をとって、シャークと睨みを効かせ合う。

シャークは再びヒレを震わせると、Eキバに向けて飛びかかる。

「優紀！」

Eキバは再び、Wラルクに指示を入れる。彼女もそれに従って再び銃口をシャークに向ける…。

が、シャークは同じ手では来なかった。今度は両手のヒレを振り回し、そこから衝撃波を放ってきたのだ。

思わぬ新たな攻撃にEキバが弾かれ、Wラルクも食らった拍子に武器を取り落してしまった。

「ふふふ、どうです、私の實力は？」

「ふん、なかなかやるじゃねえか、だがまだ俺は戦えるぜ！」

Eキバはそう言って近づいてきたシャークの足を払うと、立ち上がる勢いに合わせて怪人にアッパーそして、膝蹴りをぶつけて吹き飛ばした。

「どうだ、俺の實力は？」

「よし、今の内に…。」

Wラルクもその隙を狙って、落としたラルクラウザーを拾おうとする。

しかしその時、ラウザーの前に新たなファンガイア…クロコダイルファンガイアが現れ、彼女を蹴り飛ばす。

「きゃあー！」

「優紀！」

「よそ見をしていて、いいんですか!？」

Wラルクに気を取られたEキバ、その身体をシャークのヒレ攻撃が切り裂き、彼の身体に火花を散らした。

直人は呻くと片膝をつく。

「しかし人の獲物を横取りとは感心しませんね…。」

「何を言ってる。勝負は見つけたもの勝ち、くだらないことをほざくな。」

どうやらこの二体はまったく知り合いではないらしく、偶然同じ場所に現れただけのようだ。

とは言え、この偶然がダメージを負った二人にとって非常に危険なことは明らかだ。

そこに、老人を連れた進也、由美子、雪が偶然にもこの場所へとやって来た。

彼らもすぐにEキバが戦っている様子に気がついた。

「あれは…直人さん！」

「由美子さん、おじいさんを連れてどこかに行ってください。」

雪の指示に由美子は頷く。そして老人を傍に寄せると離れた所へと移動した。

「よし、行くよキバット、雪さん！」

「おう！」

「ええ！」

「よっしゃ、そんじゃ久々にキバっていくぜ！ガブツ！」

キバットは進也の右手に掴まれると進也の左手に噛みつく。

雪も懐からイクサナツクルを取り出すと、左手を叩きつけた。

『R - E - A - D - Y
』

「変身！」

「変、身！」

進也は腰に出現したベルト、雪は装着したイクサベルトにそれぞれの相棒をはめキバとイクサに変身、戦いの渦に飛び込んだ。

「何、キバが二人？」

驚くシャークを尻目にKキバはEキバ、イクサはWラルクの横に並び立つ。

「久しぶり、直人さん！」

「会いたかったぜ、我が孫よ！」

この呼び方に直人と優紀、キバット？はすぐにKキバとイクサの正体に気づく。

「ふん、お前も元気そうだな！」

「何度も言っておくが、俺は孫じゃない。」

悪態をつくものの、直人とキバット？の口調はどこか嬉しげだ。

救援が来た以上に、見知り合った仲間との再会が嬉しいのだろう。

「優紀さんも久しぶり！直人さんとはもうチューした？」

「な、何をいきなり言うんですか！」

Wラルク・優紀は仮面の下で真っ赤になりながら手を振り回す。

「ちょうどよかった、一人二体ずつなら手柄はお互い二倍だ。」

「おう、俺様も運がいいぜ！」

だが一瞬驚いた怪人達もすぐに気を取り直すと、獲物が増えたことに歓喜を始める。

「みなさん、話もいいですけど、まずは……。」

イクサ…雪の言葉に全員、話を中断、こちらも敵と向き合う。

「よし、それじゃ行くよ！」

「おう！」

第2ラウンドが始まった！

その頃、由美子は老人を引つ張って安全な場所まで離れようとしていた。

「あれ？」

気がつくとも手の感覚が軽い。

不審に思いながら振り向いてみると…。

「あれ〜！？」

さっきまで手を引かれていたはずの老人は忽然と姿を消していた。

「ちよつと、え、どこ行つちやつたのよ！」

二人のキバはシャーク、イクサとWラルクはクロコダイルに的を絞り、戦いを挑む。

「よつ、ほつ！」

Kキバ、Eキバはお互い素早く動きながらシャークのヒレ攻撃、衝撃波をかわす。

「進也、左だ！」

「直人さん、右だよ！」

互いに指示を出しあいながらかわし、そして同時攻撃を次々と決めていく。

兄弟の様な連携プレーにシャークは次第に翻弄され始めていた。

「キバット、ガルルでいくよ！」

「おう、ガルルセイバー！」

Kキバは青いフェッスルを取りだすと、キバット？に吹かせる。

イクサとWラルク、こちらもクロコダイルの放つ強力なパンチ攻撃をかわすと隙の出来た背中ダブルパンチを決める。

敵がバランスを崩してのけ反ると、Wラルクは落としていたラルクラウザーを拾い、イクサのイクサカリバーと共に連続で弾丸を撃ち

込む。

しかしクロコダイルのボディは意外に固く、銃弾が当たったとて、大きなダメージを与えてはいなかった。

クロコダイルはすぐさま立ち上がるとイクサとWラルクの立っている地面にパンチを叩き込んだ。

寸手のところでジャンプでかわすものの、足場が無くなり浮遊するライダー。

クロコダイルはそこへ猛烈に突進を決め、二人を吹き飛ばした。

「きゃああああ！」

地面に倒れる二人のライダー。

「さあ、とどめだ！」

だがそこに吹き飛ばされたシャークがクロコダイルに衝突する。

「ぐお！貴様、あと一步のところを…！」

「あなたが突っ立っているのが悪いんですよ！」

掴みかかるクロコダイルにシャークは反論する。

その間にイクサとWラルクは体勢を立て直した。

「優紀さん、いいですか？」

「はい、何でしょうか？」

「あのファンガイアを倒す策を思いつきました。」

シャークをキバ達の方へ追い払うと、クロコダイルは再びイクサ達の方を向く。

「さて、今度こそ…って何だ？」

クロコダイルは彼女達の姿勢を見てギョツとする。何故ならWラルクが構えているラウザーの上にカリバーを構えたイクサが片足を乗せていたからだ。

その上、二人はそれぞれの武器にチャージしており、互いに大技を出せる体勢をとっていた。

「何をしたいか知らんが、そんなもので俺を倒せるか！」

クロコダイルは叫ぶと両腕を振り上げて襲いかかって来た。

「今です！」

その時、イクサの叫びと共にWラルクが引き金を引いた。ラウザーから強力な光弾が放たれ、その勢いに乗ってイクサが飛び出す。

「はあああ……！」

そしてイクサカリバーを正面に構えると、クロコダイルの腹部に向けて一撃を放った。

「が、ああ……！」

腹に大穴を開け、虫の息のクロコダイルに雪が囁く。

「あなたに、明日は来ない……。」

クロコダイルは最後に呻くと粉々になった。

キバペアの方も勝負は終盤に来ていた。

先ほど吹き飛ばされた拍子にクロコダイルの固いボディに衝突したシャークは既に全身にかなりのダメージを受けていた。

それに加え、キバ達の攻撃の応酬。もう怪人に勝つ望みは消えていた。

ガルルセイバーの一撃と、Eキバのジャンプキックを受け、ふらふらのシャーク。

「よし、とどめだ！」

Eキバはウエイクアップフェッスルを出そうとするが、Kキバはそれに待ったをかけた。

「ねえ、ここは僕にやらせてくれない？」

「……わかった。」

Eキバは了承すると後ろに下がる。

「よっしゃ、行くぜ、ガルルバイト！」

キバットがコールと共にガルルセイバーに噛みつく、すると辺りは満月が光る暗い闇に包まれる。

驚き戸惑うシャークを見ながら、

「ねえ、キバット、『アレ』やっていい？」
と何かをやる指示を仰ぐ。

「おお、『アレ』か！おもしろえ、やれやれ！」

キバは頷くと、ガルルセイバーをくわえず、両手に握ると、その刃で周囲に円を描く。

何が起こるか分からないが危険が迫っている、そう感じたシャークは背を向け走り出すが。

「逃がさないよ！ほい！」

キバは描いた円をシャークめがけて勢いよく飛ばした。

円は唸りを上げると、怪人の身体を切り裂き、その動きを封じた。

「よし、仕上げだ！」

「よし、三拍子！1、2、3…！」

キバは数えながらガルルセイバーを鞭のように振るい、怪人を切り裂いてゆく。

そしてシャークの身体が透けた瞬間。

「ファイナーレ！」

キバが刃を元に戻し、怪人の身体も砕け散る。

浮かんだライフエナジーがキャツスルドランに捕食されたのを見ると、ライダー達は変身を解いた。

進也と直人は再度、今度は素顔でお互いを見合う。

にっこり笑う進也。

そこへ由美子が慌てて戻ってきた。

「進也、雪、大変、おじいさんがいなくなっちゃった！」

「『ええ〜っ！』」

叫ぶ三人。

すると、直人が、

「それって、あの人か？」

と眩きながら上を指差す。

老人はいつ戻ったのやら、丘の上で蝶を見ながら「ホッホッホ」と笑っていた。

「も〜。」

脱力して由美子はへたれ込んだ。

17・白き帝王（後書き）

黒服さん、いかがでしたか？

ちゃんとキャラをしっかり書けていれば何よりです。

今回は直人達に限らず、他のキャラも出ますよ！

次回も頑張って書きますので、皆様、どうぞお楽しみに。
それではまた次回。

18・異世界探訪(前書き)

コラボ元の黒服さんの小説・「仮面ライダー剣&mp;キバ 白
き帝王」が再開してまったので、急がねばと急ピッチで書き上げま
した。

多少、強引なところが出来ていますがご了承ください。

ドラム

「なるほど、じゃあそのオーロラに飲み込まれてこっちの世界に来た。」

「ああ。」

あれから数十分、進也達はケガの手当てを兼ねて自宅に招いた直人から、この世界にやって来た経緯を聞いていた。

旅を続けている途中、謎のオーロラに飲み込まれたこと、たどり着いた先がこの世界であったこと、そして現れたファンガイア達と戦うことになったこと……。

以前自分達が経験した異世界への冒険のきつかけとまったく同じ経緯だけあって進也達も疑うことなくそれを受け入れた。

「でも良かった、直人さん達が来た世界がここで。僕もまた会いたいって思ってたから。」

「ふん、別に俺は……。」

直人は無愛想にそっぽを向くが、

「大丈夫ですよ。本当はかなり嬉しいはずですから。」

と優紀はこっそり付け加えた。

実際、直人は進也に顔を向けてこず、照れ隠しのように背けたままだ。

それを見て由美子もくすりと微笑みをもらす。

その一方で、

「おお、孫よ！おじいちゃんの胸に飛び込んでおいで！」
と両手のように羽根を広げるキバット？に、

「だから俺は孫じゃない！」

キバット？は鬱陶しそうに叫んでいた。

話もそこそこに進也は本題…『白銀のライダー』の噂に関して聞いてみるが。

「噂？知らんな。」

「第一、私達はさつきこの世界にきたばかりですし…。」
直人達にはあつさり否定された。

「そつか…。」

「これで振り出しに戻ってしまいましたね…。」
由美子と雪は肩を落としたが、逆に進也は嬉しそうだ。

「でも僕は直人さんや優紀さんが来てくれただけで嬉しいよ！だつてこうやって一緒にいられるもん！」

「進也…！」

まったく話が噛み合っていないし！そう突っ込みたい由美子だがあえて引き下がる。

何せ、いつも笑っている進也の顔が今日はいつも以上にキラキラしているのだ。

突っ込みを入れるのは「野暮」というものだろう。

「ほっほ、そう焦らんでも探し物ならいつかは見つかるものじゃ。

取りあえず落ち着きなされ…。」

「そうね、それもそう…って、おじいちゃんはいつまでいるのよ！」
そう、この老人の存在を忘れていた。

戦いの後、再び老人を送ろうとしていた進也達だったが、直人達が怪我の具合を心配していたことと、老人の家がドランの近くにありと聞いたことで、取りあえず手当てを優先して老人もドランに連れてきたのだ。

その時、キバットの姿も見られてはいたが相手は老人ということに隠さずにおくことにした。

「んじゃ、おじいちゃんもそろそろ送るよ。」

進也は老人に声をかけるが、

「いやあ、気にするこたない。もっと後回しでも構わんよ。」

と言つと、老人は再び、『ホッホ』と笑つ。

「とりあえず…せつかく来たことですし、私達もその調べ物に付き合いますよ、ねえ、直人さん、キバットさん。」

「俺は別に構わんが、直人…。」

キバット？が直人を見ると、直人は無言で腕を組んだ。取りあえずは『好きにしる』とのことだろう。

「よし、んじゃ話がまとまったところで！」

相談がつくなり、由美子は優紀を立ち上がらせ、腕を引く。

「え？」

「私達は女同士でチームを組むから、あんたとキバットは直人さんを頼んだわよ！」

「あい！」

「えっ、ちよつと待ってくだ…。」
戸惑う優紀の手を掴むと、由美子はドタドタと店を飛び出していった。

「まったく由美子さんは…。」

雪は立ち上がると、直人達に一礼、由美子達の後を追っていった。

「いつてらっしや〜い。さて、それじゃ僕達も行こうか？」

進也は直人の方を向くとニッコリ笑つた。

「で、どうなんですか？」

ある程度、優紀を引つ張つたところで由美子は単刀直入に聞いてきた。

「え、何のこと、ですか？」

優紀も何を聞かれているのか理解しているようで、必死にごまかそうとする、が焦り口調で喋り方も棒読みになっている。

「も〜う、とぼけちゃって〜。」

由美子はますます面白がると、にやけながら優紀の腹を肘で打つ。それに助長され、真っ赤になる優紀の顔。

「べ、別にちよつと、キスしたぐらいで…。」

「あ、言っちゃいましたね。」

しまったとばかりに口を押さえる優紀。

その顔がまた赤くなるのを見ながら由美子の顔がますますにやけた。そこに遅れて雪がやって来た。

「あ、雪、実はね…「わあ、わあ!」」

優紀は必死に由美子の発言を遮る。

しかしすぐに無駄とわかったのだろう。ため息をつくとがっくり頂垂れた。

「はい、直人さんに告白しました、OKももらいました…。」

敵の敗北宣言。由美子はそれさえ聞ければ満足と勝ち誇って腕を組む。

「素直でよろしいです!」

雪は雪で何の話かまだよくわかってなかったが。

その様子を後ろで見ている影。

「う〜ん、別に色恋沙汰には興味ないけど、面白い話してるねん。」

由美子達のすぐ後ろに立った樹の裏…そこでオレンジ色の髪の少女が彼女達の恋バナの様子をジロジロと眺めていた。

彼女の名前は日向息吹。直人達の世界の仮面ライダーイクサであり、それを率いる戦闘部族「日向の一族」の一人である。

あどけない容姿と子供のような喋り方と裏腹に戦いの実力は非常に高く、直人…Eキバも一度は敗北寸前に追い込まれたことがある。

進也と雪も直人達の世界に来た際、この息吹と戦ったものの、結果は痛み分け。進也も雪の助けがなければ敗北していた可能性もあった。

そんな彼女が何故この世界に来ているのかというと…。

直人達を飲み込んだオーロラはそのまま消滅することなく、長く前進を続けていた。

その際、追撃に向かおうとしていた息吹と相棒・乃木統二も巻き添えを食らって飲み込まれ…気がつけばこの世界に来ていた。

「統二のバカチンはどっか別に飛ばされたみたいだけど、あたしは偶然近くに来てたみたいだね。運が良かったよん。」

あれからドランの前に張っていたのだが、由美子と優紀、雪が順に出てくるのを見て後を付けていたのだ。

今、目の前にいる人間…由美子達は自分には気づかず、自分達の話で盛り上がっている。

バトルオタクの息吹としてはまたとない絶好のチャンスだ。

「ちょうど、あの雪って子ともう一度戦ってみたかったし、ふふ、楽…。」

息吹が立ち上がるようにする、と彼女の頬を何かがかすめた。

「ん？」

息吹が通った方向をちらりと見ると…それは石だ。

「あ、あれ…？」

弾道から見れば間違いなく由美子の方向から飛んでくる石。

「ひょっとして…私のこと、気づいてる？」

当の由美子本人は、

「あ、私はずっと恋なんかしたことないもんや〜！」

と今度は悔しがりながら石を投げていた。

そして優紀の顔や髪を見ながら、

「すこしでも女っぽくって伸ばしてたけど、あんま効果無いし、助っ人の邪魔だし…そろそろ短くしようかな…？」

と自身の髪を撫でた。

その頃、もう一人のイクサ：乃木統二もこの世界に到着し、今は…
こちらに進也と直人達の背後の、こちらは電柱の陰に隠れていた。
「キバの野郎に…何だ、あのガキは？」

統二は息吹と違い、以前自分達の世界に来た進也達には会ったこと
はない。それ故、見知らぬ子供が自分の獲物の傍で親しげに
いることを不思議がった。

「お母さん、あのお兄さん、変だよ？」

「しっ、見ちゃいけません！」

彼自身は五歳児に不思議がられていたが。

「くっ、あのガキがいたんじゃ戦えねえじゃねえか、ってジジイも
いやがる。」

進也と直人、その後ろからはまたしてもあの老人がついてきていた。

「一族の掟が忌々しいぜ…。」

老人はよたよたゆっくりと進也達の後を追っては、止まって後ろを
チラリと見ていた。

「おじいちゃん、ちゃんと付いてきてね。」

「おお、わかっとなるわかっとなる。」

老人は進也に返すと再び、後ろ、その視界に入る統二を見ていた。

「まずはあれを引き離さにやらんな…。」
そう呟いて。

進也は普段は箆笥に大事にしまっていたコート…直人からのプレ
ゼントを着て、直人とのパールックで歩いていた。

進也も由美子同様、優紀との恋の進展を聞いていたが、直人は特に
隠すこともなく進也に話していた。

「ええ！じゃあ、ほんとにチュウしたの？」

「ああ、したぞ。それがどうした。」

直人はそっけなく答えるが、進也とキバット？はまるで尊敬する人

物に会ったかのようにより目を輝かせた。

「まあ、それは良いとして…、大切にしてるんだな、それ。」

直人は話を切ると、進也の着ているコートを指さす。

「うん、大事にしてるからね！」

進也が大事にしすぎてあまり着ていないから、というのもあるが彼が着てコートはほとんどシワもなければ、色あせもなくほぼ新品同様だ。

逆に常に激しい戦いを潜り抜けている直人のコートは傷だらけのシワだらけ、色もあせてボロボロだ。

片や、純粹無垢、片や硬く厳しい性格を表すような二人のコート。

だがそれでいて、同じものを羽織る姿はまるで…。

「兄弟みたいだな…。」

二匹のキバツトは声を揃えて同じことを呟く。

「おお、言葉が通じあったな、孫よ！」

「偶然だ、偶然！」

「でも僕、できれば直人さんみたいなお兄ちゃんが欲しかったな…。」

ふと、そんなことを呟く進也。

「ん、どうしてだ？」

「僕、昔から一人っ子でね、ああ、もちろん、お母さんやガール達はいたけど、それでも、兄弟が…お兄ちゃんやお姉ちゃんが欲しかったんだ。」

「そうか…。」

直人は特に何も突っ込まず進也の話を聞く。

「だから、別世界の人でも…直人さんや優紀さんに会えて良かった。

ありがとう！」

進也にもらうお礼の言葉。直人も悪い気はせず、ふっと笑った。

「なあ、進也。お前の親はどんな人だった？」

今度は直人が進也に聞く。

「うーんと、僕、お父さんのことはよく知らないし、顔も見たこともないんだ。でもお母さんはすっごく優しくかったよ。僕が悲しいとき、嬉しいとき、いつも笑って僕を抱きしめてくれて、僕がわるいことしたり、危ないことしたときはビシッと叱ってくれたんだ。」

嬉しそうに親を自慢する進也。

「昔、僕が犬を助けようとして道路に飛び込んだ時は…。」

『助けたいって気持ちは立派だけど、それで自分の命を投げ出しちゃダメ。相手だけじゃなく自分も思いやることが大切よ。』

「て言つて僕を叱つて、その後笑いながら撫でてくれた。」

「そうか…。」

進也の話を聞きながら直人は考える。思えば自分も、優紀を助けるために自分の身、命を顧みず行動し挙句の果てには暴走したことがある。

進也の母、真夜の言葉はまるで自分に言われているかのようにも感じた。

「今はどこにいるかわからないお母さんだけど、きっと今も何か良いことやってるんだろうな…。」

進也はそう言つて直人と空を見上げた。

「あわわ…やっぱ、私のこと、気づいてるよねん…。」

息吹はまた自分の横をかすめた、由美子の石ころを見ながら啞然としていた。

彼女の傍には同じように石が数個あった、それも同じ位置に塔のようにして。

そんなことが起きているとは露知らない由美子達は。

「ああ、それにしても彼氏がいて羨ましいな、優紀さんは。」

先程の意地悪とは一転、由美子は優紀を羨ましがりながら頭を掻く。

「ねえ、そう思わない雪？」

「いえ、私はそういうことにはまったく興味が無いので…。」

「あんだ、それ年頃の女の子の発言じゃないわよ…。」

雪のストイックな発言に若干引く由美子。

「あんだ、恋を試してみたいとか、気になる男、とかそういうの無いわけ？」

「いえ、全然。由美子さんはどうなんですか？」

まったく動じないどころか逆にどぎつい（心の）カウンターパンチを放ってくる雪。

彼氏いない歴17年の由美子にはかなり効果的だ。

「え、ほんとに由美子さん、彼氏がいないんですか！驚きです…。」

「いや、あの、今の効いたんですけど…。」

そこへ来る優紀の（悪気の無い）パンチ。

由美子は一気にグロッキー状態に追い込まれる。

「あ、いえ、悪い意味じゃなくて。由美子さんって十分美人だし、

女の子らしいし…どうして彼氏が出来ないのかなって…。」

由美子の心のゴングが鳴る。

優紀は弁解するつもりが逆にとどめをさしてしまった。

それから数分後。

落ち込んでいる由美子をベンチに残して優紀と雪はトイレに行っていた。

「由美子さんの事情って、複雑なんですね…。」

「そうなんですか？私にはよくわからないのですが。」

心ならずも由美子を傷つけたことに優紀も落ちこんでいると…。

「おや？何かお悩みごとでも？」

スーツをきつちり着こんだ男性が二人に声をかけた。

「よければ私と遊びませんか？」

にこやかにナンパしてくる、その男に優紀達が胡散臭さを感じていると、彼女の腰下で鈴が鳴る音が聞こえてきた。

しかもかなり近い場所にいることを示すくらい音は大きい、ということだ。

「あなた、ファンガイアですね？」

「おや、ファンガイアをご存じで？ならご安心を。私は人を襲うこととは嫌いですから。」

正体を看破されても男は動じない。

「ただ私はゲームをやりたいだけですよ、あなたがたと。」

「ゲーム？」

優紀と雪は互いに顔を見合わせた。

その頃、由美子もようやく気を取り直していた。

「はあ…。よし、決めた、この後…。」

由美子が何かを決意し、立ち上がるうとする手と手が何かに触れた。

「あれ、これは雪のバッグ？」

開けてみると中に入っていたのはイクサのベルトとナックルだ。

「あの子どもどこか間抜けなところがあるのよね…。」

ま、いつかと由美子がそれを持って歩き出そうとすると。

「あゝ、もう、いつになつたら直人たんが来るんだよ！」

茂みの中から息吹が飛び出し、由美子と目が合う。

「「あ。」

だが息吹の目は由美子の持っているもの…イクサのベルトに目が合った。

それを見た途端、ニヤリと笑いだす息吹。

「なるほど、やっぱり私に気づいてたんだねん…。」

「え、は？」

「だったらあんた相手でもいいや！私と戦おうよん！」

息吹はそう言っ手元からイクサナックルを取り出した。

「は？」

わけもわからず目が点になる由美子。

同じ頃、進也と直人は帰路につこうとしていたが…。

進也が見ると直人は何故か後ろをチラチラと見ていた。

「どうした、直人？」

「あ、いや…。」

『おかしい、さっきまでかなり近くにあった殺気が消えている。一体どこに…。』

「直人さん？」

「ああ、いや、何でもない。それより、携帯がなってるぞ。」

「あ、ほんとだ。」

進也はポケットに入れた携帯電話をとる。

「知らない番号だな。もしもし？」

『やあ、キバ君、君の横にいるイケメン君に代わってくれかね？』
知らない相手から『キバ』、そして横に直人がいることを言われ驚く進也。

「誰、ですか？」

『イケメン君に渡したら話そう！』

進也はとりあえず直人に渡した。

「もしもし？」

『初めまして、不知火直人君。私は佐倉。ゲームの司会者だ。』

「ゲームの司会者が何の用だ？」

『君と進也君を私が作ったアトラクションに招待しようと思ってね。』

「興味ない。」

直人はバツサリ言い切って電話を切ろうとすると。

『君の恋人が人質といっても、かね？』

「何…？」

直人は再び携帯を耳にあてる。

「私のゲームに参加し、なおかつ勝利すれば君の恋人はお返ししよう。」

「待ってやがれ……。」

「おっと、気が早いな。まだ時と場所を教えていない。今晚10時、場所はこの街の西通り公園だ。時間厳守、1、2分前には来てくれよ。ハッハッハ……。」

小馬鹿にするような声が聞こえた後、電話は切れた。

「直人さん、ひよつとして大変なこと？」

「ああ……。しかもお前もお呼びのようだ。」

直人は冷静に、それでいて心の中に熱いものをもって進也に言う。進也もそれを理解し頷いた。

そこからやや離れた場所。

「な……。」

倒れている統一……イクサの前に銀色に輝く鎧を纏った戦士が悠然と立っていた。

「坊や、その程度でミーに挑むとは感心しないな。」

「だ、まれ……。貴様、一体……。」

「ミーの名かい？」

統一に名を問われた戦士は答える。

「仮面ライダー……『サガ』さ。」

相方に起きている事態も知らず（知ってても気にとめないだろうが）、息吹は由美子相手ににこにここと笑っていた。

「さあ、変身しなよ、でないと私も戦えないよん。」

「あんたもこの世界に来てたなんてね。でも私はバトル専門じゃないから。」

「もう、そんなこと言っちゃって……。手に持ってるそれは何？」

「これは……。」

相手が普通の人間ならともかく、彼女がこれをおもちやと思わない

人間であることは由美子はよく知っている。

「でもあんた、直人さんを追っかけてんじゃないの？」

「ん、確かにそうだけど戦えるなら別に誰でもいいよん。」

「だから戦ったことないんだって！」

イクサベルトを持ちながら、

『あ、もう雪も優紀さんも何してるの！この勘違い女を何とかして！』

などと思っていると。

『F-I-S-T-O-N』

いつの間にか変身した息吹：イクサICが立っていた。

「ほら、変身したよ。次はそっちの番。」

「ああ、もう！」

由美子は意を決してベルトを装着した。

「確か、こうだっけ？」

雪の見よう見真似、由美子は手をナツクルに押し当てる。

『R-E-A-D-Y』

「：変身！！」

やけくそに叫び、ベルトにナツクルを装着した。

『F-I-S-T-O-N』

「出来た…。」

自分の手、そして身体を触り白い鎧が装着されていることを確認する由美子。

イクサは彼女の身体にしつかりと装着されていた。

不思議なことに出来るとわかると、由美子には高揚感、出来る気持ち湧いてきた。

「何だ、やっぱ出来るんじゃないか。それなら…。」

構える息吹：イクサIC。

「こうなりややってやるわよ！」

由美子も迎え撃つ姿勢を取った。

それを、いつの間に来ていたのか銀の戦士……サガが見ていた。傍らには気絶した統一が彼の片手に抱えられている。

「さて、『由美子ちゃん』のお手並み拝見といきますか。」

サガは戦いの幕開けを見ながら笑いを漏らした。

18・異世界探訪（後書き）

今回は再びバトル編、進也、直人コンビ、由美子に別れての戦いで
す。

お楽しみに。

特別ゲストも出演予定ですよ。

19・イクサvsイクサ（前書き）

お待たせしました、コラボ編第三話でございます！

お詫びを一つ、前回このコラボ編でゲストを出すつもりでしたが、入れる余地が無くなりそうなので、またの機会に保留と致します。誠に申し訳ございません。それではどうぞ。

19・イクサvsイクサ

由美子が異世界のイクサ…日向息吹と偶然の、「望まない」再会を果たしていた頃。

「雪さん、優紀さ〜ん！」

「お〜い、姉ちゃん達〜！」

「どこだ、どこにいる？」

謎の電話があつた後、いてもたつてもいられなくなつた彼らは進也とキバツト？、直人とキバツト？の二手に分かれて、雪と優紀の二人を捜していた。

その内、街の右側から捜していた進也たちは。

「ねえ、キバツト、優紀さん達の反応を魔皇力で探せない？」

「へへ、言われる前からやってるぜ、だがな…残念なことに反応ゼロだ。」

キバツトの持つ力は何も進也を変身させるだけではない。

彼が持ち、額に備えている魔皇石はキバの鎧の管理、コントロールの他にも魔力操作や付近の人間、魔族の探知など様々な能力への応用が効く。

中でも探知能力に関しては本物の蝙蝠が持っている以上の超音波を、魔皇力で更に高めることで暗闇でも十数キロ離れた動体の反応を検知でき、なおかつその行動さえも窺うことができる。

この能力があれば、この街程度の空間、すぐに捜している人間を検知してもいいはずなのだ。

反応があつた際にぼうつと光を放つはずの魔皇石は街中を駆け回つてもなお、動きを見せない。

そうしている内に反対側に回っていた直人とキバット？が戻ってきた。

キバット？が身体をひくつかせているところから見ると、彼らも進也達同様、キバットの能力で優紀達を探そうとしていたのだろう。

「直人さん、いた？」

進也の問いに直人は無言で答える。

代わりにキバットが、

「いや、残念だがこちらはいなかった。そちらは…。」
と答え、

「収穫ゼロか。」

と進也達の表情から察した。

「それにしてもキバットの探知能力センサーでも見つからないなんて…一体どこに消えたんだろ…？」

「街の中で見つからねえということはこの街の外に連れ去られたか…。」

キバット？は珍しく冷静に考え答えを出す。

「あるいは異空間だ。」

「異空間？」

進也は首を傾げる。

「ああ、ファンガイアの中でも上級種に入る連中はそれぞれ自分の好きな空間を作ることができる。自分の為の狩場、有利になるための戦場…厄介なもんさ。」おい。「？」

そこに暫く会話に加わらなかつた直人が突然口を開いた。

「その空間、どうやってた入れるんだ？」

「お、おお…。第一に奴ら自身が俺達を招く。これは戦場に引き込む連中のすることだな。第二に奴らが狩りの時に開く門ゲートが開いた時、俺達自身が飛び込む。だがどちらも確率は非常に低い。やるなら第一の…いや、待て、これは危険すぎるな。」

キバット？は何故か、第三条件に関しては口をすばむが。

「いいから教える…。」

「いや、だが…。」

「教える…！」

直人は普段の冷静な顔が嘘のように、鬼のような顔でキバット？を睨み声を荒げる。

「直人、さん…？」

直人に無邪気に懐く進也もこの時は僅かに、直人に震えた。

「お、おい、直人！」

「うるさい！いいからどうするんだ！」

キバット？が窘めるのも聞かず、直人はキバット？に詰めかからんばかりの勢いで吠える。

「だがこれは下手すればお前も命を落とすかもしれないんだぜ！」

「構わん！優紀あいつを助けられるならそれでも…！」

直人は一度、暴走から優紀の命を奪いかけたことがある、嫌、直接的には直人の責任では無いのだが、彼は彼女を危険にさらしたその件を今でも自分の責任と悔いており、恋人となった今では彼女に対する責任感と合わせて彼女を守ろうとする気持ちが強くなっていた。この感情も優紀を必死で思い、心配する感情なのだ。

「駄目だよ！」

直人の頭に理性がふつと返った。

彼の後ろでは先程まで怯えていた進也が叫んでいた。

それでも相当気持ちを振り絞ったのか肩が震え、息も荒くなっている。

「進也…。」

「直人さん、さっき言ったよね！『人の命を守る人が、自分の命を粗末にしちゃいけない』。それは直人さんも同じだよ！」

ひいひい、ふうふうと喉を潤らしながら進也の叫びは続く。

「直人さんの命を犠牲にして優紀さんが助かって、優紀さん、喜ぶ

と思う？僕は…そうは思わない…。」

気持ちを奮い立たせ、感極まったのか、進也の足元にポタ、ポタと何かがこぼれる。

それは…。

「僕は…僕は…、由美子さんや雪さんが好き。優紀さんも好き…でも直人さんも好きなんだ…。だから…。」

それは進也の涙だ。

涙はとめどなく頬を流れては進也の足元へこぼれ落ちる。

「簡単に命を投げるとか…言わないでよ…。」

言い終わると進也は直人の胸に飛び込み、本格的に泣き出した。直人はその背中を支えながら思い出す。

そう、あの時の暴走、そして優紀の献身を。

「すまなかつた。」

直人の声のトーンが元に戻った。

「悪い、俺もどうかしていたようだ。悪かった…。」

謝る直人、それはいつもの顔、そしていつもの直人だ。

「直人…。」

「直人さん…。」

進也は涙を拭きとると、またしっかりと立って直人を見る。

「まだ異空間に行ったとは限らない。そうなんだろ？」

「うん、まだ捜してないところもあるかもしれないし、それに手はまだあるんだよ直人さん。」

そう笑顔で笑う進也も元通りだ。

「とりあえずまずは夜を待つ。それからだ。」

キバツト？の言葉に進也達は頷いた。

すると二匹のキバツトの額の魔皇石がポウツと明るく光り始めた。

「こ、こりゃ…。」

「もしかして、優紀さんと雪さん？」

「いや、まだわからねえ。急に光りだしやがった。」

進也は望みが出たことに目を輝かせたが、キバット？は渋い顔で身体を横に振った。

「とりあえず近いな。直人、行ってみるか？」

「…無論だ。」

????

何ともつかない「不思議」なモノが蠢き、辺りの風景の色が赤から紫、青、緑と目まぐるしく変わる歪んだ空間。

意識を失っていた優紀はその中で目を覚ました。

「ここは…。そうだ、私、変な臭いを嗅がされて…。」

「お目覚めですか？」

正気に戻った優紀の耳に聞き覚えのある慇懃無礼の声、空間が違うせいか、より響いて聞こえた。

声の主を探そうと身体を動かそうとしていると、ガシャンと重苦しい金属音が響いた。

「おっと、動けませんよ。あなたは拘束済みです。」

どこからか聞こえる声の言うとおり、優紀の手足は鎖の付いた錠で嚴重に封じられていた。

動こうにも鎖の重さは半端ない上に鍵のロックがしっかりしているのか赤茶けた色に反し、まったくビクともしなかった。

そうしている内、優紀の目の前に、声の主…あのスーツの男が現れた。

「あなたは…。」

「手荒に扱ってしまい誠に申し訳ない。本来私はレディには優しいんですがね。」

男は優紀に礼儀正しく頭を下げる。

「ただこうでもしなければキバをおびき寄せることが出来なかったのですね。私としても非常につらいものなのですよ…。」

男はキバを知っていた、そして優紀が彼に近い存在だと気づいていた。

ただ。

「待ってください、そういうば私と一緒にいた子、雪さんはどうしたんですか？」

優紀は男にせいっぱいの声で聞いただす、だが男はそれどころ吹く風と、

「ん？ああ、あの無粋な少女ですか。あんまり騒がしいのでちょっと黙らせてやりましたよ。」

「虫を払った」と言ったような声でうつつしげに答えた。

「あなたも、うるさいですね。ゲーム開始まで眠ってもらいましょう。」

と手元から小瓶を取り出し中の臭いを彼女に嗅がせた。

「こ、これは…。」
先程も嗅いだあの臭い、そう気づいた時には優紀の意識は暗闇に落ちていた。

そして場面は変わって公園。

「ほらほらどうしたの？」

由美子が変身したイクサ…イクサは息吹が変身したイクサ・IC相手に苦戦を強いられていた。

理由は二つ。

「これ…めちゃくちゃ重くて動きが出せない…。」

由美子は自分の持つカリバーで息吹のカリバーを受けとめながらもやく。

一つ目は彼女の言うように鎧の重さだ。

イクサの鎧はキバと違い、変身する人間こそ選ばないものの、それ相応の訓練を必要とする。

『どのようなもの』かはまだ明かせないが、変身のための訓練を積

んでいた雪や戦闘民族である息吹ならまだしも、これが初変身となる由美子にこの鎧が使いこなせるはずがない。

「ちよつと…雪を尊敬するかも…。」
肩で息をしながら由美子は雪の戦いを思い浮かべた。

そして二つ目の理由…それは戦い方の違いだ。

由美子は人間としては並以上の格闘能力を持っているが、それはあくまで「試合」としての話だ。

同じく形式にそって戦う相手になら互角以上に戦えこそする由美子も、元々ルール無用で、感情の向くまま命を捨てても戦う息吹相手では力不足は否めない。

それに前述の第一の理由が加わり、由美子…Yイクサはイクサ・IC相手に防戦一方の姿勢となっていた。

イクサ・ICは専用武器・鉄の鞭にも変化する自在剣を振るって由美子へと攻撃を仕掛ける。

「そお〜れ！」

しかしそこは由美子、防戦一方とはいえ軌道の読めないイクサスラツシャーの斬撃を素早く自分の背後にある樹へと向ける。

切られた樹は無論、Yイクサへと倒れ掛かってくるが、彼女はそれをカリバーを突き刺すことで受け止め、そのまま縦一閃に真っ二つにした。

だがそこへイクサ・ICが素早く駆け寄るとイクサカリバーで斬りかかってくる、がYイクサも自分のカリバーで応戦、受け止めたのだが…。

「くう〜、痺れる〜…。」

イクサ・ICの攻撃の力は強く、Yイクサが剣を握る手にも負荷がかかった。

「おかしいわね、そろそろトイレから帰ってきてもいいはずなんだけど…。」

Yイクサ：由美子は行動を共にしていた雪と優紀の帰りを待つが。

来るはずもない、優紀達はこの時「あの」出来事に出くわしていたからだ。

そうは知らない由美子は雪達が戻ってくるのをどきまぎしながら待つが。

そのことで力が抜けた一瞬、Yイクサのガードが破られ、イクサ・ICの斬撃が鎧に真一文字を描く。

「くっ…。」

「む、私との勝負中に気を抜いたねん？」

イクサ・ICはYイクサの動きからそれを見抜くが、容赦は無い。Yイクサが怯んでいるその隙に更に彼女の猛烈な一撃が決まった。

「全然ダメだねん。それじゃ私が戦う意味が無いよん！」

それでも「先程の偶然」から由美子の実力を過信している息吹…イクサ・ICはためらうことなく攻撃を繰り出して来る。

カリバーを受け止められても、その勢いを殺さずにYイクサを押し返す。

そこから二連続のキックを放ち、Yイクサの防御が足に向いたところに、後方からスラッシャーの刃を襲わせる。

ギリギリで受け止めるYイクサ、しかしそこでガードが開いた彼女の装甲に、前方から飛び込んできたイクサ・ICの剣撃、膝蹴りが決まった。

「かはっ…。」

Yイクサは急所を突かれ、仮面の下で血反吐を吐く、だがそれでも負けじと近距離にいたイクサ・ICにカリバーを一閃、彼女を振り払うと距離をとった。

「へへ、いいいいいよ、それでこそ私と同じイクサだねん。」

「…これ、借り物なんだけどね。」

重い鎧を纏ったことと、雪も常日頃受けている装着の副作用、そして当たってしまった攻撃のダメージでふらつくYイクサ。

それでもなお、Yイクサ…由美子は震える足をカリバーを支えにして何とか立ち上がるうとしていた。

「齒ごたえのある相手だねん。よゝし、それなら…。」

イクサ・ICのフェイスガードが開き、辺りに赤い熱風が振り撒かれた。

息吹…イクサICが本気を出したのだ。

「私も…本気で行くよん！」

息吹はそう呟き…爆風のごとく飛び出した。

そこからの勝負は一方的だった。

セーブモード相手には防戦状態でも何とか相手にしていたYイクサもバーストモードになったイクサ・IC相手には無力も同然。

攻撃力、反応速度が上昇した息吹相手に由美子はなすすべもなく叩きのめされていった。

「OH、どうしちゃったのかな、由美子ちゃん？」

その様子を近くの屋根の上からずっと眺めていた謎の戦士・サガ。

しかし彼(?)はピンチの由美子を助けることも無くただ二人が戦っている様子を一人眺めているだけだ。

「君の実力はそんなもんじゃないはずだろ？もつとPOWERを見せなきゃ…。」

その間に更に攻撃を受けた由美子…Yイクサは遂に、

『I - X - A - C - A - L - I - V - E - R - R - I - S - E - U

- P』

「いっくよん、はああ…！」

イクサ・ICの必殺の一撃を受け、地面に膝を付いていた。

「私の勝ちだねん。」

息吹は仮面の下で微笑むと自分の勝利を確信した。

気を抜けば今にも倒れそうな由美子。

その意識が失われかけていた時、彼女の頭にある思い出が蘇ってきた。

「ふん、ふん！」

広い道場の中、わき目もふらずひたすら竹刀を振る、幼い由美子。彼女は何かあったのか怒ったような目で竹刀を振っていた。

「いつも練習熱心だね、由美子ちゃん。」

そこへ胴着姿の青年が由美子が練習している元へやって来た。

「お兄ちゃん！」

「おや怒ったみたいなの顔してるけど…はは、さてはまたお祖父ちゃんに負けたんだな？」

そう言つて由美子をかからかい混じりに見る青年。

由美子は頬をプクツと膨らますと、

「勝つもん、今度は絶対！」

と地団太を踏んだ。

「いい心がけだ。よし、じゃあ今日はお兄ちゃんが稽古をつけてあげよう。」

「ほんと!？」

その言葉を聞いた途端、由美子の顔がパアツと輝いた。

「はあっ！」

「まだ脇が開いてるよ。」

「ほっ！」

「おっと惜しいな。」

「てやあっ!！」

「甘い！」

青年は由美子の攻撃を全てかわすと、素早く後ろに周り、
「はい、僕の勝ち。」

と自分の竹刀の先で由美子の頭を小突いた。

「む。」

悔しさからか、由美子はまた頬を膨らませた。

そうして数時間、稽古をつけ終わった後。

「にしても由美子ちゃん、いつつもスポーツに武道って、やってるけど普通に女の子っぽいことに興味は無いの？」

「別に無いよ。私、これやってるときが一番楽しいもん。」

「はは、そっか、そっか。」

由美子の素っ気なさに青年は思わず苦笑した。

「ねえ、明日も稽古つけてくれる？」

「え？ん、明日か。実は僕、明日、道場を出ることにしたんだ。」

「

「え、何で何で？」

青年の告白に戸惑いながら、その理由を聞く由美子。

「それはね、これから武者修行の旅に出ることにしたんだ。」

「むしゃ…しゅぎよ？」

聞き慣れない言葉に由美子は首を傾げた。

「ああ、だから当然由美子ちゃんとも会えそうにない、残念だけど今日でしばらくお別れだ。」

青年はにこやかに、それでいて寂しそうに微笑むと、由美子の頭を撫でた。

由美子はその頭を嬉しそうに抑えると、

「また、会える？」

と青年に聞いた。

「ああ、会えるとも。だから今度会う時までには由美子ちゃん、強く

なるんだよ。」

「うん、わかった!」

その言葉に青年は頷くと、置いていた竹刀を再び取った。

「よし、最後に僕が先生から教わった技を全部、見せてあげよう。よく見ててね。」

そう言つて青年は竹刀を握つて…。

「さうで、じゃあ次は直人さんと、あのキバ君かな?」

イクサ・ICはイクサが動かなくなつたと思ひ、彼女に背を向ける、が。

「はああああ…」

唐突に聞こえてきた声、そして呼吸に立ち止まり、思わず振り向いた。

そこにはつい今まで立つのがやつとだったはずのイクサが、まさに仁王立ちの様な姿勢で両足を地面に付けていた。

「な、何、この気迫…」

常に戦いを求め、強き者に歓喜するはずの自らの身体が思わず震え、冷や汗まで流している。

息吹はそんな自分に驚きながら、

「さ、最高だよ。」

恐怖を感じている自分自身に歓喜し、興奮した。

「いいよ、いいよ、いいよ、最高だよ!」

イクサはいつの間にかフェイスガードが開きバーストモードへと変化していたが、装着者：由美子の気迫はそのエネルギーを上回る程の気迫、熱気、闘志を生み出していた。

「鎧が…軽い…。まるで身体の一部みたい…。そっか、これが…。

「重く動くのもやつとだった鎧が、まるで紙のように軽い。」

Ｙイクサ：由美子はそれを肌で感じながら、カリバーを構えなおした。

「はは、いいよ、もっとやろうよ！」

イクサ・ＩＣは狂気に近い笑い声を上げながら、またスラッシャーを振るった。

それは先程の由美子では反応し、よけるのがやっとだった攻撃を上回る更に変則的な攻撃だ。

刹那、強い風が吹くような音が二回、辺りに響いた。

「わぷつ…！」

イクサ・ＩＣは思わず顔を覆い、気付いた。

「すごすぎるよん…。」

しなやかさだけでなく強度においても自信のあるスラッシャーの節がバラバラに切断され、地面に落ちていたからだ。

そう、風が吹いたかと思ったあの瞬間、Ｙイクサは目にも止まらぬ速度でカリバーを二回振ったばかりか、その二回でスラッシャーをバラバラにしたのだ。

もちろんその光景はサガの目にも届いていた。

「エクセレント！さすがは由美子ちゃんだ！」

しかしこれを見ても戦意を削がれるどころか、ますます興奮するの
が息吹だ。

「いいね、いいね！もっとその強さを見せてよん！」

イクサ・ＩＣはスラッシャーに代わって、カリバーを握ると、Ｙイクサに向かっていた。

「…！」

その突撃にＹイクサは仮面の下で閉じていた目をカッと見開いた。

突撃のすれ違いざま、イクサ・ICの装甲を叩き斬ると振り向きざまに縦、横、斜めに剣撃を加え、よろけたイクサ・ICに真つ向両断の一撃を入れた。

「不思議…。」

最初に別世界で出会った際、そしてこの世界で望まぬ再会を果たした際：由美子はそのどちらにおいてもこの戦闘狂の少女に恐怖という感情しか抱いていなかった。

それがどうだろう、「過去の思い出」が蘇った途端に由美子の心と身体に闘争心と強力な力を与えていた。

喧嘩のごとき戦法でまったく動きが掴めなかった息吹の動きが読める、その攻撃を返し、新たな一撃を加える余裕が生まれる、それを利用し、力強い一撃を叩き込める。

「そつか、思い出した…これが、これが力！」

由美子はその気持ちを剣に込め、敵の鎧を斬る。

「これが…技！」

そして息吹：イクサ・ICに掌底を打ち、押し出すと、無意識にフエッスルをベルトに差し込み、インサートした。

『I - X - A - C - A - L - I - V - E - R - R - I - S - E - U
- P』

「はは、負けないよん…。」

イクサ・ICも怒涛の攻撃に自分が意識を失いかげながら、執念でベルトにフエッスルを差し込んだ。

『I - X - A - C - A - L - I - V - E - R - R - I - S - E - U
- P』

二人の胸に輝く太陽と刃が神々しい赤に輝く…。

先に動いたのはイクサ・ICだった。

剣を横に構えると、Yイクサに向かって駆ける。
対してYイクサは円を描くように剣を振るうと、腰に剣を当て、同じく素早く駆ける。

「はああああ…！」
二人のイクサの身体がすれ違い、激しい火花が立った。

果たして勝ったのは…。

先に膝をついたのは由美子だった。

カリバーの剣が嫌な音と共に折れたかと思うと、ベルトの警告音がけたたましく鳴り、自動で変身が解けた。

「勝った…、勝ったよん…。」

その時だ、彼女のベルトから嫌な音と共に赤い電流が流れたのは。

瞬間、息吹の変身が強制的に解除されたかと思うと、ベルトに電流が走り…爆ぜた。

「あれ…、負けちゃったよん…。」

煙を吐くベルトを見て一言、そう呟くと息吹は意識を失いその場に倒れ込んだ。

「つつ…。」

由美子は血反吐の後を拭くと、倒れた息吹に歩み寄り、その顔を見た。

「…ったく、こんな時まで笑ってるなんてね…。」

由美子の言うとおり、息吹は気を失ってもなお、まるで子供が良い夢を見ているような安らかな顔だった。

「さして、どうするか…？」

そのセリフを由美子だけでなく、サガも呟いていた。

彼(?)は自分の傍に寝かせていた統二を一瞥し、しばし考え込んだ。

「だ後、

「ま、しかたないな…。」

と呟き、統二の身体を肩に担いだ。

「由美子ちゃん、そっちの娘、よろしくたのむよ。」

最後に由美子のいる公園を見てそう言くと、サガは屋根から飛び降りた。

「痛て。」

それからすぐ後…。

「近い…この反応はファンガイアだ。」

キバツト二匹の先導で進也と直人はその反応の場所へ向かっていた。

しばらく走っている内、

「雪さん！」

目の先に自分が知る人物が倒れていることに気付いた進也とキバツト？は真っ先に彼女に駆け寄った。

「おい姉ちゃん、大丈夫か？しつかりしろ！」

額から血を流して意識を失っていた雪は直人の手の中でキバツト？に呼びかけられ目を覚ました。

「進也…、直人さん…。」

「どうしたの、何があったの…？」

「すいません…私の不覚でした…。」

雪は悔しそうに呻くと、また意識を失った。

「お、おい…、この姉ちゃん、イクサのベルト持ってねえぞ。」

進也達もそれに気づく。

「ほんとだ、どうしたんだろ？」

「おいおい、やべえんじゃねえか。早く「なるほど、そういつい」とだっただってわけね…。」

何やら聞き覚えのある声。

由美子は背中になにかを担ぎ上げ、手にイクサのベルトが入ったバッグを持った姿で戻ってきた。

「悪いわね、ちよつと借りちゃったんだけど…何やら緊急事態？」
だがそれより何より、由美子がボロボロの傷だらけになった理由を知る由もない進也は彼女を見て、安堵するが…。

「おい、そいつは…。」

直人は由美子が背負っていたモノ、嫌、人物を見て驚いた。

その人物は誰であろう、何度も自分を襲撃していた人間…息吹だったからだ。

「ちよつとそこでケンカしてたんだけど…話は後！まずは雪を運ばなきゃ。」

由美子の言葉に進也とキバット達は頷き、直人も少し悩む様子を見せるが、

「わかった、とりあえず俺達も伝えることがある、まずは戻ろう。」
と、一応、賛同の意思を示した。

ドラムへ戻る一同…、それをいつの間にか現れた老人が静かにその後を追っていった。

19・イクサvsイクサ（後書き）

以前黒服さんからの指摘があつた直人のセリフを改訂、加えて今回は出来る限り黒服さんの原作キャラに近づけたつもりでしたがいかがだったでしょうか？

次回はいよいよファンガイアとの大勝負、そしてコラボ編クライマックスを予定しております。
お楽しみに。

20・優紀SOS（前書き）

はい、前回予告した通り、今回は二話同時投稿：なんですが本来今回完結させる予定だったのをストーリーに厚みがついてしまったという理由で延長させていただくことになりました。

それから：黒服さん、申し訳ございません！m（――）m
了承を得たからとはいえ、お借りしたキャラクターをかなり暴走させてしまいました！

気を悪くしなければよろしいんですが…。

長くなりましたがそれではどうぞ。

由美子VS息吹、成り行きによる変身、バトルに苦戦を強いられながらも勝利した由美子。

そして謎のファンガイアに襲われ捕らわれの身となった優紀…、果たして彼女は無事なのだろうか？

「いっただよ〜い！」

戦いの後、面々が一時帰還したドラム、そこから辺りに響きそうな悲鳴が轟いた。

「〜〜！耳がちぎれるかと思いましたよ…。」

「だったらもつと優しくしてよ…つつつ！」

由美子の悲鳴をモロに受けて目を回す尾上に、由美子は涙目で手当てに抗議する。

今の悲鳴は傷口に消毒液を当てられた彼女の悲鳴だったのだ。

しかしあれだけの激戦を繰り広げた割に、由美子の身体の傷は浅いものがほとんどだった。

おそらくはイクサの鎧が由美子の身体に来る身体的損傷をある程度和らげてくれたからだろう。

「でも…思った以上に来たわね…。私も体力には自信がある方だったんだけど…。」

代わりに、副作用による『体力消費』そのものは彼女の身体にしつかり残り、その上で息吹を直人達の元まで運んだ（途中から直人が肩代わりをした）由美子はそれから今になるまでの数時間、ぐっすりと寝に入ってしまうほど体力を減らし、先程目を覚ましたところで再度手当てを受けていた。

しかし、それよりも不安だったのは…。

「ねえ、尾上さん、雪は、雪はどうなったの？」

「はい、あれから…。」

全身、特に頭に鋭く深い傷を負っていた雪は、かろうじて即死に至る致命傷こそ免れていたものの、出血が酷く予断を許さない状態だった。

このままでは病院に連れていくのも間に合わない、全員の不安を感じ取ったキバット？は、

「しかたねえ、治療は家でやるぞ、幸いあまり離れていねえ。」
「言い出す。」

「ちよつと、救急箱とかで何とかなる治療じゃ…。」

「バカ、『アイツ』を呼ぶんだよ！」

その言葉に苦言を呈す由美子に、キバットは意味深に『ある人物』の名前を告げた。

リビングでは進也、直人、キバット達が隣のドアを見ながら、中で『ある人物』の手で行われている雪の治療が終わるのを今か今かと待ち続けていた。

「雪さん…。」

彼女の無事を祈る進也、しかし年相応に不安なのか、彼の表情に普段の笑顔は無く、その身体はふるふると小刻みに揺れていた。

「進也…。」

そんな進也に本来なら自分が叱咤激励を行うべきとわかってはいるのだが、キバット？はその不安げな背中にも何も言いたすことができなかつた。

しかしそんな進也の揺れる肩にポンと乗る手。

進也がその手にハツとなった表情で振り向くと、そこには直人の進也を見つめる顔があつた。

「直人さん…。」

「大丈夫だ。お前が知っている雪は、こんなことで死ぬような人間じゃないはずだ。」

「…うん！」

直人の励ましに、進也は瞳を輝かせて頷いた。

「く、く…ああ、孫よ！」

キバット？はそれを嬉しそうな、悲しそうな複雑な面持ちで見つめていたかと思うと、目から涙を水鉄砲のように噴出しキバット？に抱きついた。

「な、何をする！」

「今日はおじいちゃんと一緒に泣こう、な！」

「そんな暇は無い、というより孫でもない！」

キバット？は鬱陶しく抱きつくキバット？を振り払った。

その頃、手当てを終えた由美子と尾上は隣のベッドで眠る息吹の傍らで、彼女の寝顔を見つめていた。

「しかし…信じられませんね…。こんな由美子さんと歳が離れていない表情の女の子が坊ちゃんを襲っていたなんて…。」

大半の人間が尾上と同じ感想を述べるであろう息吹の寝顔は、普段戦いに喜びを見せる人間のそれではない、普通の少女が見せる安らかな寝顔だった。

尾上も別世界で進也に呼び出された際に、息吹に操られてしまった記憶ことこそあるもののその素顔を見たことがないために、にわかによ美子の言うことが信じられなかった。

実際由美子自身、進也、雪との『戦い』が出会いで無ければ普通の少女と見比べることができなかつたろう、しかし…。

「私も…勝てるかどうかは五分つてところだった…。この子はそれだけ実戦に慣れてるってことね…。」

「ぶつむ…。」

尾上は真正面から息吹の顔をしげしげと見つめる、すると今まで目を閉じていた息吹の目がパツチリと開いたかと思うと、ガバリと立ち上がり、尾上の顔へぶつかる。

「は、鼻が…。」

「あれ、生きてる?!！」

思い切り鼻に頭突きを食らった尾上を尻目に、息吹は周りの状況をボンヤリとした顔で見えていたが、その顔が由美子に向いた途端、生気が戻った顔で驚いた。

「ん、気がついた?」

それと時を同じくして、リビングでは部屋にかけられた時計が間もなく午後9時45分を指そうとしていた。

進也はその時計をしばし見つめた後、未だ治療が終わる様子の無い隣の部屋をまた見ると、意を決して頷いた。

「行こう、直人さん。」

「…良いのか?」

名指しはしなかったが、進也は直人の問いにまた頷く。

「うん、僕、戻ってきたときには雪さんが助かってるって信じてた…だから、今は一緒に優紀さんを助けに行こう。」

「ああ、進也の言う通りだ!」

直人は進也の目を見、彼の顔に先程の不安が纏っていないのを感じ取ると、進也の頭に軽く手を置いた。

そしてただ一言、

「行くぞ!」

とだけ告げるとキバット?と共に真っ先に店を飛び出していった。

「僕らも行くよ!」

「おう!」

進也と直人もそれに伴って、足早に玄関をくぐっていった。

「う…むむむ…。」

そこへ進也達が店を出て行くのを見計らってかのように電柱の影から一つの影がぬつと姿を現した。

その人物は、誰であろう、進也や直人の行くところ行くところへと姿を消してはまた現れる、あの老人だった。

「さ、て、と…あのガキも追い払ったことだし、そろそろわしの、いやミーのカッコいい出番、かな？」

老人は曲がった腰を、よいこらとばかりに無理矢理あげると、その声には似つかないキザな言い回しで首を捻った。

異空間

束縛した優紀の顔を、男はまるで美術品を鑑賞しているような恍惚とした表情で撫でていたが、ふと我に返ると、スーツから懐中時計を取り出す。

「おつと…そろそろ時間ですね…。」

男は時計をしまい、優紀の正面に立つと彼女の額に手をあて、何か小難しい呪文のようなものを唱え始めた。

「う、うん…。」

呪文が進むに連れ、それを受ける優紀は苦悶の表情に浮かべ辛そうに唸っていた、がそれもしばらくすると静かに収まり、変わって彼女の目から光が失せていく。

「ついでにちよつと趣向を凝らして…。」

男は優紀の瞳に光が完全に消し去ると、今度は懐から一枚のコインを取り出した。

それを男が優紀の右腕にあてた、その瞬間、コインからまるで虫のような六本の足が飛び出し、優紀の右の肘へと這っていく。

コインはそこで不気味な奇声を挙げると溶けるようにして禍々しい形状の腕輪になると、彼女の腕にガツチリと吸着した。

「ふふ、これでファイナルゲームの勝ちが決まったも同然ですね。」
鈍く光る腕輪を見た男は顎に手をあてニヤリと微笑むと、また一回、

優紀の頬を撫でた。

ドラン

息吹は意識が戻るにつれ、自分が今いる状況、傷の手当てを受けていること、そして何より自分の目の前に先程まで戦っていた相手…由美子がいることに驚き、そして戸惑い始めた。

「アンタ…どうして…。」

「まったく、アンタあれから5、6時間くらいずっと寝てたのよ。

よく…「どうして…」へ？」

「どうして助けたの？別に私、そんなこと頼んでないのに…！」

息吹は戸惑いで頭が混乱したまま、いつものような「よん」などが無い素の口調で由美子に詰問する。

「え、いや、どうして…。」

逆に問われた由美子の方がこんな質問を受けたことに戸惑ってしまふ問いかけ、だがそれもいた仕方ない。

何故なら彼女や直人が住む世界のイクサ達…「日向の一族」は戦闘部族、それも物心ついてから死ぬその瞬間までを戦いに生きる人間達だ。

敵の前で屍を晒すことさえ嫌う一族の一人である自分が、戦った相手にとどめをさされるどころか、あまりにも屈辱的な、戦闘部族にとっては最も恥と言える感情…「情け」をかけられた。

もちろん由美子はそのなつもりでやったわけでは無いのだが、息吹にとつては、そうとしか感じられない行いを受けていた。

「それで恩を売ったつもりなの？別にこんなことをされたところで私、感謝なんかしないよん。」

幾分か落ち着いたのか、元の口調に戻っているが、今度は変わって卑屈な言葉を由美子にぶつけてくる。

「あなた…。」

その言い草に思わず立ち上がりかける尾上、しかしそこへ伸びた腕、

由美子の腕がそれを制した。

由美子は目の向く方向を尾上に向けると、

「尾上さん、アンタは雪をお願い…。」

一言告げる。

「しかしこの子は…。」

尾上は由美子に口を開こうとするが、由美子は再度、「お願い。」と首を振る。

「…わかりました。」

尾上は仕方ないと肩を振ると、素直に従い、席を立った。

同じ頃、進也と直人、キバット2匹も目的の場所へ向け身体を急がせる。

特に進也はその小さい身体に負担をかけるのも厭わず、必死の全速力で走っていた。

「おい、進也、そんなに急いでたら戦う時身体がもたねえぜ！」

「大丈夫、優紀さんを助けるぐらいには体力を残しておくから！」

「…へへっ！」

立場上たしなめたキバット？も、その実進也に負けないスピードで羽根をばたつかせ、彼のスピードへ追いつがった。

「あ、それから直人さん。」

「…何だ？」

直人は足を止めず、振り向きもしないが、進也は続けて、

「さつきはありがとう。」

と答える。

「僕、変な時に臆病になっちゃう悪いところがあって、さつきももしかしたら雪さんが死んじゃうんじゃないかと思っちゃったんだ…。だけど直人さんのおかげで…。」

「別に助けたつもりはない…。」

「え…。」

「それに別にお前のそれは臆病じゃない。人を思いやり誰よりも心

配するお前の優しさだ。別に恥じることはない。」

「直人さん……。」

「それにこれで貸し借りも無し、それでいいな？」

言っている間、まったく進也に顔を見せず、言い方もそっけない直人。

しかし進也はその背中にある暖かさ、思いやりを何気なく感じると、

「うん！」

最高の頷きでそれに答えた。

そんな力強い会話が終わる頃、直人の腰に付けられた鈴が突如として大きく鳴り出す。

「直人、近いぞ！」

「ああ、わかってる。進也！」

「うん！」

二人と二匹は鈴の鳴る場所…戦いの舞台へ足を踏み入れていった。

21・最悪のゲーム

電話の相手…ファンガイアとの約束の場所、西通り公園は工事中のマンションが傍にある公園とは名ばかりにベンチしか無い大きな空き地だった。

約束の時間ギリギリにようやく到着した進也達、だっただがそこに相手とおぼしき人影は無くしんと静まりかえっていた。

二人はバラバラになって不意を突かれないう、辺りの様子を背中合わせで窺う。

「ファンガイアの気配は消えていない。油断するな…。」

「ああ、わかつてる…。」

現に直人の腰に付いた鈴は鳴りやむどころか、ここに近づいた時よりも激しく音を響かせていた。

それから公園の時計の秒針が二周した頃、「やつ」は唐突に姿を現した。

進也達が周囲を警戒しながら相手はその姿を現すのを待っていると、突如として大きな風が吹いた。

「わふっ！」

「うおっ！」

思わず手で顔を覆った進也が再び顔を上げると、そこには派手なスーツを着込んだ、如何にも怪しい男が立っていた。

「いつの間に…。」

同じく顔を上げた直人は驚く、その場にいたなら即座に気づくであろう怪しい男が自分にも気づかれずにこの場所に現れていたからだ。男はそんな二人に人懐っこい様な笑みを見せると、スーツの懐から懐中時計を取り出し時間を確認する。

「おや、二分も遅刻してしまつた。はは、いやすみません、お呼びした私の方が遅れてしまうとは面目ないです。」

男の喋り方は初対面の、それも普通の人間から見れば人当たりの良い好男子の喋り方に聞こえる言い方だ。

だが直人はそんな言葉には一切耳を傾けず率直に男に聞く。

「お前か、優紀をさらつたファンガイアは？」

「はい。」

冷静に、それでいて怒りを込めた直人の問いに、しかし男は眉ひとつ動かさず即答で返した。

「それじゃイクサの姉ちゃんを傷つけやがつたのも…。」

「イクサ、何のことかわかりませんがもう一人いた小娘のことですか？」

「な…！」

続いてきたキバツト？の問いに男の言い方が相手を小馬鹿にするような慇懃無礼な口調へと変わった。

「まったくせつかく私が美しいお嬢さんの『ついで』に『景品』として連れ帰ろうとしたのに抵抗しようとしたものですから、つい私もカツとなつてしまいました…。まことに申し訳ありません。」

「てめえ…！」

先程以上に建前の謝罪に爆発しかけるキバツト？。

「待つてキバツト。」

それを進也が制する。

「進也…。」

「ねえ、おじさん、『景品』って言ったってことは僕達がゲームをクリアしたら優紀さんを返してくれるってこと？」

「はい。」

進也の質問にまた、事も無げに答える男。

「本当に？」

「私、嘘は申しません。」

男の答えを聞くと進也は、

「わかった。」

と頷き、直人達を見る。

「直人さん、やろう！」

「おい、進也、奴はあの姉ちゃんをさらったファンガイアだぞ！返すつつたからって嘘かもしれないねえじゃねえか！」

「うん、わかってる。」

怒るキバット？だが進也は慌てず返す。

「でもこのままだと優紀さんの命が危ないかもしれないんだ。だから、僕はやるしかないと思うよ。」

「進也…。」

「進也の言う通りだ。それに俺達はみんな優紀を助けたい、その気持ちは同じだ。」

それでもまだ渋るキバット？に、キバット？は進也の言葉に賛同、かつキバット？に全員が思っている気持ちを向ける。

キバット？が直人の方を見る、だが直人は何も言わない、代わりに進也と同じ気持ちであることが表情から見て取れた。

「ちっ、俺も甘い…。仕方ねえ、進也の好きにしな。」

それにようやくキバット？も舌打ちしつつ進也の意志を飲み込み、受け入れた。

「意見はまとまりましたか？」

それまで待っていた様子の男も、会話が終わるのを見計らって再び口を開いた。

「うん、それじゃ初めていいよ。」

進也、そして直人達も男の問いに頷いた。

「それでは…参ります。」

男は進也達に向け、恭しくお辞儀をすると、指を弾いた。

それと同時に、空き地の一角にボワンとマジックのような煙が上がリ、そこから赤色と青色をしたドアが二つ現れた。

「普段普通の方々にやってもらうのとはちょっと違うのですが…。」

本日はあのキバが相手ですからね、こちらも趣向を凝らしたゲームをご用意させていただきました。」

そのドアを見ながらキバット？は、

「あの内、どちらか片方から妙な気配を感じる。恐らくそれが異空間への入り口だろう…。」

と呟き、キバット？も頷く。

「それがどちらかわかるか？」

「いや、やつはそれと同時に魔力に対する遮蔽力をドアに与えている、どちらがそれに繋がるかはわからんな。」

そんな中、男はゲームについての説明を始めた。

「さて、キバさんならお察しと思いますがこちらの扉のどちらかは私が作ったゲームステージへと繋がっています。今からあなた方にはこの二つからセカンドステージに通じる本物の扉を選んでもらう、そうファーストステージにチャレンジしてもらいます。何、簡単ですよ、選択肢はたった二つなんですから。」

男はそう言うと、またニヤリと笑った。

「それでは初めていただきましょう、どうぞ…。」

しかし男が叫ぶより早く進也と直人は赤いドアの前に立った。

「いやにお早い選択ですが…、そちらでよろしいので？」

「ああ。」

直人は事も無げに頷く。

「…ふふ、正解です！素晴らしい！」

男は驚くどころかハイテンションに直人を称賛すると再び指を鳴らした。

同時に赤いドアがゆっくりと開く、とそこには先が見えない程続く長い道があった。

「それでは次のステージへどうぞ…。あっ、ちなみにこちらは…。」
男が青いドアに指を鳴らすと、開いたドアから不気味な骨のような腕が飛び出し、何かを掴むように手を握るとまた中へ引っ込んだ。

もし間違えていたらあの腕に握り潰されていたことだろう。

「ふふ、あの手にミンチにされなくて良かったですね。おっと、私は次のステージの最終チェックがあるので…。」

男はお辞儀をするとその空間に溶け込むように姿を消した。

「ちっ、食えない野郎だぜ。」

キバット？は舌を打つとドアをくぐり、進也、直人、キバット？もそれに続く。

全員が中へ入ると、ドアはゆっくりと扉を閉じようとした、だがそこへ赤い紐のような物がドアノブに絡まり閉まるのを封じた。

そして紐が伸びてきた先から黒い影が姿を現すとドアの向こうへと飛び込んだ。

それと時を同じくして。

「まったく…これなら助けずほつといったら良かったかしら…。」

由美子は息吹と二人きりでの会話を試みようとしていたが、わめくのに疲れたのか、それとも話す気が無いかはわからないが息吹はそっぽを向いたまま一言も喋らなくなっていた。

しかしその顔を見れば、未だ消えていない戸惑いと情けをかけられたいと思いつている、複雑な表情が張り付いていた。

「まったく…あんときゃただ不気味な娘と思つてたけど…。」

口を開かない息吹を見ながら由美子は頭を掻きつつ考える。

「この娘、何となく私の昔に似てんのよね…。あの頃の私と…。」
その脳裏には先程の戦いの時、蘇つた思い出の中にいる幼い自分の姿、そして今の自分に至るまでの道が自然に浮かび上がっていた。

由美子はその思い出を頭に仕舞い直すと、息吹に向けて語り始めた。
「アンタ、前に会った時はただ戦う姿しか見てなかったけど、アンタって戦うこと以外の生きがいを見つけたことないでしょ？」

由美子がそう指摘すると、息吹の眉がほんのわずかだが…動く。

「やっぱり…。アンタ、それで今までされたことないから混乱してたってわけね？」

「違う…。」

息吹の震える口から言葉が漏れる、だが由美子はそれが聞こえてくるのかいないのか構わず続ける。

「ふふ、ま、いい歳こいて戦い戦い言ってたんならそうもなるわよね…。」

「うるさい…。」

だんだん苛立ちが混じった声で由美子の言葉を振り払おうとする息吹。

それに傾合いを感じてか、由美子の眼差しが真剣なものへ変わると、
「そんなんじゃないつまでたつても成長できないわよ。」

挑発から一転、鋭い刃のような一言を息吹の心へ突き立てた。

「うるさい!」

その瞬間、息吹は勢いよく立ちあがり由美子の胸倉を掴む。

「だったら何、アンタは成長してると言うの?」

興奮してか、息吹の口調からはまた子供っぽい語尾が抜けていた。

しかし由美子は驚くことも、そして慌てることもなく、

「ま、少なくともアンタよりは、ね。」

と事も無げに言葉を返すと、手を開き…息吹の顔に唸りを込めたビ
ンタをぶつける。

その力に息吹はよろめくとベッドの上に転げ、頬を押さえた、だが
その痛み以上に彼女の顔には目覚めた時を超える、驚愕の表情が浮
かんだ。

「どう、私のビンタの味、これでも手加減したほうなのよ?」

由美子はそう告げながら深く息を吐くと息吹に背を向け、ドアノブ
に手をかけた、しかし。

「待ってよ!」

息吹が後ろからかけてきた大きな声に手を止めた。

「それがアンタの強さってやつなら、私、それを超える強さを手に
入れるよ。そして…今度は勝つ!」

「ま、楽しみにしてるわよん。」
からかい半分に息吹の言葉を真似ると由美子は部屋を出て行った。
誰一人いなくなった部屋で、息吹は身体を震わせると血が滲むのも
構わず握った右拳を壁にぶつけた。

由美子がドアを閉め振り向くと、そこには尾上がのっそりと壁際に
立っていた。

「雪の様子を見ててって言ったのに…。ひよっとして聞いてた？」

「はて、何のことでしょうか？」

これだけ近くにいて、なおかつ狼男なのだ、聞こえないはずはなかつたが尾上はとぼけたように耳を掻いた。

由美子はイライラと歯ぎしりしながら、聞かれたことへの照れで赤くなつた顔を隠した。

異空間

「なあ、兄ちゃん、よくどっちの扉が入口かってわかったな。」

「…簡単なことだ。」

どう正解を見破つたか聞くキバット？に、直人はその仕掛けを話し始める。

「これを見る。」

「…鈴？」

ファンガイアの巢に入ったせいか未だに鳴り止まない直人の鈴、これにどのような仕掛けがあるのか？

キバット？だけでなくキバット？も首…ではなく身体を傾げる。

「俺が注意を青のドアに向ける度、鈴が激しく鳴っていただけだ。大して悩むほどのことでもない…。」

直人は顔色一つ変えることなく、あっさりと答え、二匹のキバットも納得したように頷いた、が。

「…嘘でしょ？」

進也がそっけなく、場に水を差す一言を呟いた。

「な、何でだ、俺にはそれで…。」

「だって直人さん特に考えもしないで、赤のドアの前に立ってた。それも鈴なんて見ないうちに。」

進也の言葉に直人は参った、とばかりに頭を押さえる。

「きつと優紀さんのことが大好きって気持ちが無自然に選ばせたんだよ。でもそれだと恥ずかしいから適当に理由をつけた、だよな、直人さん。」

普段は非常に幼稚に見える、いや本当に幼稚な進也だがその洞察力は並の大人以上に優れている。

それ故、ドランの店においても彼を励ました直人の言葉も情けや慰めからのものでなく、確信を持って言った一言だということに気付いた進也は元気を取り戻したのだ。

反面、普段空気を読まなければいけないところに言葉のトゲを刺して相手を怒らせることもしばしばあるが。

「お前には敵わない…。」

笑顔の進也に直人は顔をほころばせながら言った。

それからどれくらい歩いたことだろう、気がつけば辺りの風景や地面が全て変化をしていた。

「ここは…。」

進也達が辺りの様子を見てみると、空間の天井をすり抜けるように男が現れた。

「いやあ、先程はお見事でしたね、私心から感動致しました。」

「てめえ…!」

キバット?は青筋を立てて拍手をする男に体当たりをぶつけるが、それは男の身体をすり抜け天井へとぶつかった。

「んがつ!」

「無駄ですよ、今の私はファイナルステージにいます。これはただの監視役の幻影ですから。」

キバット?を嘲笑う男の姿が揺れる、そのことから見てそれは間違

いないと直人は確信した。

「もつたいぶらずに次のゲームを出せ。」

「ふふ、いいでしょう、では今度はこちらです。」

男が指を鳴らすとドンと音が鳴り地面が揺れた。

「何だ、何にも起きないぞ？」

「まあ、そう焦らずに……。」

間もなく地面はじわじわと端の方から進也達がいる中央の方まで消え始めた。

「こ、これは……。」

「今から私が出す簡単な問題に代表者の方が答えてもらいます。問題は全部で四問、代表者の方にはその中から一問だけ答えていただければ結構です。ただし一問間違える度に床はドンドン消えちゃいますから注意ですよ。あ、他の方がヒントを出すのは禁止です。」

「な、何だ、簡単じゃねえか……。」

キバット？が言う通り、誰もが簡単と言いそうなほどにハンドの多いゲームだ。

「さて、代表者の方は……？」

「俺が行く。」

男が問うよりも早く直人が前に出た。

「直人さん……。」

「次にどんなものが来るかわからん。ここは俺に任せてくれ。」

直人の言葉に進也は頷く。

「よろしい、ただしこのゲームでは代表者以外が口を出すことは許されません。そこで……。」

男がまた指を鳴らすと、どこからか大きなコインが三枚飛び出し進也と二匹のキバットの口を塞いだ。

突然のことにキバット達はコインを剥がそうとするが、まるで身体の一部であるかのようにコインは剥がれない。

「はは、心配しなくてもゲームが終われば自然に剥げますから御辛抱を。あ、でももしゲームオーバーしますと落ちるより早くコイン

についた爆弾で頭吹っ飛びますからね。」

「…貴様…。」

あまりの外道ぶりに睨みつける直人も意に介さず、

「はは、では第一問！」

ときなりゲームをスタートさせた…しかし。

「上は洪水、下は大火事、これが示す物は？」

男が出した問題に進也、キバット？の目が点になった。

「は…？」

「クイ、ズ…？」

わかる人には簡単にわかる小学生のような問題…答えは『風呂』だ。

「はは、もうクリア決定だ、行け、兄ちゃん！」

相手の問題ミス、そして秒速クリアを確信し、キバット？はエールを送る。

だが…。

「……………」

直人はいつもの無表情、それでいてどこか戸惑っている様子にも見える顔で黙っていた。

「…へ？」

「直人、さん？」

キバット？がチラッとキバット？を見るとキバット？も「わからない」と言いたげな表情で冷や汗を流していた。

「ひよつとして直人さん…。」

「こんなクイズ、やったことねえのか？」

だが実際、直人には子供として育った期間が少ない上、こんな子供クイズに親しんだことなどない。

むしろ、彼に人間らしさ自体、生まれたのは優紀と出会ってからなのだ。

彼にとっては子供クイズも超難問の数学問題に等しかった。

『これなら僕が出ていれば…。』

その間に床の消滅は徐々に進行していた。

「はい、時間切れ!」

男が言葉と共に指を鳴らし、消滅の進行は更に激しくなる。

『やべえ、まずいぞ、まずいぞ!』

進也達が大危機に陥っているその頃。

あれから更に時間が立ってもなお、雪の治療が終わる様子が無く由美子と尾上は部屋の前で手をこまねいていた。

「心配、ですか?」

「当り前よ、何があつたか知らないけど、あんなボロボロで虫の息になつて…。」

息吹といい、雪といい、自分が考えている以上の『何か』を持つている人間に苛立ちを感じる由美子。

「ですが今は祈ることしかできません。雪さんが助かること、坊ちやん達が無事に戻ってくることに、どちらにおいてもね。」

「言われなくてもわかつてるわよ…。」

それから数分もしない内だった、開かなかつたドアの中から糸矢…ドクターが出てきた。

「ふう…ってウゴツ!」

汗を拭く時間も与えず、由美子はドクターの胸倉に掴みかかる。

「ねえ、雪は大丈夫なの?どうにもなつてない?」

「ま、待ちなさい、話す、話すから放して!」

由美子の手から解放され更に荒くなつた息を吐き出し、落ち着いたドクターは両肩をすくめて答えた。

「ふう、いやはや医者你真似事しかできない我輩に無茶を頼むからだ。悪いがもう『手の施しようは無い』な。」

「そ、そんな…。」

無情に告げられた言葉にさしもの由美子も言葉を無くして座り込んだ。

『最悪だ！もう後一問しかねえ！』

そんなことが起きていることを知らない進也達も危機に陥っていた。あれから二問、またクイズが出されたのだが直人はそのどちらも答えられず、思わず口に出そうとする進也達も口を塞がれているので答えられず。

辺りを見れば、床も彼らがいる中心以外の全てが跡形も無く消え去り、消滅の進行も徐々にその足元へと近づいていた。

『兄ちゃんも当てずっぽうでいいから答えてくれよ！』

『直人さん…。』

「ふふ、どうしたんですか、もう後一問しかありませんよ？いや、まだ一問残つていると言うべきですかね？」

「…いいから早く問題を出せ…。」

口ぶりからは想像できないが直人もかなり焦り始める。

問題がまったく解けないことではなく、進也達、そして優紀の危機に。

男もそれがわかってしているのか、それを嘲る笑みで最後の問題、答えなければ即「死」に繋がる問題を出した。

「では…動物の中では人間以外のほとんどの生き物が持っているもの、それでいて人間が時に非常に重宝する道具にも使われ、また動物達が自分の才能を発揮する力となる、それはいったい何か？」

『急に難しくなりやがった~~~~~！』

キバットは涙を滝のように流す。

『何だアレ！ただの問答じゃねえか！あれをどう答えりゃ良いんだよ！』

キバット？が激しく男の問題に突っ込む中、進也は…、
『わかった、けど…。』

その問題の答えを早くも見つけながら、ヒントを言えない。

直人は直人でやはりわからないのか歯を噛みしめたまま、何も言わない、いや言えない。

「直人さん…。」

このまま答えられず全てが終わるのか…命の危機も間近に迫った時だった。

「む…?」

いつの間に飛び出していたのか、直人が持つラウズカード…彼らの世界に存在する怪物、アンデッドを封印したカード、その内の数枚がひらりと風に舞うように直人の足元へと落ちた。

「これは…。」

その中の一枚には以前、直人達の世界に進也達がやって来た際、直人が戦い封印したアンデッドの力が込められたクラブの3…「ビート・ライオン」…カードの中で拳を構える雄々しいライオンのカードがあった。

だがこんなものがあつたところでどうすることも出来ない。

何故ならばキバの力で戦い、カードの力を引き出す術をもたない直人にとってはラウズカードは何の意味もなさない無用の長物、ましてやこの状況での糸口を見つけたすこともできないただの紙切れに過ぎないからだ。

「ああ、もう兄ちゃん…つて、え?」

「直人?」

それにも関わらず直人は手にとつたカード…ライオン、鳥、昆虫を映したカードを凝視したまま、時間が減り足場が無くなっていくのも構わずその場に棒立ちをしていた。

それを上からずつと見ていた男は、どこか失望したような顔で指を前に差し出すと、

「タイム…。」

と口が開きかかった…が。

「『尾』だな？」

直人の口にした答えと共に、足場の崩壊が止まり、そして男も満面の笑みで微笑む。

「ふふ、正解です。」

それに伴ってか、進也達の口を塞いでいた大きなコインも元のサイズに縮まり直人の足元へと転がった。

「な、何でだ？」

「そう人以外の鳥、動物、虫のほとんどが『身体に一つは』持つ物、そして人間の道具に『加工』され、動物達も様々な才能…『鼓舞や武器』にも使う物の一つ、それは『尾』だ。」

「だがそれならまだ羽根とかもあるんじゃない？」

キバットが言うようにそれだけで答えを出すにはいささか苦しいものがあるが、直人はそんなキバット達に持っていたカードの絵を見せた。

「見る、こいつを。」

何の偶然か、それともカード達が指ししめたのかどれも『尾』が目立つ絵柄のカードばかりが彼の手の中に並んでいた。

「わけがわからなかったが、これのおかげで助かった。」

「おお…すげえ、何かすげえよ！」

「直人さん！」

進也が直人の腹にドンと飛び込む。

「うぐっ！な、何だ…。」

「やっぱ直人さんはすごい、かつこいいー！」

「進也…。」

柄にも無い一言を言われながら、どこか悪い気がしない自分の心、直人はそんな自分の胸と進也の頭を押さえると、ゆっくりと撫でた。

「いやあ、素晴らしい、感動させていただきました！」

言葉と共に飛び出す称賛に進也と直人、キバツト達の気持が現在の状況に引き戻された。

直人は一転、元の冷静な目で男を睨む。

「はっは、今までこのステージまでクリアした人間は皆無、それも皆さん方が最初のファイナルステージの進出者です。さすがはキバさんだけありますね。」

男は散々褒めちぎると指を鳴らす、すると今度は辺りの情景が男もろともぐるぐると渦を巻き、また姿を変えた。

完全に姿を変えたその世界、それは六面体の様相で天井、床、四方の壁が将棋、チェス、オセロ、スゴロクといったゲーム盤の絵になったこれまた奇妙な世界だった。

「今度は一体どんなゲームが待ってんだ？もうどんなゲームでもクリアできるって感じだぜ！」

「貴様、何もしてないだろ！」

二つのゲームをクリアしたのに調子づき、気が大きくなるキバツト？にキバツト？が突っ込んでいると。

「なかなかの根性だ、ぜひクリアして頂きたいものですな。」

扉も無い空間でどこから出てきたのか、進也と直人の正面に男が立っていた。

「な…！」

素早く飛び退く直人、しかし男はあの慥懃無礼の笑みのまま、動く気配がなかった。

「おや、ファイナルゲームが『私と戦ってそれを倒す』、何てことだと思いませんか？」

驚く直人の心を見透かしたような言葉を吐く男。

「ふふ、暴力が嫌いな私がそんなことをするわけないじゃないですか、したとしても今の間合いじゃあなた、死んでましたよ？」

動揺をさそってか男は次々と直人が思うことを当ててみせた。

「確かに当たってるな、だがそんなことで俺が驚くとも思ってたか？」
それに対して直人は元に戻した、そしてそれに僅かの怒りを加えた表情で男を逆に睨みつけた。

「だろうと思つて、ファイナルゲームはあなたがとびきり驚くものをご用意させていただきました！」

男は直人から離れながらそう言うと、指をパチンと鳴らした。

するとその瞬間、進也達の真上から鉄格子が彼ら目がけて降下してきた。

「進也…！」

直人が進也を庇う形で間一髪かわされた鉄格子は轟音と共に地面に降り立った。

「どういうつもりだ。」

「おや、まだ始まつてもいけませんよ？」

「何…？」

直人が振り向くと、鉄格子の扉が錆びついた音を鳴らし、開き始める。

と、同時に進也、キバット達、そして直人の目が驚きに見開いた。

「え？」

「まさか？」

「何？」

鉄格子から現れたのは誰であろう、進也と直人が探していた人物、そして今最も助けようとした人物…優紀だった。

「無事…だったのか…？」

その突然の再会に直人の張りつめた警戒が、ほんの一瞬だけ薄れた。
「ダメ、直人さん！」

進也の叫びに直人が我に返って飛び退いた瞬間、優紀の右足が前へと飛び出した。

「な、何…?」

「ふふふ…。」

その様子を見ながら微笑む男。

優紀は前にいる直人や進也がわかっていないのかハイライトが無い目のボンヤリとした顔で、彼らに襲いかかってくる。

「おい、俺がわからないのか?」

「待て直人!」

その時何かに気づいたキバット?が優紀の右腕を指し示す、そこには黒く禍々しい腕輪が彼女の腕に食い込んでいた。

「ありや魔具じゃねえか!」

「魔具?」

意味がありげな単語を呟いたキバット?に進也が優紀の攻撃をかわしながら聞く。

「ああ、ありやはめた人間や魔物を操る腕輪、それもあの形の物は…まずいぞ。」

「何がまずいんだ。」

「ああ、あれははめたやつライフエナジーを動力にして動く道具だ。それにあのタイプはつけられた奴が死ぬまで離れることはねえ!」

キバット?が吐いた絶望的な言葉に進也達の動きが固まる。

その隙に優紀は彼らを殴り飛ばすと、手元にバツクルとカードを取り出し、カードを差し込んだバツクルを腰にはめた。

「変…身…。」

ぼうつと呟くと優紀は腰にはめたバツクルを展開、

『OPEN UP』

出現したスクリーンをくぐり、Wラルクへと変身した。

「貴様、どういうことだ!」

遠くで見物に入る男に直人は憤る、だが男はそれを意に介さず、
「だから、これがファイナルゲームですよ。」
とさも当然のごとく話した。

「見てみればこのお嬢さんも仮面ライダーの様ですからね。ここは
一つ、仮面ライダー同士の勝負にさせていただきました。」

「仮面ライダー同士の勝負だと…。」

「ええ、面白いでしょ。でも簡単じゃないですか、彼女を倒して手
に入れる、ほら、簡単に景品が入りますよ?」

「貴様、このために…。」

ゲームをクリアすれば優紀の命は無い、かと言って躊躇すれば自分
や進也達が倒れる。

どちらをとつても直人達の『本当の勝ち』にはならない悪魔のゲー
ムだったのだ。

「優紀さん、やめて!直人さんがわからないの?」

直人と優紀の関係をよく知る進也は何とか優紀の心に語りかけよう
とする、だがWラルクは躊躇なくラルクラウザーの光弾を進也達に
撃ってきた。

「進也、変身するぞ!」

「でも…。」

「このままじゃ姉ちゃんも死んじゃう、その前に何か見つけんだ!」

「…うん。」

進也は頷くとキバット?を右手に掴む。

「ガブツ!」

キバット?に左手を噛ませ、現れるキバットベルト。

進也はそれにキバットを装着、キバへと変身するとWラルクへ向か
った。

「直人、俺達も…。」

変身を、と言おうとしたキバット？が言葉を止める。

直人が顔のあちこちに筋を浮かべ、血走った眼をしていたからだ。

「くっ、まずい…直人！」

キバット？の再度の呼びかけに直人が呟く。

「キバット、変身だ…。」

「ああ、ガブリ！」

いつものセリフを言う暇もないまま、キバット？は直人の手に噛みつく。

そして出現したベルトに、こちらもキバット？が装着、直人の姿をEキバに変えた。

「許さん！」

「お、おい…。」

「直人さん？」

ところがEキバはキバが相手取るWラルク、ではなく男の方へと向かい走っていく。

「はああ…！」

Eキバは心からの怒りを身にまとうと拳を握りしめた。

21・最悪のゲーム（後書き）

何とか二話更新しました！

いやあ、にしても書いた自分が言うのもなんですが、こじつけが多いなあ（汗）。

黒服さんに借りたキャラも暴走させまくっちゃいました（本当に申し訳ないです、書くのも時間かかったし）。

…ともかく次回はいよいよ（というか今度こそ）完結編です。

お別れ編に加えて特別な「あること」をやる予定です。

お楽しみに。

22・ファイナルバトルゲーム　そして（前書き）

前回から数日、今回は頭にたまっていたストーリーから一気に書き上げました。

いよいよ黒服さんとのコラボ完結編です。
それでは早速どうぞ。

22・ファイナルバトルゲーム　そして

「うおおおお！」

直人：Eキバは怒りを込めて振り上げた拳で男に殴りかかる。

「ふふ…。」

だが男は笑みを浮かべた表情を崩すことなく、指を鳴らす。

その瞬間、Kキバと戦っていたWラルクは彼を払いのけると目にも止まらぬ速さ（スピード）でEキバの矢面に立った。

「何！？」

怒りから正気に返ったEキバは拳にブレーキをかけようとするものの、既に遅く彼のフルパワーがこもったパンチはWラルクを殴り、殴られたWラルクは何度もバウンドしながら壁に叩きつけられた。

「しまった！」

そのまま地面に崩れたWラルク、しかしその指がピクリ、と動いたかと思うな否やWラルクは何事もなかったかのようにムツクリと起き上った。

「優紀…さん…。」

普段の彼女であればあの一撃で意識を失っていたはず、それにも関わらず優紀…Wラルクはまるで操り人形が糸で引き上げられるように立ち上がった。

その様子に様々なファンガイアと戦ってきた進也…Kキバも思わず絶句する。

しかし進也達が驚くのはまだ早かった。

「お嬢さん、あの二人はあなたの恋人を殺そうとする敵です。彼らを倒さなければあなたの恋人が死ぬことになりますよ。」

「直人さんの…敵…。」

男の囁きを受けたWラルクは手にボウガン…ラルクラウザーを構えると二人のキバにその銃口を向けた。

「おい、優紀、直人がわからないのか？」

キバット？がWラルクに呼びかけるが、Wラルクはそれに構わずラウザーの引き金を引き、光弾を放った。

「優：紀：。」

怒りに我を忘れていたのと変わって茫然と立ちすくむEキバに向けて放たれる光弾。

「危ない！」

Kキバの力任せの体当たりで吹き飛ばされたおかげで光弾は何もない地面に直撃するのとどまる、だがWラルクは変わらず人形のような手取りでラウザーを再度彼らに構えた。

「まずい、あの動きじゃもう相当のライフエナジーを吸い取られてやがる、もう10分もたねえぞ。」

「そんな：。」

「だがもしかしたらあのファンガイアを倒せば腕輪が外れるかもしれねえ：。」

「だけど攻撃をしようとしたら優紀さんの邪魔が入る：。となるとここは：。」

Kキバは緑のフェッスルを取り出すと、キバット？の口にはめ込む。バツシャーマグナムの軌道がコントロールできる弾丸で攻撃しようと考えたのだ。

「よっしゃ、よく考えた、バツシャーマグナム！」

キバットも賛同し、フェッスルからトランペットのような音が流れる。

だが：。

辺りは静まり返ったまま変化する様子はなく、呼び出したはずのバツシャーも来ない。

「無駄ですよ、私が作ったこの空間は音楽禁止でしょ。特殊な防音壁でフェッスルの音も封じられるようになってるんですよ：。」

「そんな：。」

Kキバが動揺した隙を見計らってWラルクが光弾を放つ。

「ぐっ…！」

数発の光弾を身体に浴びたKキバはきついダメージに片膝をついた。

「進也！」

「な、直人さん、気をつけて…。」

進也…KキバはEキバに注意を促そうとする、がここで先程まで傍らにいたはずの直人の姿がないことに気付いた。

「直人さん？」

そんなKキバにWラルクはズンズンと詰め寄るとラウザーを構える、その時だ。

「やめろ！」

彼女の後ろからEキバが飛びかかるとWラルクの手からラウザーを叩き落とし、身体をはがいじめにする。

「直人さん！」

「よせ、お前が探している男はここにいて、目を覚ませ！」

いつになく熱い口調でWラルク…優紀の心へと呼びかける直人。

「ぐ…お…。」

体力の低下で最早会話することもままならないのか、Wラルクは言葉にならない奇声を挙げていたがやがて、

「な、なお…と…さん…。」

僅かばかりのか細い声で直人の名前を口にする。

「優紀…。」

「ちっ、これはいけませんね…。」

その様子を見た男が指を弾くと、彼女に付けられた腕輪が鈍く光った。

「ぐ、おおおお…！」

Wラルクは再び奇声を挙げるとEキバ、そしてKキバを弾き飛ばし、落としていたラウザーを再び拾い上げ、取り出したカードをラウズ

する。

『Mighty』

電子音声が鳴り響くとWラルクは銃口をキバ達に向け、最強の光弾『レイバレット』を放つ構えをとる。

「ふふ、ゲームオーバーですね。」

勝利を確信した男がほくそ笑む。

「でも良かったじゃないですか、あなた達を倒した後、このお嬢さんはあなた達の元へと逝く…。そう死んでも幸せになれるんですよ？」

「く。。。」

自分の声でも呼び戻しきれなかったことを悔やむ直人は仮面の下で悔しげに歯を噛む。

しかし…。

「ふざけるな…。」

「はい？」

「死んで、それも無理矢理戦って殺されたも同然の人が…幸せになるはずがないよ！」

男の言葉を真つ向から否定するKキバ…進也。

「進…也…？」

その後ろ姿を見るEキバはそこに普段ニコニコと笑っている少年ではなく、非道な悪に怒りを向ける戦士が立っていることを心を感じた。

「直人さん、お母さんが言っていたことをもう一つ教えてあげる。」

「え…？」

「お母さんは『人の命を守る者が自分の命を粗末にはいけない』って言った…けどもう一つ、『愛する人を守るためならどれだけ自分が傷つこうとその人を守れ』って言ったんだ。だから僕は…優紀さんの命を…守る！」

「進也…フツ…。」

直人：Eキバは軽く笑うと立ち上がり、進也：Kキバの肩へ手を置いた。

「なかなか言ってくれるな、お前の母親は。」

「フフツ、いいお母さんでしょ？」

「話は終わりましたか？ではゲームも終わりです、やりなさい！」
男の命令にWラルクはレイバレットを放つ、その威力は腕輪の力で強化されているのか二人のキバの手でも防ぎきれかわからないほどに大きい。

「やるぞ、進也、例え身体が吹っ飛んでも…。」

「うん、最後まで諦めない！」

そして大爆発が起きる…。

「やれやれつまらないゲームでしたね…。」

男はがつくりと肩を落とすと、顔を押さえ…笑い出す。

「ハハハ、しかし私はキバを倒した、もう私達ファンガイアを止められるものは誰もいない、ハハハッハ！」

しかしその声は、

「誰を倒したじゃて？」

一つの声を聞いた途端、ピタリと止まった。

「何…？」

爆発の煙が晴れ、そこから現れたのは無傷の二人のキバ、そしてあの謎の老人だった。

「おじいちゃん？」

「アンタは？」

しかも老人はあの光弾の一撃を何と、片手一つで押さえこんでいた。

「な、何者だ、貴様…。」

突然姿を現した老人に男が問うと、

「ワシの誰かって？ふうむ…。」

老人は頬を掻く。

「まあ、聞かれたら… ANSWERするのが世の情けって奴かな？」
老人は口調を変えたかと思うと、持っていた杖を放り、代わりに白い笛の様な物を手に取った。

「サガーク！」

『#% ’ &&% ’ 』

老人が叫ぶと同時にどこからともなく、白い円盤状の生き物が姿を現す。

「あれは…都市伝説の、じゃあまさか！」

進也がその生き物の姿にあることに気付いた。

「変身。」

老人は呟くと腰に装着された生き物…サガークに持っていた白い笛を差し込んだ。

『HEん、シン』

サガークが奇声を挙げた瞬間、老人の身体はキバへの変身の時と同じような銀色の膜で覆われる。

そしてその背丈が背の低い老人から一気に頭身を挙げると膜が砕けた。

「これは…。」

二人のキバの前に立っていたのは誰であろう、都市伝説にその姿が出されていた『銀色の戦士』だった。

「おじいちゃんが…戦士だったの？」

「ん、NO、NO、BOY。あのOLDなBODYはMEがFACEを隠すためのただの変装さ。」

「あんだ、何者なんだ…？」

銀色の戦士に驚きながら直人は戦士に問う。

「ん、MEの名前？ふふ、MEの名は…。」

戦士は敵の方へ身体を向けながら進也達に背中中で名前を告げる。

「サガ、仮面ライダーサガ。この世界で最も仮面ライダーしてる、仮面ライダーさ。」

「仮面ライダー…。」

「サガ…。」

男はわなわなと震えながらサガに問う。

「貴様、私のゲーム空間にどうやって乗り込んだ!？」

「ん、VERY EASYなとき。お前がFAST GAMEの時、開けたドア、それにBOY達がぐった後を通っていただけさ。」

「馬鹿な、そんな馬鹿な…。」

「正体を隠していてSORRY!でもMEはこいつを探すのに苦労しててな、今回YOU達のおかげでようやく尻尾を掴むことができた。」

「へ、へえ…。」

「誰だか知らねえが…ウザいな…。」

某芸人張りに英語を挟む言い方に進也は唇を引きつらせ、キバツト？は僅かに青筋を浮かべる。

「な、何をしている、早く奴らをやれ!」

なりふり構わなくなつたのか男が叫んだ命令にまたWラルクが動き出す。

だがもうほとんど体力が残っていないのかももう足取りはフラフラだ。

「優紀…。」

「おっと、MEの仕事を助けてくれたお礼にあのLADYはMEが助けてやるぜ?」

「出来るのか?」

サガが言った希望の言葉にエキバが思わず問う。

「ああ、見てな…！」
言った刹那、サガはWラルクに向けて飛び出す。

「ああ…！」

Wラルクは向かってくるサガは格好の標的とばかりに光弾を放ってくる、だがサガはその光弾を数撃はかわし、数撃は手に持つ武器ジャコーダーを鞭状に変化させた武器で弾いた。

「ジャコーダービュート！」

サガは更にその鞭をWラルクに当て、体力を削いでいく。

「も一つオマケだ！」

そしてジャコーダーを鞭の形から剣の様な真つ直ぐな形に変え、Wラルクの右腕に突き立てた。

「ぐ、ああ…！」

その様子を見てキバット？が気付く。

「そうか、あの手は義手、奴は腕ごとあの魔具を壊す気だ！」

サガはまたジャコーダーを鞭に戻すと、腕輪がついた右腕の義手の部分にだけ、鞭を絡めつけると、腰から一本のフェッスルを取り出し、サガークの口に装填した。

『うえ！ 苦アツPU！』

キバットのコールと似た叫びをサガークが挙げるのと同時にベルトからサガの右腕、そしてジャコーダーに赤い電流が走る。

「SORRY！ 痛みは一瞬だ！」

サガは叫ぶとジャコーダーを力強く引く、と同時に鈍い音が鳴りWラルクの右腕が落ちて砕けた。

そしてその右腕についていた腕輪はドロリとした煙を挙げると蒸発するように消え去った。

その瞬間、Wラルクは糸が切れたように倒れ変身が解ける。

「優紀！」

駆け寄ったEキバが優紀を抱きかかえると、彼女はうっすら目を開

け、

「直人…さん…。」

とか細く呟く。

それを聞き、安堵したように腰を落とすEキバ。

逆に慌てふためくのは男の方だ。

「馬鹿な、今まで負けたことがないこの私が…この私が…。」
激しい動揺に男は頭を掻きむしり、うずくまった。

「ゲームは終わりだよ、君の負けだ。」

進也は男に告げる、が…。

「く、黙れ…、まだ本当の最後のゲームが終わってないぞ！」

「何？」

「最後のゲーム、それは私を倒すことだ！」

男は今までの余裕をかなぐり捨てると、遂にその正体…コックローチファンガイアの姿を現した。

「暴力は嫌いじゃなかったの？」

「黙れ黙れ黙れ〜！」

コックローチは子供が喧嘩をする時に使うような、腕をグルグル回して相手を殴る攻撃をしかけるが、既に助けるべき相手を助け余裕が戻った進也はそれをあっさりかわす。

「何〜！？」

「フツ、もうMEの力を貸さなくてもOKのようだな…。」

サガはほくそ笑むと後ろへと引き下がった。

「直人さん…行ってください…私は大丈夫ですから…。」

優紀は肩で息をするような苦しげな表情を何とか微笑ませると直人に言う。

「死ぬなよ…。」

「ふふ、大丈夫です…。」
直人…Eキバは優紀の生命力を信じると彼女を床に寝かせ、自らはKキバの援護へと飛び出す。

「おおお！」

コックローチは両手を掲げるとそこから緑色の粘液を連続で放つ。粘液は空気に触れると即座に固まる性質らしく、Kキバがかわし粘液が付着した個所に次々とガチガチとした塊が出来る。

「ハッハ！私のゲームをぶち壊した奴を楽に死なせるほど私は甘くない！全身を固めたうえでなぶり殺しにしてやる！」

「でも、攻撃は当たらないと意味がないよ！」

Kキバは粘液の弾幕をかくぐつてコックローチにパンチを決める、がコックローチは大きな両腕を重ねるとパンチの衝撃から身を守った。

「ジン…！」

コックローチは自分の攻撃の衝撃で怯むKキバに隙を見ると、今度こそと粘液を、今度は口からも放ってくる。

「うわ…ベトベトする…。」

「気持ちわりい…。」

諸に被ったKキバとキバツト？。

すぐに他のものと同様、ガチガチに固まった粘液に身体の稼働とスピードを遮られてしまう。

「こ、これ…結構重たい…。」

そんなKキバにコックローチの鋭い爪の一撃が浴びせられ、火花が散った。

「くっ…。」

「進也！」

そこへ優紀の元から離れたEキバも加勢に向かった。

「直人さん、優紀さんは大丈夫なの？」

「ああ、もう心配はいらない。」

Eキバの言葉にKキバは安堵のため息をついた。

「ふん！」

そしてEキバのパンチやキックで手足の粘液を砕いてもらうと、Kキバは彼と並んで再びコックローチと対峙する。

「貴様ら、二人まとめてあの世に送ってやる！」

「優紀さん、雪さんをよくも傷つけたな……。」

「貴様だけは……許さん！」

Kキバ：進也とEキバ：直人は互いに拳を握ると、コックローチへと向かう。

「はあああああ！」

「おおおおお！」

ダブルパンチ、ダブルキック、そしてEキバのアシストからのKキバのジャンプキック：二人のキバは息のあった連続攻撃をコックローチに決める。

「ぐ、お、がつ！」

元々大した戦闘力は持たないのかコックローチは反撃はおろか防御も出来ないまま、二人の連撃にダメージを負い、後方へと追いやられていく。

「ぐっつ！なめるな……！」

それでも何とか攻撃を振り払うとコックローチは両手の鋭い爪をパンチでキバ達に突き刺そうとする。

「ふん、はああ……！」

だがそれも空しく二人の腕に絡めとられ、腕をねじ回された上爪を叩き折られてしまった。

そこからガラ空きのボディめがけてダブルキバ、怒りのダブルパン

チが決まり吹き飛ばされるコックローチ。

彼が地面に叩きつけられるのを確認すると、二人はそれぞれウエイアップフエッスルをキバットの口に装填し吹き鳴らさせる。

「ウエイクアップ！」

笛の怪しげな音色が鳴り響く、と共に二人の右足の力テナの鎖が吹き飛ぶと蝙蝠の羽が広がり、そこについた三つの魔皇石が光る。

「直人さん、ここは一つ、『ライダーダブルキック』って言わない？」

「何だそれは？…まあ、いいだろう。」

二人は頷き合うと、大ジャンプから一回転、とどめの…。

「ライダーダブルキック！！！」

叫びと共に放たれた二人の必殺キックはコックローチの胸に叩き込まれ、彼を後方の壁へと叩きつける。

同時に壁にキバの紋章が刻み込まれると、

「ギャアアアア…！」

コックローチは絶叫と共に粉々に砕け散った。

「ゲームセットだ。」

キバット？が最後をこのセリフで締めくくった。

「んだよ、結局孫が締めるのか！」

「別に構わんだろ！それに孫ではない！」

二人のキバットが騒ぎながら飛び回っていると、今までいた異空間が歪み始める。

「奴を倒したから…ここも消滅するというわけか…。」

異空間はまた色を変え、形を変え徐々に薄れていくとやがて跡形も無く消滅、元の公園に戻った。

「帰ってきたんだ…。」

とここで進也は優紀のことを思い出し、辺りを見回すと、そこへ…。

眠っている優紀を両手に抱えた直人が歩み寄ってきた。

「直人さん、優紀さんは…。」

「何度も聞くな、ちゃんと息はしてる。」

「よかった…。」

進也とキバツト達が胸を撫で下ろしていると、そこに先程切り落とされた優紀の義手が放られた。

投げた方向を向くと、そこにはサガが立っている。

「壊してSORRY。だが義手なら何とか修理は出来るよ。」

サガはそう言っていると進也達に背を向ける、が。

「待って！」

進也に呼び止められサガはチラリと振り向く。

「助けてくれてありがとう。でも君は一体何者なんだい？」

進也の問いにサガはジツと黙っていたが…フツと微笑む。

「それはまたの機会のお楽しみ、それではSEE YOU！」

そうしてサガは飛び上がると、屋根伝いにどこかへと飛び去って行った。

進也と直人はそれをじつと見送った後、

「帰ろつか？」

互いに顔を見合わせ、歩き出した。

家…「ドラン」に帰った進也達、彼らを出迎えるのはもちろん、

「おっ、お帰り！」

「ちょうどお茶が入ったところですよ。」

由美子と尾上、二人による出迎えた。

温かく出迎えられる進也を見る直人は、わずかに進也を羨ましがる目を見た。

「優紀さん！ちょっとドクター！」

「はいはい…。」

直人に抱えられた優紀を見ると由美子はドクターを呼びつける。
ドクターは隣の部屋から返事をしながら現れる、がその容貌はどこか変だ。

着ている白衣のあちこちがボロボロ、かけているメガネをずり下がっている上にグンニヤリとひん曲がっていた。

「お、おい、こいつは一体…？」

何故かボロボロになっているドクターを直人が指さすと、ドクターは取り出したハンカチで、

「いえ、ちよつとジョークを言っただけなのに由美子さんが…。」
さめざめと流れる涙を拭う。

「大ウソこいてんじゃないわよ！あれが笑えるジョークか！」

逆に由美子はウガアと牙むき出しにドクターの言い分にブチキレた。

「こいつはね…。」

数時間前。

「手の施しようがないね…。」

ドクターに言われた由美子はドクターが止めようとするのを振り切ると無理矢理雪がいる部屋に入ると。

「…あれ？」

深い傷を負っていた頭に包帯を巻かれ、意識も戻っていないが、既に顔色は良くなっており今はただゆっくり眠っているだけだった。後から入ってきた尾上もその様子を見ると「良かった…。」とその場に膝を下ろした。

「いやいやあんな傷を負ってて血もダクダクだったのに凄いな。」

ちつともへこたれないし安定するまでも早い。この調子なら2、3日の内に意識も戻るだろ。」

「な、なんだ…ん、ちよつと待て！」

由美子も安堵しかけるが、思いとどまってドクターを睨む。

「じゃあ『手の施しようがない』ってどういう意味よ？」

「いやあ、ニセ医者である私が見る限りじゃもう治療する必要がな

い、つまりは『手の施しようがない』ということさ。」

紛らわしい言い方にメラメラ燃えている炎があることに気付かずドクターは続ける。

「それにさっきの君達のビビりっぷり、すっごく良かったんだよね。我輩思わず興奮ごふぁ！」

ドS発言が続く前にドクターの下顎に強力なアップパーカットが決まった。

それから当然言葉に出来ない何やかんやがあつた末、現在に至るわけだ。

「あんなことされたら我輩、もうお婿にいけない…。うっ…。」

「紛らわしい言い方すんな！」

由美子はもう一発殴ろうとするが、それではいつまでたっても優紀の手当てが出来ないので直人と尾上に止められた。

「おや、このお嬢さん義手なのかい？」

「ああ、そうだが？」

優紀の右手がないこと、そして壊れた人形のような手が落ちていることからのドクターの問いに直人が頷く。

「前に教えてもらったけど…何かあまりいい気分じゃないわね…。」
「ダラリと下がったりリアルな義手に由美子が思わずそう漏らす。

しかしそれとは対照的にドクターはその義手を掴んでニヤアと唇を三日月のように歪めた。

「じゃ、じゃあこれ、我輩が新しくしても構わんか？」

「あ、ああ。別にいいが…。」

何をするのかと感じながら直人はとりあえず許可する。

「よし、今からこれを改造してあげよう！」

『字が違〜う〜！』

ドクターの本音に由美子とキバット達が叫んだ。

翌日…。

優紀も持ち直し、一同に束の間の平穏が訪れたころ。

『それ』は不意に訪れた。

尾上がいつものように外の掃除をしようと店を出ると店のすぐ傍にあのオーロラが現れていることに気付いた。

彼の大声に進也達も外に出、『その時』が来たことに気付いた（由美子もそれに備えられるように数日『ドラム』に寝泊まりしていた）。

直人と優紀はファンングに荷物を載せながら一人足りないことに気づく。

「ん、あのイクサの女が見当たらないが？」

そう、イクサ・息吹も直人達の世界の住人。

となればこの時には姿を現すはずだが…。

「ああ、アイツなら昨日私が目を離している内にいなくなっちゃったのよね。どこに行ったんだろ？」

あれから息吹は姿を消したらしく、既にドラムに姿は無かった。

「孫よ、今度こそお別れだな。」

「だから孫ではない、というかいいい加減離れろ！」

キバット達も別れを惜しみあう、というよりは涙と鼻水に汚れたキバット？がキバット？にベタベタと抱きついているのをキバット？が嫌がっているだけだが。

「さて、これが新調した義手だ。前のよりさらにいい物になってるぞ。」

昨日の間に新たに作られた義手の心地を確かめる優紀。

前の物の具合も悪くはなかったが、これはかなりフィット感が違う…まるで本物の手を使っているような感触だ。

「…ありがとうございます。」

「アンタまさか余計な手を加えてないでしょうね？」

素直に謝礼の言葉を言う優紀と睨みを利かす由美子。

「八八とんでもない…あ、もし直人さんとやらがピンチになったら強い気持ちを込めて右手を前に掲げなさいよ。」

由美子に聞こえないように入れ知恵をするドクター。

そんな喧騒の中、進也、そして直人は静かに語り合っていた。

「…しばらく世話になったな。」

「ううん、いいよ。これは昔の分のお礼。」

礼を言う直人に進也はいつものように笑って返す。

「そうか…。」

直人は呟くと、進也の後ろにいる由美子、尾上、ドクター…そしてキバット？と言った面々をチラツと見るとどこか寂しそうに微笑む。

「お前は、羨ましいな…。」

「え？」

「お前には仲間がいて、帰る場所がある…。それが俺には羨ましい。」

直人が言った告白に進也は一瞬驚く、がすぐにまた微笑んでこう返す。

「直人さんだって大事な人、仲間がいるよ。」

「え…？」

「だって直人さん、優紀さんのことになるともう恋人を通り越しちゃうくらい感情が爆発するもん。僕、思わず止めちゃったけど…その気持ち、わかるような気がするんだ。」

そう言っただけで頭を下ろす進也。

直人はその姿に何かを感じたが、何も言わず静かに見ていた。

そして直人と優紀はバイクにまたがると最後にまた進也に目を向ける。

「進也さん、みなさん、ありがとうございました。」

礼と共にニツコリ微笑む優紀に一同もまた笑顔で返す。

「まあ、楽しかったぞ…爺さん。」

「ムッ、俺は爺さんなどではないぞ！」

最後にジョークを見せたキバット？にキバット？がその口調を真似る。

「直人さん…また、会える？」

進也は最後に直人に聞く。

直人はフツと微笑むと…。

「いや、お別れだ…。」

そう告げてエンジンをかける。

走り出したファングは勢いよくオーロラをくぐりぬけると、やがてエンジン音と共に姿を消していった。

オーロラも徐々に薄れゆくと風景へと消え去った。

「さようなら…直人さん…。」

「行っちゃったね…。」

由美子は息をつくと進也の肩に手を置く、がその手をメキヨと握りしめるとまたドクターを睨んだ。

「そつえばアンタ、あの義手に何か仕込んだでしょ？」

「え、や、やだね。」

ドクターは汗まみれで否定する、しかし逆に汗まみれなことが「何かをした」ということへの動かぬ証拠になった。

「何したのよ…。」

「リ…レイ…。」

「聞こえないわよ！」

胸倉を掴まれたドクターは「ヒィ」と叫ぶと、

「リパルサー・レイだよ。」

と答えた。

「？何それ？」

カタカナ言葉が苦手な由美子が進也と尾上を見ると二人、そしてキバット？は「ゲツ」と言った表情で冷や汗を垂らしていた。

「え、何？何なの一体？」

何かヤバ気な反応に由美子が再度聞くと、

「アイア マンが手に装備した…高出力のビーム砲、かな？」

と進也が冷や汗混じりに答える。

「いやあ、ちょうど義手の人間がいてくれて助かったよ。本当なら腕を切り落として装着するところだけど流石にぶるああ！」

「このマッドサイエンティスト！」

懲りないドクターはまた由美子の強烈ナックルをくらいましたとき。

夢の中…。

「さあ…ちゃん、挨拶なさい…。」

「誰…。」

どこかの明るい部屋の中、女性が手に抱いた赤ん坊を誰かに見せた。しかし女性も赤ん坊もその顔にはもやがかかっており、誰かはわからない。

「ここは、どこ…。だけど見覚えがあるような…。」

「この子が…よ、『雪ちゃん』。」

「…！」

夢？を見た雪はベッドの上でボンヤリと目を覚ました。

「あれは…一体…？」

22・ファイナルバトルゲーム　そして（後書き）

長くなりましたがようやくコラボ編、完結と相成りました。

今回の別れの言葉は映画「メン・イン・ブラック」の主演二人の別れ言葉をもじったものです。

優紀にとんでもないプレゼントを与えてしまいましたでしたがこちらは有効利用なり外して変えるなり好きにいじくってくださいって結構です
黒服さん、今までありがとうございました！

今回の最後に加えた伏線を交えて、次回から新章突入です。

新キャラ、新展開に次回からはいよいよ「恋愛」もストーリーに加えていこうと思いますので、皆様の応援、感想、お待ちしております
ます。

それではまた次回に。

23・新章・紅牙の巻（前書き）

みなさん、こんにちは。

今回から新章スタートに当たって、今回のストーリーは初めての方でも出来る限り読みやすいよう、また今までの読者の方々も楽しんで読んでもらえるストーリー構成にしておりますので、ぜひご覧ください。

もちろん前回の予告通り、今回から新キャラも続々登場予定でございます。

それではどうぞ。

23・新章・紅牙の巻

進也達と再会を果たした異世界のライダー：不知火直人と東雲優紀。激戦を力を合わせて共に戦ったもう一人のキバ達と別れて、早くも二週間の時がたった…。

どこかの暗い空間、進也がその中を一人、佇む。

「ここは…？」

「や…。」

進也が辺りを見回していると、どこからか小さな声が響く。

「誰？」

「しん…や…、進也…。」

声が大きくなるに連れて進也はその声の主が誰かということに気付いた。

「その声は…お母さん？」

「進也…！」

進也が前を見ると、そこには黒い衣装を纏った母…真夜が立っていた。

「進也…！」

「お母さん…！」

進也は真夜が伸ばす手に触れようと、自らも手を伸ばすが…。

「お母さん…！」

「く、紅君？」

気がつくくと進也は教室の自分の机に突っ伏して、両手を教師に向かって伸ばしていた。

「え、あ…？」

立ちあがって辺りを見ると、教師はギョツとし、クラスメイト達は

引きつった顔で乾いた笑い声を出していた。

「く、紅君、あなたみたいな優等生が…珍しいわね…。」

「ご、ごめんなさい！」

本気でビビる教師に進也は目一杯頭を下げた。

ドラン

「そついや坊ちゃん、そろそろ学校終わりだよな？」

売り物の人形のホコリを落としながら優輝が聞くと、

「ええ、でも今日は図書館に行って帰るから遅くなるって言っ
ましたよ。」

尾上も陳列棚の皿や壺を磨きながら答える。

「坊ちゃん、一人…心配。」

「大丈夫ですよ、キバットさんがついているそうですから。」
不安そうに目を細める力をなだめる尾上。

一つの人形を拭き終わると、別の人形をとりながら優輝は別の、ド
ラン内での新しい話題に入る。

「そついえば、坊ちゃんが言ってた『サガ』って仮面ライダー、あ
いつは何者なんだ？」

「サガ、ですか…。『闇のキバ』の鎧は聞いたことはあるんですが
…。」

尾上が言いながら力を見る、が力も「知らない」とばかりに首を振
った。

「何者なんでしょうか…？」

尾上は考え込む、と同時に手から力が抜け、手の中にあつた皿が落
ち、砕ける。

「あああああああ！」

ドランからけたたましい絶叫が轟いた。

図書館

広げた分厚い本を開いたまま、進也は頬杖をついてボクツとしていた。

「どうしたんだ、進也？今日は一日中変だぜ？」

リュックの中からキバットが声をかけるが、進也からは返答はなくボクツが続いたままだ。

今日は平日ということもあって図書館を利用する客は少なく、その中で本も読まずボンヤリしている進也は他の客からチラチラ、ジロジロと見られていた。

「兄ちゃんが別れたのをまだ引きずってる……ってこたないか。」

確かにいなくなったその日は丸一日しょぼくれていたが、流石に二週間もたっているのにそのまま、なんてことはないだろう。

第一、進也はいやなこと、悲しいことは「ただひとつ」を除いてすぐに忘れるたちなのだ、これもそれほど問題ではないはずだ。

「じゃあなんだ、俺があいつのヴァイオリンの弦を切っちまったことか？それともあいつがとっといたプリンを半分食べちゃったことか？」

考えてみるが思いつかない、というか全部キバットが何かしら関わっているが気にしない。

キバットが何だ、と考えていると、いつの間に読み終わったのか進也は本を片手に持って書庫の方へと歩き出した。

「あ、おい……って動けねえ！」

キバットは後を追いかけようとするが、こんな場所で動き回れるはずもなく、悔しそうにリュックの中でバタついていた。

その時、もぞもぞ動くリュックに人々がギョツとしていたことは言うまでもない。

「あの夢はなんだったんだろう……。」

進也は先程見た母親の夢のことを考えながら、読んでいた本をしまし新しい本を数冊取り出していた。

「うん…。何なのかな…。」

考えるまま、周りの様子を気にせず歩く進也。

その横の方から本を前が見えない程抱えた少女がヨロヨロとよるめきながら、進也の進路へと歩き出してくる。

「え、わあ!」

「きゃあ!」

前を見てなかった、見えなかった二人は飛び出したところで接触し、お互い尻もちをついた。

「いたた…あ、ごめんね。」

「あ、いいんです、大丈夫ですから…。」

眼鏡をかけた少女は慌てて本を拾い上げると、またヨロヨロした足取りで本をカウンターまで持っていった。

「大丈夫かな…、ん?」

心配しつつも、起き上がろうとした進也は足もとに学生証…自分の学校の学生証が落ちていることに気付いた。

「これは…。」

自分の学生証はリュックの中に入れていたはず、ということはあの少女の物が。

進也が見てみるとそこには確かにあの眼鏡の少女の顔写真があった。しかし写真でも光の反射で目が隠れ、名字もかすれているのかイマイチ読みづらかったが、

「沙耶」

と名前のところだけ何とか読めるようになっていた。

学年は中学一年生…進也の一歳下だ。

「沙耶…さんか、よし明日届けてあげよう。」

それから帰り道、キバットに騒ぎたてられたが…。

どこか。

「じゃあまたね〜!」

友達と別れた高校生の少女が一人、家路へと歩いてきたが、少女が耳をすませれば後ろから歩く足音がついてきている。

「え、何、ストーカー？」

少女は早く帰ろうと足を速める、と足音もスピードを上げる。

更に少女がスピードを上げるのに合わせて足音も速度を上げた。

「ちょ、もう、何なのよ！」

少女が苛立ち混じりに振り向くと。

「ひっ！」

いつの間にか目の前に気味の悪い中年の男が立っていた。

「な、何…、誰…？」

少女が涙目で呟くと、男は両目をニヤリと細めながら、

「あなたを…私と一つにしてあげましょう…。」

姿を怪人…イヤーウィッグファンガイアへと変えた。

「何やってんだ、お前ら…？」

ドランへ戻った進也達の目の前で、尾上、優輝、力達は真剣な表情でバラバラになった皿を接着剤で組み立てていた。

「待ってる、坊ちゃん…、あともう少しだから…。」

慎重に、慎重にピースを組み立てていく三人。

キバットがそれを白い目で見つめていると。

いつもの様に激しい音を立てて壁のヴァイオリンの一つが鳴り出す。

「進也！」

「うん！」

荷物を置く間もなく、進也達は店を飛び出す、とその足もとにあった皿の破片を踏み砕く。

「あああああああ！！」

進也達がかけてつくと、そこには見知らぬ少女、そして彼女に今にも襲いかからんとするファンガイアの姿があった。

「キバット！」

「おう、ガブツ！」

幸いに少女から見えない位置だったため、進也は死角でキバットを装着、キバへと変身する。

「それでは…。」

イヤーウィッグが少女に覆いかぶさろうとした瞬間、飛び出してきたキバが怪人を撥ね退ける。

「逃げて！」

「え、はい！」

突然現れた仮面の戦士に驚きつつ、少女はその場から逃げ去った。

「うぬぬ、よくも僕の少女を逃がしたな！」

怒りながら襲いかかってくるイヤーウィッグをキバはパンチで跳ね飛ばす。

「何が彼女だ、嫌がつてるのに無理強いしてたじゃねえか！」

「それは、僕と一つになるのが怖いからさ。ただ僕はあの子を僕の身体の一部にしたいだけなのに…。」

「チツ、キモい奴だな！」

キバットが嫌悪感を剥き出しにするのに合わせ、キバも怪人にパンチ、キックを順序良く叩き込んでいく。

イヤーウィッグは怪力こそあるものの、変わった特殊能力は無く、その攻撃に軽く追い詰められた。

「な、何なんだよお前、何で僕の邪魔をするんだ！」

「僕？僕は仮面ライダー、キバさ！」

言葉と同時にキバは再度、イヤーウィッグをパンチで吹き飛ばした。

「よし、進也、とどめだ！」

「うん！」

弱らせたのを見ると、進也はウェイクアップフェッスルを取り出す、だが。

「くっそ〜、覚えてる〜！」

イヤーウィッグはむっくり立ちあがってそう叫ぶと、黒煙を吐いてその中に紛れた。

「あ、くそっ！」

キバは煙をかきながら怪人を探そうとするが、既に姿は無く、後にはイヤーウィッグが残した煙しか残っていなかった。

「駄目だ、逃げちゃってる…。」

キバは残念そうに呟くと、変身を解いた。

暗い道すがら、ボロボロの体で歩いていたイヤーウィッグはせえせえと重い息を吐くと変化を解き、人間の姿へと戻った。

「くっそ〜っ、なんなんだよアイツ…。僕と和美ちゃんが一つになるのを邪魔しやがって〜。」

男はまるで幼児のように呻くと、ポケットから手帳を取り出し、一つのページを開いた。

「ウフ、ウフフ…。」

それを見た人がいたならゾツとしたであろう、その手帳にはびっしりと細かく女性の名前と、その住所と電話番号が書かれていた。

ところどころ×印が書かれたその手帳を、男は気味悪く笑いながら見ていたが、その内に鼻息荒く呟き始める。

「まったく…和美ちゃんはこれまで長く恐怖を育てていたのに…、あんな邪魔が入るなんて…。」

男の口ぶりから察するに、彼は目をつけた女性の素性を調べては、ストーカー紛いの方法で女性達を苦しめた上、ライフエナジーを吸っていたようだ。

その過程、キバに攻撃を受けたのは自業自得なのだが、男は悪びれるどころか、キバへの逆恨みで鼻を鳴らしていた。

「よ〜し、こうなったら明日はやけ食いだ〜！」

男は叫ぶと、夜の街の中をドタバタと走り抜けていった。

翌日。

「はあ、結局寝不足だよ…。」

あれから進也は一日で起きた三つの出来事のことを頭に浮かべたまま、ほとんど一睡もせず、寝不足頭のまま学校へと歩いていた。

「おいおい、昨日の奴がまた出てきたら戦えねえぞ。」

「ん、大丈夫、昼までには回復するから…。」

寝ボケまなこでキバットに返すと、進也はポケットから昨日拾った学生証を見た。

「ZZZ…。」

「あの、紅君？」

それから昼休みまで、進也が机に突っ伏していたのは言うまでもない。

昼休み

進也は学生証の中の辛うじて読める字をもとに少女の教室へとやってきたが。

「えっと…あの子、名前なんだっけ？」

「成績は優秀みたいだけど…あんまり人と喋らないしね。」

「いつも隅っこで本を読んでいるのはわかるんだけど…。」

クラスでは非常に目立たない存在らしく、クラス内で彼女の詳細を知っている人間はほとんどいなかった。

それでも何とか、

「ああ、あの子ね、あの子ならご飯食べた後いつも図書室に行くよ。」

との証言を聞いて、進也は一路、図書室へと向かった。

だが図書室に来たはいいものの、そこにも探す少女の姿はなかった。

「あれ、おかしいな？」

図書室では静かにしつつか騒ぎ立てると廊下を出てから図書館司書・

茶川竜（47歳）の『鬼の制裁』を受けることになる）少女のいそ
うなところを聞こうとする進也だが中高共同の図書室、かなりの人
数が入りするためか一人の地味な少女を気にする人間は一人もお
らず、居場所はおるか、情報を得ることすら出来なかった。

はあ、とため息をつきながら歩く進也。

思いも寄らぬ捜査の難航に頭を悩ませている内に、時計はまもなく
昼休みが終わる時間を指そうとしていた。

「湊先生なら生徒のことを知っているような気がするけど…。」

進也の頭に思い浮かべられるのは、保健医・湊。

噂によれば彼女はこの学校の人間の個人情報校長以上に精通して
いるらしく、中でも全校生徒のプロフィールに関しては住所はおろ
かスリーサイズや趣味までわかるという。

彼女にかかれば例えば地味な生徒であろうと数秒で見つかるまで言
われているほどの噂話だ。

「ううん、ダメだ。」

進也は頭を振ってこの案を打ち消す。

その肝心の湊は今日を含めた数日、空手部の県大会に校医として同
行して留守にしていたため、この日は保健室には彼女はいなかった
のを思い出したからだ。

ちなみに由美子もいつもの助っ人に召集されたため、彼女も学校に
はいない。

「はあ…。」

頼れる人物がなく、肩を落とす進也だったが、ふと校庭に目をやる
と、喧騒の中、唯一人気の無い施設：飼育小屋：正式には飼育室：
がまるで進也の目に入るようにポツリと佇んでいた。

小中高一貫で三つの学部に分かれているこの学校では、学生同士で
共同使用されている施設が多い。

通称で飼育小屋と呼ばれているこの飼育室も共同使用されている施

設のためか、他の学校と比較するとかなり大きな施設だ。

区画されたオリの中には定番のウサギやニワトリはもちろんのこと、この学校周辺で過去に保護された野鳥の子孫や生物学習に使われる小動物など数多くの生き物が収容されていた。

「お邪魔します…。」

進也が中に足を踏み入れた瞬間、オリの中の鳥が一斉に羽ばたき、色とりどりの羽を散らす。

おそらくは静けさの中に他者が入り込んだことにより、鳥達が驚いたからなのであるが、進也にはそれが鳥から自分への歓迎のように感じた。

「わあ！」

思わず目的を忘れそうになる進也、しかしすぐにハッと我に返ると中を探索し始めた。

それから程無く、ウサギのオリがある辺りに人影がうずくまっているのが見えた。

進也が近辺まで近づいてみると、それは紛れもない、昨日の少女だ。少女はオリの中を走り回るウサギ達の様子を座り込んでジッと見つめていた。

「あ…。」

すぐに近づいて声をかけようとする進也だが、それに至る前に足と口が止まった。

昨日ぶつかったときの様子、学生証の顔写真、彼女のクラスメイトから聞いた話などが嘘に思えるほど、少女は優しい横顔でウサギ達を微笑ましげに見ていたからだ。

だが進也が改めて近づいた途端、少女は人の気配にビクつくとおろおろと振り向いた。

「ひゃ…あ、あなたは…。」

少女はしばしオドオドした様子で進也を見ていたが、やがて昨日ぶつかった相手とわかったからか、若干表情がやわらいだ。

進也もそれを察すると、少女に気を使って、微笑んで見せた。

「あ、あの…昨日はごめんなさい、ちゃんと謝れなくて。」

「ううん、いいよ、それより…ハイ、コレ。」

「え？」と少女は進也に手渡されたものを見、それが自分の学生証とわかるとまた頭を下げる、が勢いあまってオリに額をぶつけて目に火花を散らした。

「ギャツ！」

「ひゃつ、だ、大丈夫？」

「だ、大丈夫です…。」

ぶつけた時に眼鏡が落としたようで、拾い上げるその時、少女のレズンの奥の目が現になった。

「？　どうか、しましたか？」

「ふうん、結構かわいい顔してるんだね、『沙耶ちゃん』。」

寝めるついでに名前を呼ぶ進也、しかしながら彼の言うように少女の眼鏡の下の顔は思いの外、それも綺麗と可愛いの間ぐらいには入る顔をしていた。

「え、えつと、あ…。」

少女…沙耶は慌てて眼鏡をかけると朱に染まった頬を押さえたが、やがて目をくらくらさせるとその場に卒倒した。

「え、ちよつと、ねえ、大丈夫？」

進也は突然倒れたことにあたふたしながら、少女の身体をゆすつた。原因は自分にあるとも知らずに。

それから数分、何とか目を覚ました沙耶を連れて、進也は普段あまり利用されない階段に腰を下ろした。

「あ、あの、さっきはごめんなさい。」

「へへ、僕の方こそ。それより何で飼育小屋にいたの？僕、友達からいつも図書室に来ているって聞いたけど？」

進也が問いかける、と少女はまた恥ずかしそうにうつむきながら、
「その、あそこで動物達を見ていると落ち着くんです、だからたまに…変、ですよね？」
と答えた。

だが進也はその答えが不思議、と感じているような顔で頬を掻き、
「別に、変じゃないよ、僕もそうだったし。」
と返す。

今でこそ明るく純粋な少年に見える進也だが、いや実際そうなのだが…彼も母親がいなくなつた一時期、元気が無いまま、飼育小屋に通い動物達とだけ話していた時期があつた。

それから紆余曲折、ようやく今の明るさを取り戻した進也から見れば沙耶は、昔の自分によく似た人間にも見えたのだ。

それを進也の口から聞くと、沙耶はどこか安心したのか、今度は自分の身の上を話し始めた。

「私、お姉ちゃんがいるんです、それも凄くスポーツ万能でケンカも強いお姉ちゃん。」

「強い、お姉ちゃん？」

進也の頭に自分の傍にいる強いお姉ちゃん（由美子）が連想される。

「私、お姉ちゃんに憧れて自分も空手とか柔道とか習ってみたくて、思つたんですけど、私、昔から身体が弱くてお姉ちゃんに迷惑かけてばかりで…。」

比べられているわけでは無いのだろうが、親や姉からは昔から氣を使われっぱなしで、彼女はそれを苦痛に感じていたのだという。

「だから少しでも頑張ろうと、私、人一倍勉強しているんです。将来、お姉ちゃんたちに胸が張れるように。」

それで図書館に…、進也は気持ちを察するとくすりと微笑む。

「え、あの、変でした？」

「あ、ううん、素敵だと思うよ。頑張つて。」

進也の励ましに沙耶の顔がほころんだ、よっに見えた。

「ありがとうございます、紅先輩！」

「え、せ、せんぱい？」

だが頭を下げて言われた呼ばれ方に今度は進也が戸惑う。

その頃の進也の教室。

「はっ、これは？」

キバットは何らかの気配に身体を震わせる。

「マズイ、早く進也に……」

キバットは無理矢理リュックに体当たりを決めるとようやく外に飛び出し、

「では、消えまゝす。」

身体を景色に溶け込ませると、パタパタと教室を飛び出していった。

そしてドラン。

ようやく何とか組み上げた皿を尾上はそろりそろりと元あった台の上に置こうとすると、突然壁のヴァイオリンがけたたましく鳴り出した。

「え、わ、わ！」

驚いた拍子にまた手を滑らせ、皿を落とす尾上。

当然、接着して組み上げただけの皿はまたバラバラに砕けた。

「ああああああ！」

悲痛な悲鳴、Part 3。

畏まった言い方、言われ方が苦手な進也は沙耶の『紅先輩』との呼び方にいつもの平静さはどこへやら、無茶苦茶に戸惑っていた。

「あ、いや、でもぼ、僕『先輩』じゃなくて良いし……そ、それに思っただけ、そんな敬語みたいな言い回しじゃなくてもいいんだよ??」

「え……でも……」

沙耶は言葉に合って真面目な性質らしく、進也の言葉に口を渋らせる。

「ほら、僕も『沙耶ちゃん』って呼んでるんだから…。」
と進也が言葉を改めさせようとしていると。

「グへ。」

用務員の服を着てはいるが、どこから見ても怪しい男が進也と沙耶の後ろに立っていた。

「え、だ、誰？」

男はキョトンとする進也と沙耶の前でニヤリと笑うとイヤーウィッグファンガイアに姿を変えた。

「お前は昨日の…！」

ヒツと口に手を当てる沙耶を庇い、進也は男の前に立つ。

「グへへ、この用務員の服を盗んで着たら誰も怪しまなかつたよ。おかげでこゝんないいご馳走にもめぐり合えたしね。」

男：イヤーウィッグファンガイアはまた声に似つかわぬ、幼稚な声でよだれをすすする仕草を見せた。

「手出しはさせない…。」

きつとキバツトも気付いてすぐ来るはず…、進也はそう考え自分を盾にイヤーウィッグに睨みをきかした。

「ん〜、何かわかんないけどお前ム力つく。」

だがイヤーウィッグはそんな進也を見て不機嫌そうに首を傾げると、腕を振るって進也を吹き飛ばした。

「うわあっ！」

「あ、ああ…！」

庇いだてが無くなった沙耶を見つめると、イヤーウィッグはまるで笑うように身体を振るわせた。

「う〜ん、怯える女の子、うまそうだな〜。」

そう呟くのに合わせて、沙耶の頭上に吸命牙が浮かび上がった…。」

「そうはいくか〜！」

寸前で飛び出してきたキバットがイヤーウィッグを跳ね除け、吸命牙を打ち消した。

「キバット！」

「悪い、待たせたな。」

キバットは謝罪すると進也の元に飛び、進也の右手にキャッチされる。

「それじゃ、本日もキバるか、ガブツ！」

進也がキバットに左手を噛ませると魔王力が彼の身体に注入、下顎に紋様が浮かびキバットベルトが腰に形成される。

「変身！」

進也はコールと共に、ベルトにキバットを装着、その身体が鎧に包まれ、キバへと変わる。

「え、先輩…？」

「へへ、実は僕、仮面ライダーなんだ。」

驚く沙耶に進也…キバはそう告げ、イヤーウィッグをパンチで跳ね飛ばす。

「お、おい、あれ？」

校庭でサッカーをしていた一人がふと見た方向に指を指す。

それに一人、また一人と振り向いた少年や少女…学生達は目にしたものと同じ名前を叫び、呟く。

「か、仮面ライダーだ！」

「ほ、ほんとにいたんだ…。」

キバの右、左の連続パンチが決まり、のけ反るイヤーウィッグ。

怯んだ敵に休むことなく今度はハイキック、ジャンプからのパンチ、回し蹴りが決まった。

「へへ、いいぞ。」

怪人も反撃に拳を振るうが、変身したキバに効果はなく、あるもの

はすかされ、あるものはまったく歯を立てることが出来なかった。

「す、凄い……。」

ただ一人、変身から戦いまで全ての様子を見ていた沙耶は驚き戸惑いながらも、その戦いぶりに思わず目を光らせた。

「く、くっそ〜！」

イヤーウィッグは敵わないと見たのか、また口から煙幕を吐き視界を覆う。

「おっと、二回も同じ手は食わねえよ！ガルルセイバー！」

キバは素早くガルルフォームに変身、鐔に飾られる狼の口を前面に向けると、増幅した遠吠え：『ハウリングシヨック』で煙幕を打ち払った。

だが…。

「また逃げたか……。」

煙が晴れるとイヤーウィッグの姿は無かった、と思われたが。

「きゃ、きゃあ！」

悲鳴にキバが振り向くと、そこには振るえる手で沙耶を羽交い絞めにするイヤーウィッグの姿があった。「こうなりや直にライフエナジー、吸いとつてやるう！」

「させない!!」

キバはガルルフォームの足で、イヤーウィッグの懐に素早く潜り込むと、怪人の腕と沙耶の身体の僅かな隙間にガルルセイバーを突き立てた。

「ギッ、ギヤアア！」

激痛からイヤーウィッグは沙耶を手から放して地面に叩きつける、その衝撃で沙耶の目から眼鏡が外れると地面に落ち、暴れる怪人に踏みつけられ、砕けた。

「うわあん、痛い、痛いよ……。」

緑の血を流しながら呻き、戦意を失っていくイヤーウィッグ、だが人を傷つけた以上、容赦をしないのがキバだ。

キバは怪人を前に、元のキバフォームに戻ると、赤い笛…ウエイクアップフェッスルをキバットに噛ませた。

「よっしや、ウエイクアップ！」

キバットは吹き鳴らしながらベルトを飛び出す、そしてキバが呼吸と共に腕を組むと、辺りは夜の闇へと包まれた。

キバットが右足の周りを飛び回ると、右足を封じる鎖が飛び散り、中に埋め込まれた魔皇石が光を放つ。

「はああ…はっ！」

キバは深い息を吐き出すと同時に夜空へとジャンプ、その姿を月と重ね、イヤーウィッグに右足で狙いを定めた。

「やだ、まだ死にたくないよ！」

最後のあがきに逃げ出そうとするももう遅い。空から迫り来るキバの赤い右足は、

「はああ…、ライダーキック！」

キバの叫びと共に逃げるイヤーウィッグに叩き込まれ、怪人を地面に叩きつけた。

その瞬間、地面にキバの刻印が刻み込まれると、イヤーウィッグは最期に一声唸って砕け散り、空へと浮かび上がったライフエナジーはどこからともなく飛んできたキャッスルドランに補食された。

「はい、ご苦労様〜。」

キバはキャッスルドランの後ろ姿を見送り、変身を解いた。

しかし同時に気づく、自分の姿を先程からずっと凝視していた少女…沙耶の存在に。

「あ、あはは…。」

未だに状況を把握しきれず、ただ自分を見ている彼女に、進也とキバットはしばし苦笑いするしかなかった。

それから数十分後、表向き「不審者が現れた」という理由から、この事件は警察が来るほどの騒ぎとなり、生徒達は臨時下校となった。後からわかった話によれば、あの男…イヤーウィッグは以前から学生に手を出す事件を起こしていた前科者であり、学校に現れたその男を誰かが取り押さようとする姿を何かと勘違いしたのだろう、と警察は結論づけることにした（男は行方不明扱い）。

戦いの様子を見た学生達は、口々に「あれは仮面ライダーと怪人だった」と声を揃えていたが、大人達に信用されなかった。

と、言うことで実際起こった事実を知るのはただ二人…進也と沙耶だけとなった。

「あの、ホントにゴメンね。」

帰り道、人氣が無くなったところで進也はグチャグチャになった眼鏡を手に、沙耶に謝った。

「それは、別にいいんですけど…あれは…。」

「ほら、嬢ちゃん戸惑ってるじゃねえか、あんまり無闇に変身見せるからだぞ。」

とは言えもう正体を知らせてしまったのは事実、進也とキバットは、キバとファンガイアに関する全てを洗いざらい全て沙耶に伝えた。

聞いている間は信じられない、といった表情で聞いていた沙耶だったが、

「でも…実際見てしまったんですから…信じるしかないですよね。」と答えた。

進也は顔を輝かせると、

「うん、ありがとう！」

と彼女の手を握ってニッコリ返す。

「それに、凄くカッコ良かったです、紅先輩。」

しかしまた、沙耶の畏まった言い方にゲンナリとなる進也。

「え、あの、悪かったですか？」

「いや、嬉しいけど…僕、もう沙耶ちゃんって呼んでるから、沙耶ちゃんももつと親しげに、ううん敬語なんて使わなくていいんだよ？」

進也の言葉に沙耶はまた頬を朱に染め、また口ごもった、がその顔に柔らかく微笑みを浮かべ、

「えっ、じゃ、じゃあ、シンくん、でいいのかな？」と初めて敬語を抜いて進也に話した。

「…ありがとう！」

「えっ、あ…！」

途端、進也に思い切り抱きつかれ、顔を真っ赤にしながら…沙耶はどこか嬉しい心を感じ…思わずまた顔をほころばせていた。

キバツトは、

「相変わらずデリカシーのないヤツだ…。」

と呆れて苦笑しつつ…一つ考えた。

「あれ、嬢ちゃんの名字、まだ聞いてねえな？」と。

その時、

「コラコラコラコラ！」

後ろからの聞き覚えのある声に、進也は思わず手を放しそつと後ろを見ると、そこには他でもない、由美子が、何故か仁王立ちに身体中から殺意の宇宙コスモをたぎらせ、佇んでいた。

その姿に進也、そして沙耶は、

「由美子さん！」

「お姉ちゃん！」

と叫び、

「「え？」」「

とお互いを見合った。

沙耶は驚いた顔で、進也、由美子を交互に指差し、あわわと口に手を当てる。

「えっ、じゃあ…お姉ちゃんが言ってた、ちょっと変わった面白いヤツって…シンくんのこと？」

逆に進也とキバットも呆然と目を見開きながら、彼女の学生証の名字の部分の思い浮かべた。

そう、「麻生沙耶」と。

「由美子さんって…妹がいたんだね…。」

「読者の奴らも驚いてるぜ、きつと…。」

「えっ、何、一体何なのよ？」

驚愕と呆然の混沌カオスが渦巻く中、由美子だけが状況を認識できず、ただ戸惑っていた。

23・新章・紅牙の巻（後書き）

今回はタイトル通り、進也にスポットを当てたストーリーにしたため、由美子もほぼ出番無し、尾上達もほとんど「ああああ！」しか喋っていません。

雪も今回はまったく出番がありませんでしたが、近々また満を辞して登場しますのでご安心を。

この小説を開始当初から既に由美子の「兄弟、姉妹」の案は考案していたのですが、今まで出す機会に恵まれなかったので、今回読者の皆さま方へのサプライズを含めてようやく登場させましたが、いかがだったでしょうか？

沙耶はこれからレギュラーキャラとして頑張ってもらおうと思いますので、応援のほどよろしくお願いします。

今回は新キャラだけでなく、既存キャラの新たな一面も掘り下げていく予定です、お楽しみに。

皆様からの応援はこれからの励みとなるので、新規読者様、そして最初から続けて読んでくださっている皆様からの感想、お待ちしております。おきます。
それでは。

24・謎の白コウモリ（前編）（前書き）

今回も新たに新キャラが登場、加えてこの小説内での新設定も盛り込みました。
それではどうぞ。

24・謎の白コウモリ（前編）

とあるアパート区内。

夜の暗がり、街灯の下で、進也：キバとハエに似た怪人：フライフ
アンガイアの戦いが繰り広げられていた。

「ふん、はっ！」

既に素早い敵への対抗策としてバツシャーフォームに変身、バツシ
ヤーマグナムを用いて空を飛ぶ素早い怪人を狙い撃とうとしていた
が、フライのあまりの素早さに照準を当てられず、手をこまねいて
いた。

「どうした、その程度か？」

逆に目にした瞬間に放つても、フライは着弾する前にかわしてしま
い、その上キバを挑発してくる。

「キバット、ここは必殺技で…。」

「待て、あれはホーミングに相当の魔王力を消費すんだ。見たこ
ろやつはモロそうだが…。」

キバットは攻撃をしかけてくる怪人の隙を見て弱点を探そうとする
が…。

「くっさー！」

その前に思わず鼻をつまんでしまった。

「どうしたのキバット？」

「あの野郎…ハエだけに悪臭で俺の鼻を封じてやがる…。」

加えて怪人はスピードで目、羽音で耳からの情報を遮り、バツシャ
ーフォームの利点である強化された五感を封じてきた。

「スピードならガルルが…。」

「それも無理だ。お前まだ二回もフォームチェンジしたことないだ
ろっ？」

キバの鎧が持つ難点、それはあらゆる武器に対応しその力を100%引き出せる形態に変形できる代わりに、形状変化に伴って使用者の体力を必要以上に浪費してしまうことだ。変身時に大人の体格に変わるものの、体力的には普通の同年代と大差ない進也はこれまで二回以上のフォームチェンジに成功したことが無かった。

「むむむ…。」

手をこまねいている間にもフライは上空からキバに隙が出来る時を今か今かと待ち、彼を挑発しながら飛びまわっていた。

「…よし。」

するとキバは何を考えてか頷くと、敵が攻撃しやすいような真正面に両手を広げて立った。

「お、おい！」

これでは「攻撃してくれ」と敵に頼むようなもの、一体どうしたのか。

411

「ひやははは！諦めたか！」

フライもそんなキバを見た瞬間、体勢を前に向けキバへと突撃してきた。

「な、何考えてんだ〜〜〜〜〜！」

キバットが叫び、フライの頭がキバの胸に迫ったその時。

「よつと、ほい！」

キバは体当たりがぶつかる前に自分で後ろに倒れこみ、攻撃をかわす。

同時にその一瞬で足を上げるとフライの両足を挟んで動きを封じ、

「な、何だと！」

「行くよ、キバット！」

「お、そうか、よし、バッシャーバイト！」

マグナムの撃鉄を噛ませて魔皇力をチャージ、動けなくなったフライの腹めがけて必殺の弾丸を放った。

「ぐ、ぎゃああー！」

かわすことも出来ず、柔らかい腹部に攻撃を受けたフライはそのまま粉々に碎け散った。

キヤツスルドランがいつもの具合でファンガイアのライフエナジーを食らうのを見送り、キバは変身を解く、とキバットが進也の頭に体当たりをかました。

「バカヤロー、何をするのかと思えば…。」

「エへへ、ゴメンね…。」

進也は謝りながら頭を掻いた、が。

「ウフフフ…。」

「え？」

その途端、横にいる相方キバットではない声に目を見開き、周囲を見回す。

「ん、どうした？」

「キバット…今の声は？」

「声、声なんかしねえぞ？」

キバットは訝しげに進也を見る、ということとは彼には今の声が聞こえなかったらしい。

「空耳だったのかな？」

それにしても鮮明な声だったが、とりあえず聞いた者が自分しかないのではしょうがない。

進也は声がした方向をチラリと見ると、何も無いことにまた頭を掻いた。

「ほら、帰るぞ。」

「う、うん…。」

その後はまったく振り返ることなく、進也はキバットと共に家路へ歩いて行った。

後ろから小さな影がひょっこり顔を出したことに気付かず…。

それから数日後、学校の屋上。

進也は由美子にも同様の「声」の話を聞かせていた。

「声…？」

「ほんとなんだよ、最初は空耳かと思ったけど…。」

あれから数日、進也は度々その笑い声を聞くだけに止まらず、歩いている最中や部屋にいるときに誰かに見られているような視線を感じるのだという。

「それ、自意識過剰なんじゃないの？アンタをストーカーして何が楽しいのよ。」

「だろ？俺もそう言うんだけどな。」

「あゝ、ほんとに聞いたんだし見られたんだってば！」

キバットだけでなく由美子にすら疑いの目と嘲笑いを受けた進也はバタバタと手を振る。

二人と一匹がそんな話をしている中、屋上のドアを開け、別の人物が入ってきた。

人物：由美子と同じ制服を纏った少女は屋上に吹いてくる風にプロンドヘアをなびかせ辺りをキョロキョロしていたが、その目が由美子に止まるとその近くに歩いてきた。

「由美子、探したわよ。」

「渚…。」

由美子は自分を見ながらやれやれ、と首を鳴らす少女：水無月渚を見た。

彼女は由美子の小学校時代からの同級生、所謂親友であり、同時にスポーツ仲間だ。

勉強嫌いで常時赤点の常習犯である由美子と対照的に成績上位保持

者の秀才でもある。

最初の一言の後、渚はしばし由美子と目を合わせたままジツとしていたが、ふと進也を見やり、

「この子は？」

と由美子に聞く。

「え、こいつ？」

「へえ、じゃあこいつが由美子の言ってた『不思議君』なわけ？」

「そ。」

由美子による進也の紹介と説明が終わると、渚はまた進也をチラッと見、進也もいつもの笑顔で答える。

渚もそれにニツと微笑んで返す、とまたキョロキョロと周囲を何かを探すように見る。

「何、どうしたの？」

「いや、何かさつきから『銀さん』みたいな声が聞こえるなって思ったんだけど…気のせいだったかしら？」

その言葉にドキツとする由美子、幸いドアを開けた瞬間にキバツトは進也の懐に潜り込んだので見つかることはなかったが。

詮索したげにまだ辺りを見る渚、彼女の興味を変えるにはどうすれば、由美子は考えを巡らせると、

「そ、そういえば、アンタ、何で私を探してたのよ？」

最初の方へと話題を引き戻した。

「おっとそうだった…。昼休みに渡そうと思ってたんだけど、アンタが急にいなくなるから…。」

渚もそのことを思い出しか、制服のポケットをいじると中からチケットを四枚取り出し、由美子の顔の前に出した。

「？…ってこれ…これって！」

最初、何かと訝しげに細めていた由美子の目がまぶたを撥ね退けるように大きく開いた。

渚もその反応を待っていたように、そのチケットをチラつかせてほくそ笑む。

「ファ、『FANG』のチケットよね？」

「そ、あつたり〜！」

「『FANG』？何それ？」

だがその名前を聞いてもキョトンとしている進也に、

「『アンタ、知らないの!?!』」

異口同音、由美子と渚はハモリ言葉で驚く、が進也は、

「うん、知らない。」

再度首を横に振る。

二人は互いに顔を見合わせ、しょうがない、といった形のため息をつく。

「良い、アンタにもわかるように説明するけど…。」

『FANG』…それは一年前結成、デビューした新たなロックバンドだ。

リーダー兼ボーカルの『KENGO』に率いられたこのバンドはその音楽性の高さ、メンバーの甘いマスクから早くも男女問わずの熱烈なファンが付き、結成数カ月で全国メジャーのバンドとなった。

あまりアイドルに興味を示さない由美子も例外的にこのバンドにはまっており、CDも発売の度に即購入していた。

「アンタ、音楽好きな癖にバンドも知らないのね…。」

「エへへ、僕普段クラシックしか聞かないから…。」

呆れ目で進也を見ると、由美子は再度渚の手元を見やる。

全国人気のバンドである『FANG』のライブは当然ながら常時満席であり、それを獲得するために必要なチケットも発売日に完売するよ
うなレアな代物だ。

そんなチケットを、しかも四枚も何故渚がゲットしたのか。

「フフ、私にも幸運の神様がついてるってことね。」

そう自負する彼女に寄れば、このチケットは本来渚の兄が友人達と
行くために代表してゲットしたものらしい。

だが数日前その兄、そして友人達はどんな不運の巡り合わせか、揃
いも揃ってケガだの風邪を引くだの、親戚の不幸など偶然が織りな
す悲劇に見舞われ、誰一人ライブに行けなくなってしまったのだ。

「というわけで、その四枚、全部私の元に巡ってきたわけ。兄貴、
ギブスした足引きずって泣いてたな。」

チケットで顔を煽ぎながらケラケラ笑う渚、由美子に負けず劣ら
ずの美貌ながらかなりエグイ一言だ。

「で一人で四枚、三枚は払い戻して小遣いにしても良かったけど…
アンタとは長い付き合いだしね。」

渚は由美子にチケットを差し出し、由美子もそれを受け取るかに思
えたが、違った。

彼女の手はチケットに伸びず、代わりに渚の背中へと伸び、渚を回
すように抱きしめたのだ。

「ありがとう、アンタという親友を持てて良かった！」

「ちょ、由美子？」

その姿はさながら進也が相手に友愛を示す抱擁に似、進也自身はそ
れをうらやましそうな目で見た。

それから十数分後。

「姉ちゃんが、何か姉ちゃんらしくねえな。」

やや引き気味のキバツトが言う通り、由美子は三枚のチケットを抱きしめ、明るい足取りでスキップまでしていた。

「良かったね、由美子さん！」

「うん、もちろん…って。」

由美子の満面の笑み、それが進也に向いた途端、彼女の顔が正気に返る。

輝く進也の目、それが物欲しげな犬猫に似ていたからだ。

その目はまっすぐに…。

「アンタ、これ欲しいの？」

由美子が恐る恐る手のチケットを指差す、と進也は何も言わないが表情がパアと輝いた。

目的はこれか、由美子は進也にフツと微笑むと、

「ヤダ。」

と舌を出す。

途端に固まる進也の顔を見ながら、

「これは、私がもらったの！クラシックしか聞かないアンタみたいな坊ちゃんにはまだ早いのよ。」

とワザと意地悪く言い、ソッポを向いた。

だがその瞬間、無表情に固定されていた進也の眉がだらり、と垂れ下った。

「誰を連れて行くのかな？」

そんなことに気づかない由美子は再び希望に胸を膨らませ、明るい足取りで歩む、が。

「…グ、ヒック…。」

背後から聞こえてきた呻くような泣き声に足が止まり、顔の血の気が引く。

「これは…まさか…。」

案の定、そろりと振り向いて見れば、進也はボタボタと涙を流して大泣きしていた。

「僕、ロックって…どんなのか知らないから…、一度聞いてみたかったのに…。」

「おいおい泣くな、進也…。」

気がつけば辺りから小声で、

「あれ、2年の麻生だろ…ひでえよな…。」

「あんなかわいい子を泣かせるなんてさ…。」

由美子に向かって非難を飛ばす声が流れてきた。

「え、何、コレ？何、このシチュエーション？前にもこんなの無かったっけ？」

由美子があちこちに目をやれば、どの方向からも白い目、非難の声。その様子に戸惑っていた由美子だったが、やがて全身がわなわたと震え始め、顔中に青筋が浮かぶ、そして、

「だあ！何で私が悪者扱いなのよ！」

怒声を挙げてブチ切れると、由美子は進也にズンズンと詰め寄り、

「…ホラ。」

出来る限り優しく、そして出来る限り丁寧な手つきで進也に残りの二枚を手渡した。

「由美子さん…ありがとう！」

「まあね…私も大人だから…。」

嬉しそうにチケットに頬をすりよせる進也、由美子は腕を組んで優しくそうに微笑んだ…と本人は思っていた、が実際のところ辺りの人物から客観的に見られたその様子は巨大な悪魔が人間に化けるのに必要な皮を怒りの感情で破らないよう必死で抑え込んでいる姿に似

ていた。

(その様子を見ていた北村学園高等部1年・国枝政樹君談)

「ええ、あれはもう、可愛らしい天使を悪魔が今にも食べちゃいそうな、そんな様子に見えました。悪魔ってホントにいるのかも、って思っちゃった程ですね…。」

帰路、進也は家へと歩きつつ、手に持ったチケットに顔を綻ばせていた。

彼にとつて初体験のロックであることもあるからであろうが、それ以上に進也は由美子がチケットを譲ってくれたことが嬉しかったのだ。

「しっかし二枚もらったんなら一枚余るだろ、誰か誘いの相手はいるのか?」

「へへ、大丈夫、もう決めてるんだ。」

進也にとつて尤もな問いをかけるキバットだが、進也は困った様子も見せることなく、残った一枚のチケットをキバットの前ではためかせた。

その直後だった、また進也の耳に、

「ウフフフフ…。」

すぐ近くからまた、女性の声が聞こえた、気がした。

「どうした、また『声』か?」

「う、うん…。」

耳を押さえる進也を見て、キバットは自らの探知能力を全開、周囲の状況を探るが…。

「やはり、何もねえぞ?」

「え、でも…。」

キバットの超音波センサーに引っかけたものの、それは近くに落ちた空き缶

や壁の上を渡る猫達だけだった。

元々人通りの少ない地域だけあって、他の人間の声が入ってきたとも思えなかった。

だが進也はそれでも納得いかない様子で辺りを見回していたが、結局声の主はおるか、怪しいものを見つけたことも叶わなかった。

夜、麻生家。

由美子は手に取った一枚のチケットを片手に、がっくりと肩を落としていた。

「せっかく沙耶も連れて行こうかと思っただのに……。」

そう、由美子がチケットを進也に渡すのを渋った理由、それは妹…沙耶に一枚をあげようと考えていたからだ。

理由はよく知らないが、妹は最近少し明るくなった、そんな妹にもっと外の世界に触れてほしい……。

こんな気持ちがあった由美子の手から、進也は事もあろうに二枚のチケットを両方持って行ってしまった。

「そりゃ私も意地悪言っちゃったし、アイツに私の事情がわかるとも思えないけど……。」

由美子は進也に対する苛立ちを感じずにはいられず、思わず手に握ったシャーペンへし折ってしまった。

「とりあえず、一言謝っとこ。」

普段ガサツな由美子ではあるが、その実、妹思いだ。

彼女は一言謝ろうと、沙耶の部屋の前に来る、がその沙耶の部屋の中からボソボソと声が漏れているのに気付いた。

「あれ？何してるんだろ？」

由美子がソロリとドアに耳を当てると、中から、

「え、本当……でも……。」

どうやら誰かと電話をしているらしい、妹の声が聞こえてきた。口調から誰か親しげな相手と会話しているようだが、由美子にはその相手はわからなかった。

「う、うん、ありがとう…。」

やがて電話の相手にお礼を言う声を最後に、携帯を閉じる音が聞こえた。

それに合わせて、由美子もノックをして妹の部屋に入る。

「お姉ちゃん、何?」

「いや、アンタ、さっき電話してたみたいけど…。」

「え?」

由美子の言葉に沙耶の背がドキリ、と動く。沙耶は慌てて平静を装うが由美子はその一瞬を見逃さなかった。

「ねえ、誰と電話してたの?」

「え〜っと…。」

沙耶は誤魔化そうとしているのか、目を由美子に合わせず動かす、だが由美子はより怪しい目で妹を睨んだ。

「え、あ、ちよ、ちよっと、これから本読むから部屋に入らないで!」

最終手段、沙耶は由美子を部屋から押し出すと慌ててドアを閉めた。

「ちよ…何なのよ…。」

いつもと違う妹の反応、由美子は戸惑うのと同時に何か違和感を感じた。

同時刻、ドランの進也の部屋。

進也は度々起こる『声』のことも忘れ、嬉しそうにチケットを見つめていた。

「ふふ、楽しみだな〜。」

24・謎の白コウモリ（前編）（後書き）

本編中でも挙げた通り、この作品内のキバは一回の変身でフォームチェンジはほぼ一回しか出来ないという設定にしています。

これは原作の劇中にてキバがほとんどフォームを切り替えたことが無かったこともありすが、同時にウルトラマンダイナのタイプチェンジもイメージして作っています。

新キャラ・渚、由美子同様現時点ではライダー達とのにまったくありませんが、実は名前にある伏線を込めてあります。

声のイメージはけいおん！の唯などでお馴染みの「豊崎愛生」さんをイメージしていますが、いかがだったでしょうか？

次回は白コウモリ完全登場、そして準レギュラーの敵も登場予定です。

お楽しみに。

25・謎の白コウモリ（後編）（前書き）

書けたらっつ、書けました、はい！

約3ヶ月もの間、更新ストップしてすみませんでした！

その分、見所要素を多数入れて書き上げましたので、ぜひ読んでください。

ただし後半急ぎすぎて多少強引な展開になってしまいましたが、悪しからず。

25・謎の白コウモリ（後編）

それから二週間後の日曜日。

いよいよ待ちに待ったライブ当日。

「〜。」

由美子は鼻歌交じりに足取りも軽くしながら、待ち合わせを予定していた駅にやって来ていた。

「〜…ってアレ？」

だが楽しみに気が急いでいたのもあったのだろう、早々と到着した駅前には、同じようにライブに出かけようとする若者達や出勤客の姿こそあったものの、まだ渚や進也の姿は見えなかった。

「はあ…ま、良いか…。」

由美子は近場を見回し柱を見つけると、そこに寄りかかってiPodで『FANG』の曲を聞き始めた。

『再生』のキーを入れてすぐ、由美子の耳に『FANG』の曲の中でも代表的なナンバーが流れ出す。

『〜！』

激しい勢いの楽器の音色に、合わせて流れてくる熱唱…。

『〜』

やり方こそどこにでもありきたりな形だが、それでいて話題の『韓流』にも負けないリズムとセンスだ。

一、二曲聞いただろうか、由美子がいつしか聞くのに夢中になった頃、不意に彼女の肩に何かが乗った。

由美子はそれを払いのけるが、それは再び由美子の肩に乗る。

「……」
鬱陶しげに思いながらも再度、それを払う、が何かは再三由美子の肩に乗った。

「あゝ、もう、うるさいわね!…ん?」

ようやく肩を見た由美子がそれを、人の手と気付くのに一秒もかからなかった、ついでに言えばそれが誰の手であるかということにも

「まったく、呼びかけても聞いてないから肩叩いたのに、それをうるさいなんて!」

「だから謝ってるのでしょ?なのに何でそんなに騒がしく言ってるのよ!」

「もう、あげるんじゃないかった!それ(チケット)返せ!」

「今更返せるか!」

それからすぐ、由美子は『到着し、由美子の元に来た』渚に頭を下げたものの、似た者同士の手前、二人は謝罪から新たな口論を生み出したことは言うまでもない。

「…まあ、良いわ。ところで…」

公衆の面前でこれ以上は、と判断してか、一応口論からの発展を抑えた渚はキョロキョロと辺りを見回す。

「ところで不思議君は?」

「ああ、進也なら、誘った『友達』を迎えに行くからちょっと遅れるって。」

言いつつ、由美子は進也との前日の電話を思い出していた。

前日

「…ってわけだから、明日は駅集合、遅れないこと!」

『はい、じゃあお休み、由美子さん』

相変わらずの進也の声を聞くと、由美子は受話器を下ろし…かけて、それを留めた。

「そう言えば、アンタ、私から二枚チケット持ってったわよね？」
『うん？』

半分泣き落としのような方法で持って行ったにも関わらず不思議そうに進也の声に由美子は一瞬、受話器を持つ手に力を込めた、が思い留めてもう一つ、進也に問う。

「あれ、一枚はアンタの分として、もう一枚は誰の分なの？尾上さん、とか？」

『え？由美子さんは馬鹿だなあ。』
受話器の握りしめ、Part 2。

それもどうにか抑えると由美子は震えを出来る限り抑えた声で、

「じゃ、じゃあ誰、なのかしら？」
と進也に聞くと。

『友達、それ以外は内緒だ…。』

限界だった…由美子は壊しかけた受話器を元の本体に叩きつけることで何とか壊すのを阻止したのだった。

「まったくあのガキ…。」

思い出してみると腹立たしい、同時にもう一つ。

「あいつに友達って…いたっけ？」

試しに指で数えてみるが、出てくるのは自分、キバット、それ以外に思いつかない（考えに集中しすぎて『他の面々』が頭に入っていない由美子）。

以前、彼と同じクラスの生徒に聞いたこともあるが、

「紅？さあ、変な奴、かな？」

「こないだゴキブリをじつと眺めていたこともあったよな？」

「時々自分のリュックに話しかけてたりするし。」
「奇人談ばかりで、友達に関する言葉はまったく出てこなかった（一部、由美子の理解の範疇こそあったものの）。」

「ああ、もうでも今日はライブ、ライブ！」
「そんな『謎』を考えるより、今はライブ。」

由美子はペットボトルから水をあおり、気分を切り替えようとして…、
「お、来たみたいよ？」
吹いた。

「ちょ、汚いわね！」
「あ、由美子さ〜ん！」

渚の非難も進也の声も聞こえないほどに驚愕する由美子。
何故なら進也の後ろに…誰であろう妹・沙耶が立っていたからだ。

「どっぴいっこと？」
電車の中、バツが悪そうに頭を下げる沙耶を隣に座った由美子がジロリ目、仁王のような腕組みで問いかける。

「由美子さん、実は…。」
「進也が代わりに何かを言おうとする、がそれは渚に止められた。」
「渚さん？」

「これは姉妹間の話、部外者は立ち入り禁止よ。」
「納得いくように、聞かせてくれる？」
「…っ、うん…。」

二週間前の夜…。

沙耶が一人本を読んでいると、机の上に置かれていた携帯の着信音が鳴った。

「？誰だろう…。」

手に取り、発信者を見ると、そこには『紅進也^{シんくゑ}』の名前が表示されていた。

「シンくん？どうしたの、この時間に？」

『フフフ、沙耶ちゃんにお誘いしたいことがあって。』

「お、お誘い？」

のっけから飛び出た『お誘い』の言葉に沙耶の胸がビクンと鳴った。

「どうしたの沙耶ちゃん？声が裏返ってるよ？」

「え？な、何でもない！…で、な、何のお誘い？」

平静を保つと、沙耶は進也に問う。

そして聞いた、由美子が『FANG』のチケットをもらったということ、その内二枚を自分がもらったということ。

「…で、二枚の内、片方を誰にあげるか迷っちゃって、沙耶ちゃんにあげることにしたんだけど、どうかな？」

「ホント？で、でも…。」

沙耶も姉の影響で『FANG』は知っている、しかしながら姉と違って大人しい彼女は音楽も激しいものはそれほど好きではない。

だが友達になってくれた進也が自分を誘ってくれている、その気持ちに断ることを悩ませた。

「わ、私…。」

「ん？」

「私…。」

肯定も、否定も出来ず、口だけがパクパクとなる。

その時、不意に奥の方から足音が部屋に向かって近づいてきた。

「あ…、ああ…。」

部屋にどンドン向かってくる足音に切羽詰まった沙耶は思わず…。

「行く！私、行く！」

思わずそう答えてしまった。

『じゃあ、由美子さんにその日の日取りを聞いたら、また連絡するね。』

「う、うん、ありがとう。」

残りの彼の言葉はほとんど聞こえず、即座に電話を切る。

直後にノックが鳴り、由美子が部屋に入ってきた、というわけだ。

「そういうことだったの…。」

由美子のため息について、頭を手で押さえる。

「まったく、私は沙耶に謝れなくてずっとモヤモヤしてたんだから…。」

「謝る？何で？」

途端に由美子は沙耶の両頬をつかんでグイグイ引っ張る。

「アンタにチケットをあげようと思ったのに、進也に取られたと思っただからよ！」

「ご、ごへんなは〜い！」

「まったく…、でも…。」

もうひとため息つくと、由美子はフツと笑む。

「私があげたところで、アンタ、断ってただらうから。その辺、進

也にも感謝しなくちゃね。」
そう言って進也の方をチラリと向いた。

進也も二人の様子を見ると、
「よかった、怒るんじゃないかなかったんだ。」
ニツコリ微笑んだ。

が。

「でも…。」

由美子はその身体をギシギシと揺らしながら進也の方へ振り向く。

「へ?」

「全て迎ればアンタが元凶、ってならない?」

「え、そ、そうなっちゃう?」

はぐらかしつつも、鬼の爆発を予期して進也が縮こまった。

「これは『お仕置き』が必要ね…。」

「ま、待って、話せばわかるよ!」

「問答無用!」

「ちよ、ここ電車の中!」

「お姉ちゃんやめて!」

渚と沙耶の制止も聞こえなくなった由美子の手で、進也が『ボロ雑巾』にされたことは言うまでもない。

ドラン

相も変わらず客の来ない『ドラン』の店内を、尾上達が掃除をしていた。

「ふふ、坊っちゃん達、楽しんでますかね？」

「さあな？それより俺も行って見たかったのに…。」

正確には掃除をやっているのは尾上一人、勇輝と力はPSPで一狩り行っていた。

「そんなワガママ言ってる暇あるなら掃除しなさいよ、掃除！」

「せうな、あと一步で討伐できるんだからちよつと待てよ。」

「待てますか！」

まったく、と尾上はため息をつくと八タキを握りしめる。

「それにしても…何か不吉な匂いがするような…。」

「ふう、痛かった…。」

会場の最寄り駅についたことで由美子の制裁（ほつぺ引つ張り）からようやく解放された進也は、痛む頬を抑えてトイレに入る。

手洗い場の正面に置かれた鏡を見ると、由美子の馬鹿力に引つ張られた頬は案の定、赤く染まっていた。

「へへ、えらい目にあつたな。」

「笑い事じゃないよ、ホントに痛かつたんだから…。」

リュックに隠れてニヤニヤ笑うキバットに進也は涙目で反論しながら、再度鏡を向く。

「あれ？」

進也の背後のドアの後ろ、白い個室のドアの上に、それ以上に白い…キバットがいた。

いや、見ればキバットに比べると一回りほど小さく、顔つきは女性的で長いまつげがある。

そして何より、以前『見たことのある』フォルムだ。

「どうした、進也、また『声』か？」

「ううん…それよりアレ、見て…。」

「？」

進也の指が指し示すまま、キバットも怪訝に鏡を見る。途端、彼の表情も『あ』という形に変わった。

「あ、やっぱ…。」

進也達の反応にキバット？はそう漏らすと、そそくさとトイレから飛び出していった。

「「あ!!!」」

進也とキバットも急ぎ、後を追いかける。

外では、

「お〜い、進也〜、渚〜、早く出ないと置いてくぞ〜。」

由美子と沙耶の二人がトイレに入った進也と渚が戻ってくるのを待っていたが。

「お〜い…ん？」

呼びかけている由美子の頭擦れ擦れを何かがかすめる。

「何…ってグエツ！」

二人が何かが飛び去った先を振り向く、否や、今度は進也が由美子の脇腹へと突っ込んだ。

「お姉ちゃん、シン君、…とキバットさん？」

沙耶が慌てて駆け寄ると、下敷きにされた由美子の上に進也だけでなく、キバットも乗っかっていた。

だが進也とキバットは即座に息を吹き返すと、ムツクリ起き上がる。

「沙耶ちゃん、さっきのコウモリ、どこに行った？」

「えっ、コ、コウモリ…。」

「早く！」

「う、うん……」

起きるなり、鬼気迫る勢いで問うてきた進也とキバットに、沙耶はビクつきながら、

「あ、あっち……」

キバット？が飛び去った方向を指さす。

「ありがとう（サンキュー）！」

進也とキバットは手早く礼をすると同じ方向へ走って行った。

「何だっただらう……」

沙耶が不思議そうに首を傾げたその時、彼女の背後に熱気と冷気が同時に立った。

悪寒を感じ後ろを振り向く沙耶、するとそこにはいつの間にか息を吹き返し、そして何故か胸を抑える由美子が立っていた。

「お、お姉……ちゃん……？」

沙耶が恐る恐る影のかかった由美子の顔を見る、と由美子の口がブツブツと、震えながら何かを言っているのが聞こえた。

「な、何……？」

「クロス……クロス……クロス……」

聞き違いかと思い、沙耶がもう一度耳を当てようとしたその時。

「あのガキ、ぶつかったばかりが胸まで触りおって！生かしてはおけん！」

地の底から響きそうなおぞましい怒声を放った由美子は身体をメラメラと燃やしながら、進也達の向かった方向へ走って行った。

沙耶が啞然として程無く、渚がトイレから出てきた。

「ふう、おまちどう…ってアレ？由美子は？」

「渚さん…、あ、あの…。」

沙耶は言うべきか悩みながら、口をごもらせたが。

「あ、あの…ごめんなさい！」

言葉が見つからないまま、渚にただ頭を下げると、沙耶も由美子の行った方向へ走って行った。

「な、何…だったの？」

渚は何もわからぬまま取り残され、ただ首を傾げるばかりだった。

そんな顛末を知らない進也とキバットは、謎のコウモリに追いつこうと必死に走っていた。

「ねえ、アレ…確かクロノさんのところのコウモリだよな？」

「ああ、俺も会ったんだから間違いねえ。」

二人が気付いたコウモリの正体…。

それは数ヶ月前、進也達と共闘した『薄明のキバ』・桜井黒乃のパートナー・キバーラそのものだった（ただし交流は深くないため、進也もキバットも彼女の名前を知らない）。

逃げる彼女は進也とキバットが走る正面…およそ500mほど先を低空飛行で飛んでいた。

「けどよ、アイツがお前を監視していた犯人としてよ、何のためにクロノはそんなことをしやがったんだ？」

「ううん、あれはクロノさんのコウモリじゃない…と思う。」

進也の言葉に驚くキバット。

「どういうことだ？」

「あのコウモリ、クロノさんのと同じ、何だけど、どこか違う気がするよ…。」

言っている意味がわからず、キョトンとするキバット。

その後方、約1kmほど後方では。

「どこだ〜、どこに行きやがった、クソガキ！」

修羅のごとく進也を追う由美子と、それを必死で止めようとする沙耶の姿があった。

やがて、追いかけるまま走り続けていた進也達は、気付けば人通りの多い街路へと飛び出していった。

「どうしよう、見失っちゃった…。」

キバーラの姿を見失い、落胆する進也。だがキバット（人混みに出たのでリュックに戻った）の言葉が進也に再び希望を持たせた。

「大丈夫だ。あの野郎、慌てるせい知らねえが、あっさり俺の超音波センサーにかりやがった…左だ。」

キバットに頷くと、進也はまた、走り出した。

それからセンサーに頼って、走り続けること数分…。

「あ、あそこだ！」

視線の先の細い路地に、キバーラらしき姿を見つけた。急ぎ追いつくべく足を速める進也…。

ドンッ！

その途端、死角となっていた角から現れた女性とぶつかった。

「痛い…。」

「くっそ〜、お前今日女とぶつかりすぎだぞ！」

キバットが進也に愚痴っていると。

「あ〜〜〜〜〜！」

先に立ちあがっていた女性が、手元を見て叫んでいた。

「え、え、何？」

進也が慌てながらあちこちを見回すと、丁度進也と女性の足の真ん中辺りに、ソフトクリームのアイスが落ちている。

見れば、女性の手にはそのアイスが載っていたと思わしきコーン。

「おいおい、やっちゃまったな。」

「あ、ご、ごめんなさい…。」

進也はそっと立ち上がると女性に謝る、が。

「ゴメンですむなら警察はいらないっての！」

女性は進也を睨みつけると、残ったコーンを握りつぶす。

その瞬間、女性の目元にヒビのようなアザが浮かぶと、彼女の姿が人間から怪物へと変わった。

「ファンガイア？いや、違う！」

その怪物の姿は一見すると蛇に、そしてファンガイアに似ていた。

だがファンガイアと違い、怪物の身体にはステンドグラスのような光に輝く装飾は無く、濁ったような青色に光るだけだ。

そしてその形もファンガイア以上に気持ち悪く、おぞましかった。

怪物は進也を一瞥すると、頭についた蛇の牙を撫でる。

「せっかく美味しいソフトクリームを食べながら『キバーラ』を探してたのに、アンタのせいで両方台無しになっちゃったじゃない！」

「じゃあ、どうするの？」

「…ことうする！」

進也が問うと、怪物は答え代わりに頭から蛇を伸ばし、進也に叩きつけた。

進也は素早くそれをかわすと、リュックを開く。

「キバット！」

「たく、こんなときにキバラにやらねえなんてな！」

「変身！」

そこからあまり遠くない場所の屋根の上。

「ふゝ、えらい目にあっちゃった。」

思いがけぬ要因で進也達を撒いたキバールはパタパタと羽根をはためかせて、「主人」の指に降りた。

「……。」

「ええ、仕事よ。」

そして「主人」がかけた問いかけにキバールは頷く。

「くっそゝ、どこに行ったのよ……。」

由美子と言えば、進也が先ほどまでいた街路の中を、彼の姿を探して歩きまわっていた。

「お姉ちゃん、もう諦めたら？」

「嫌！絶対見つけてバラバラにしてやるんだから。」

「バラバラって……。」

とはいえ、流石にこれ以上探していれば、ライブの時間にも間に合わなくなる。

由美子の頭にそんな気持ちも僅かに浮かんた時だ。

「？ 何か今、壊れる音がしなかった？」

「えっ？…ううん。」

沙耶は首を横に振るが、由美子の耳には岩が砕けるような、音が風に紛れて微かに聞こえた。

そしてそれが正しいと指し示すかの如く、街中の人々も幾許かざわ

つき始める。

「…アンタ、先に戻ってて。私、確かめてくるから。」

『長い付き合い』の感覚で音の理由を感じた由美子は沙耶に告げるが。

「私も行く。」

沙耶は尚もついてくる気で、由美子の言葉に首を横に振る。

「…。」

そんな妹の言葉に、由美子の顔に僅かの戸惑いが浮かぶが、

「…どうなっても知らないわよ！」

それをため息混じりの苦笑いで、打ち消し、由美子は走り出す。

「…うん！」

沙耶もそんな姉の後へと続いていった。

「く…。」

砕けた壁の下にうずくまり、苦悶するキバ。

叩きつけられた反動に苦しむ彼に向かい、怪物の頭から生えた蛇が巨大化、キバへ向けて襲いかかる。

「そおくれ！」

キバは瞬間に、反動の抜けた身体を翻し、その一撃をかわす。代わりに砕けた壁の欠片は再度、攻撃の直撃を受けて更に粉々になる。

だがよけたのも束の間、怪物の頭の別の蛇が移動したキバに襲いかかると、腰に食らいついて身体を振り回し、地面へ投げ落とした。

「がっ…！」

キバは地面に激突、ぶつかった地面には小さなクレーターが浮かび上がる。

怪物の強さは桁違いだった、それもファンガイアと戦ってきたキバの強さが霞むほどに。

「つ、強い…。」

「弱いわね…。キバの名前も大したこと無いんじゃないの？」
焦るキバと余裕の怪物、二人の態度の違いが戦いの戦況を大きく示していた。

「まあ、あのコウモリを捕まえるより、キバを殺したほうが、王様は喜ぶかもね！」

「王？」

キバットに疑念が浮かぶ間もなく、新たな蛇攻撃がキバを地面へ叩き伏せた。

「おい、大丈夫か！」

「大丈夫…じゃないけど、簡単に退く雰囲気でも無いよね…。」
キバ（進也）の言うとおり、このままでは勝てない、しかし敵もそうそう簡単に獲物を逃がす雰囲気では無いのも事実だ。

その上、進也にとって更にマズイ声が聞こえてきた。

「進也！」

「シン君！」

ようやく進也を見つけた由美子と沙耶が、あるうことか戦場の場へと来てしまったのだ。

「おやおや？」

「ダ、ダメ…。」

二人に気付いた怪物を制止しようとキバは怪物をはがいじめにする、だが怪物の方は「チッ」と舌打ち一つでそれを払い除けてキバを振るい落とした。

自分達に歩み寄ってくる怪物、地面に倒れ伏したキバに目をやりな

がら沙耶を自分の背中へ回す由美子。

だが彼女自身も身体が震え、冷や汗をかいていることを身にした。

「アンタ、ファンガイア…なの？」

由美子の問いかけに怪物は、フツと笑んだように息を鳴らす。

「ププ、失礼しちゃう。私をあんな下等種族と一緒にしないでくれる？私…。」

怪物はその『名』を告げる。

「私達は…『レジエンドルガ』よ。」

「『レジエン…ドルガ…？』」

「私はその一人、メデューサよ、よろしくね。」

自らの名前を告げ終わるのに合わせ、怪物…メデューサの頭の蛇がまたみるみると巨大化していく。

「でもどうせ食べちゃう相手に自己紹介するなんて無駄だったかしら？…ま、いいわ。」

メデューサが顎を振り上げると同時に、蛇が今にも突進する構えをとる。

「や、やめて…。」

キバはそれを止めるべく、立ち上がるうとするが足に力が入らない。

「それじゃ…。」

そして蛇の頭が由美子達に向けて大口を開けた…。

だが、数秒たつても頭は由美子達へと届かなかった。

「…？」

目を伏せた進也、目を閉じた由美子がそれぞれ視界を戻すと…。

大口を開けていた大蛇が、白い一本の剣に頭から顎まで貫かれビクビクと痙攣していた。

「キヤ〜〜〜〜！誰よ、私のかわいいスネークちゃんを…。」
悲鳴を上げるメデューサに限らず、キバも由美子達も辺りを見回し、剣が飛んできた方向を探した。

全ての目がようやく飛んできた方向へ集まったとき、最初にキバツトが一番高い建物の上に、人影を見つけた。

「何だ？」

キバ達が見るその場所に立っていたのは…青いラインが走る女性的シルエツトの鎧に、同じく青い複眼と魔皇石を持った仮面。腰には白いコウモリ…キバールが一体化したベルトを装着。全身を白で覆った戦士だった。

それを見た途端、メデューサが初めて驚き、叫んだ。

「アンタは…『キバール』！」

「キバール？」

白い戦士は身を翻しながら舞い降りると、悶絶する蛇の頭からためらいもなく剣を引き抜く。

『グシャアアアア…！』

蛇が断末魔の叫びと共に放つ緑の血が飛び散り、戦士の白い鎧が汚される。

「うええ、ペツ、ペツ！汚〜い！」

「汚い…、ふざけんな！」

腰のキバールが鬱陶しげに身体についた血を拭うのを見て、自分の

頭の蛇を一匹殺されたメデューサは激昂、自ら襲いかかった。

「死ね！」

「……。」

メデューサは怒りのままに、腕の爪を振るが、戦士はそれを足一つ動かすだけで難なくかわす。

「ムキーーーーッ！」

苛立ったメデューサの二撃、三撃も戦士のバックステップがするりとかわした。

「なら、これはどう！」

その動きで戦士が後方に下がったのを見るや、メデューサの頭の蛇は今度は二匹同時に巨大化、戦士に向かい突っ込む。

「ふふ、甘いわね。」

だが戦士は先程取り返した剣でそれを切り払い、攻撃を無力化する。

「すげえ……。」

自分達が手も足も出なかった敵に、ここまで圧倒的リードしている。いつの間にか立ち上がっていたキバが加勢するまでもなかった。

「……！」

戦士はそうして出来たメデューサの隙を見逃さず、ガードが空いた敵の胴体に剣撃を与えた。

蛇ゆえに表皮が硬かったのか、怪物の身体にそれほど響かせることこそ出来なかったものの、それでも初めてメデューサに一撃が加えられた。

「く、くっそ……！」

戦士の攻撃で、幸いにも我に返ったメデューサだったが、流石にま

ずいと感じたのか、元の女性の姿に戻ると、そそくさと逃げて行った。

「よ、よかった…。」

「進也！」

「シン君！」

緊張の糸が切れ、再度膝をつくキバに由美子達が駆け寄ると、キバはそのまま変身が解け、進也に戻る。

「まったく、そんなんじゃ女の子一人守れないわよ。」

キバーラが呆れ目に呟くと、進也達を見つめていた戦士はその場を去って行った。

「あ、ちよつと待って…。」

追いつがるうとする進也だが、足がもつれて由美子に抱きとめられる。

「無理すんな。」

「…うん、ごめん…。」

新たな敵、そして新たな謎の戦士。

更なる激戦の匂いを、進也は感じていた。

25・謎の白コウモリ（後編）（後書き）

ふう、何とか前回予告していたネタを何とか消化することができました（疲）。

今回からいよいよ登場のレジエンドルガはこれから、準レギュラーの強敵として登場してもらう予定です、他の奴もゾクゾク登場しますのでお楽しみに。

さて、同じく今回から初登場となるキバーラですが、あえて色の違う、『不完全体』として出しました。

これから、「ある形」でオリジナルのキバーラとなっていくですよ。

ちなみに長らく想像がつかなかった沙耶のイメージＣＶですが、この度「後藤沙緒里」さんとしました。

（最近、数回ほど聞いた声にピンと感じ、決めました。）

今回はイクサ再登場、お楽しみに。

26・麻生由美子の憂鬱（前書き）

どうも、お久しぶりでございます。

今回は雪の再登場も兼ねての着休めの回です。

タイトルは今回の主役の声ネタとなっています（ストーリーにはまったく関係ありません）。

26・麻生由美子の憂鬱

新たな敵、レジエンドルガ、そして謎の白い戦士。

一体、何者なのか？そして目的は何か？

多くの謎が生まれたまま、数日が立った。

ドラン前の一本道。

籠にたこ焼きが入ったパックを載せたママチャリを店の前に停めた由美子は、片手にパックをつまんで、店の扉を勢いよく開いた。

「こんにちは〜〜！」

「わ、わわ…由美子さん…。」

そんな彼女の勢いに驚いた尾上は拍子に、持っていた花瓶を落としそうになるのを抑えると、由美子の方に苦笑い気味で頭を下げた。由美子も尾上と、勇輝と力へと再度の挨拶を交わすと、

「進也は？」

店の中を見回しながら、早速とばかりに尾上に聞くが。

「えっ？…あ、ああ、坊ちゃんなら…。」

ところが途端、尾上の目が横に逸れ、言葉がたどたどしくなる。

「？」

不審に思った由美子が横目に他の二人を見ると、彼らまでも不自然な、否、どこかどんよりとした顔を下に逸らしていた。

「…どしたの？」

とかく尾上から教えられ、二階に上がった由美子が進也の部屋のドアをノックすると、

「ん、誰だ？」

それに返ってきたのは進也の声、ではなく何故かキバットの声だった。

「私よ、私。進也もいるんでしょ？」

「何だ、姉ちゃんか…。ま、入れよ。」

部屋に入った由美子は進也はどこか、と目をやると、部屋の奥、そこに一つだけある窓の傍に進也が頬杖をついていた。

だが傍にいるとは言っても、外の様子を見るわけでもなく、進也はただボーっとした表情でただ突っ立っているだけだ。

「ここ数日ずっとあんな様子なんだぜ。一応、学校には行ってるんだが、帰るとすぐに部屋に引っ込むし、好きなヴァイオリンも弾かねえし…。」

そこでキバットは由美子がたこ焼きを持っているのに気づき、『ちよっと貸せ』と爪楊枝に刺した一個を足に掴む。

それを窓際の進也の元へ運び、キバットがたこ焼きを進也の前でチヨイチヨイと動かした後、またたこ焼きが外れた爪楊枝だけを由美子に持ってきた。

「今日は食欲があるみてえだな…。」

「進也はザリガニかい…。」
キバットによる、進也の食欲検査に突っ込む由美子。

そんな様子でまた数分、ポーっとしていた進也は、やがてようやく動き出すと由美子がいることに気づいた。

「あつ、由美子さん。」

「…オッス。」

それから由美子が出てきたたこ焼きで一息ついた所で、進也は由美子に、

「ところで、沙耶ちゃんは大丈夫？」

と聞いてきた。

あの数日前の戦いの後…。

「無理すんな…。」

「ゴ、ゴメン…。」

由美子と、由美子の身体にもたれながら謝る進也の後ろで、パタリ、と何かが倒れる音がした。

「えっ…?」

二人が顔を見合わせながら何事かと振り向くと、それまで由美子に庇われる形で彼女の後ろにいた沙耶が地面に倒れこんでいた。

「沙耶（ちゃん）!」

由美子が真っ先に駆け寄ると沙耶を抱きかかえると、沙耶は『はあ、はあ』と荒く息を吐いていた。

額に手を当ててみれば、どうやら熱もあるようだ。

「…たく…。」

由美子は苦く表情を崩しながら、携帯でタクシーを呼んだ…。

幸い、熱を出してはいたが沙耶の状態は軽く、この数日で元の通りにまで回復した。

加えて由美子も幼い頃から妹が病弱であることを知っているだけあって、こんなことは『日常茶飯事』であつたのだが…。

「そつか、よかつた…。」

それを体験したことが無い進也には、目の前で起きたことは衝撃であつたのだ。

自分が怪人に手も足も出なかつたことが、沙耶を倒れさせるきっかけになつたのではないか？

そう感じているだろう彼の顔は言葉の安堵と裏腹に、なお暗いままだつた。

「いや、あれは私が無理させちゃつたのもあつたし…。」

「あれは敵の方が強かつただけだ。お前に非はまつたくねえよ。」

由美子とキバットも胸中を察し何とか励まそうとするが、進也はうつむいた顔を上げず。

普段のような屈託のない笑顔も見せなかつた。

「（こつ繊細なものも純粹だからかね…？）」

どうしたものかと由美子は腕を組んだ。

路地

このまま単純に励ますと返って状態を悪化させるかもしれない、そ

う考えた由美子は一旦、ドランを後にし家路についた。その道すがら、自転車を転がしつつ改善策を考えてはみるが、どれも今ひとつと言ったところだった。

「よく考えてみりゃ、私、あいつの好きなものもイマイチ知らないのよね…。肝心なところでアイツを慰める方法もわかんないし…。」

「あゝ、私って…。」と由美子の口から深いため息が漏れる。

「ん…?」

ふと頭を上げると、道の先から見覚えのある顔が見えた。

「あれって、雪?」

一瞬ながらそう感じた由美子は、雪(?)が曲がった角の道に自分も入ることにした。

そうして追いかけた後姿、それはやはり雪だった。

彼女は肩に大きなカバンを下げた姿で、道をゆっくりと歩いていた。特にやましいところがあるわけではないが、由美子も足音を立てないように、雪に気づかれないようにしながらその後をゆっくりと追う。

やがて雪がまた角を曲がったのを見ると、由美子もその後から雪を追い、広い道路へと飛び出した、が。

「あ、あれ?」

先に曲がってからまだほんの数秒しか経っていないのに、歩いてい
た雪の姿が無い。

由美子は横の道、目の前の道路を挟んだ反対に建つマンション側に

も目を向けるが、彼女は影も形もなくなっていた。

「おっかしいな。」

由美子が頭を掻きながら後ろに下がろうとすると。

「誰かと思えば……。」

「!？」

いつものまにいたのか、雪が後ろで仁王立ちになっていた。

思わず仰け反った拍子に、由美子は自転車を引っ掛け、もろとも地面に転がる。

「い、いつから気づいてたの……？」

「足音を消しきっていたのは賞賛に値します。しかしあなたが傍で転がっていた自転車のチェーンの音、そこまでは気が回らなかったようですね。」

「ま、参りました……。」

お手上げと両手を挙げる由美子。

「おや……？」

そこで雪が由美子の足を見て、眉を動かす。

「別に良いのに……。」

「いえ、それでは私の気がすみません。」

転んだときに足を擦りむいていた由美子は、雪に押し切られるまま、反対側のマンション……そこにあった彼女の部屋へ引っ張られた。

「（ここが雪の部屋……。）」

そこはテーブルと箆笥など、ある程度生活に必要な家具が置いてい
る他はTVすら置いていない。

カレンダーは卓上のものを筆筒に乗せているため壁には画鋏の痕もない小綺麗な白壁が光っていた。

「（『何もないところですが…』、とか家に招くときに言うけど、ここはホントに何も無いわね…。）」
雪が救急箱を探している間、部屋を見ていた由美子の目に筆筒の上の写真立てが止まった。

手に取った写真の中では、四角い眼鏡をかけた大柄の男性、長い茶髪を纏めた綺麗な女性、そして赤茶色の髪の幼い少女が揃って笑顔で笑っていた。

由美子は足の消毒を受けながら、雪に写真のことを聞いてみた。

「ねえ、雪。この写真に写っているのって、アンタ？」

「はい、私と、私の家族の写真です。もう十年ほど前のものになりますが…。」

「ふん…。」

やっぱり、と感じる一方で由美子はやや腑に落ちない点も感じた。

それは今でこそクスリともしない雪が満面の笑みで笑っているものもあるが、それ以上に、

「これ、雪のホントの親？」

思ったまま聞いてしまうほどに、雪の両親は雪に似ていなかった。

しかし雪は不快感を現すような顔もせず（と言ってもいつも通りの無表情だが）、その質問に答えた。

「お察しの通りです。そこに写っている『両親』は私の本当の親ではありません。私は幼少の頃、養父ちちの友人だった本当の親から預けられたと聞きましたから…。」

『ですが。』と雪は続ける。

「優しい両親でした…。それも私が本当の家族と思えるほどに…。」
由美子は聞いている内、話している雪の顔に僅かに微笑がこぼれる
いることに気づいた。

「…何ですか？」

由美子がつとよく見ようと目を寄せた時には、いつの間にか元
に戻っていたが。

「はい、終わりました。」

「あ、ありがとう…それで雪の両親だけど…。」
「死にました。」

「あ、そう、死…ううえ!？」

あまりにも淡々としていたため、由美子の脳が理解するのに一瞬、
判断力が鈍るが、理解と同時に今度は気が動転する。

「えっ、そ、それって…。」

「一年前、私の前で二人とも…。」

雪の頭に映るイメージが浮かぶ…。

赤い炎で包み込まれる部屋の中、幼い雪の前で養母、そして養父が
血を流しながら床へと倒れる。

二人の前には二本角を携えた黒い影が大きな三叉の槍を握り、炎に
輝く黄色い目を光らせていた。

「雪、ちよつと雪…?」

「っ…!は、はい。」

「その…悪かったわね、変なこと聞いて。」

「いえ、別に…いつかは話すことと思っていましたから。」
表情からどことなく、雪が悪いことを思い出したと感じた由美子は雪に謝るが、雪も「気にしていない」とそれを流した。

その帰り道、雪の見送りを辞退した由美子はまた自転車を転がしつつ、再度進也への対策を考えていた。

「雪の意見も聞きたかったけど…あんな話の後じゃね…。」
またひとつため息をつく由美子、だがその内、別な考えも頭の中を巡りだした。

「でも、よく考えてみたら進也と雪、あの二人、よく似てるのよね…。責任感の強いとか、変に真面目なことか…。…そういえば、」

あの写真の雪の笑顔…いつもの進也に似ていたような…。」

その頃、雪が部屋に戻ると、扉に備え付けられたポストに何かが入る音が聞こえた。

「…?」

雪がポストを開くと、カラリという音と共に小さな何かと封筒が落ちた。

「これは…。」

拾ってみたそれはフェッスルと、差出人の名が無い手紙だった。

26・麻生由美子の憂鬱（後書き）

今回の物語で、雪の過去の一部をようやく明かすことに加えて、影のみですが新敵キャラがようやく登場しました（無論、勘の良い方はすぐに気づくキャラですが）。

回想シーンはタイバニのバーナビー＋牙狼の零と言ったところで作っています。

今回は今回の過去シーンを絡めつつ、雪のキャラを更に掘り下げていきますので、お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7237/>

新説・仮面ライダーキバ

2011年12月10日01時49分発行